教 育 研 究 論 文

第 ４７ 集

船 橋 市 総 合 教 育 セ ン タ ー

平成23年度 第47回 教育研究論文 受賞者

船橋特別支援学校
教諭　濱本　武將

宮本中学校
教諭　横堀　肇之

八栄小学校
教諭　河西　敦史

古和釜小学校
教諭　小林伊津子

葛飾小学校
教諭　松本侑里香

高根東小学校
教諭　中澤　悠紀

行田西小学校
教諭　八木橋朋子

葛飾中学
教諭　佐々木陽子

葛飾小学校
教諭　赫多　藍

西海神小学校
教諭　三浦　義正

法田中学校
養護教諭　松田　和枝

湊中学校
主任主事　及川　妙子

小室小学校
教諭　工藤　緑

宮本中学校
栄養教諭　渡邉　紋子

金杉台中学校
主幹教諭　齊藤　浩憲

葛飾小学校
教諭　石澤　広大

高根東小学校
教諭　葛城遼太郎

芝山中学校
教諭　堀江　春香

総合教育センター
所長　山本　稔

船橋市教育委員会
教育長　石毛　成昌

審査員長　日本女子大学
教授　坂田　仰

学校教育部
部長　亀大地　道雄

高根台第三小学校
教諭　大島　沙織

八栄小学校
教諭　横田　達

序

現在の変化の激しい時代においては、日常の安定した社会生活の営みの中で、子どもたちの笑顔や元気に遊ぶ姿は多くの人に勇気を与えるものです。子どもたちを育んでいる学校教育に寄せる期待は大きく、また、その果たす役割は益々重要なものとなります。

そのような中、船橋市教育委員会では、平成２２年２月、新しい教育計画「船橋の教育」を策定し、実現に向けて各種施策を推進しているところであります。基本方針の一つに、「教職員の力量を高め指導力を発揮できる環境をつくる」が掲げられており、「教職員の指導力の向上」が推進目標として設定されております。

「教職員の指導力の向上」には、学級経営・教科・領域において、教師自らが目標を設定し、実践、検証、改善のサイクルを土台にして、積極的に研究や研修を積み重ねていくことが重要となってきます。

自主的な研究をまとめ、発表する場として「教育研究論文」事業があります。今年度は、２０名の教職員から研究論文・実践記録が寄せらました。応募された論文の内容は教科・道徳・学級経営だけでなく、喫緊の課題である小学校英語・ＩＣＴ活用・体力向上・食育・健康教育・言語活動・特別支援教育など広い範囲にわたっております。どの論文からも、子どもたちの望ましい変容を願い、教育活動の工夫・改善に取り組む教職員の熱い思いが伝わってきました。

本研究論文集は、昭和４１年度の第１集発刊から今年度で第４７集を数えました。この貴重な論文の積み重ねは、船橋市の教育を推進してきた教職員のかけがえのない実践の証であります。この度、２０編の論文を「教育研究論文－第４７集－」として刊行することで、多くの教職員の皆様に御活用いただき、新たな教育研究や創造的な実践のきっかけとなることを願っております。

終わりになりましたが、日々の多忙な教育活動の中で、充実した研究論文・実践記録をまとめあげられました皆様方に改めて敬意を表しますとともに、論文の審査にあたってくださいました審査員長の日本女子大学教授 坂田 仰 先生をはじめ、審査員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成２４年３月

船橋市総合教育センター
所　長　　山　本　　稔

新学習指導要領の定着に向けて

4 月から，中学校において新学習指導要領が全面実施される。既に全面実施となっている小学校とあわせて，学校現場は新学習指導要領一色に染まることになる。

今回の改訂では，「生きる力」を育むというこれまでの理念を堅持し，知識や技能の習得に加えて，思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。また，学力低下批判を受けて，小学校では，国語，社会，算数，理科，体育の授業時数が 6 学年合わせて 350 時間程度増加し，外国語活動が高学年で週 1 コマ新設された。他方，中学校では，国語，社会，数学，理科，外国語，保健体育の授業時数が，400 時間程度増加している。授業時数の増加は，つまずきやすい内容の繰り返し学習や観察・実験，レポートの作成，論述などの学習活動の充実に向けられる予定である。

当然のことながら，新学習指導要領を学校現場において実質化するためには，その内容を理解し，教材化する努力が不可欠である。多忙を極める学校現場において，授業研究，教員の学習，いわゆるレッスンスタディーをどのように充実させるかが，大きな課題となる。だが幸いなことに，船橋市には，教材研究，授業研究を行い，それを発表するという風土がある。その成果といえる教育研究論文も既に 47 回の歴史を積み重ねてきた。教育研究論文の作成は，これまでの教育実践を振り返り，新しい学びを模索する格好の機会となるであろう。

今年度は，20 編の応募があったが，どれも力作で，審査の場でも侃々諤々の議論が繰り広げられた。特に，教育長賞に決まった大島沙織教諭の「自己肯定感を育み，前向きに生きようとする意欲を高める学級経営－自他を認め合う活動と生きる力を考える事業実践－」と，優秀賞の堀江春香教諭の「『学ばざるを得ない理科』から『学びたい理科』へ－理科学習の有用性を実感させる教材の工夫－」の二編は，甲乙付けがたく，何れも教育改革のトレンドを的確に押さえ，限られたリソースの中で，自らに何が可能かを問いかけた意欲的な論文であった。

学力低下批判の中で，思索の時間，調べ学習や実験･実習の時間が，停滞，後退していることは周知の事実である。しかし，新学習指導要領は，「生きる力」，すなわち，「いかに社会が変化しようと，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」，「自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など，豊かな人間性」を育むことを諦めてはいない。次年度もその奮闘の記録を期待したいと思う。

平成 24 年 3 月 1 日

審査員長　坂田　仰

略　歴

昭和 58 年，立命館大学卒業後，大阪府立高等学校で社会科教諭として勤務。その後，東京大学大学院法学政治学研究科博士課程を経て，日本女子大学に赴任。専攻分野は，公法学，公教育制度論。（独）教員研修センターにおいて中央研修の講師を務める等，現職教員のコンプライアンス意識の向上に向けて研究，教育活動を展開している。また，教育関係の近著として，『図解・表解教育法規［新訂版］』教育開発研究所（2012），『学校教育紛争－事件の概要・判決・争点』春風社（2007）等がある。

目　次

序　船橋市総合教育センター所長　山本　稔
審査評　審査委員長　坂田　仰

１　教育長賞　【実践記録】　船橋市立高根台第三小学校　教諭　大島　沙織・・・・ 7
題名　自己肯定感を育み、前向きに生きようとする意欲を高める学級経営
－自他を認め合う活動と生き方を考える授業実践－

２　優秀賞　【実践記録】　船橋市立芝山中学校　教諭　堀江　春香・・・・ 13
題名　「学ばざるを得ない理科」から「学びたい理科」へ
－理科学習の有用性を実感させる教材の工夫－

３　優良賞　【実践記録】　船橋市立八栄小学校　教諭　横田　達・・・・ 19
題名　八栄小の児童の体力を高めることを目指して

４　優良賞　【研究論文】　船橋市立高根東小学校　教諭　葛城遼太郎・・・・ 25
題名　小学校外国語活動におけるコミュニケーション能力の充実
－コミュニケーション・ストラテジーの実践を通して－

５　優良賞　【研究論文】　船橋市立小室小学校　教諭　工藤　緑・・・・ 31
題名　コミュニケーション能力の素地を育てる英語学習の取り組み
－小学校から中学校への英語教育の円滑な移行を目指して－

６　優良賞　【実践記録】　船橋市立湊中学校　主任主事　及川　妙子・・ 37
題名　パソコンを利用した学校事務の効率化に向けての取り組み
－学校事務の電子化の先に見える教育支援－

７　優良賞　【実践記録】　船橋市立宮本中学校　栄養教諭　渡邉　紋子・・ 43
題名　「食に関する指導」の効果的な啓発のあり方
－広がる食育・つながる食育－

８　優良賞　【研究論文】　船橋市立法田中学校　養護教諭　松田　和枝・・ 49
題名　今を生きる中学生の「笑いの力」と「健康」との関係はどのようなものか
－養護教諭の視点から本校生徒の実態を探る－

９　優良賞　【実践記録】　船橋市立金杉台中学校　主幹教諭　齊藤　浩憲・・ 55
題名　金杉台校区における小中連携教育の展開
－学ぶ意欲と豊かな表現力を身につけた児童生徒の育成をめざして－

１０　奨励賞　【実践記録】　船橋市立西海神小学校　教諭　三浦　義正・・・・ 61
題名　社会参画力の育成を目指した社会科学習
－「ごみの処理と利用」の実践を通して－

１１ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立葛飾小学校　教諭　石澤　広大・・・・ 67
題名　体力づくり環境劣悪の中での体育指導
－環境改善を工夫した実践記録―

１２ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立葛飾小学校　教諭　赫多　藍・・・・ 73
題名　自分の生き方についての考えを深める道徳の時間の工夫
－他の教育活動との関連を図って－

１３ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立葛飾小学校　教諭　松本侑里香・・・・ 79
題名　言語活動の充実を目指して
－国語科、算数科での実践記録－

１４ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立八栄小学校　教諭　河西　敦史・・・・ 85
題名　より使いやすい通知表デジタル化システムの開発とその普及を目指して

１５ 奨　励　賞　【研究論文】　船橋市立行田西小学校　教諭　八木橋朋子・・・・ 90
題名　自己を見つめ、自己の生き方を考える高学年の道徳の時間
－「自己の生活を振り返る」指導の充実を通して－

１６ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立高根東小学校　教諭　中澤　悠紀・・・・ 96
題名　ディズニー流学級づくり
－永遠に完成しない場所、「また来たくなる」学級経営をめざした３年間の歩み－

１７ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立古和釜小学校　教諭　小林伊津子・・・ 102
題名　「物語を中心に他教科と関連した活動」を取り入れた小学校英語の実践

１８ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立宮本中学校　教諭　横堀　肇之・・・・108
題名　デジタルカメラを活用した、ノートの表現と記録技術の向上

１９ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立葛飾中学校　教諭　佐々木陽子・・・・114
題名　豊かな表現を目指した音楽教育
－自分の声つくりに興味を持ち、歌いたい気持ちにさせる合唱指導－

２０ 奨　励　賞　【実践記録】　船橋市立船橋特別支援学校　教諭　濱本　武將・・・・120
題名　キャリア教育の充実を図る作業学習のあり方
－自立活動の実践を通して－

教 育 研 究 論 文

第 ４７ 集

【実践記録】

「学ばざるを得ない理科」から「学びたい理科」へ

－理科学習の有用性を実感させる教材の工夫－

船橋市立芝山中学校　教諭　堀江　春香

Ⅰ　はじめに

学習指導要領の改訂に伴い，中学校理科の目標の冒頭には,「自然の事物・現象に進んでかかわり」と掲げられた。つまり，従前の「関心を高め」に比べ，生徒たちの学習への主体性を育成することを重視したものだといえる。

これには，OECD が実施した PISA などの国際調査が大きな影響を与えている。2006 年に実施された PISA は，科学的リテラシーを中心に行われたものであり，科学的能力・知識等が得点化された。また，生徒の理科学習や科学技術に関する意識・学習状況についても分析された。その結果，科学的リテラシーにおける総合点では,日本は上位であった。しかし，理科学習に対する目的意識や興味関心は，OECD 平均を大きく下回っており，受動的な学習態度だと感じている生徒が大半であった。また，2003 年の PISA においても同様の結果であった。これを踏まえ，主体的に学ぶ意欲を向上させることが，今回の学習指導要領作成におけるねらいのひとつとされた。

上記の事柄を踏まえ，本校でも生徒たちにアンケートを実施した（P17～18 に記載)。その結果，テストや受験のためであったり，刹那的な興味から学習をしている生徒が少なくなかった。さらに，自然現象や科学技術に対する関心が乏しく，成績に直結しない内容には目を向けられていないこともわかった。PISA を受験した生徒たちと同様，学習に対する主体性が不十分だといえる。そこで，この点を改善する方策を検討したいと考えた。

今年は東日本大震災・原子力発電所・国際宇宙ステーションなど理科に関連したできごとが数多くあった。生徒たちも，強い地震を経験したり，節電を必要とされるなど，身近な自然現象や科学技術について考えさせられてきたといえる。また，テレビや新聞では，度重なる余震や計画停電の情報など，生徒の日常生活にかかわる内容が連日のように報道された。加えて，船橋市では山崎直子さんの講演会も催され，何名もの生徒が参加するなど,専門家の意見に耳を傾ける機会が増した。したがって，生徒たちが身近な自然現象や科学技術についてより深く知ったり，日常生活や将来との関連から意志決定を求められた１年だったといえる。

先行研究から，自ら学ぶ意欲を高めるためには,「知的好奇心」「有用性」「有能感」「自己決定感」にはたらきかける必要があることがわかっている（吉崎，2008 年)。そして，前述のような背景から生徒たちの中には，理科学習に有用性を感じるためのレディネスが今まで以上に形成されていると考えられる。そこで，本研究では「有用性」に着目し，生徒たちの学習への主体性を育てる工夫を講じることにした。

Ⅱ　研究の目的

生徒たちの理科学習への主体性を育むために，理科学習の有用性を実感させる教材を作成して指導を実践し,その有効性を検証する。

Ⅲ　研究の方法と内容

1　研究主題に関する基礎理論研究
2　理科学習の有用性を実感させる教材の開発
3　2 をふまえた指導計画の作成と実践
4　実践結果の分析と考察

Ⅳ　研究の具体的内容

1　研究主題に関する基礎理論研究

有用性とは，子ども自身が学習の必要性や価値を認識することである(吉崎,2008 年)。

山極（2009 年）は,「身近な自然の事物・現象にかかわることから始められる学習を，生活や環境における問題へと広げ，理科学習を生活・社会・環境との関連の中で進める活動を充実させること」で有用性を実感させられると説明している。また，学習指導要領解説では，有用性を実感させるには，実社会・実生活との関連を理解させる必要があるとされている。そして，このために科学技術の恩恵や理科の学習と職業の関係を学ばせるべきだとしている。

以上より,有用性の獲得に影響を与える「身近な自然の事物・現象に進んでかかわること」

「実社会・実生活との関連を理解すること」「理科学習の意義や有用性を認識すること」「理科学習への関心・意欲を高めること」の間には密接なつながりがあるといえる。そして，副次的要素ともかかわりながら，互いに強めあっているといえる（図 1）。

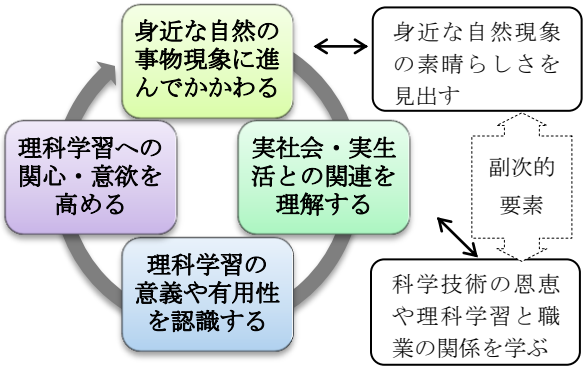


図 1　生徒の学習意欲にかかわる要素

2　理科学習の有用性を実感させる教材の開発

本校は，昨年度まで市の研究指定校として，思考力・表現力の育成に取り組んできた。本研究者はその一環として，遺伝子や DNA を指導するための教材を開発した。このとき，食品を用いて DNA の抽出実験をし，身近にある科学として指導した。また，遺伝子組換え農作物の利用に関するプレゼンテーションやディベートを行わせた。その結果，これらの活動は思考力・表現力を伸ばすほかに，学習の有用性を実感させ，意欲を高めるはたらきもあることが明らかになった（図 2）。図 1 に加え，このことからも，理科の有用性を実感させるには，身近な自然現象や科学技術の素晴らしさを見出させたり，実社会・実生活で活用できるようにさせる教材が必要だと考えた。

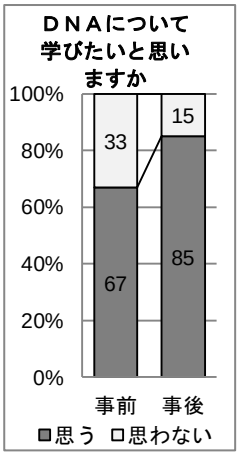


図 2　昨年度の生徒の変容

そこで，これらに関するアンケート（P5～6 に記載）を行った。その結果，「身の回りの自然現象や科学技術について不思議に思うことはありますか。」という質問に対して肯定的な回答をした生徒は多くなかった。ここから，身の回りの自然現象や科学技術に対するアンテナが低いことがわかった。一方で，「理科は役に立つ教科だと思いますか。」「理科をもっと勉強したいと思いますか。」に対しては，肯定的な回答をしたものが多かった。しかし，その理由としては「受験に役立つから」「テストでいい点を取りたいから」などが目立った。

以上のように，生徒たちには，理科学習の有用性を実感する上で重要な，身近な自然現象や科学技術の素晴らしさを感じたり，実社会・実生活に活かしたりする態度が十分備わっていないといえる。そこで，身近な自然現象や科学技術にかかわる教材や実社会・実生活において活用できる教材の検討を行った。

なお，実践の都合上，単元は中学校 2 年生の学習内容から選択した。

1）　身近な自然現象や科学技術の素晴らしさを見出させる教材の検討

①　探そう　科学の種（教材 a）

身近な自然現象や科学技術について疑問に思うことを探させた。毎授業の初め 3 分間を使い，「科学の種」と称したカードに記入させた。また同様に，自然現象や科学技術について調べたことがあれば「科学の芽」として記させた。授業では，生徒たちの「科学の種」をいくつか紹介したり，話題にした。年度末に，「科学の種」からひとつを選び，自由研究を行わせる予定である。

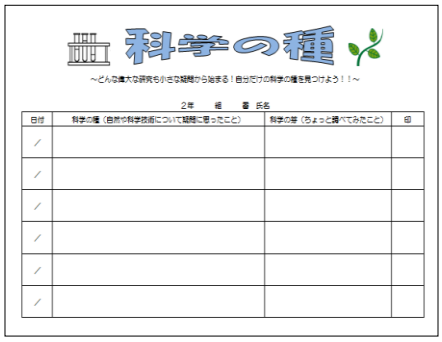


図 3　「科学の種」ワークシート

②　見つけよう　人体の謎（教材 b）

第 2 分野 3 章 3 節「生命を維持するはたらき」・4 節「生物の分類」において観察や実験を行う際には，実体験を活用させた。例えば，デンプンに対するだ液のはたらきを調べる実験では，実際に生徒にご飯やパンを食べさせてから予想させた。また，相同器官の学習では，多くの生徒が食べたことのある鳥の手羽先を用い，実験を行った。これらの活動により，最も身近な自分の体にも，素晴らしい能力や不思議なことが沢山あると気づかせた。

2）　実社会・実生活で活用できる教材の検討

①わが家の節電作戦（教材 c）

第 1 分野 3 章「電流とその利用」には，学習指導要領の改訂により，電力量の学習が付加された。これは，日常生活との関連を強調

するためである。そこで，教材として，「わが家の節電作戦」というワークシートを作成した。これは，電力量の学習と節電や電気代の節約といった生活と関係の深い事柄を絡めたものである。電力量と電力や時間の関係を生徒たちが正しく理解し，日頃の生活でも学習内容を活用できるようになることを目指した。また，各家庭の電気料金明細書から，節電率を読み取らせ，達成感を得させた。

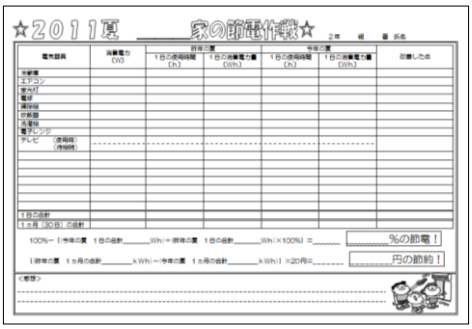


図 4 「わが家の節電作戦」ワークシート

図 5 「わが家の節電報告」ワークシート

②理系のお仕事インタビュー（教材 d）

学習指導要領解説では，有用性を実感させるには理系の職業に就いた専門家とのかかわりが必要であることが強調されている。また，小倉（2005 年）によれば，授業において専門家招へいを経験している生徒ほど，理科に対する学習意欲が高い。そのため，生徒たちにこのような専門家たちとのかかわりをもたせたいと考えた。しかし，日程等の関係で直接会わせることは叶わなかった。そこで，地域の人材など約 40 名に，「理系のお仕事インタビュー」と称したアンケート用紙を記入してもらった。職種は，薬剤師・酪農家・宇宙航空開発研究機構職員・大学講師・医師など，理科に関する幅広い分野から選択した。また，生徒たちが自分たちの将来の姿と重ね合わせて考えられるよう，回答者の年齢は，比較的生徒に近い 20～30 代前半とした。記入済みの用紙は，理科室に掲示し，休み時間等に自由に閲覧できるようにした。また，「プロフェッショナルへの手紙」と題し，全生徒から回答者に手紙を書かせ，交流をもたせた。

【回答者の職業・勤務先】大学職員・農業高校教諭・中学校教諭・医師・看護師・薬剤師・理学療法士・化粧品・製薬・食品・大学院生・材料・自動車・農業・電器・知的財産管理・教科書会社・プロセスエンジニア・システムエンジニア・産業総合技術研究所・宇宙航空開発研究機構・県職員・原子力発電所の設計

【インタビュー項目】
Q1 職業
Q2 仕事内容
Q3 職業選択の理由
Q4 職業の魅力
Q5 仕事上の夢
Q6 中学生へのメッセージ

図 6 理系のお仕事インタビュー

【理系のお仕事インタビュー回答の一例】

Q1 飲料の商品開発（中身の成分，配合の設計）です。

Q2 マーケティング担当の部署から上がってきた製品のコンセプトを元に，製品の中身の設計を行っています。風味設計も行います。エネルギーなどの成分表示の値の設定も行います。

Q3 現在働いている会社の製品が元々好きだったので，それにかかわってみたいと思いました。また，大学院での研究生活を通して，どうせなら理系であることをいかせる職業に就きたいとも感じていました。

Q4 自分が開発した商品を飲んでいる人を見たときはとても嬉しく，やりがいを感じます。また要求されているコスト内で要求されている品質をしっかり守って製品をつくるのは，モノによってはとても難しい場合があるため，それをきちんと製品化するのは大変ですが，とてもおもしろいです。

Q5 ヒット商品をつくること。飲んでみたいと思ってもらえるような商品のコンセプトを考える仕事もゆくゆくはやってみたいと思っています。

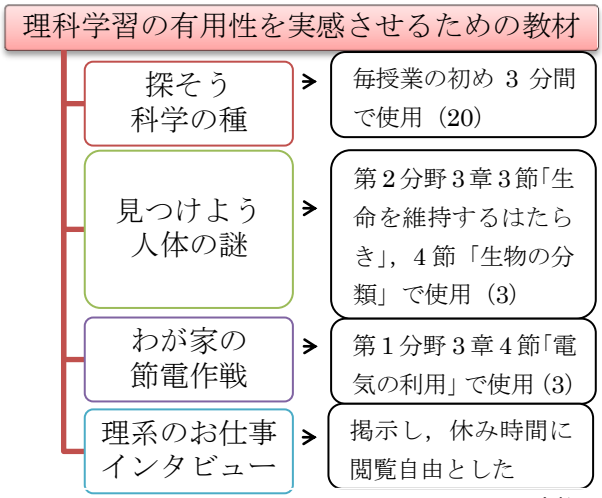
Q6 興味のあることでもないことでも，いろいろ吸収できる時期だと思います。何が自分にとって将来役に立つのかまだまだ分からないと思いますので，今できること学べることを一生懸命吸収してください。

3　理科学習の有用性を実感させる教材を用いた指導計画の作成と実践

1）指導計画

①　期間：平成 23 年 5 月～11 月

②　対象：A 中学校 2 学年　合計 107 名



※（）内は時数

図 7　指導計画

2）実践のようす

①探そう　科学の種（教材 a）

以下に，生徒たちが見つけた科学の種と，科学の種を探した感想の一例を紹介する。

【科学の種】

❇ 油性ペンはなんで簡単に色が落ちないのか。
❇ からだで一番冷たいところは本当に耳なのか。
❇ 風はどこからくるのか。
❇ ジェットコースターに乗ったときにおなかがぐわっとなるのはなんでか。

【感想】

❇ 初めは苦労したが，段々と慣れてきた。結構ネタはあった。
❇ 身の回りには，普段あまり気にしないことでもよく考えてみると不思議なことがたくさんありました。
❇ とても身近な自然や科学などを不思議に思えたし，考えてみると面白かった。
❇ いろんな種類の科学の種が見つかりました。次は科学の芽を見つけてみたいです。

②見つけよう　人体の謎（教材 b）

図 8　ご飯やパンを食べ，実験の予想をする生徒

図 8 の授業では，普段あまり噛まずに食べている者も多く，生徒たちは味の変化を伝えあっていた。また，この体験を実験の予想に反映させることができた。

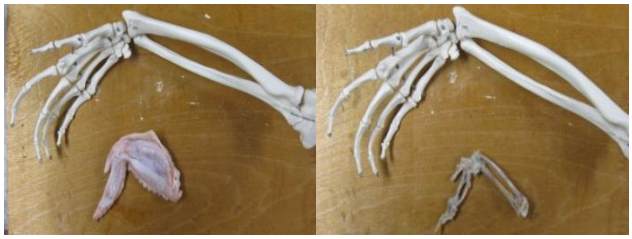


図 9　鳥の手羽先と人体の比較

生徒たちは骨格標本や自分の腕と見比べながら，積極的に手羽先に触れていた。骨のつき方や本数から，鳥類のつばさとヒトの腕は相同器官であることを理解させられた。

③わが家の節電作戦（教材 c）

図 10　わが家の節電作戦　掲示のようす

互いに節電作戦の評価を行わせた。観点は「節電率」「実現性」「工夫」とした。生徒たちの高評価を集めたものには「節電大賞」のシールを貼った。掲示することで，さまざまな節電方法に気づかせた

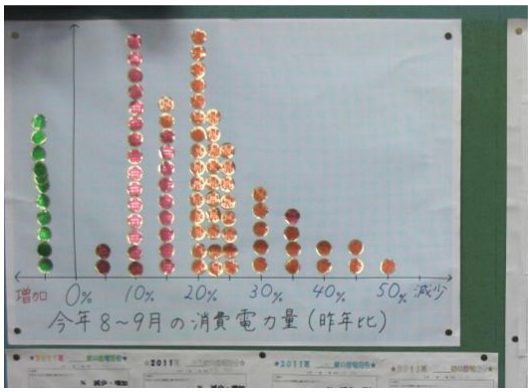


図 11　わが家の節電報告　掲示のようす

節電報告とともに，昨年と比較した消費電力量の増減グラフを掲示した。グラフの作成には，シールを用いた。生徒全員に自分の節電率の箇所にシールを貼らせ，グラフを完成させた。

以下に，生徒たちが書いた「わが家の節電作戦」と「わが家の節電報告」の一例を紹介する。

【わが家の節電作戦（節電のための工夫）】

❇ エアコン：代わりに扇風機を使う。
❇ ドライヤー：自然乾燥し，仕上げに使う。髪を切る。
❇ 炊飯器：保温をなるべくしない。
❇ 冷蔵庫：設定を強→弱をする。
❇ 掃除機：ふきそうじをする。
❇ 蛍光灯：日が出ているときはつけないようにする。
❇ 電子レンジ：冷凍食品ではなく，作って食べる。
❇ トースター：何枚かまとめて焼く。

【わが家の節電報告（節電をした感想）】

❇ この授業を受けてたし節電を心がけたらなんと10%以上も減少していてとても驚きました。ほんのすこしの意識でもここまでいくということは，もっとがんばればもっと節電できるんじゃないかと考えました。
❇ 夏は暑く，エアコンをやっぱりつけてしまいました。けれど，去年よりは1～2℃設定温度を高くしました。そして，家にある電気製品の扇風機やパソコン，オーブントースターなどなどコンセントをぬくくせをつけました。
❇ 計画通りちゃんと節電できた。計画を立てて27%という計算になり，本当に27%も節電できるのかなと思っていたけど，本当に27%節電ができていて正直ビックリしました。これからもなるべく続けていきたいなと思いました。

④理系のお仕事インタビュー（教材 d）

「理系のお仕事インタビュー」を掲示すると，生徒たちは休み時間に集まって読んでいた。以下に，生徒たちがインタビュー回答者にあてて書いた手紙の一部を紹介する。

【プロフェッショナルへの手紙】

❇ （宇宙航空開発研究機構の研究員へ）テレビでよく宇宙に行っている人を見ますが，その人達が安全に宇宙にいけるのは，宇宙航空分野の人達が，日々研究をしてくれているおかげなんだと思いました。
❇ （電器メーカーの研究員へ）質問です。デジタルカメラのきれいな画像を利用して，失明した人をなんとか目が見えるようになりませんか？
❇ （食品会社の研究員へ）乳製品が理科とあまり関係がなさそうだったが，つながっているときいておどろきました。
❇ （システムエンジニアへ）ぼくの将来の夢はSEでぼくもこんな人になりたいと思いました。なれるよう一生懸命がんばります。
❇ （大学院生へ）生物や化学の研究は，不思議なことがいっぱいあるので，それを調べることはすてきだと思いました。
❇ （食品会社の研究員へ）今，自分達が飲んでいる飲料を考えているのはすごいと思いました。こういう商品開発の仕事は面白そうだと思いました。
❇ （教科書会社の編集員へ）理系が得意だけど文系の仕事につきたいなと思っていて，悩んでいた私にとって「こういった人もいるんだ」ととても勇気がもてました。

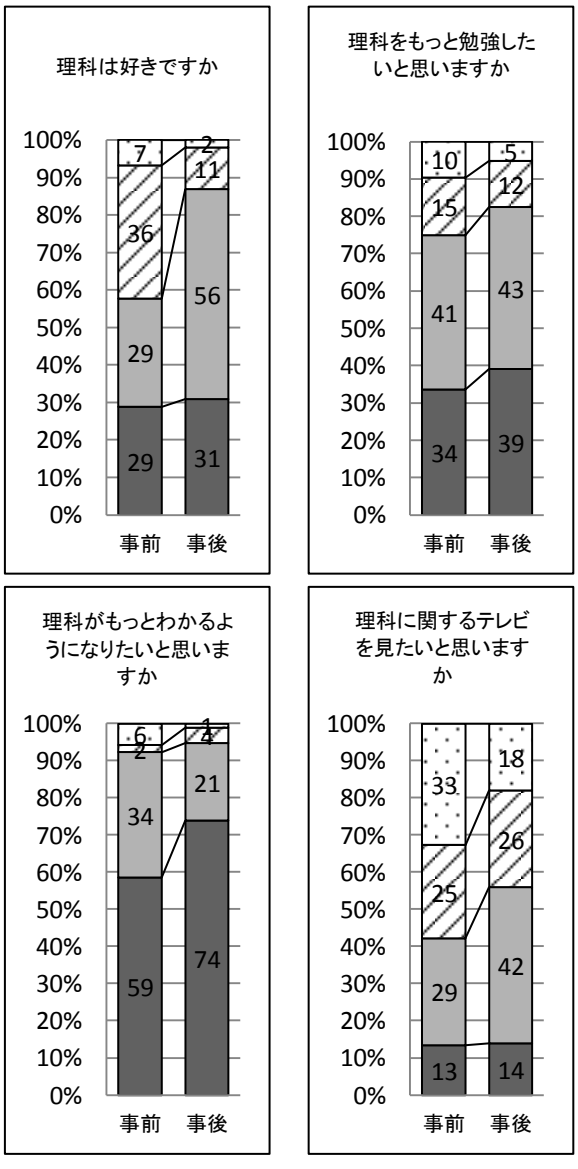
【プロフェッショナルの方からのお返事】

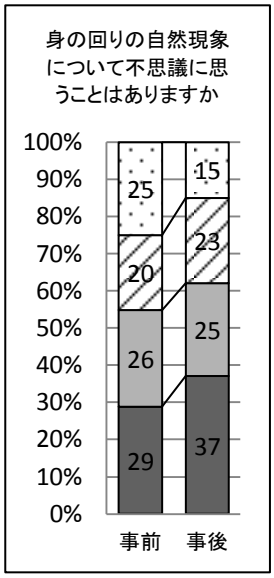
❇ （製薬会社のMRから）中学生のみなさんからコメントをいただけて，とても嬉しかったです。仕事の励みになりました。
❇ （薬剤師兼大学院生から）薬剤師の仕事ももちろん楽しいですが，研究はもっと楽しいですよ！
❇ （電器メーカーの研究員から）感想ありがとう！アンケートの記入を通して，就職したての初心に返ることができました。お互い有意義な時間になりましたね。

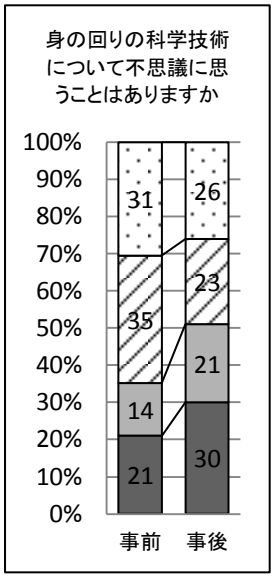
4　実践結果の分析と考察

以下は，アンケート調査の結果である。

n＝107
事前：平成23年5月，事後：平成23年11月
A：そう思う　B：どちらかというとそう思う
C：どちらかというとそう思わない　D：そう思わない







まず，「理科が好きですか」「理科をもっと勉強したいと思いますか」「理科がもっとわかるようになりたいと思いますか」という質問に対しては，「そう思う」「どちらかというとそう思う」という生徒が増加していた。これは，生徒たちの理科学習に対する意欲が向上してきたことを示している。つまり，教材 a～d が生徒の学習意欲によい影響を与えていることがわかる。また，理科に関するテレビを見たいという生徒も増加していた。ここから，日常生活において，進んで理科に関する情報を得ようとする態度が身についてきているといえる。「身の回りの自然現象・科学技術について不思議に思うことはありますか」という質問に対しても，肯定的に考える生徒の増加が見られた。生徒たちは身近な自然現象や科学技術に目を向けられるようになってきているといえる。これは，「科学の種」や「人体の謎」探しを継続し，身近な自然現象や科学技術の素晴らしさに気づかせたためだと考えられる。

一方で，「理科は大切（役に立つ）教科だと思いますか」という質問に肯定的な回答をした生徒は，事前・事後ともに 8～9 割程度であった。しかし，回答の理由から，以前は進学や成績のためとしていた生徒も，有用性を意識するようになってきていることが示唆された。「学ばざるを得ない理科」から「学びたい理科」へと意識が変化し，学習に対する主体性が身についてきたことがわかる。これは，「わが家の節電作戦」や「理系のお仕事インタビュー」を行い，理科学習の有用性を実感させてきた成果だといえる。

【アンケートに対する回答とその理由】

Q　理科は大切な教科だと思いますか。

【生徒 a の回答とその理由】

事前：C（大人になっても数学や英語しか使わないと思うから。）

事後：B（身の回りのことがわかったりするから。）

【生徒 b の回答とその理由】

事前：B（高校とかに行けなくなるから。）

事後：B（社会で使いそうだから。）

Q　理科は役に立つ教科だと思いますか。

【生徒 c の回答とその理由】

事前：B（国語と数学の方が役に立ちそう。）

事後：A（医学や料理などはすべて理科だと思うから。）

【生徒 d の回答とその理由】

事前：D（将来関係のある人はいいけど，関係ない人はやってもむだ。）

事後：B（子どもとかに教えたら喜びそうだから。）

【生徒 e の回答とその理由】

事前：D（まったく役に立たない。）

事後：A（不思議とかを説明してくれるから。）

V　研究の成果と課題

1　成果

1）「科学の種」，「理系のお仕事インタビュー」など，理科学習の有用性を実感させるための教材を作成することができた。

2）作成した教材を用いて指導を行ったところ，生徒たちの理科学習への主体性を高めることができた。

2　課題

1）今回の取り組みにより，全ての生徒の意欲を向上させることができたわけではない。今後も，理科の有用性を実感させる教材の工夫を行い，生徒たちにはたらきかけていきたい。

2）理科学習と職業の関係を意識させるにあたり，今回は「理系のお仕事インタビュー」を掲示するにとどまった。より高い指導効果を得るためにも，次回は日程や指導計画を調整し，専門家招へいを実現させたい。

【参考文献】

○　小倉康；「PISA の国際学力調査を読み解く」『Science Window』３・４月号，独立行政法人科学技術振興機構，2008 年

○　山極隆;『中学校　新学習指導要領の展開　理科編』，明治図書，2009 年

○　小倉康;「科学への学習意欲に関する実態調査」，国立教育政策研究所，2005 年

○　吉崎静夫;『活用型学力が育つ授業デザイン』，ぎょうせい，2008 年

【実践記録】

自己肯定感を育み、前向きに生きようとする意欲を高める学級経営

－自他を認め合う活動と生き方を考える授業実践－

船橋市立高根台第三小学校　教諭　大島　沙織

1　はじめに

内閣府が全国の９歳～14歳を対象に実施した「低年齢少年の生活と意識に関する調査」(平成19 年）によると、「自分に自信がない」と答えた割合が全体の 61.5%を占める結果となった。小・中学生の半数以上が「自信がない」と答えているのは大きな課題である。

図１は平成19年に千葉県の小学４年生から高校２年生まで、1，323 人を対象に行った「子どもの意識・実態調査」の結果の一部である。

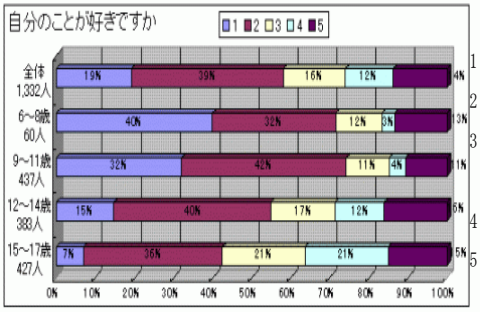


図１

千葉県の子どもたちの半数以上は自分のことを肯定的に感じていることがわかる。しかし、年齢を重ねるにつれ、自分のことを否定的に捉える割合が増えている現状がある。

前述の「自信がない」「自分を好きになれない」といった調査結果は、５年生初期の本学級の児童の実態と重なるものであった。低学年担任を経て、昨年度初めて５年生担任となったが、低学年児童との違いに驚いた。それは「自信がないから、やりたくない」と何事にも消極的だったり、「どうせ自分なんて」と自己否定したりする児童が多かったことである。このまま児童が自分を否定し、消極的な態度で学校生活を送ることは、成長のチャンスを逃すことになるだろう。児童の意欲を高めるためには、自分自身を肯定的に捉えさせることが不可欠であると考える。

「自分に自信がある」「自分が好きである」といった自分を肯定的に捉える感覚を本論では、『自己肯定感』という言葉に置き換えて論じていくこととする。『自己肯定感』とは、「自己自身の存在に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情をさす。」(「教育用語辞典」山﨑秀則・片山宗二　ミネルヴァ書房）と定義される。

発達心理学者であるエリクソンは、６才頃から12 才頃までの児童期に、周りの人から認めてもらえなかったり、充足感を得るような体験ができなかったりした場合は、自分は何をやっても駄目だ、何もやれないという劣等感にさいなまれることになると唱えている。この理論から、認められること、充足感を得ることが自己肯定感を育むことにつながるのではないかと考え、学級経営に取り入れていこうと考えた。

年々低下していく傾向にある自己肯定感を高学年のこの時期に育むことで、将来的にも変化の激しい社会を前向きに生きていこうとする意欲を高めることにつなげていきたいと考え、本主題を設定した。

また卒業を控えた６年生の時期に「生き方を考える」授業を展開することで、「前向きに生きる」というテーマにさらに迫っていきたい。

本論は、本学級において２年間を見通し、自己肯定感を育み、前向きに生きようとする意欲を高めようと試みた実践記録である。

2　実践の仮説

(1)**「自他を認め合う活動」**を取り入れることで、充実した学校生活を送ることができ、自己肯定感を育むことができるだろう。

(2)**「生き方を考える授業」**を実践することによって、前向きに生きようとする意欲を高めることができるだろう。

3　実践経過

（１）「自他を認め合う活動」の実践

＜実践の方法と内容＞

①連絡帳日記

５年生の４月から、帰りの会で、一日を振り返り、自分のがんばったこと・楽しかったこと・うれしかったこと等自由に書き、毎日私が返事を書くようにした。その際、カウンセリング・マインドを取り入れた返事を書くことにした。カウンセリング・マインドとは、カウンセリングを行う際のカウンセラーの心情・態度を指す。臨床心理学者のカール・ロジャーズは、カウンセリング・マインドとその姿勢について、表１

の 3 つの条件をあげている。

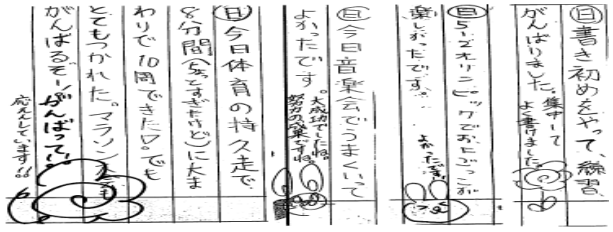
表 1

条　件	意　　味
①自己一致	相手を自分の既成の概念にとらわれずに見る姿勢を持つこと
②無条件の肯定的配慮	相手の考えや行動を否定せず、温かく受容すること
③共感的理解	相手の立場になり、相手の話からその気持ちを積極的に理解していこうとすること

この 3 つの条件を意識して、児童の書いた日記に対して、児童を否定するような返事ではなく、ほめたり、認めたりするような返事を書くように心がけた。また、日記は毎日家族に見せ、サインをもらうようにした。

＜経過＞

3 ヶ月が経過した頃には、自分のがんばったことなどをすぐに見つけられるようになり、毎日の連絡帳日記は習慣化されている。



返事を書く際は、必ず 1 対 1 で顔を見ながら、声をかけながら返事を書くようにしている。毎日のやりとりを通して、児童との信頼関係を築くこともできた。自分自身の行動を振り返ることによって、自己のよさやがんばりを改めて発見することにつながり、日々の積み重ねが自信となっている。また教師や家族に認められることが、「明日からもがんばろう」という意欲へつながっている。

② 構成的グループエンカウンター（SGE）

自他の良さを認め合える学級集団を作ることが、個々の自己肯定感を育むことにつながるのではないかと考え、構成的グループエンカウンター（以下 SGE と表記）を学級活動の中に取り入れていくことにした。SGE は、各種の課題（エクササイズ）を遂行しながら、心と心のふれあいを深め、自己の成長を図ろうとするグループ体験である。SGE はエクササイズとシェアリングで構成される。エクササイズは自己理解・他者理解・自己受容・信頼体験・感受性の促進という 6 つのねらいを満たすために用意された課題である。シェアリングは、エクササイズを振り返って、そこでの気づきや感情を本音で話し合い、分かち合うことである。5 年生の 6 月から、SGE を表 2 のように実施するように計画し、6 年生でも継続して取り組んでいる。ここでは、5 年生の時に実践した「自己理解・他者理解・自己受容」をねらいとしたエクササイズを中心に取り上げる。

表 2　　指導計画

6 月	5 年 2 組の大好き探し
7 月	目指せ　ありがとう名人
9 月	男女の素敵なところを見つけよう
10 月	がんばった自分をたくさんほめよう
11 月	「わたし」「あなた」を伝えよう
12 月	「友達の詩」を作ろう（4 時間）
2 月	5 年 2 組のキセキ発表会（2 時間）
3 月	6 年生になる君へ

＜経過＞

『5 年 2 組の大好き探し』

クラスの良いところや好きなところを学級全体で交流し合った。「仲が良い」「給食をよく食べる」「明るい」「がんばりやさん」「楽しい」などたくさんの意見が出た。シェアリングでは「クラス替えをしてまだ 3 ヶ月だけど、たくさん良いところが見つけられた」「これからも、さらに良いクラスになるようにしていきたい」などの前向きな感想を述べる児童が多かった。実践前と後を比べると、クラスのまとまりや協力体制がよくなっており、SGE の効果を実感することができた。

『目指せ　ありがとう名人』

友達へ日頃の感謝を伝えるために、ありがとうカードを書いた。カードを受け取ると、うれしそうにじっくりと読む姿が見られ、友達に認められる心地よさを感じることができた。シェアリングでは、普段は感謝の言葉をうまく伝えられない児童 A が「ありがとうをいつも伝えられるようにしたい」と述べ、教室内外でも「ありがとう」と自然に言えるようになっていった。しかし時間の経過とともに、エクササイズの効果が薄れているのを感じた。このような日常生活に生かしやすいエクササイズは、機会を見つけて、繰り返して取り組んでいくべきであると感じた。

『男女の素敵なところを見つけよう』

クラスの実態を見ると、性格や考え方など、さまざまな場面で男女差が目立った。そこで、男子は女子の、女子は男子の素敵なところを探し、お互いに発表するエクササイズを行った。

シェアリングでは「男子にないところが女子にあって、女子にないところが男子にあると思いました」「男女で助け合えば、とてもバランス

がよくなると思います」など、お互いの違いを認め、良さに気づくことができた。

『がんばった自分をたくさんほめよう』

前期の終わりに、5年生になってからの自分のがんばりをほめるエクササイズを行った。

「ぼくは、委員会の仕事を一度も忘れていません。高学年として、とてもがんばっています」「私は、5年生になってから、勉強をがんばっています。テスト前にも復習をして、成長したと思います」など、楽しそうに紹介し合う姿が見られた。聞いている方も、拍手をしたり、うなずいたり、友達のがんばりを認める態度が見られた。友達にもがんばりを認められたことで、「自分は5年生になってから、がんばっている」という気持ちをさらに高めることができた。

『「わたし」「あなた」を伝えよう』

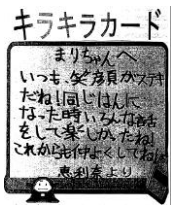
隣の席の友達をクラスのみんなに他己紹介するエクササイズを行った。

シェアリングでは「友達のことがさらによくわかりました」「ぼくのことをわかっているなぁと思ってびっくりしました」などの感想が出た。友達の新たな一面を知ったり、自分自身を客観的に見たりする良い機会となった。

『「友達のうた」を作ろう』

クラスの好きなところ・友達の素敵なところを「友達のうた」という詩に表すエクササイズを行った。表3のような流れで、4時間かけて活動した。　　**表3**

主な活動内容
1. 友達の素敵なところをキラキラカードに書きためる。(2)
2. カードに書いた班の人の素敵なところを参考に、「友達のうた」の詩を作る。(1)
3. 「友達のうた」を発表する。 カードを交換する。(1)



授業参観で、友達のうたの発表とカードを交換する場面を展開した。保護者からも資料①のような感想をいただき、好評であった。

【資料①保護者の感想】

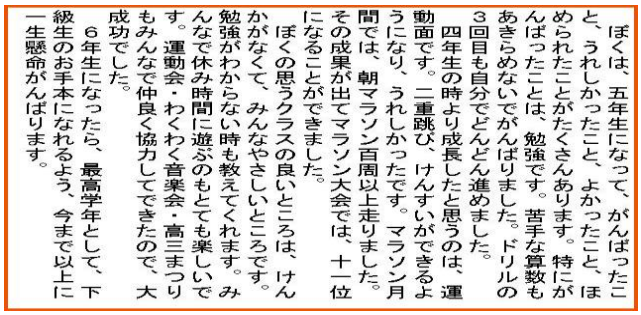
- 友達やクラスの良いところを言葉にできることは、すばらしいと思いました。家でも、子どもの良いところを口に出して、ほめてあげたいと思います。
- 子どもたちの様子を見て、心があたたかくなりました。5年2組は男女仲良く素敵なクラスですね。クラスのみんなのおかげで、我が子も成長できたのだと思います。

たくさんの参観者がいる中でも、素直に自分の思いを表現できたのは、今までの実践から互いに認め合おうとする雰囲気が出来上がっていたからであろう。教室中が温かい雰囲気に包まれ、保護者にも「認め合い」の大切さを伝えることができた。

『5年2組のキセキ発表会』

5年生の4月から、「キセキ」という学級通信を毎週発行している。子どもたちの日々の「軌跡」、30人が出会った「奇跡」、一人一人が価値のある「輝石」という3つの意味を込めて「キセキ」というタイトルにした。今まで発行した学級通信「キセキ」をみんなで読み返し、自分やクラスの1年間の「キセキ」を一人一人が資料②のような作文に表す活動を行った。そして5年生最後の授業参観で「5年2組のキセキ発表会」として、交流し合った。

【資料②1年間を振り返っての児童の作文】



ぼくは、五年生になって、がんばったこと、うれしかったこと、よかったこと、ほめられたことがたくさんあります。特にがんばったことは、勉強です。苦手な算数もあきらめないでがんばりました。ドリルの3回も自分でどんどん進めました。

四年生の時より成長したと思うのは、運動面です。二重跳び、けんすいができるようになり、うれしかったです。マラソン月間では、朝マラソン百周以上走りました。その成果が出てマラソン大会では、十位になることができました。

ぼくの思うクラスの良いところは、けんかがなくて、みんなやさしいところです。勉強がわからない時も教えてくれます。みんなで休み時間に遊ぶのもとても楽しいです。運動会・わくわく音楽会・高三まつりもみんなで仲良く協力してできたので、大成功でした。

6年生になったら、最高学年として、下級生のお手本になれるよう、今まで以上に一生懸命がんばります。

児童・教師・保護者みんなで、この1年の5年2組のがんばりと成長を分かち合うことができた。全員が充実した1年であったことがわかり、有意義な時間となった。

『6年生になる君へ』

学年末に、グループで家族に感謝していることについて、交流し合った。そして、家族へ感謝の気持ちを伝えると共に、家族からも「6年生になる君へ」というテーマでメッセージを書いてもらうことにした。5年生でのがんばりを認めたり、6年生へ向けて励ましたりするようなメッセージが多く「6年生になっても、がんばりたい」と最高学年への意欲を高めることができた。

(2)「生き方を考える授業」の実践

＜実践の方法と内容＞

卒業を控えた6年生の11月に、伝記を読むことによって、生き方を考える授業を展開することにした。伝記から多様な生き方を知り、これからの人生を前向きに生きていこうとする意欲を高めていきたいと考え、国語科「生き方を考えながら読もう～『伊能忠敬』から広がる伝記の世界～」の単元を設定した。

表4　　指導計画（14時間）

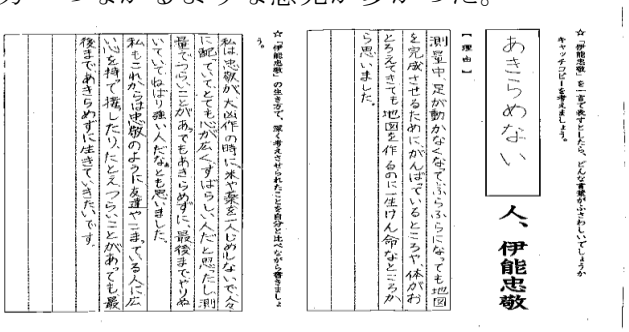
	主な学習活動
第一次	**『伊能忠敬』の生き方を考えながら読もう** 1.『伊能忠敬』がどのような生き方をした人なのか考えながら読む。(7) 2.「△△な人伊能忠敬」というようなキャッチコピーを考え、交流する。(2)
	さまざまな伝記を読もう＜並行読書＞
第二次	**生き方に対する考えを深めよう** 1. 今まで読んだ伝記の人物の中から、ポスタートークをする人物を選び、準備をする。(4) 2. ポスタートークを通して、生き方について意見交流する。(1)

＜経過＞

①『伊能忠敬』の生き方を考えながら読もう

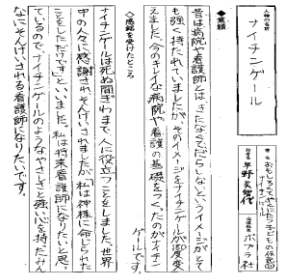
教材文『伊能忠敬』の学習では、生き方についてわかる文章に線を引きながら読んでいくようにした。また、その生き方から自分はどう感じたのかをワークシートに意見をまとめていくことで、一人一人が忠敬の生き方についての考えを持つことができた。『伊能忠敬』の学習のまとめとして、忠敬の生き方で一番感銘を受けたところを根拠として「△△な人 伊能忠敬」というようなキャッチコピーを考える活動を行った。そして、クラス全体で各自の読みを持ち寄り、交流した。学級全体で話し合ったことで、さらに『伊能忠敬』の人物像や生き方を明確にすることができ、考えを深めることができた。

まとめの感想でも「努力することの大切さを学びました」「忠敬のあきらめない、粘り強いところを見習いたいです」など今後の自分の生き方へつながるような意見が多かった。



②さまざまな伝記を読もう＜並行読書＞

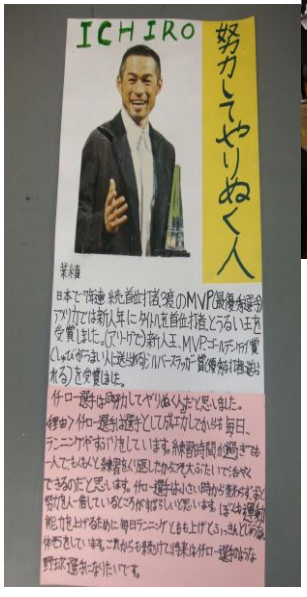
「生き方を考えながら読もう」というめあてにさらに深く迫るために、『伊能忠敬』に限らず、自分の関心のある人物の伝記を読むことを並行読書として取り入れた。また教室に伝記コーナーを作り、たくさんの伝記を置いて児童の関心を高め、自由に手に取れるような環境を整えた。

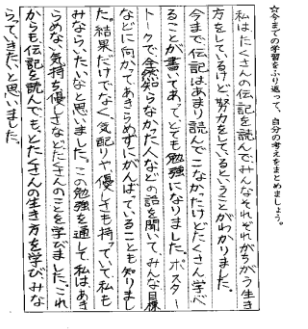


『伊能忠敬』の学習から、伝記を読むことの楽しさを知り、空き時間を見つけると熱心に伝記を読み、感想カードに業績や感銘を受けたところを書きためる姿が見られた。

③生き方に対する考えを深めよう

たくさん読んだ伝記の中から、特に感銘を受けた人物についてポスタートークを行った。ポスタートークでは、その人物の①キャッチコピー②業績③感銘を受けたところと自分の考えを、グループで交流した。そして、それぞれの人物の共通点について話し合った。どのグループでも「努力する姿勢」「思いやりの心」「あきらめない気持ち」「強い信念」などの共通点が話し合いの中で出ていた。まとめの感想では、「伝記の人物のように、あきらめずに努力していきたい」など伝記の人物の生き方を通して、今後の自分の生き方に生かしていこうとするものが多かった。また、「これからも伝記を読んで、色々な人物の生き方を知りたい」という感想も多く、生き方を学ぶ手がかりとして、伝記の存在を位置づけることができた。





4　児童の変容と考察

(1)「自他を認め合う活動」の実践から

＜教師から見た児童の変容＞

約１年半の「自他を認め合う活動」を経て、児童の変容を実感した。特に大きな変容として、新しいことや苦手なことにも積極的に取り組めるようになったことが挙げられる。ここでは、特に児童の積極的な姿勢が、成果として表れたことについて、紹介する。

①対外体育行事の練習参加人数の増加

表５

	相撲大会	水泳大会	陸上大会
４年時	０人		
５年時	５人	２人	６人
６年時	11人	５人	16人

表５は、本学級の対外体育行事の練習参加者人数を示したものである。本校では、学年が上がるにつれ、練習参加者数が減っているという現状があったが、本学級では、参加人数が年々増えている。参加理由は「選抜メンバーに選ばれたい」という児童が多いが「体力をつけたい」「苦手な運動をできるようになりたい」という理由から参加している児童もいる。また、選抜メンバーに選ばれなくても、「もっとがんばろう！」とあきらめずに、継続して練習に参加している児童が多い。

４年時は本学級の児童は、誰も練習に参加していないことから、５年生６年生では「自分でもできる」という自信や「やってみたい」という意欲が高まったと考えられる。

②『給食残菜ゼロ』の記録を更新中

５年生初期から、『給食残菜ゼロ』を目標に、毎日完食を続けていたが、苦手な食べ物は先に減らしている児童も何人かいた。しかし、５年生の後期には、「苦手だけど、がんばって食べます」と苦手なものも減らさずに食べられるようになった。結果として、１年半給食残菜ゼロを続けることができ、いきいきちばっ子「元気アップ・プラン大作戦」コンクールにおいて、健康づくりの取り組みを実践していることが高く評価され、千葉県教育庁教育振興部から船橋市の小中学校で初めて認定証を授与された。この結果は児童の大きな自信となり、「２年間残菜ゼロを目指そう！」と児童の意欲を高めている。

＜意識調査の結果から＞

６年生の９月に、児童の意識が５年生初期からどのように変化したのか、現在の自分をどう思っているのか、意識調査を実施した。

図２

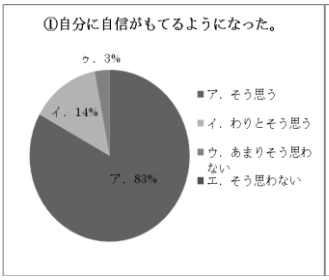
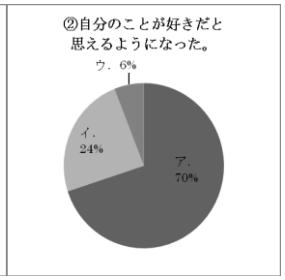


図３



【資料③自由記述の主な意見】

①自分に自信がもてるようになった。
◎そう思う　○わりとそう思う＜主な理由＞
・高学年として行事や委員会活動で、がんばったから。
・クラスのみんなで協力して色々なことに、挑戦して、達成できたから。
・友達・先生・家族にほめられるようになったから。
△あまりそう思わない＜主な理由＞
・勉強や運動などができないから。
②自分のことが好きだと思えるようになった。
◎そう思う　○わりとそう思う＜主な理由＞
・友達と、仲良くできているから。
・毎日学校で、がんばっているから。
・前より勉強ができるようになってきたから。
△あまりそう思わない＜主な理由＞
・宿題を忘れてしまう時があるから。
・家族に反抗してしまうことが増えたから。

図２・３と資料③は調査の結果である。ほとんどの児童が「自分に自信がもてるようになった」「自分自身を好きだと思えるようになった」と答え、５年生初期に比べ、自己を肯定的に捉えられるようになったことがわかる。「自信をもてるようになった」理由を見ると、自分自身の努力や達成経験、他者から認められた経験が自信につながったと考えられる。また「自分を好きだと思えるようになった」理由を見ると、人間関係・生活面等で問題や悩みなどがなく、生活できている場合、「自分を好き」だと感じる児童が多いことがわかる。

前述の実践結果から、さまざまな経験が複雑に作用して、自己肯定感が高まるものと考えられる。しかしながら、本学級で実践してきた「自他を認め合う活動」も自己肯定感を育んだ一因であると言えよう。自分を認め、さらに他人に認められることで、自分の良さに気づいたり、自信をつけたりすることができた。自己を肯定的に捉えられるようになったことがきっかけとなり、児童は何事にも積極的に取り組めるようになったと考えられる。そして、前向きにさまざまなことにチャレンジし、充足感を感じたことが、さらに自己肯定感を育む結果へつながったものと考察する。

(2)「生き方を考える授業」の実践から

＜意識調査の結果から＞

「生き方を考える」授業実践を通して、児童の意識がどのように変化したか意識調査を行った。実施時期は、授業開始の 1 週間前（10 月）、授業終了の 1 週間後（11 月）である。質問紙はさまざまな尺度調査を参考に、小学生向けに自作したものである。表 6 に示す通り、4 点尺度で行った。

表 6　　あてはまる←４３２１ →あてはまらない

	質　　問	事前	事後
1	自分のことが好きである	3.43	3.41
2	自分に自信がある	3.45	3.22
3	将来へ希望を持っている	3.02	3.33
4	大変なことがあっても、あきらめないで取り組んでいきたい	3.31	3.87
5	目標へ向かって精一杯努力していきたい	3.35	3.81
6	決めたことは、強い気持ちを持って最後までやり通したい	3.21	3.65

4 点尺度の平均を見ると、事前調査の段階で、全ての項目で 3 点台と高い結果となった。これまでの一年半の取り組みがこれらの項目において、有意であったことがわかる。事後の結果を見ると 1･2 の自己肯定感に関わる項目の平均がわずかに低下している。理由として、伝記の人物を「偉人」として捉えた結果、「自分にはできない」「自分はまだまだである」などの気持ちを持ったのではないかと考えられる。伝記の人物と自分の共通点を探すなど、同じ一人の人間として据えるための手だてを講じる必要があったと感じている。しかし、3～6 の「希望」「あきらめない」「努力」「信念」といった前向きに生きていくために必要と考えられる項目の平均は、全て向上している。この結果から、生き方を考える授業は、前向きに生きようとする意欲を高めるために有効であることがわかった。

表 7　　項目 3～6 の平均値

	事前	事後
自己肯定感の低いグループ	2.52	2.91
自己肯定感の高いグループ	3.42	3.74

また、項目 1･2 の平均値が 3 未満の自己肯定感の低いグループと 3 以上の自己肯定感の高いグループに分けて、項目 3～6 の平均値を表したのが表 7 である。事前・事後調査のどちらも、自己肯定感の低いグループは、項目 3～6 の平均値も 3 未満と低く、自己肯定感の高いグループは、項目 3～6 の平均値も高い。このことから、自己を肯定的に捉えられる児童は、前向きに生きようとする意欲も高いことがわかる。

その一方で、自己肯定感が低いグループの児童も高いグループの児童も共に、前向きに生きようとする意欲の高まりが見られたことから、今回の実践はどの児童にとっても、有意義な学習であったと言えよう。

5　実践の成果と課題

(1) 成果

①個人を対象とした「連絡帳日記」集団を対象にした「構成的グループエンカウンター」の 2 つの**「自他を認め合う活動」**がきっかけとなり、児童の自己肯定感を育むことができた。また 2 年間を見通し、実践を継続したことによって、さらに効果をあげることができた。

②**「生き方を考える授業」**を実践したことによって、さまざまな人物の生き方を知り、将来を見据え、前向きに生きようとする意欲を高めることができた。また、前段階で自己肯定感を育む実践を重ねたことが、さらに意欲を高めることにつながった。

（2） 課題

①**「自他を認め合う活動」**には、他にもさまざまな方法がある。児童の実態に応じて、さらに有効な手だてを模索していく必要がある。

②伝記を扱った**「生き方を考える授業」**では、自己肯定感が低下した児童が見られたことから、「偉人」ではなく、児童の生活にさらに身近な人物から生き方を学ぶことも検討していきたい。

6　おわりに

5 年生初期は、自信がなく消極的だった本学級の児童も、今では最高学年として学校の先頭に立って、リーダーシップを発揮している。3 月に卒業する児童にとって、この 2 年間の取り組みが少しでも今後の人生の糧となることを願っている。私自身、初めての高学年担任であったが、児童と共に経験を積み、たくさんのことを学ぶことができた。今後もさらに研究と修養に励み、児童と共に成長していけるような教師を目指していきたい。最後に、このような機会を与えていただいたこと、たくさんの方に助言いただいたことに、深く感謝申し上げたい。

【主な参考文献】

・山﨑秀則・片山宗二（2003 年）『教育用語辞典』、ミネルヴァ書房
・国文康孝・岡田弘（1996 年）『エンカウンターで学校が変わるーグループ体験を生かした楽しい学級作り』、図書文化社

【実践記録】

八栄小の児童の体力を高めることを目指して

船橋市立八栄小学校　　教諭　横田　達

１　はじめに

平成２１年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」より、千葉県の児童の体力は全国でトップクラスであることが分かった。

さらに、千葉県の児童の体力は、ここ数年で徐々にではあるが向上していることも分かっている。

本校の平成２２年度の新体力テストの結果（資料１）を見ると、千葉県平均を超えている種目が２７種目で、千葉県平均を超えていない種目が６９種目あることが分かった。本校の児童の体力は千葉県平均と比べると大きく下回っている。その中でも特に反復横跳び、５０ｍ走の結果が全ての学年の男女で千葉県平均を超えておらず、特に苦手とする種目であることも分かった。

資料１　平成２２年度新体力テストの結果　千葉県平均との比較

	小１		小２		小３		小４		小５		小６	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
握力	●	●	●	●	○	○	●	●	○	●	○	●
上体起こし	●	○	●	●	○	○	●	○	●	●	●	●
長座体前屈	●	○	●	●	○	●	●	●	●	●	○	○
反復横跳び	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
シャトルラン	●	●	○	○	●	●	●	●	○	●	○	●
50m 走	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
立ち幅跳び	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ボール投げ	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●

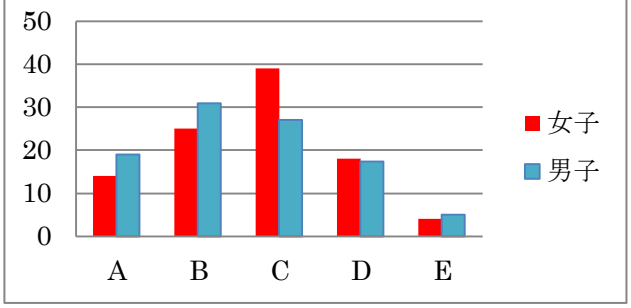
○千葉県平均以上　　●千葉県平均未満

この結果から、本校の児童の体力を高める取り組む必要性を感じた。体力を高める取り組みを行うことにより、自分の体力に興味・関心を持ち、進んで運動する児童の育成につながると考えた。その結果、新体力テストの結果も改善されるのではないかと考える。

また、資料２の昨年度の新体力テストの総合判定の分布グラフを見ると、男子はＢ判定の児童が多い山形になっており、判定の基準からすると若干良いことが分かった。女子はＣ判定の児童が一番多い山形になっており、判定の基準からすると標準的な結果だと分かった。

しかし、全校の中でＤ、Ｅ判定の児童が約２割いる。休み時間や毎朝取り組んでいる朝運動の様子を見ると、意欲的に外へ出て運動する児童と、教室で過ごす児童の二極化が見られる。新体力テストの結果の二極化は見られないが、運動が苦手だったり得意でなかったりする児童に対する手立てが必要だと考える。

資料２　平成２２年度新体力テスト総合判定



体力を高めるためには、体力の必要性や生活習慣について指導した上で、各運動に取り組ませる方がより効果的であると考える。

今回の体力を高める手立てをとる大きな目標は、児童の体力を向上させることである。

しかし、単に苦しさを乗り越えるトレーニングを行って結果を伸ばすのではなく、取り組む運動の特性や楽しさなどを感じる取り組みにしたいと考える。運動が苦手な児童も、楽しさや達成感を感じられる取り組みを念頭に置き、本校の児童の体力を高めたいと思い、試みた実践の記録である。

２　実践の目的

本校の児童の体力を高めることを目指し、授業の改善や、児童に運動の特性や楽しさを感じさせる取り組みを通して、運動に親しむ児童の育成を目指す。

３　実践

（１）授業の改善

児童が運動を好きになるため、また、体力を高めるためには、授業の質の向上に対する意識を常に持ち、安定した水準の授業を行うことが大切である。そのため、本校では２つの手立てをもとに授業の改善を行った。以下、その２点について述べる。

①初期層研修

本校では、経験５年目以内である初期層の教員が１４人在籍している。体育の授業をどのように進めればよいのか悩んだり、運動を苦手とする児童のサポートの仕方が分からなかったりする教員が多いのが現状である。

そこで、今年度は３名の体育部員が初期研の一環として授業研究を行った。講師として保健体育科の先生に直接指導していただいた。事後研修では、初期層の教員から授業の進め方、運動が苦手な児童へのサポートの仕方などを質問し、指導していただいた。そこで体育の授業実践に関する知識を補うことができた。

②学年会を研修の場として活用

各学年の体育部員を中心に、学年会で体育の授業について話す機会をつくってもらい、研修の場としている。学年会で提案する際、前もって体育部員は単元の見通しを持って資料を用意し話ができるよう準備している。授業の進め方、場の設定などを学年全員で話し合い、学年の実態に応じて統一された、また、運動が苦手な児童でも楽しめるような授業展開を考えてもらうようにした。

その一例として、第５学年では、掲示ボードに資料を掲示し、どの学級でも使えるようにしている。授業の流れやねらい、行う運動のポイントなどを見やすく掲示して授業を行っている。まず、教員が運動の特性やそれに応じた授業展開を理解して指導にあたることができるようにし、苦手な児童でも運動の特性に触れ、楽しく取り組めるようにしている。

体育カードも学年で統一したものを使用している。体育カードには、授業のふり返り、その日にできるようになったことや工夫したことなどを記入できるようにしている。単元に応じて、チームの作戦や、友達にアドバイスされたことなどを書けるようにすることで、「ただ運動する」だけでなく、「考えて運動する」習慣をつけることをねらいとしている。

また、学年で統一した授業を行うことで、初めに授業を行った学級の様子を生かし、次の授業ではさらに細部にわたる配慮ができるという利点もある。

このような取り組みがきっかけとなり、どの学級でも一定の水準の授業が展開され、教員も自信を持って授業を行うことができている。運動が苦手な児童でも意欲的に取り組んだり、主体的に体を動かしたりする姿が多く見られる。

（２）朝運動

児童の持久力向上を目指して、体育委員会が中心となり、８時から８時５分まで５分間走を行っている。

校庭で全校児童の約１０００人が一斉に走ると危険なため、高学年、低学年に分けて実施している。高学年は月、水、金曜日、低学年は火、木曜日に行っている。

昨年度の参加児童は、運動が得意な子が多かったので、運動を苦手とする児童も前向きに参加できるような手立てが必要だと考えた。

①教師のはたらきかけ

各担任に児童が朝運動に参加するように声をかけてもらうよう促した。ただ促すだけではなく、一緒に走ったり、励ましたりしながら教師も参加している。

また、カードを配布して自分がどれだけ走ったか記録できるようにし、自分の努力の足跡を見て実感できるようにした。

さらに、朝会の際、運動をするとなぜ体によいのかという話をし、運動の大切さを伝えると共に朝運動に参加するよう促した。

②児童同士のつながり

教師のはたらきかけがもととなり、体育委員会の児童が各兄弟学級の教室に行って参加を呼びかけたり、係を中心に、朝運動に参加しようと声をかけ合ったりする姿が多く見られるようになった。

その結果、友達と一緒に走ったり、競い合ったりして、運動が苦手な児童も楽しく運動することができてきた。

また、教師が配布したカードを活用して、カードを見せ合いながら声をかけ合ったり、互いに誘い合ったりしながら取り組む姿も見られ、自分の頑張りや友達の頑張りの足跡がはっきりと見えることで実感することができている。

そして、実際の場では、どの学年にもスター

ト前からスタート場所に集まって、早く走りたいと待ち構えている参加意欲の高い児童が多く見受けられる。その時間の教室をのぞいてみると、ほぼ空になっているほど多くの児童が参加している。

本校の平成２２年度と平成２３年度の２０ｍシャトルランの結果（資料３）を見ると、平成２３年度の記録では６学年女子以外の学年で平成２２年度の千葉県平均を超えていた。また、資料４、５から学年ごとの数値で見てみると昨年度の記録を上回る学年が多く見られる。

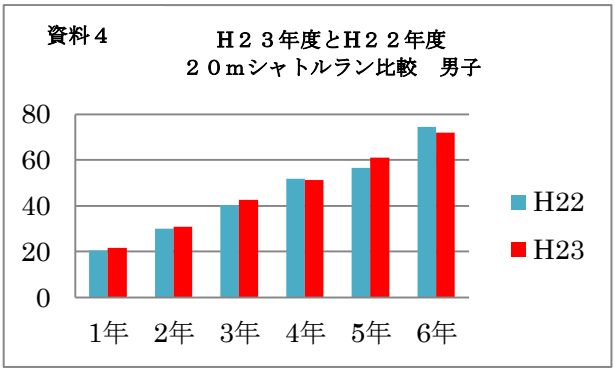
体育委員会の児童を中心として、年間を通して５分間走に取り組んだ成果だと思われる。

資料３　平成２３年度新体力テストシャトルランの結果

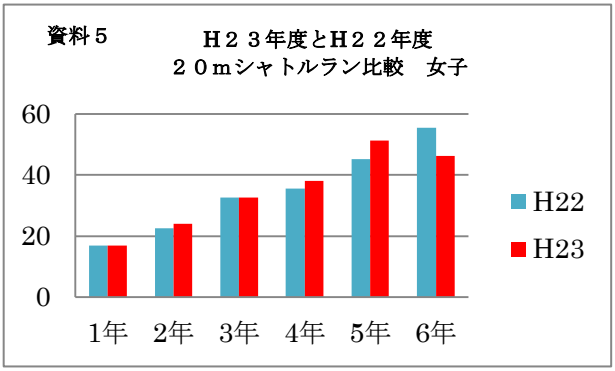
	小１		小２		小３		小４		小５		小６	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
H23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
H22	●	●	○	○	●	●	●	●	○	●	○	●

※千葉県平均は平成２２年度のものである。

資料４



資料５



（３）新体力テストに向けて

①目標値の設定

本校の児童の実態として、めあてや目標を持つと達成に向けて張り切ったり、頑張ったりする児童が多い。そのため、目標値を設定すれば児童は運動に意欲的に取り組むのではないかと考えた。また、数値として目標を設定することにより、児童は伸びが実感できると考えた。

目標値を設定する上で、児童の実態に合った適切な目標が大切である。そのため、千葉県平均を十分に参考にし、値の小数を切り上げて目標を設定した。すべての学年に男女別で資料６のような目標値とした。

資料６　６学年の新体力テスト目標値

	男子		女子	
	県平均	目標値	県平均	目標値
握力	21.85kg	22kg	20.82kg	21kg
上体起こし	23.80回	24回	21.60回	22回
長座体前屈	38.84cm	39cm	43.46cm	44cm
反復横跳び	48.18点	49点	45.25点	46点
２０ｍシャトルラン	67.05回	68回	52.94回	53回
５０ｍ走	8.62秒	8.6秒	8.98秒	8.9秒
立ち幅跳び	174.83cm	175cm	163.04cm	164cm
ソフトボール投げ	30.80m	31m	17.34m	18m

さらに、目標値を全校児童が通る掲示板に掲示したり、各担任に配布して教室に掲示したりして、児童に周知するようにした。

目標値を設定したことにより児童の意識が変わった。昨年度までは、多くの児童がなんとなく新体力テストを行い、目指す目標がないまま取り組んでいた。そのため、低い値で満足してしまったことも、本校の新体力テストの結果が悪かった原因の一つであったようだ。目標値を設定したことにより目標をどこに設定して頑張ればよいのかが明確になり、そこを目指して頑張ることができた。また、運動が苦手な児童には、練習会で自分の体力を知り、自分に適した目標を設定し取り組ませるようにした。目標値を超えた児童は、１０点を目指して頑張る姿が見られ、向上心を高く持たせることができた。

若干ではあるが、運動が苦手な児童の中で、休み時間に校庭のラインを使って友達同士で練習する姿が見られたり、家で保護者と一緒に練習したりと、児童や家庭の興味、関心の高まりを認めることもできた。

②新体力テスト練習会

新体力テストに向け、体育委員会主催で新体力テスト前に自分の体力を知ることを目的に練習会を開いた。

期日：平成２３年９月１０日～９月２１日
時間：昼休み
対象：全校児童
日程：月　５、６学年　　火　４学年
　　水　３学年　　木　２学年
　　金　１学年
種目：握力、上体起こし、長座体前屈
　　反復横跳び、立ち幅跳び

体育委員会の児童に正しい測定方法を学習させた。仕事分担を明確にさせ、自分に任された種目のアドバイスを的確に行えるように指導した。そのため、児童は種目のポイントやコツなどをお互いに研究し合う姿がみられた。練習会当日は、参加しに来た児童にそのポイントを教える姿が多く見られた。

練習会を行う際、全校児童に記録用紙（資料７）を配布した。記録用紙には記録できる欄と各学年男女の目標値を載せ、自分の体力と対比させながら練習に取り組ませた。

資料７　第４学年　新体力テスト練習会記録用紙

種目	練習1	練習2	練習3	男子目標	女子目標
握力				16kg	15kg
上体起こし				20 回	18 回
長座体前屈				33cm	36cm
反復横跳び				42 点	40 点
立ち幅跳び				151cm	143cm

自分の体力を知るために意欲的に取り組む児童の姿が多く見られた。特に平成２２年度の結果が悪かった反復横跳びでは、多数の体育委員会の児童を動員して、多くの声をかけたり、励ましたりさせながら取り組ませた。運動が苦手な児童も自分の目標が明確になり、達成感を味わう活動を行うことができた。

多くの児童が目標値を超えようと一生懸命に取り組んでいたことから、本校の児童にとって適当な値であったと考えられる。

これまで新体力テストへの意識が低かったが、この自分の体力を知るという目的の練習会により、興味、関心を高めることができた。

（４）新体力テスト

実施期間：平成 23 年 9 月 26 日～9 月 30 日

新体力テストを行っている児童の様子は、毎日取り組んだ朝運動や、体育の授業の成果を出そうとしたり、練習会での自分の記録を更新させようとしたり、目標値を超えようと楽しく取り組みながら頑張っていた。児童に前期の反省を書かせたときに一番頑張ったことは新体力テストと記述する児童がいるほど、熱の入った新体力テストとなった。

４　実践の成果と課題

（１）実践の成果

①授業における児童の変容

５学年の体育カードに、様々な変化、反応が見られる。４月当初は何を書いたら良いかわからないと言っていた児童も少しずつ考えを書けるようになってきていたり、授業中にアドバイスをもらうとすぐに書き留めたりする姿が見られる。授業後には、教員のひと言コメントを心待ちにして、それを励みに次も頑張ろうとしている様子が見られる。教員も、学年会で話し合った運動の特性を理解した上で、どのようなコメントをするか考えるように努めている。また、単元終了時に、努力の評価として貼られるシールを大切にしている様子から、児童が自分の体育カードに愛着を持っていることもわかる。日頃の体育への前向きな取り組みを体育カードという形あるものにすることで、児童の体育に対する意識が徐々に変わってきた。

その時間だけの体育、ということではなく、単元の中でも、年間の中でも、「前にこんなことをしたから・・・」と児童の中での積み重ねが明確になる。６学年の児童の中で、フラッグフットボールの授業時、「バスケのときにこうしたから、こうしてみよう。」という意見も出ていた。考えて運動する楽しさは、１日や１単元で感じられるものではなく、積み重なるものの中で会得できるものなのであろう。

②新体力テストの結果

資料８　平成２３年度新体力テストの結果　千葉県平均との比較

	小１		小２		小３		小４		小５		小６	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
握力	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●
上体起こし	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
長座前屈	○	●	○	○	○	●	○	○	○	○	●	●
反復横跳び	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シャトルラン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
50m 走	●	●	○	●	●	●	●	●	●	○	○	●
立ち幅跳び	○	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	●
ボール投げ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●

○千葉県平均以上　●千葉県平均未満

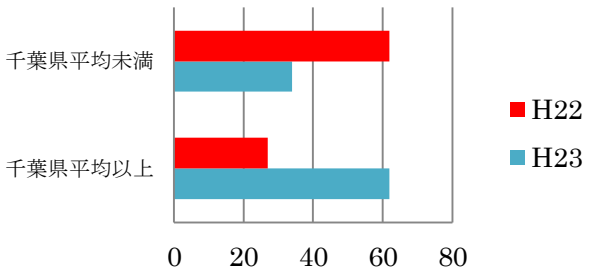
※千葉県平均は平成２２年度のものである。

千葉県平均を超えた種目は平成２２年度の２７種目に対して平成２３年度では６２種目となった。結果として大幅に改善することができた。

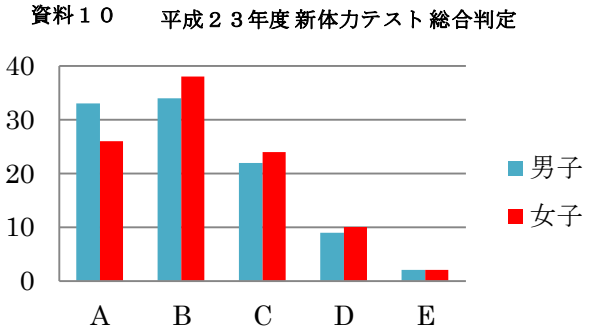
特に前年度全ての学年の男女で千葉県平均を超えることができなかった反復横跳びでは、全ての学年で超えることができた。同じく５０ｍ

走も２年男子、５年女子、６年男子で超えることができた。全体的に見ても握力を除く７種目で前年度の成績を超えることができた。

資料９　千葉県平均との比較



資料１０　平成２３年度 新体力テスト 総合判定



また、資料 10 の本校の新体力テストの総合判定の分布グラフを見ると、男子のグラフは昨年度のグラフよりＡ、Ｂ判定の児童が多い山形になっており、判定の基準からすると良いことが分かった。女子はＣ判定の多い山形である標準的な結果だったが今年度ではＢ判定の割合が高い山形となった。今回注目したＤ、Ｅ判定の児童は前年度では約２割いたのに対し、男女ともに約１割となった。

②５０ｍ走の結果

本校で全体的に見て結果がふるわなかった５０ｍ走を数値（資料 11、12）の上で詳細に見てみる。平成２２年度の結果を見てみると千葉県平均との差が０．１ 秒以下なのは３学年男女、４学年女子、５学年男子の４つであった。それに対し、平成２３年度の結果を見てみると、１学年男子、２学年男女、３学年男女、５学年女子、６学年男子の７つであった。さらに、千葉県平均との差が０．２秒以上では、平成２２年度では７つもあったのに対して、平成２３年度は１つに減ったことが分かった。

また、全国平均と比較してみても全ての学年で超えている。このことから、本校の走力は千葉平均より劣ってはいるが、確実に改善されつつあることがわかる。

改善された要因は毎日取り組んでいる朝運動の取り組みや、授業の質の向上であると考える。５０ｍ走を高める運動として走る動きを直接取り入れたわけではないが、４月からの取り組みとして５０ｍの結果が前年度より良くなったのではないかと考える。

資料１１ 平成２２年度 ５０ｍ走の全国平均、千葉県平均との比較

	男子				女子			
	全国平均	県平均	本校	差	全国平均	県平均	本校	差
１年	11.58	11.05	11.44	0.39	11.89	11.43	11.68	0.25
２年	10.66	10.39	10.61	0.22	10.97	10.69	11.02	0.33
３年	10.15	9.90	9.96	**0.06**	10.45	10.25	10.32	**0.07**
４年	9.62	9.43	9.65	0.22	9.96	9.76	9.80	**0.04**
５年	9.28	9.06	9.12	**0.06**	9.61	9.33	9.71	0.38
６年	8.90	8.62	8.87	0.25	9.23	8.98	9.16	0.18

資料１２ 平成２３年度 ５０ｍ走の全国平均、千葉県平均との比較

	男子				女子			
	全国平均	県平均	本校	差	全国平均	県平均	本校	差
１年	11.58	11.05	11.19	**0.09**	11.89	11.43	11.58	0.15
２年	10.66	10.39	10.34	**-0.05**	10.97	10.69	11.72	**0.03**
３年	10.15	9.90	9.95	**0.05**	10.45	10.25	10.32	**0.07**
４年	9.62	9.43	9.61	0.18	9.96	9.76	9.91	0.15
５年	9.28	9.06	9.20	0.14	9.61	9.33	9.33	**0**
６年	8.90	8.62	8.61	**-0.01**	9.23	8.98	9.21	0.23

※千葉県平均は平成２２年度のものである。
※差は千葉県平均との比較のものである。
※太文字は千葉県平均との差が０．１秒以下。
※アンダーラインは千葉県平均との差が０．２秒以上。

（２）課題

握力の結果が昨年度より落ちた。原因として考えられるのは、握力は握力計を使ってただ測るのみの活動だったためと考えられる。普段の児童の休み時間などの様子を見ていると、鉄棒、登り棒、雲梯で遊ぶ児童は決まっているのが現状である。このことから、年間を通して握力を向上させる取り組みをしなくてはならないと考える。また、５０ｍ走や立ち幅跳びも千葉県平均を超えた数としては前年度より上げることができ、数値的にも上げることができたが、依然として低いことがいえる。

全校で、５０ｍ走、立ち幅跳びについても、それらの動きにつながる運動に年間を通して、取り組み必要である。

（３）課題への対応

①掲示物により意識を高める工夫

今年度の集計結果をすぐに児童へ知らせることで、児童の体力向上についてさらに興味、関心を高める。

集計後、全校児童が通る場所にすぐに結果を

掲示した。立ち止まって見る児童が多くおり、関心の高さが伺えた。掲示物から頑張ったことが成果として一目でわかるため、児童たちには達成感や充実感があったようである。

また、今年度全校として結果が悪かった種目の握力、５０ｍ走、立ち幅跳びを伸ばしたい、学年で悪かった種目を改善したい、という声が児童から聞こえてきた。児童の体力向上についての興味、関心を高めることができた。

②体力向上会の設置

新体力テストの結果を見た体育委員会の児童から、来年度に向けて新体力テストの練習会をしたいという声が多く出た。

期日：①平成 23 年 12 月 12 日～12 月 16 日
　　②平成 24 年 1 月 23 日～1 月 27 日
時間：昼休み
対象：全校児童
日程：月　５、６学年　火　４学年
　　水　３学年　　木　２学年
　　金　１学年
内容：握力、上体起こし、長座体前屈
　　反復横跳び、立ち幅跳び、
　　それらを向上させる運動

そこで、９月に行った新体力テスト練習会の内容を若干変更して行うことになった。平成２３年度で結果が芳しくなかった立ち幅跳び、握力を改善するために、ただ跳んで、握って計測するだけでなく、苦手とする種目を伸ばすために、立ち幅跳びや握力に効果のある遊びや運動の場の設定やその運動の仕方を書いた掲示物を掲示したり、実際にその運動をしたりして体を動かすようにした。

また、新体力テスト練習会で配布した記録用紙の一部を改訂し配布した。改訂した表は来年度に向けた取り組みであることから、目標値を一学年上の値で設定した。さらに、自分の平成２３年度の記録を書くことができる欄を入れ、比較対象を２つにして行えるようにした。

今年度の１月下旬までの取り組みではあるが、来年度も引き続き行えるようにして、年間を通した取り組みにしていきたい。

資料１３　第４学年女子　体力向上会記録用紙

種目	練習1	練習2	練習3	自分の記録	目標
握力					18kg
上体起こし					20 回
長座体前屈					40cm
反復横跳び					43 点
立ち幅跳び					155cm

③走力アップの取り組み

朝運動の５分間走後、体育委員会の引いた５０ｍ走のラインで、５０ｍ走をしたい児童が走れる場の設定をした。運動意欲のある児童が多数参加し、走っている。

また、体育部で発行している体育部便りや体育部員を通して走力を向上させる遊びや運動を紹介し、体育の授業の導入などで取り入れてもらえるよう促している。

④細かいデータ分析

今年度より業者に集計を委託した。委託する利点として、以下の３つが挙げられる。

①児童全員に個人カードが配布され、自己の体力を詳しく知ることができる。

②個人結果を全国、県の平均値と比べられ、記載された講評などが事後指導に生かせる。

③児童全員に、記録・得点を入れた体力証が発行され、自分の体力を知ることができ、運動に親しみ､自ら進んで運動するきっかけをつくる。

集計されたデータをもとに分析結果が詳細に出るので、事後指導に役立っている。

５　おわりに

体力を高めるために、運動の苦手な児童への支援をしてあげることが、全ての児童に対しての支援であると感じた。体力を高めるプログラムを学校の児童の実態に合わせて確立して取り組ませることが非常に大切であると今回の実践を通して感じた。しかし、これらの取り組みが全てということではない。さらに本校の体力を高めるためにさらなる手立てを考えていかなければならないと考える。

【主な参考文献】

○千葉県教育委員会　２０１０年
「全国体育・運動能力、運動習慣等調査」に基づく子どもの体力向上支援事業報告書

【実践記録】

パソコンを利用した学校事務の効率化に向けての取り組み

―学校事務の電子化の先に見える教育支援―

船橋市立湊中学校　主任主事　及川　妙子

1　研究のきっかけ

1990 年代後半、携帯電話やインターネットが急激に普及し、情報化社会と言われるようになってきた頃、私は大学を卒業し民間企業へ就職した。私が就職した会社はいわゆる IT 系企業で、社内では独自のデータベースとペンダブレットを利用したサイン認証システムにより、社長までの書類決裁がすべてコンピュータ上でなされていた。まさにペーパーレス化である。そんな IT 系企業を退職し、公務員になるべく死に物狂いで勉強し、何とかつかんだ学校事務職員としての公務員の道。正直、学校事務とは何をする仕事であるのかもわからないまま初任者として船橋市立金杉台小学校へ着任した。そこで初めて知った学校事務の現状は次のとおりであった。

・仕事はほとんど紙媒体で行われており、パソコンはあまり利用されていない。
・学校に同じ立場の職員がいないため、わからないことは必携や手引き等を調べて一人で解決しなくてはならない。
・初任者であろうがベテランであろうが、その学校にとって事務職員は一人であり、一定の職務標準を満たさなければならない。

このような現状を目の当たりにしながらも、最初は膨大な仕事量にただ追われる毎日で、時にはその場しのぎで記入間違いの書類を修正液で消し、それをコピーしたあとでまた記入しなおすという、アナログかつ非効率的な作業をしながら乗り切るしか方法はなかった。しかしそのような現状を少しでも改善する必要があると徐々に実感し、民間企業から転職した者として、私にできる学校事務の効率化はないだろうかと考えるようになったのである。

2　研究の目的

(1) パソコンを利用することで事務処理の効率化およびコストの削減を図る
(2) これから増えていく若年層事務職員のために、すぐに検索できる事務マニュアル閲覧システムを提供することによって、円滑に事務処理が行われるよう支援する
(3) 効率化した結果生じる余剰時間を、より広義の教育支援に学校の一職員として充てられるようになる

3　実践の手立て

(1) データベース化することによって効率化できる仕事を洗い出す
(2) 電子化できる仕事を洗い出す
(3) すでに電子化されているデータやマニュアルに相当する資料を収集する
(4) システムを構築する
(5) 船橋市内の学校事務職員へ完成したシステムを提供する

4　実践経過と内容

(1) 文書処理簿のデータベース化

事務職員にとって、日々の公文書収受および文書処理簿への記入は、かなりの時間的負担を要する仕事である。金杉台小学校で多岐にわたる事務処理を経験していくうちに、文書処理簿についてはデータベース化したほうが効率的ではないだろうかと考えるようになった。

まだ初任ということで日々の業務に精一杯ではあったが、管理職へ相談してみたところ快く私の考えに対し背中を押してくれたことで、開発を決意することができた。

① データベース化に用いるソフトウェア

データベース化するためにはいくつかの方法があるが、金杉台小学校には職員室、事務室、PC 室、そして私の個人用パソコンに Microsoft Access がインストールされていたため、Access を用いて構築することにした。そうすれば、校内の LAN を通じて誰でもそれらのパソコンから入力や閲覧が可能になると考えたからであ

る。ちなみに私が以前勤めていた民間企業では FileMaker というソフトウェアを用いてデータベースを構築していたので、私自身 Access については何も知識がない状態からスタートした。仕事の合間に少しずつ知識を習得しながら構築していくしかなかったため、気がつけば完成までに 2 年もかかってしまった。

② 完成したものを職員へ紹介

やっとの思いで完成したデータベースだが、実際に校内で利用してもらわないと構築した意味がない。本来ならば職員へ直接プレゼンテーションをする必要があるが、なかなかそのような時間を確保していただくのは校務上難しかったため、まずは事務便りにて紹介し、全職員へ操作マニュアルを配布した。それから私が金杉台小学校へ在籍していた期間については、実際に校内ではこのデータベースによって文書管理がなされ、また文書処理簿として活用した。また、小中教協にて一部の事務職員へ紹介したところ、私が育児休業中に他校へも広がったようで、一部利用していただいた学校もあったようである。

図 1　文書処理簿データベース　入力画面

図 2　文書処理簿データベース　検索画面

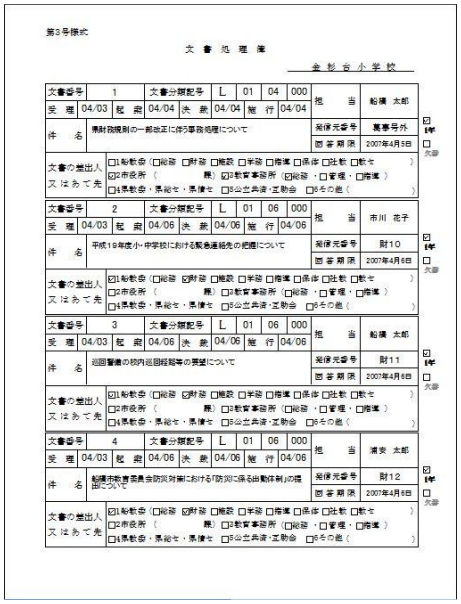


図 3　印刷ボタンをクリックすると、文書処理簿の様式で印刷できる
検索画面で抽出した項目のみを文書処理簿として印刷することも可能

図 4　入力画面にて入力した内容は、このようなテーブルに納められる

(2)　指導票の電子化

船橋市小中特別支援学校事務研究会では、長期にわたって『指導票』という事務処理における手引きを作成していた。私も初任のころ、指導票のファイル一式をいただき、事務処理に困ったときにはそれを参照しながら問題を解決することができた。これは、船橋市学校事務職員諸先輩方の努力の結晶であり、特に初任で一人制の学校に配置され、わからないことを気軽に訊くことができる環境になかった私にとっては、とてもありがたい存在であった。しかし、指導票は紙媒体で作成されており、紙自体が古くなってしまうこと、更新されるごとに大量の印刷コストがかかってしまうこと、記入例は手書きが多いため更新作業が大変であることなどが問題点ではないだろうかと思っていた。

① 小中教協を活用して指導票を Excel 化

学校事務職員歴 7 年目を迎えた頃、小中教協事務第 I 部会において、指導票を作成するグループに入ることになったので、この機会を生かし「指導票を電子化してはどうだろうか」と提

案した。実際に作業を行うことになったのは、私を含め同期の三人ということになり、月に一度の小中教協だけで行うには時間的に厳しいものがあったが、既存の指導票を Excel で入力し直すという地道な作業を三人で行った。特に記入例が手書きで書いてある複雑な様式は、それ自体を Excel で作成するだけでも随分時間を要したので、結局は既存する指導票の一部を電子化するにとどまった。

② 基本を Excel で作成、公開は PDF 形式で

指導票はその内容自体が重要なので、更新作業は責任者だけが Excel で出来るように、そして公開については閲覧者がむやみに編集できないように PDF 形式で作成した。そして、PDF 化した指導票は HTML 形式で作成した目次のリンクをクリックすることで簡単に表示されるようにした。

③ 小中教協にてプレゼンテーション

その年度の終わりに事務職員へ実際にプレゼンテーションを行い、電子化した指導票の利点についてアピールした。

図 5　指導票　目次

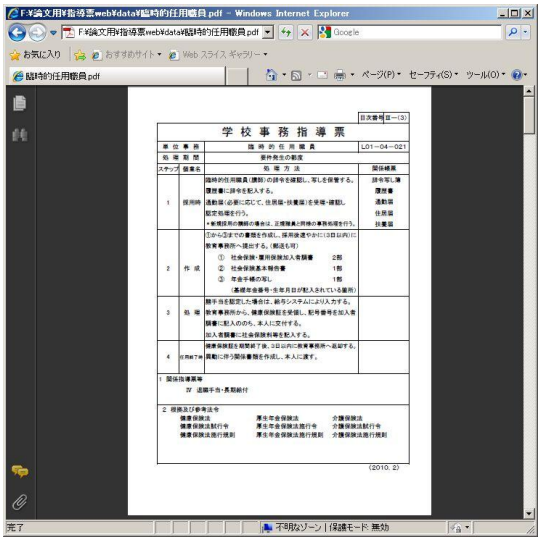


図 6　指導票　閲覧用 PDF 画面

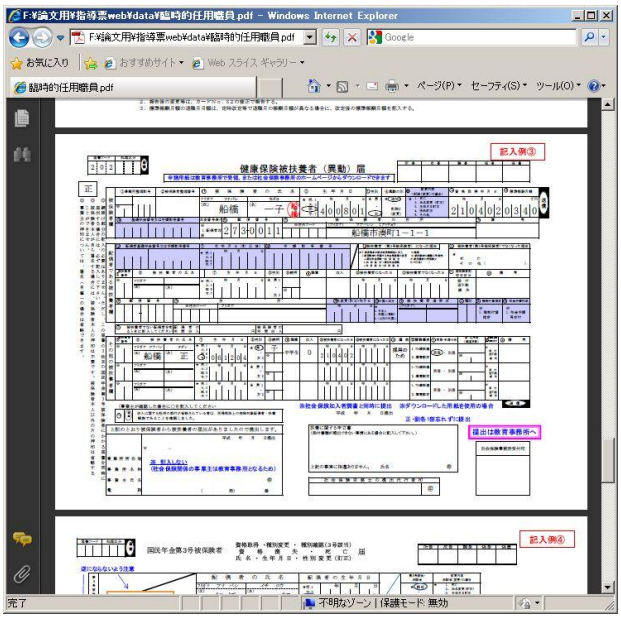


図 7　指導票　閲覧用 PDF 画面

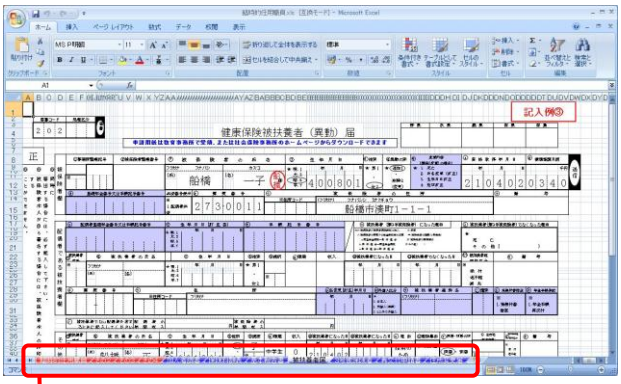


図 8　指導票　編集用 Excel 画面

PDF1 ページに対して 1 シートになるよう構成し、編集しやすいように工夫した

(3)　千葉県市町村立学校事務マニュアル（船橋市バージョン）PC 閲覧システムの構築

私が初任の頃からいつかは実現したいと考えていた、学校事務全般における手引き等のパソコンによる閲覧システムについて、今年度ついに取りかかることを決意した。その理由は次のとおりである。

・船橋市小中特別支援学校事務研究会において、独自に作成された各種事務関係様式が充実してきたため

・電子化された指導票をより便利な形で活用したいため

・千葉県教育庁葛南教育事務所総務課より、今まで全て紙媒体による各種報告書や調査書の提出依頼文書や研修資料・給与連絡等が、電子データにて配信されるようになったため

・公立学校共済組合千葉支部や千葉県公立学校教職員互助会などの関係機関において、Web による

各種申請様式のダウンロードが可能になってきたため

① 電子化されているデータやマニュアル等の資料収集および整理

船橋市小中特別支援学校事務研究会が取りまとめているほとんどのデータについては、船橋市総合教育センターで運用されているオンラインストレージパッケージ Proself を利用して保管・配信されている。これは、平成 20 年度より小中教協事務第 I 部会の情報システムグループが事務研究会用フォルダ（通称：事務研フォルダ）として Proself を利用してフォルダを構築したことにより開始されたものである。共同実施においてもこちらを利用して会議録等の配信が行われるようになり、事務職員にとって大変便利なツールとして活用されている。また、平成 23 年には葛南教育事務所総務課よりさまざまな電子データが管内の各市代表事務職員へ配信されるようになり、船橋市ではそのデータも Proself を通じて配信するようになった。そのおかげで、提出書類については紙媒体を手書きでというスタイルから、配信された様式の電子データへ入力してプリントアウトするというスタイルへ変わりつつある。そうすることによって、事務処理が以前より効率的になったことは言うまでもない。ただしこの事務研フォルダについては、保管するデータ量が増えていくことにより、データ保管の体系が複雑化していき、目的のデータを一目で探しにくくなってきたのである。

今回この問題を解決するために、まずはこれらのデータ資料を【人事・給与・服務】【調査・報告】【財務・総務】【福利厚生】【学校経営】【例規・通達】という区分に分け、さらにその中でも例えば【人事＞臨時的任用職員】というように内容を細分化しながら自分のローカルディスクへフォルダを作成し保存するという方法で、資料の収集および整理を行った。その結果作成したフォルダ数は 66 にも及んだが(図 9)このくらいに細分化せざるを得ないほど、私たち学校事務職員の仕事は多岐に亘っているということを改めて実感した。

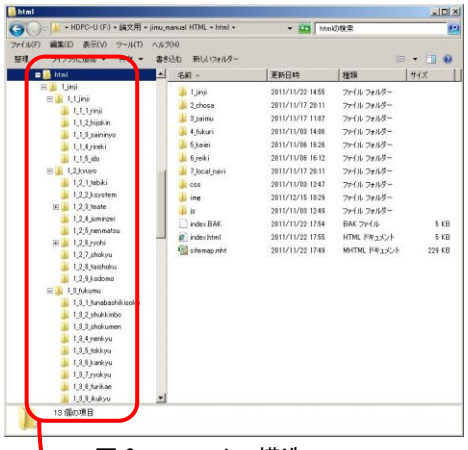


図 9　ファイル構造

66 のフォルダで構成されている

②Web 技術を用いて構築

資料の収集および整理が終わったところで、どのようにマニュアル閲覧システムを構築したらよいかを考えた。技術が日々進化している現代社会においては、さまざまなツール、プログラミング言語等が存在し、いろいろな方法が考えられるのだが、やはり学校事務職員がおかれている状況や環境に最も適した方法を用いないと、便利なツールとして活用してもらえない。したがって、次のような項目を満たしていることが必要条件であると考えた。

・誰にでも簡単に操作できること

・閲覧したい項目が探しやすく、すぐに表示できること

・どのパソコンにおいても動くこと

そこで選んだのが Web 技術を用いる方法である。ウェブブラウザならば、どのパソコンにもインストールされているので閲覧可能であるし、構築する側にとっても比較的容易に構築できて、今後のメンテナンスや収集した資料との互換性を考えた上でも最適な方法ではないだろうかと考えたからである。まずはサイトマップの設計をし、その後フリーの Web 制作ソフトやテキストエディタ等を利用して HTML の編集を開始した。見やすいデザインを考え、グラフィックソフトを用いてタイトルやメニューバーを作成したり、特にトップページには写真を用いるなどして視覚的にもユーザーが満足できるよう工夫した。(図 10)

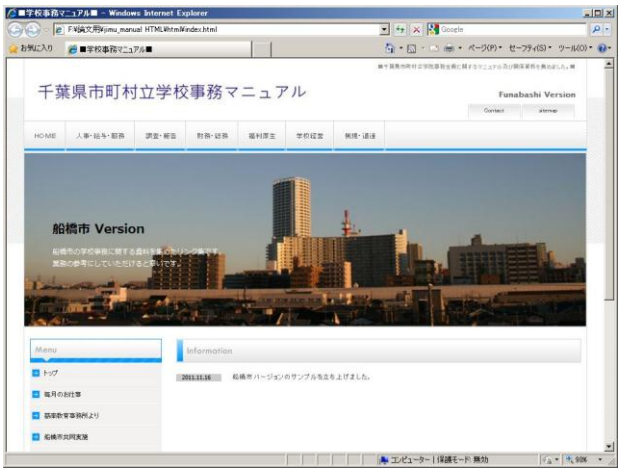


図 10　トップページ

また、データのリンクについては、①で整理した区分をベースにし、出どころもはっきりさせ

るために「葛南教育事務所配布資料」と「船橋市小中特別支援学校事務研究会配布資料」とに分けて表示されるようにした。(図 11)さらにサイドメニューとして『共同実施』などの事務職員にとって関係の深い項目を追加し、総合的な学校事務職員マニュアルとしての機能を果たせるよう工夫をした。(図 12)

図 11　画面例
リンクが張られている部分をクリックすると、さまざまなファイル形式のマニュアルや資料が閲覧できる

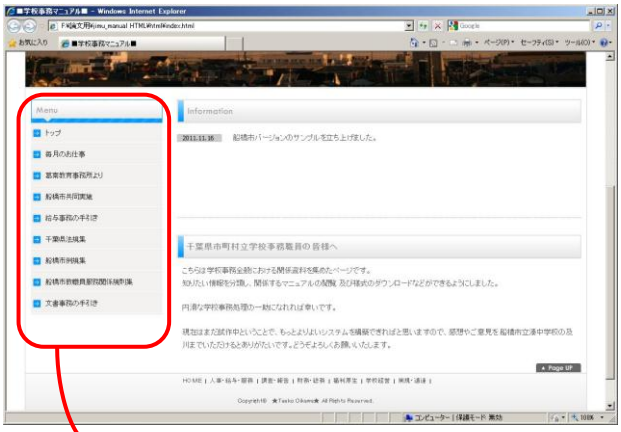


図 12　サイドメニュー部分
全ページに表示されるよう工夫した

5　研究の成果と課題

(1)　文書処理簿データベースについて
＜成果＞
・手書きより早く記入できて、文字が見やすくなった
・データを目的別（担当者名、件名、文書番号など）に検索・閲覧することができるため、急な問い合わせの対応や未完了項目の洗い出しが容易にできた
・完了したもののみを抽出し、船橋市教育委員会総務課へ報告することが容易にできた
・新しい文書番号が自動的に取得されるため、文書番号の重複ミスを防ぐことができた
・Access がインストールされていてかつ LAN でつながっているパソコンどうしで入力・閲覧が可能であるため、文書処理簿を探す手間が省けた
＜課題＞
・平成 21 年 9 月 24 日より「船橋市立小学校、中学校及び特別支援学校文書管理規程」の一部が改正され、様式に変更が生じたため、現在は利用できなくなってしまった。改正に応じた更新作業が必要である
・現在在籍している湊中学校では、Access がインストールされているパソコンがほとんどないため、環境面において利用されにくい状況にある
(2)　指導票の電子化について
＜成果＞
・事務職員へのプレゼンテーションの結果、多くの賛同の声をいただくことができた
・指導票をペーパーレス化することにより、紙や印刷代などのコスト削減につなげることができた
・クリックするだけで表示されるため、気軽に閲覧できるようになった
・『千葉県市町村立学校事務マニュアル PC 閲覧システム』へ反映するきっかけとなった
＜課題＞
・作成した指導票はその翌年度 Proself で配信することになっていたが、翌年度に指導票グループが廃止され、また Proself を管理している情報システムグループとの連携もうまくとれなかったことから、実現に至っていない
・まだまだ電子化できていないものが多数あるため、作業の継続が必要である
(3)　千葉県市町村立学校事務マニュアル（船橋市バージョン）PC 閲覧システムについて
　今年度から構築作業にとりかかったが、扱うファイル数の多さと、事前の設計に時間がかかってしまい、現段階で完成には至っていない。本来ならば、完成した上で各事務職員に実際使用していただき、その感想をもとにして成果を述べたいところであったが、残念ながらこの実践記録には間に合わなかった。しかしながら、11 月の小中教協において一部の事務職員へ試作版をみていただき反応を伺ったところ、是非使ってみたいという声を多数いただくことができた。このシステムの最大の目的は、今後増加していく若年層事務職員にとって、事務処理における問題解決ツールとし

て役に立てるようになることである。それは、私自身がかつて初任者として一番苦労した「一人で問題解決をしなければいけない」という学校事務職員としての負担を少しでも軽減し、その分事務処理を円滑に行えるよう支援することによって、他の教育支援にもつなげる必要があるのではないかと考えているからである。したがって、このシステムについては早急に完成させ、今年度中に船橋市内の事務職員へ配布したいと考えている。

今回、主に 3 つの実践を通して、パソコンを利用した学校事務の効率化について取り組んでみたが、いずれの実践においても次のような課題が挙げられる。

・今後のメンテナンスをどうするか
・外部との連携をどうするか
・環境面での問題（事務職員用 PC の整備等）

今後のメンテナンスについては、法規が改正されるとそれに伴ってシステムの更新作業も必要となる。本来ならば、組織の一部としてシステムの管理者が存在し、責任をもってメンテナンスを行うべきであるが、学校事務職員の現状としてそれは不可能である。誰かが職務以外の時間を費やして、あくまでサービスとして行っていくしか今の与えられた現状においてはできないのである。したがって、せっかくシステムを構築したとしても、それを最適な形で運用できないということが大きな課題である。

外部との連携については、文書処理簿データベースを例に挙げると、もし船橋市教育委員会との共有化を図ることができるならば、そのデータベースを一度入力するだけで自動的に総務課への報告も兼ねることができ、より効率的なシステムとなるはずである。今回作成した千葉県市町村立学校事務マニュアルみたいなものも、市町村立学校のみならず、各教育事務所や千葉県内の関係機関との共有システムとして構築できるならば、各担当課が更新することができるので、よりリアルタイムで充実した内容となるのではないだろうか。しかし、それを実現するためにはさまざまな条件をクリアしなければならないので、現実的には厳しいであろうことは想像に難くない。したがって現段階では、与えられた条件の中で可能な限りの工夫をしていくことが必要である。今年度はそのような意味において、葛南教育事務所総務課より多くの資料をデータ配信していただけたことに深く感謝している。

環境面については、今現在の学校現場においては事務職員専用の校務用パソコンの導入がなされていないという状況がある。学校としての校務用パソコンや、教員へ与えられたノートパソコンは数台ほど存在するが、それらはさまざまな職員で共有しており、例えば事務職員が必要な時に学校事務マニュアルを閲覧したくても、他の職員が使用していた場合にはすぐに閲覧できないのである。学校の管理運営部門としてあらゆる個人情報を取り扱い、もっとも公的パソコン導入による業務改善が求められる部署である事務室に専用のパソコンがないのである。このような現状ではなかなか思うようにパソコンを利用した事務処理の効率化を推進することは難しい。今は私も個人的に購入したパソコンやソフトウェアを利用して狭い範囲でシステムを構築しているにすぎないし、各学校においてもパソコンを所有している事務職員だけがこの効率化したシステムを有効利用できるにすぎない。船橋市の全学校事務職員にとって、本当に役に立てるシステムの提供ができるようになるためには、まずは環境面の整備が必要であると考える。

６　おわりに

平成 15 年 3 月 25 日付け千葉県教育委員会教育長より、市町村立県費負担教職員として配置している事務職員について、その職務内容を整理、明確にして学校運営への積極的な参画を促し、併せて学校運営の一層の充実と活性化を図るよう通知があった。それを受けて平成 16 年度には、船橋市教育委員会より事務職員の標準的職務一覧表が定められ、学校における事務職員の位置づけが明確化された。また市費負担事務職員の臨時化に伴い、ますます学校における県費負担事務職員に求められる役割が増えてきていることを実感している。学校規模や事務職員の経験年数、事務職員数などによって多少の違いはあるだろうが、この標準的職務を遂行できるよう日々努力していかなければならない。そのためには、事務処理を効率化することは必要不可欠である。今おかれている状況がどんなに厳しいものであっても、私は自分ができる範囲でこれからも積極的にパソコンを利用した事務処理の効率化に向けて取り組み、それによって事務処理に対する負担を軽減できる仕組みを構築していきたいと考えている。

学校の事務職員として、今以上に学校全体を見回す余裕が生まれ、広い意味でこれからの学校教育支援へとつなげていけることが私の最大の目標である。

【研究論文】

コミュニケーション能力の素地を育てる英語活動の取り組み

―小学校から中学校への英語教育の円滑な移行を目指して―

船橋市立小室小学校　　工藤　緑

Ⅰ　はじめに

近年、子どもを対象とした英語教育への需要は急激に高まっている。それは、急速に進むグローバル化へ対処するために早い段階からの英語教育の重要性があらためて見直されはじめているからである。

日本における今までの英語教育といえば中学校以降に始まることが多く、中学校に入って膨大な英語の語彙や文法に触れることで、英語に苦手意識を持ってしまう生徒が多い現状であった。また、英語が日常生活と結びつけづらい状況でもあった。

そこで、学習指導要領（2008 年 3 月告示）では、小学校で新たに「外国語活動」という領域が新設された。そして 2011 年度からは全国の小学校で 5・6 年生に週 1 時間の「外国語活動」の授業が必修化され、中学校の英語授業へ、スムーズに橋渡しできるように配慮された。また、現在、中学校の英語科では「ＡＴ：アクティビティタイム」の授業を行い、外国人講師の生の発音に触れ、会話中心の英語授業を行っているところである。

小学校外国語活動は、英語のスキルを育成することではなく、コミュニケーションの素地を育てることが目的である。ここで言うコミュニケーション能力の素地とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、『言語や文化に対する体験的な理解』『積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度』『外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しむこと』とされている。そこで、本校では英語教育において児童のコミュニケーションの素地を養うために（１）小学校の英語環境の整備（２）小中連携の取り組み（３）授業プランの立て方の工夫を重視していきたいと考えた。これらの活動を繰り返し行うことで、小学校から中学校への英語教育を円滑に移行していけると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究の目的

児童のコミュニケーション能力の素地を養うために、英語環境の整備、小中連携の取り組み、及び授業プランの立て方の工夫を行い、実践を通してその有用性を明らかにする。

Ⅲ　研究の実際

１研究の方法

（１）英語環境の整備
（２）小中連携による授業参観の実施
（３）授業プランの立て方の工夫
（４）検証授業の実施

２研究の具体的内容

（１）英語環境の整備

自分から英語で発信するためには、たくさんの英語が自分の中になければならない。そのために、日常的に英語に触れる機会をもっと増やしたいと考え、下記のような英語環境を整備した（図１～３）。

ア　校内環境

①昼の放送（歌）

授業の始まりに歌う英語の歌を、給食の配膳時に流している。Unit ごとに適宜流す歌を変えている。

②今月の歌（図１）

全校で取り組んでいる今月の歌に、英語の歌詞が入ったものを取り入れる。

図１　今月の歌の歌詞

③校内掲示（図２・３）

階段のステップを利用して、月の名の単語を掲示した。掲示板にはクイズ等、子どもの関心を引くものを掲示していた。

図２　階段掲示

図３　How many?　掲示板

④英語ルームの活用

授業では、英語ルームを活用している。英語ルーム内外にあるものには、英単語を掲示し、自然にたくさんの英単語を見ることができるように工夫している。英語ルームの壁には、授業で扱った英語表現について絵と単語で掲示して常に見られるようにしてある（表１）。

表１　英語ルーム掲示物

イ　学級内での取り組み

学級でも、朝の健康観察を英語で行ったり、日付・曜日・天気などを聞いたり英語に触れる機会を増やすようにしている。また、授業で扱った英語表現については、学級にも英語掲示コーナーを設けて掲示し、いつでも見られるようにしている。復習をかねて学級でも触れるようにしている（図 4)。

図４　学級の英語掲示コーナー

ウ　ＡＬＴの取り組み

①ＡＬＴによる英語絵本の読み聞かせ

昼休みや図書の時間を使って、ALT が英語絵本の読み聞かせをしている。今まで読んだ絵本の例としては「Brown bear, Brown bear, What Do You See? 」「Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?」「From Head to toe」などが挙げられる。

②校内放送の実施（ALT によるクイズ等）

ALT が来ている曜日のお昼の放送で、クイズを実施している。ALT がクイズを英語で読み上げ、各学級で答えを考えて記入する。昼休みに放送委員が集め次の日の放送で答えを発表する。

エ　教職員の取り組み

①レッスンプランの作成と保存

②英語授業参観の実施

（平成 23 年 9 月 7 日、8 日）

小室小学校の特徴として、毎年、英語だけの授業参観を実施し、教職員の英語指導の意識向上と英語指導でどんなことをやっているのか保護者へ紹介している（図５）。

図５　授業参観風景

③小中の連携

6 学年の授業を近隣中学校の教員が参観≪（２）参照≫。

④英語ルールの徹底

授業内では英語ルールを決めて徹底している。英語ルームの前面に拡大掲示して、いつでも確認できるようにしている。

⑤クラスルームイングリッシュの活用

担任も、簡単な指示や褒め言葉は英語で言うようにしている。英語教室の後方の壁にはいくつかの褒め言葉の例を掲示し、教師がいつでも見られるようにしている（図 6)。

図６　クラスルームイングリッシュ掲示例

（２）小中連携による授業参観の実施

本校は、小室中学校と一小一中という利点を活かし、平成 16 年度から「小中連携」の取り組みを実施している。学校行事での連携が主流だが、本年は、今日注目されている中１ギャップを少しでも緩和できるように、小中学校で「学習のきまり」を統一し、同様の考え方で指導していくことを始めた。また、中学校の接合部である小学校高学年と中学校との連携教育に力点を置き、体育の授業では中学校の教員がＴＴとしての支援を行っている。これらにより、心理的段差のない進路指導となることを目指し、子ども達にとって望ましい成長を促したいと考えている。そのほか学習指導での連携で、相互授業参観の実施を行った。

○授業参観及び交流会

６月：中学校参観および交流会

参加者 13 名・展開教室５

（英語・国語・数学・体育・理科）

１月：小学校参観および交流会

全教室で展開（１１クラス）

○英語教育研修会（平成 22 年度 11 月）

参加者：近隣小学校英語担当者

市内中学校英語教諭

実施クラス：本校６学年１組

授業参観後に懇談会を行う。

◎懇談会で出された意見（中学英語教諭より）

・ゲームやチャンツを通し、児童が生き生きと英語に取り組む姿が見られた。

・中学校入学までに、少しでもアルファベット文字を取り扱って欲しい。

◎改善していくところ

・コミュニケーション活動の一層の重視

→インタビューなどの活動を取り入れる。

→児童の実態に合ったゲームを行う。

・アルファベット文字の導入

船橋市は、１年生から英語教育に取り組んできたという実績があるので可能であると考える。英語ノート付録のアルファベットカードを用いた活動を行う。発音した言葉を識別させるために、文字を提示する。(たとえば、day か date なのかは聞くだけでは児童は判別しにくい。)

（３）授業プランの立て方の工夫

本校ではまず、年度始めに船橋市から出ている英語科年間指導計画をもとに、英語授業の予定を作成している。そして、JC（Japanese coordinator）が来る日までに学級担任がレッスンプランを作成し、ALT・JC と事前にミーティングの時間をとり授業を実施する。

このように、本校では基本的には学級担任主導の授業を行っている。

学級担任主導の授業の利点として、

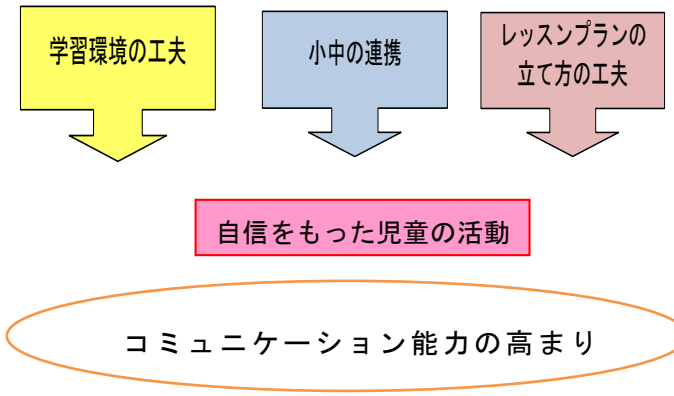
・ALT 中心の授業よりも、子どもの英語への積極性が高まる。

・学級担任は、子どもの実態に合った授業を展開することができる。

ということが挙げられる。

また、過去に各学年が作成し実施したレッスンプランを保存しておくことで、毎週のレッスンプランがたてやすくなってきている。このように、児童のコミュニケーション能力の素地を育てるために、本校では「英語環境の整備・小中の連携・レッスンプランの立て方の工夫」という３つの柱を重視している。これらを並行して行うことで、授業での児童の自信を持った活動につながり、最終的にはコミュニケーション能力の素地の１つでもある「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が育つのではないかと考える（表３）。

表３　児童のコミュニケーション能力を高めるための学習過程



（４）検証授業の実施

前述のことを検証するために、検証授業を行った。(平成 23 年 7 月 6 日・7 日実施)

また、この授業をビデオに撮影し、校内研修で教職員が見合うことで、他の先生のよいところを取り入れられるようにした。

コミュニケーション能力を高めるために重視していることは以下の 3 点である。

①児童に人前で発表する場面をできるだけ多く取り入れる。

（場の工夫・ゲーム・インタビューなど）

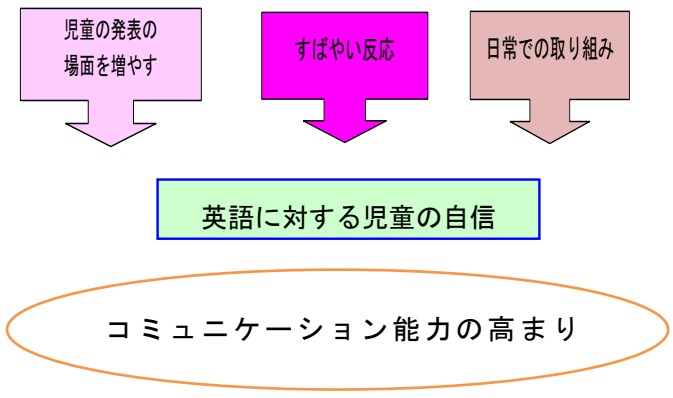
②児童が発表したことに対して反応する。

（クラスルームイングリッシュ・教師対児童・児童対児童）

③日常からの取り組み

以上３点を重視することで、コミュニケーション能力の高まりにつながると考えた（表４）。

表４　児童のコミュニケーション能力を高めるための学習過程



授業実施後、児童に簡単なアンケートをとり考察していく。

《検証授業の概要》

・3、4 年生授業　「What time is it?」

“What time is it?”　“It`s …”のたずね方とその答え方を用いて、友達やＡＬＴとやりとりをし、ゲームを行う。

・5 年生授業　「Month」

月の名前をチャンツとジェスチャーを交えて覚えて、発音する。

・6 年生授業　「劇：What's wrong?」

“What`s wrong?”“ I have a cold.”などのやりとりを取り入れたグループ劇の発表を行う。

①児童に人前で発表する場面をできるだけ多く取り入れる。

今回、6 学年は「What’s wrong?」という単元で劇の発表を行った。1 人 1 人の児童に英語で発話する機会があり、発表する場面が多く取り入れられていた（資料１）。

資料１　あるグループが作った劇のセリフ（一部）

C1: I am a boxing champion!
C2: I am a challenger.
C3: I am a referee.
C4: I am boxing fan!
-----（中略）-----
C2：Ouch!!
C3: What's wrong?!
C2: I broke my arm・・・・
C4: Oh! I call an ambulance!

②児童が発表したことに対して反応する。

児童が発表したどんなことに対しても、すばやく反応する。そのためには、教師は簡単なクラスルームイングリッシュを身に付けている必要がある。担任がクラスルームイングリッシュを用いることにより、外国語活動の雰囲気を作り出すことができる。また、多用することにより、児童が一生懸命に教員の英語を聞こうとする態度を引き出すとともに、英語に慣れ親しむことにもなる。今は、教師対児童のやりとりが主だが、児童対児童のやりとりが英語で出来るようになることが理想である。

授業の始まりに行う挨拶では、それぞれのクラスに合った工夫が見られた（資料２）。

資料２　授業のはじまりの流れ（第２学年）

児童、教師、全員立っている状態から
T1:How are you?
（手を挙げている子を指す）
C1: I am hot! (Me too.)
（同じ児童は座っていく）
C2: I am hungry! (Me too.)
C3: I am sleepy....
（全員が座るまで続ける）

③日常からの取り組み

児童が自信を持って英語を言えるようになるには、少しの時間でも毎日英語に触れることが必要である。今回 3 年生の授業の始まりには、review として前回までに取り組んでいた「What do you do in the morning?」という質問を行った。朝の会などで少しずつ取り組んだことで、児童が意欲的に発表しようとする様子が見られた。

《検証方法について》

コミュニケーション能力が高まったかどうかの検証方法については次の 2 点が挙げられる。

①教師の客観性（観察）

自信をもって言えている・声が大きい・進んで言える、等

②児童の自己評価…アンケート等

そこで今回は、検証授業の後に児童に評価カード･アンケートを記入させた。また、学校として同様の活動を繰り返し行い、１１月にも評価カード･アンケートを実施し、児童の変容を追った。

≪英語科学習評価カード≫　資料３

・実施日時　１回目　７月６、７日
　　２回目　１１月９、１０日
・実施人数　３年：５０名　４年：５０名
　　５年：３２名　６年：４３名

資料３　英語科学習評価カード

1	英語のゲームや歌を楽しんで学習できた
2	たくさんの英単語や会話文を覚えることができた
3	先生の発音をよく聞いて、同じように発音することができた
4	スムーズに英語の会話ができるようになった
5	積極的に英語を覚え、発表することができた
6	学習したことを生かして、友達やＡＬＴに話そうとした。

表５　先生の発音をよく聞いて、同じように発音できるようになった（グラフ値は人数）

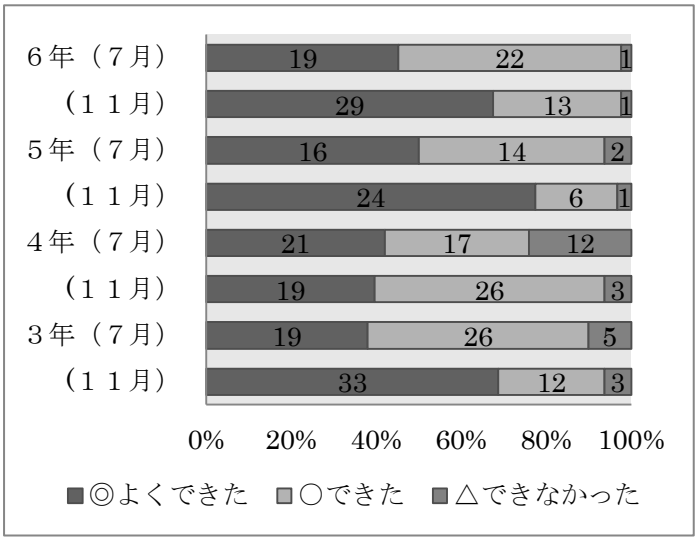


表６　積極的に英語を覚えて発表することができた

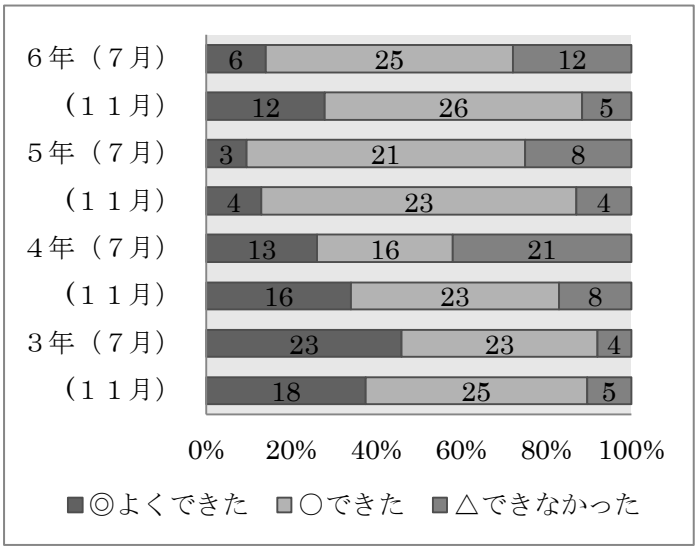
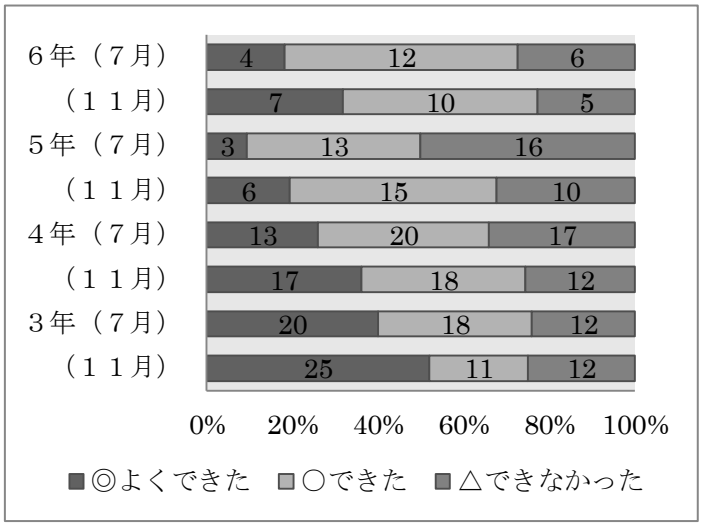


表７　友達や ALT に進んで話そうとした



《考察》

評価カードの中から、いくつかを抜粋して考察していく。アンケート項目３「先生の発音をよく聞いて、同じように発音できるようになった」では、どの学年でも７月より「できなかった」と答えた児童が減っていることがわかる。授業ではＡＬＴにも協力してもらい、より英語らしい発音になるように気を配っている。アンケートの自由記述欄からも、「先生のように発音できるように頑張った」「先生の舌をみて発音するようにした」という児童がおり、積極的に単語を覚えようとする児童が増えたことがわかる。

アンケート項目５「積極的に英語を覚え発表することができた」では、ほとんどの学年で７割以上の児童が「よくできた」または「できた」と答えていることがわかる。７月の段階では各学年ともに「出来なかった」と答えている児童が３割程度いたが、１１月では学年によってばらつきはあるが、「できなかった」と答えた児童が減少したことがわかる。毎年９月に実施している英語授業参観では、どの学年でも発表活動を取り入れるようにしており、子どもたちが自信を持って発表することができた。より意欲的に学ぶためにどのような手立てを考えていくかは今後も課題である。

アンケート項目６「学習したことを生かして、友達や ALT に進んで話そうとした」では、学年が上がるほど低い数値がでるという結果になった。わずかではあるが、11 月実施時は「よくできた」と答えた児童が増えたことがわかる。「Do you have～？」の表現を学習しはじめた３年生のアンケートの自由記述欄からは「家の人に英語をちょっと教えた」という感想が見られた。また５年生からは「習っ

た表現で家族と会話した」「妹に英語を教えて、と言われて今まで習ったのを教えたらすごいねと言われて嬉しかった」という感想もあった。日常生活に英語を結び付けていくことの大切さを実感した。

以上のことから、本実践は児童のコミュニケーション能力の素地を養うきっかけとなったと思われた。

《まとめ》

あいさつや自己紹介、日常生活の簡単な表現など、初歩的な外国語に触れ、慣れ親しむことは小学校の発達段階には効果的であると思われた。また、小学校で楽しみながら外国語に触れたり、体験したりする機会をより多く提供することは、中学校への円滑な移行が図られ、生涯にわたる外国語学習の基礎を培うことにつながると思われた。今回の検証授業より、コミュニケーション活動を通じて英語の音声、語彙、表現に慣れ親しませることで、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度の育成が図られることがわかった。また、どうして英語を学ぶのかという必然性・目的・子どもたちの伝達意欲・生活・他の学習活動との関連性が大切になってくることに気付いた。英語への抵抗をなくすために、『日常的に英語に触れる機会を多く作ること』『担任も児童と共に生き生きと英語学習に取り組むこと』『１～6年まで同じ活動を行いながらも発達段階に応じて語彙を増やしていく』など配慮が必要である。

Ⅳ　成果と課題

〈成果〉

（１）英語環境の整備により日常的に英語を聞いたり、見たりする機会が増えた。
（２）小中連携の取り組みにより、授業の課題についての改善を図ることができた。
（３）検証授業の実施より、英語の日常化の大切さに気付いた。朝の会などで英語に取り組む学級も見られるようになった。
（４）今年度は検証授業を行い、校内で研修の時間を設けるなど、全教職員協同で授業づくりを行い、英語の取り組み体制が強化された。

〈課題〉

（１）来年からはＪＣがいないため、授業の打ち合わせの際におけるＡＬＴとのコミュニケーションに不安がある。過去のレッスンプランだけに頼りすぎない、授業の展開が求められるため、積極的に学会などに参加し良い授業のための情報を収集するようにしたい。
（２）小学校段階でのアルファベット文字の導入について（中学校教員からの要望）
過度に文字の習得や定型対話文を暗記させることは外国語活動の目標に反するが、船橋市は１年生から英語に取り組んできたという実績があるため、可能である。アルファベットなどの文字や単語の取り扱いは、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いていく。文字に対する児童の興味関心も高まっているので今後の課題といえる。

Ⅴ　おわりに

小室小学校と小室中学校は、一小一中の関係を活かし、船橋市内の中では活発な「小中連携」の取り組みが実施されてきている。連携の強化や交流を計画し、教育内容の一貫性と系統性を重視した取り組みが行えるよう図っているため、今後も児童の変容を追っていきたいと考えている。

外国語活動にまつわるこれらの取り組みも、学校全体として計画・実施・改善を重ねてきたものである。特に本年度はＡＬＴやＪＣの協力の下、英語環境がより快適なものに整備された。放送で毎日流れる英語の歌を自然に口ずさんだり、英単語を言いながら階段をのぼったりする児童を見かけるようになった。また、英語の日常化をはかっていくためには、全教員の協力が不可欠であると実感した。しかしながら、英語の指導に対しての課題が多いことも事実である。中学校への円滑な移行をはかっていくために、学級担任自らが英語を学ぶ良いモデルとなるように、積極的にコミュニケーションが図れるよう教職員をコーディネートし、実践をつんでいきたい。

【主な参考文献】

○アレン玉井光江『小学校英語の教育法－理論と実践』、2010、大修館書店
○千葉県総合教育センター『中学校外国語化との円滑な接続を図る小学校外国語活動』、2011
○船橋市教育委員会『English Curriculum Elementary School Grades 1 to 6』、2011
○文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、2008、東洋館出版社

【研究論文】

小学校外国語活動におけるコミュニケーション能力の充実

ーコミュニケーション・ストラテジーの実践を通してー

船橋市立高根東小学校　葛城　遼太郎

１　はじめに

平成２３年度から小学校外国語活動が本格的に始まった。学習指導要領には，以下のように明記されている。

> 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

ここでの注目すべき点として、「コミュニケーション能力の素地を養う。」とあるが、これは①外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深めること、②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること、③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることの３つの柱からなる。また，中学校の学習指導要領には「コミュニケーション能力の基礎」とあり，単なる言語習得のための教科ではなく、将来的なコミュニケーション能力の育成も重視されていることを表している。したがって、パタン・プラクティス、ダイアローグの暗記、音と綴りの法則（フォニックス）を暗記させるなど、単に技能の向上を目的とした指導は、外国語活動の目標に合致しないのである。また、新学習指導要領実施前に総合的な学習の時間に行われていた英語活動も、外国語活動とは異なる点がある。英語活動の目標は①積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する、②自己表現力を豊かにする、③様々な活動を通して外国の文化や生活への関心・理解を深めるとなっている。そのため、外国語活動は単に英語だけでなく、日本語によるコミュニケーションの際にも効果を発揮することが期待されている。

しかし、「コミュニケーション能力」という言葉は非常に広義な意味を持っており、その解釈の仕方は様々である。そして、授業を実践する度に、コミュニケーションとは何なのか、そしてコミュニケーション能力を育成するためには何が必要なのか、ということについて、強く疑問を持つようになった。そこで、本研究論文では、コミュニケーション能力とは何なのかを明らかにし、それを育成する手段であるコミュニケーション・ストラテジーを活用した実践を通して、その有効性を検証し、より充実した外国語活動を提案していきたい。

２　研究の目的

小学校外国語活動で必要とされているコミュニケーション能力とは何かを明らかにし、コミュニケーション・ストラテジーを用いた実践を通して、外国語活動の目的に合った活動を提案していく。

３　研究の方法と内容

（１）小学校外国語活動で目指すべきコミュニケーション能力とは何なのかを明らかにする。

（２）コミュニケーション能力を育成するために有効とされているコミュニケーション・ストラテジーを取り入れた活動を計画し、検証授業を実施する。

４　コミュニケーションとは何か

コミュニケーションを大まかに定義すると、「２人以上の人間と何らかの手段を通して、意思疎通を図る」ということになる。何らかの手段というのは、言語のみではなく、音声、抑揚、文字、表情、身振りなどが挙げられる。(磐崎2001)では、あいさつなどを中心とする儀礼的コミュニケーション（ceremonial communication）、情報伝達を目的とする情報提供コミュニケーション（informative communication）、説得を意図する説得コミュニケーション（persuasive communication）に分類し、さらに発信者と受信者が同一文化を共有する文化内コミュニケーション（intercultural communication）と異文化間コミュニケーション（intercultural communication）といった観点からも分類されている。

これを外国語活動での授業に置き換えると、

目的や相手を意識しない活動（例えば英単語を繰り返しリピートする、英語構文を聞く、暗唱するといった活動）は、コミュニケーションを行うための準備練習になるとしても、それだけはコミュニケーションを行ったということにはならない。また、授業の最初にしばしば以下のような会話のやりとりがおこなわれる。

①T：How's the weather today?
　S：It's sunny.
②T：What day is it today?
　S：It's Monday.

これらの会話は教師と児童のやりとりであり、一応コミュニケーションが成立しているといえる。しかし、教師側の質問文には（1）だとsunny、そして（2）ではMondayという明確な答えが存在している。学習指導要領に示されているコミュニケーション活動は、答えの決まっている挨拶や会話ではなく、より実践的な活動が求められている。1時間の授業を組み立てる際には、教師はそうした活動を取り入れながら構成を考える必要があるのだ。

5　小学校の外国語活動で育てるべきコミュニケーション能力とは何か

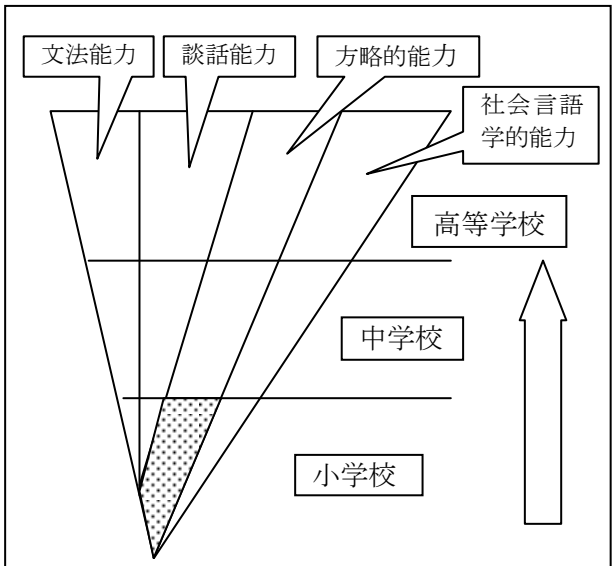
コミュニケーションを成立させるためには，言語を効果的に使うための知識､そしてそれを実際に使える能力が必要で、これをコミュニケーション能力（communicative competence）と呼ぶ。（磐崎　2001）

コミュニケーション能力は今まで多くの学者によって研究されてきたが，その中でも有名なのが Canale（1983）が以下の4部構成に拡張したものである。

①文法能力（grammatical competence）
基本的な文法構造その他，文単位の文法に関する知識。
②社会言語能力（sociolinguistic competence）
相手によって依頼表現を変えると言った，社会的文脈での適切性を考慮できる能力。
③談話能力（discourse competence）
まとまった発話行為とコミュニケーション機能を円滑に組み合わせる能力。
④方略的能力（strategic competence）
これまでに挙げた3つのコミュニケーション能力の不備を補うために，種々の方策を用いることの能力。すなわち，第2言語でコミュニケーションを行う場合、不十分な文法の知識から意思疎通がうまく行われないことは必然的である。そうした困難を乗り越えるための能力である。

大城（2008）は、これらのコミュニケーション能力を発達段階に応じて以下のように区分している。

図1　発達段階によるモデル　大城（2008）



（注）網は筆者による

このモデルによると、小学校段階では方略的能力の占める割合が他にくらべて高いことがわかる。方略的能力は、簡単に言うと「知っている知識を組み合わせて、困難を乗り越えていく力」である。例えば、I like apples.と相手に伝えたいが､I like～までしか思い出せなかったとする。そうした時，I like～までは英語で表現し、「りんご」を絵で表すことで，相手に自分の意志を伝えることができる。このように，語彙や文法に関する知識が少なかったとしても、それを乗り越える手段を自ら考え，実践していくことが小学校段階で身につけさせたい方略的能力、すなわちコミュニケーション能力なのである。

6　コミュニケーション・ストラテジーとは何か

5では，小学校段階における方略的能力の重要さを述べてきたが、この能力を用いて、最も効果的にコミュニケーションを行う方法をコミュニケーション・ストラテジー（communication strategy）と呼ぶ。（磐崎2001）このストラテジーについては、具体的に分類されたものがいくつかあるが、Tarone（1977）のモデルに沿って概観されたものを以下に示す。

①回避
ア．トピック回避
特定の話題を完全に避けること。例：好きなスポーツを聞かれ、「野球」と答えたい

が、単語が出てこないので、他のトピックを選ぶ。

イ．メッセージ中断

特定の話題を途中でやめてしまうこと。例：自分の夢をスピーチするという単元で、スピーチをしている途中に、難しくてやめてしまう。

②言い換え

ア．近似表現

知らない語句を類語・上位語などの、近似表現で代用すること。例：おばを表す単語「aunt」がわからず、「my mother's old sister」と表現する。

イ．造語

対応する英語がわからず、新語を作ってしまうこと。例：消防士という単語「fire fighter」という単語がわからず、「fire man」と表現する。

③意図的転移

ア．逐語訳

対応する英語がわからず、とりあえず母語をそのまま逐語訳してみること。例：本来「彼らは同室だった」（They shared the room.）と言いたいが share がわからず、意図的に日本語をそのまま訳して They were in the same room.で済ます。

イ．言語転換

（よく似た）母語を外国語に持ち込むこと。例：カタカナ英語をそのまま使い、My car had a flat tire.（車がパンクしてしまった）と言うところを、My car had a 「パンク」. ととりあえず言っておく。

④助言要請

わからない単語を相手（ネイティブ）に質問して教えてもらうこと。例：「獣医」（veterinarian）がわからず、What do you call a doctor?とネイティブに聞く。

⑤物まね

ジェスチャーなど、非言語手段による描写をすること。例：I wash my face.「顔を洗う」という表現をしたいが、英文が出てこず、顔を洗うジェスチャーをする。

以上のように、様々なストラテジーを用いることにより、効果的にコミュニケーションを行うことができる。ただし、このようなストラテジーを外国語活動に盛り込む場合、言い換えや助言要請が常に有効な学習ストラテジーであるのに比べ、トピック回避や言語転換などは、必ずしも奨励されるストラテジーではないと磐崎（2001）は述べている。単元や学習活動に応じて、どのストラテジーを用いることが児童のコミュニケーション能力を育てるために最も効果的なのかをしっかりと見極めた上で授業を組み立てていくことが重要である。

7　検証授業の実施「コミュニケーションストラテジーを用いた授業」

（1）対象：小学校６年生２９名（男子１３名、女子１６名）

（2）期間：平成 22 年 11 月～2 月（週に 1 時間）

（3）指導者：担任（本研究者）、ALT、JC

（4）単元名：「将来の夢を発表しよう」

（5）児童の実態

本学級のほとんどの児童は英語学習を好んでおり、且つ英語をしゃべれるようになりたい児童も多い。この要因として、歌やゲーム活動を通して習得した英単語やフレーズを使い、友だちや教師と日本語でなく英語でコミュニケーションをとる楽しさを知ることで、英語学習への意欲が高まったことが要因として挙げられる。また、将来に向け、英語学習で学んだことを旅行や仕事で活かしたいと考える児童も多い。

しかし、英語学習を苦手とする児童については、英語特有の発音の難しさや、英語をしゃべることへ不安が大きな原因となっている。また、高学年になり、知的好奇心が増す一方で、間違った発音をしてしまうのではないかという不安から、つい声が小さくなってしまう場面もしばし見受けられる。

図２は、子どもが、好きだと答えた活動の一覧である。方略的能力を求められる活動とそうでないものに分類してみると、子どもたちが好んでいるのはほとんどが授業で学習した英語表現を習得するためのゲーム活動に限定されていることがわかる。子どもたちはこれまで、英語ノートや船橋市教育委員会から発行されているカリキュラム集を基に学習を進めてきた。しかし、単元を通して方略的能力に焦点を絞った活動にふれる経験は少ないことが問題として挙げられる。本単元はコミュニケーション上の困難を、自分の力で解決し、相手に自分の意志が伝わったときの楽しさを味わえるような活動である。

図２　子どもが好きだと答えた活動

方略的能力を求められる活動	方略的能力を求められない活動
・クリスマスカード作り ・ジェスチャーゲーム ・案内	・ビンゴ ・爆弾ゲーム ・数字カルタ ・爆弾ゲーム ・ハロウィン ・歌 ・かるた ・いすとりゲーム

（ア）単元の目標

○様々な職業の言い方に興味を持つことができる。（関心・意欲・態度）

○積極的に自分の将来の夢について、理由を含めて紹介したり、友だちの夢を聞き取ったりすることができる。（コミュニケーション能力）

○どのような職業につきたいかを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむことができる。（外国の言語や文化についての理解）

（イ）指導計画

時	ねらい	学習活動	言語表現
1	○様々な職業での言い方に興味をもつ。	・様々な職業の英語での話し方を知り、練習する。 ・職業名でクラッシュ・コミュニケーションを行う。 ・職業名でビンゴゲーム	teacher ,doctor , cook,firefighter , astronaut racing driver , nurse baseball player , singer pilot , farmer , police officer , tennis player
2	○将来なりたい職業の尋ね方、答え方についての表現に慣れる。	・新たな１０個の職業でクラッシュ・コミュニケーションを行う。 ・職業名でビンゴゲーム ・フレーズをチャンツで練習する。	What do you want to be? I want to be a teacher.
3	○スピーチメモを作成し、スピーチの練習をする。	・将来の夢のスピーチ原稿作り ・スピーチの練習	Hello! My name is~. I want to be a~. Because I like~. Thank you.
4	○スピーチメモを元に、理由を含めて自分の夢を紹介する。	・スピーチ大会を行い、お互いに評価し合う。	

（ウ）研究の視点

○コミュニケーション・ストラテジーの活用

本単元では、“What do you want to be?”（大きくなったら何になりたいですか？）と“I want to be~”（わたしは～になりたいです。）の表現を使ってなりたい職業は何かを尋ね合う表現の練習を行い、自分の将来の夢を紹介できるようにすることを目標としている。ここで使用されるコミュニケーション・ストラテジーには以下のものが挙げられる。

A 言い換え
B 助言要請
C ジェスチャー

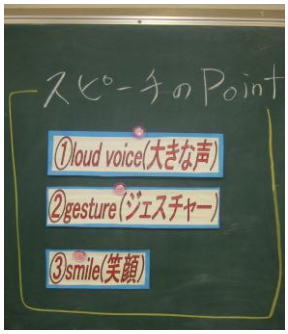
A、B は主にスピーチの原稿作成時に使用される。スピーチで原稿を書く際、子ども達の将来の夢には本単元で学習する言語表現以外にも様々なものが出てくると予想される。その場合、学習した言語表現のみに絞ってしまうと、児童の意欲を低下させてしまうことも考えられる。よって、学習した言語表現以外の場合には、既習の単語を組み合わせたり、ALT に聞いてみたりする時間を設ける。そして、自分の直面した困難に対し、自力で解決できるよう助言していく。

また、スピーチの発表時に、聞く立場からしてみると、自分の知らない単語でスピーチされてもほとんど理解はできないであろう。そのため、スピーチには必ずジェスチャーを入れるようにする。聞き手からすると、ジェスチャーを取り入れることで、たとえ言語表現が理解できなくても、ジェスチャーから相手の伝えたいことを推測することができる。そして、ただ相手に自分の夢を「伝える」ことを目的にするのではなく、自分の夢が「伝わったか」どうかに注目させて学習に取り組ませる。

○自由練習の確保

スピーチ活動を行う上で、最も大切なのが練習時間の確保である。ストラテジーを駆使し、試行錯誤して作り上げた原稿を読み上げるだけでは相手に自分の考えを伝えるには不十分である。そこで、グループごとに自由練習の時間を与え、お互いに評価し合う時間を設定する。グループの中で、お互いに評価し合いながら練習を重ねることで、全体発表の場ではより自信をもって臨むことができる。また、教師が実際にスピーチを行っているビデオを見せ、スピーチを上手に行う観点を考えさせた。児童から出てきたのは「声の大きさ」、「ジェスチャーのわかりやすさ」、「表情」

だったので、ポイントをこの３点に絞り、練習を行うよう助言した。



８　検証結果の分析と考察

①コミュニケーション・ストラテジーの活用について

ア　原稿作成時

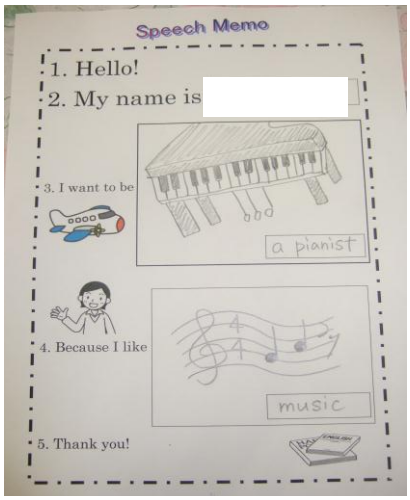
当初は自分の将来の夢、そして理由について漠然としている子が多く、戸惑っている様子だったが、教師、友だち、ALT と相談しながら日本語で原稿を作成していった。そして、英語に直す際、知っている語彙数が少ないため、最初は担任や ALT に頼りがちであったが、徐々に既習知識を使いながら原稿を仕上げることができた。以下に子どもが原稿作成時に使用したストラテジーの中で主なものを表に示す。

a.言い換え

夢	子どもが考えた表現	正しい表現
イルカの飼育員	Dolphin teacher	Dolphin breeder
サラリーマン	Salary man	Office worker
歯医者	Teeth doctor	Dentist
理容師	Hair make	hairdresser
漁師	Fish hunter	fisherman
レーシングドライバー	Racer	Racing driver

b.助言要請

夢	ALT に教えてもらった表現
大工	carpenter
探偵	detective
政治家	politician
客室乗務員	Flight attendant
漫画家	cartoonist
宇宙飛行士	astronaut

表からもわかるように、普段からなじみのある英語（hair や teeth）や、カタカナ英語（race や fish）で使われているものに関しては、自力で表現できたが、探偵や政治家など、自分の既習知識だけで連想できないものについては、助言要請に頼る場面が多かった。しかし、助言要請をする時に日本語を使ってはいけないというルールがあったので、指さしで聞いたり、ジェスチャーを交えながら聞いたりするなど、どうすれば自分の考えが伝わるかを考えながら取り組む子が多くみられた。全体的には助言要請の占める割合が一番多かった。

イ　ジェスチャーの活用

ジェスチャーに関しては、スピーチの練習時だけでなく、授業の初めに TPR（Total physical response）を含んだ活動を取り入れたり、単語練習の時にジェスチャーで表現する活動を行ったりしていたため、それほど抵抗感は感じなかったようだ。また、ジェスチャーのやり方がわからなくてもグループ内でお互いにアイデアを出しながら練習することができた。

また、スピーチ発表時に、発表者の夢を子どもに尋ねると、ほとんどの子が発表者の夢を当てることができた。これは、言語が伝わらなくても、ジェスチャーを通してコミュニケーションができるという実感を、発表者だけでなく、聞き手も経験することができた。

②質問紙調査より（単元終了後の主な意見）

図２の質問紙調査の結果より、ほとんどの児童が、スピーチの発表についての感想や、教え合いの時間での人との関わりについての記述をしていた。これは、子どもたちがただ英語表現を身につけることを目的とするのではなく、自分の考えを相手に伝えることを目的として学習に取り組んでいた結果であると考えられる。また、ジェスチャーは、ただ体で何かを表現するだけのものではなく、言語環境が違う人とコミュニケーションをとる上で、重要なツー

ルであることを実感できたようだ。

図３　単元終了後の主な意見

・最初は、発音がとても難しくて、不安だったけど、絵やジェスチャーも一緒だったので、自信をもって発表することができた。
・ジェスチャーは恥ずかしかったけど、友だちと見せ合うことで、楽しくなってきた。
・たくさん練習したので、本番でも緊張しなかった。
・外国でも自分のスピーチが通じるのか、試したいと思った。
・たくさんの職業を覚えることができた。
・友だちと見せ合ったり、アドバイスしたりする時間が楽しかった。
・いろんな人の夢を知ることができてよかった。

９　研究のまとめ

【成果】

①以前までは、ALT と給食を食べる時間や、授業後の時間など、ALT と会話できるチャンスがあっても、自分から進んで会話をできる子は少なかった。しかし、徐々にではあるが、ALT の幼い頃の夢を聞いてみたり、ジェスチャーや言い換え表現を使って話しかけたりする子が増えた。コミュニケーション能力を育てる上で重要な間違いを恐れない姿勢が徐々に育ってきた。

②小学校段階で身につけさせたいコミュニケーション能力を明らかにすることで、コミュニケーション・ストラテジーの活用が有効な手立ての一つだと確認できた。

【課題】

①今回は、英語で原稿を作成したため、音声で発音できても、それを文字に表せない子が多く、ほとんどが教師主導であった。原稿を作る際には、アルファベットではなく、言いたいことを絵で表すことも方策の１つとして考えられるので、今後の実践に活かしていきたい。

②本単元では主に自己表現活動が中心であったが、すべてのストラテジーを活用しているわけではない。単元によってロール・プレイやインタビューなど活動が異なるので、新たに教材を開発していく必要がある。

１０　おわりに

私が外国語教育に興味を持ったのは、学生時代にタイを訪問したことがきっかけである。私の母語は日本語で、ルームシェアの相手の母語はタイ語であった。生活環境も、言語環境も違う相手と唯一意思疎通を図るのに使用したツールが英語だった。自分の片言の英語でも、一生懸命伝えようとした結果、相手に伝わった時に、とてつもなくうれしかったのを今でも鮮明に覚えている。

グローバル化が進む中で、子ども達が大人になる頃には、より外国の人々と関わる機会が増えてくるであろう。そういう機会に遭遇したときに、その場から逃げようとするのではなく、何らかの方法で解決できるような大人であってほしい。

そのためにも、外国語教育を行っていく中で、他人とコミュニケーションをとる楽しさを味わわせたり、困難に出会った時に、自力で解決しようとしたりする態度を身につけさせる活動をこれからも研究し、実践していきたい。

【主な参考文献】

・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』東洋館出版
・磐崎　弘貞（2001）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店
・サンドラ・サヴィニョン（2009）『コミュニケーション能力―理論と実践―』法政大学出版局
・樋口　忠彦（2005）『これからの小学校英語教育―理論と実践―』研究社
・川崎　深雪（2010）『小学校英語の教科書　５年生～６年生用』
・官　正隆、直山木綿子（2009）『小学校　新学習指導要領の授業　外国語活動実践事例集Ⅱ』小学館
・大城賢・直山木綿子（2008）『小学校学習指導要領の解説と展開』教育出版
・Tarone, E.（1977）Conscious communication strategies in interlanguage.

【実践記録】

「食に関する指導」の効果的な啓発のあり方

－広がる食育・つながる食育－

船橋市立宮本中学校　栄養教諭　渡邉　紋子

1　はじめに

平成 20 年、新学習指導要領総則「教育課程編成の一般方針」の中に、食育に関する記述が盛り込まれた。もとより「食」に関する学びは日々の生活の中にあるものだが、これは、学校生活の中でも同様ではないだろうか。学校教育を通じて行う食育には、栄養教諭からの指導だけでなく、生徒を取り巻く大人たちの共通理解や協力体制が欠かせない。教職員、家庭・地域全体が食育への共通理解を深め、一丸となって取り組むために、食育のコーディネーターである栄養教諭として、何ができるだろうか。

2　実践の目的

食育は、教科のようなまとまりがなく、ともすれば場当たり的な指導になりがちである。そこで、栄養教諭が軸となり、食に関するさまざまな実態の情報を集約し、実態に合った啓発活動を各領域にコーディネイトすることで、子どもたちやそれを取り巻く大人全体に、「広がる」「つながる」食育の実践がムダ・ムリ・ムラなく継続的に行えるようにする。

3　モデルによる仮説

食に関する経験は、個人によりさまざまであり、限られた時間の中で一斉に指導していくうえでは配慮が必要である。そのため、基礎的な実態を把握しておくことが不可欠であると考えた。調査や交流で得た実態の「情報」の流れを作り、それをもとに、それぞれの立場から食に関する啓発活動を行うことによって、生徒のみならず、生徒を取り巻く大人も、食に関する知識・関心を深めることができるのではないかと考えた。

図１は、栄養教諭を起点として、「生徒」「教職員」「保護者・地域」各領域へと「広がる」啓発活動を行い、さらに各領域どうしが「つながる」ことで、相互に影響しあっていくというモデルである。このように、多くの人が自らの手で「食に関する指導」に関わることにより、多角的かつ継続性の高い食育の実践が可能となり、生徒の心身の健康の増進と豊かな人間形成に繋がるのではないかと考えた。

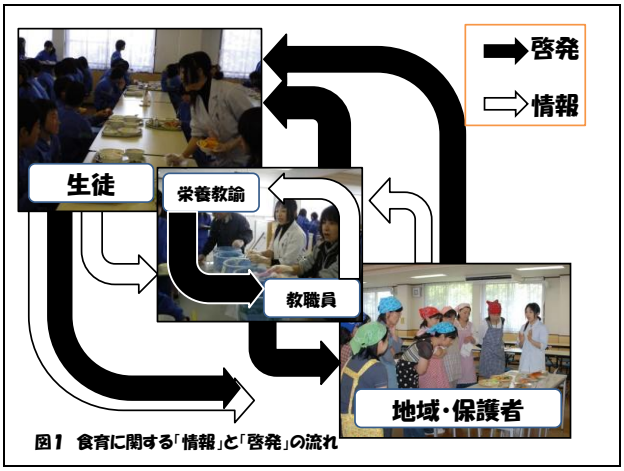


図１　「広がる・つながる」食育モデル

4　本校生徒の実態

（１）学校給食について

生徒は全体的には落ち着いた雰囲気で楽しく食事をとっているが、一部に毎回野菜料理を残す生徒や、会話に夢中になり食べきれなくなってしまう生徒がいる。どちらかというとやせ傾向で、食べる意欲そのものが低く感じられる生徒も目立つ。

残菜調査の結果を図２に示した。年間を通して野菜を使った「副菜」（和え物や煮物）の食べ残しが多い。気温の上がり始める７月に食べ残しが増えている。冬場は牛乳の飲み残しや、野菜類・果物類の食べ残しが増える。また、学年単位で給食の中止がある ４ 月・2 月・3 月は全体的に食べ残しが少なくなる。

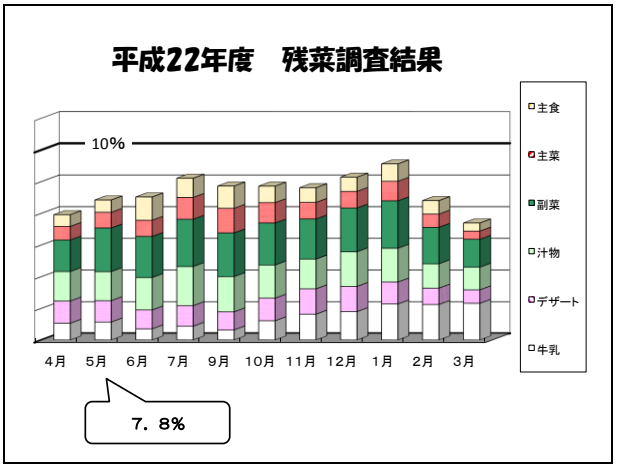


図２　平成 22 年度　残菜調査結果

また、近年生徒数の増加により、ランチルームが混雑して喫食時間を確保しにくいこともあり、慌ただしくなりがちである。

（２）食生活について

朝食の喫食状況、睡眠時間、不定愁訴（※１）、運動習慣に関する「平成 22 年度食生活アンケート」より、以下の結果を得た。

アンケートでは、８割以上の生徒が毎日朝食をとると答えた。一方、自由記述による当日の朝食の内容を、「主食」「主菜」「副菜」「乳製品」「果物」「飲み物」「その他」に分類し集計したところ、一日の食事の 1／3 として主食・主菜・副菜を過不足なく食べてきていると考えられる生徒は 30％に満たなかった。

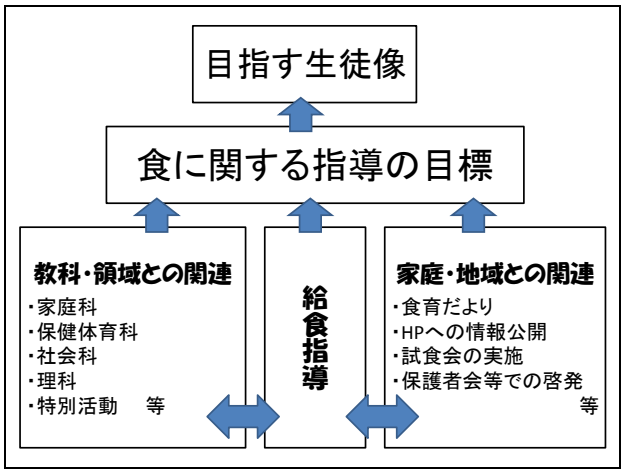
不定愁訴の調査においては、「特にない」と答えた生徒が全体の 20％以下にとどまり、「朝から眠い」「疲れやすい」「やる気がでない」等の項目に約半数の生徒が集まった。

※１）不定愁訴：原因不明の体の変調を訴えること。

５　指導計画

全体計画は、給食指導を核として、教科・領域での指導と家庭・地域への啓発を含めた。

資料１　食に関する指導全体計画の構造



資料２　食に関する指導年間指導計画

	月	学校行事・授業計画	たより	献立計画	
年間指導計画	4	給食集会（2・3年）	学校給食について	入学・進級	キャベツ 鯖 たけのこ 人参 アスパラ 玉葱 じゃが芋 レタス グリンピース あさり さやえんどう そら豆 わかめ
	5	給食集会（1年）1・2年校外学習	食事のマナーとルール	1年給食開始	
	6	県民の日 修学旅行	食品の衛生・安全について	虫歯予防・入梅 カルシウム摂取	なす ピーマン トマト びわ かぼちゃ ゴーヤ きゅうり 枝豆 しそ さくらんぼ スイカ オクラ 冬瓜 メロン
	7	美化活動 総合体育大会	食品の表示 スポーツ栄養	七夕 土用丑の日	
	9	避難訓練 運動会	防災と食	防災の日 十五夜	とうもろこし なし ぶどう 栗 らっかせい りんご 秋刀魚 さつまいも きのこ 里芋 さば いわし かれい
	10	進路保護者会 合唱祭・市内駅伝	生活リズムと食	豆腐の日 イワシの日	
	11	地域交流会 勤労体験	食の生産と流通	勤労感謝 リクエスト給食	鮭 人参 ごぼう ねぎ 柿 みかん 白菜 春菊 山芋 れんこん かぼちゃ かぶ ほうれん草 小松菜 青梗菜
	12	美化活動	日本型食生活	冬至	
	1	成人の日駅伝 私立入試開始	給食の歴史	鏡開き 全国学校給食週間 船橋市学校給食展	小松菜 いわし ぶり たら キャベツ ほうれん草 ねぎ 菜花 わかさぎ 大根 水菜 にら ブロッコリー カリフラワー いちご 柑橘類
	2	女子駅伝 公立入試	健康と食事	節分・生活習慣病予防週間	
	3	卒業式・美化活動	1年間の食事をふりかえる	ひなまつり・卒業	

年間指導計画は、献立計画を中心に据えた。各教科実践に沿い無理なく食に関する指導が行えるよう、栄養教諭の献立のねらいを教職員に周知し、「学校給食」を生きた教材として活用しやすい環境を整えることが目的である。

６　各領域への実践の記録

（１）生徒に向けた実践

①　「給食集会」の実施

従来１年生にしか行っていなかった「給食集会」を、平成 21 年度から全学年に対して実施した。時期は、各学年の給食が実施される前とし、１年生は４月末、２・３年生は４月初頭に行った。内容は、栄養教諭による講話で、１年生には「中学校での給食のルールやマナー」、２・３年生には「成長期の食事」「給食ができるまで」の２題を隔年で行うこととした。今年度は、実際の給食室の写真を使ったスライドを上映しながら説明した。

資料３　給食集会で使用したスライドの一部

②「教科・領域」での食に関する指導

【栄養教諭との TT による授業の例】

・１年　保健体育「食生活と健康」

食生活アンケートの結果を鑑み、朝食の内容を題材とした。バランスのよい食事として学校給食を例に授業を展開した。

【栄養教諭の資料提供による授業の例】

・２年　総合「わたしたちの住む地域について知ろう」

修学旅行の事前学習の一部として千葉県の産業を見直すにあたり、栄養教諭から、学校給食を例に地産地消についての資料を提供した。実際に納品された県産物をカレンダー形式にしたものと、その写真を使ってオリジナルの資料を作成した。

③ 給食委員会による活動

喫食後の清掃や食券の確認に加え、ルール

やマナーについての呼びかけを重点的に行った。また、残菜調査の結果をふまえ、エコクラブ（※２）との協力で残菜に関するたよりを発行し、生徒同士の呼びかけに活用した。

※２）エコクラブ：本校生徒による自主活動クラブ。環境に配慮した活動を行うことを目的としている。

④昼食時間における給食指導

給食主任を中心に、ルールとマナーを徹底できるよう呼びかけた。

⑤配布資料・掲示資料等

生徒用食育だより「ぱくぱくだより」（資料４）に、実際の写真や調査データなどを用い、生徒にとって身近な内容になるよう心掛けた。

資料４　「ぱくぱくだより」より抜粋

ぱくぱくだより　平成22年11月号
宮本中学校の「学校給食」に関わる人々を知ろう
校長先生
学校給食は、教育委員会と校長先生の責任のもとに運営されています。できあがった給食を一番に「検食」して、適切な給食であるかどうかを毎日確認、記録しています。
事務職員
みなさんが給食を選択したマークシートを読み取り、給食の申込みに関する管理を行っています。残んだ給食を全員が食べられるように！と、回収もれ、マークミス、給食費の入金等をていねいにチェックしています。
栄養教諭
食育の「生きた教材」に ふさわしい献立を考えます。成長期に合った栄養価であることはもちろん、旬、彩り、産地、金額等も考慮します。日課や食数のことも考えて、時間内に衛生的に作ることができるよう、先生方や調理員さんと連絡をとり合って仕事をすすめます。
食材料納入業者の方々
調理員の方々
ひとりひとりに安全でおいしい給食が提供できるように、厳しい衛生管理のきまりを守りながら心をこめて調理をしてくださっています。食事を作る だけでなく、食器の洗浄や調理場の清掃などもしていただいています。
納品形態や価格、納品時間、安全確認のための検査等、学校からの相談や要望に応えながら、学校給食にふさわしい食材料を納めていただいています。

（２）教職員に向けた実践

①　「 教職員のための食育だより」の配布

食に関する時事ニュースや、ランチルーム・調理場の状況等を伝える資料を配布した。

②　生徒の喫食状況の報告

生徒指導部会および職員会議等で報告を行った。

（３）家庭・地域に向けた実践

①　試食会の実施

試食会の対象を保護者・地域住民および給食関係業者に広げ、両者に学校給食の意義を伝えるとともに、交流の場とした。

②　保護者会での情報提供

新入生保護者会、部活動保護者会、進路保護者会等で、内容に関連した食の情報の資料提供や講話を行った。

③　レシピ配布

生徒用食育だよりの裏面を利用して、たよりに合わせたレシピの配布を行った。

④　ウェブサイトへの情報掲載

NPO 法人の運営する学校給食専門サイト「はなまる給食」の協力を得て、毎日の給食の写真等、献立に関する情報を掲載した。

７　今年度調査にみる実践の成果と課題

（１）生徒への調査結果と考察から

①　残菜調査（図３）について

平成 23 年 11 月 25 日現在の調査で、残菜総量の割合は 8.2%であった。昨年度に比べ若干の増加となったが、平成 20 年度から現在に至る調査期間中の推移を見ると、昨年度まで順調に減少していることがわかる。今年度も 9 月までは例年並みであったが、例年気温が下がり残菜が少なくなる 10 月に日中の残暑が続いたことが、食べ残しの増加につながったのではないかと考えられる。しかし、年間を通じてあまり変化のない「副菜」の残菜が、わずかずつではあるがここ 4 年間減少傾向となっていることは、日々の地道な給食指導の成果であると考えられる。

また、月別残菜率を見ると、ほぼ２学年での喫食で時間や空間に余裕のある４月と３月はとても低いことがわかる。5 月は全学年での喫食となるが、21 年度以降、残菜率が他の月に比べ低くなっていることは、給食集会の成果であると考えられる。

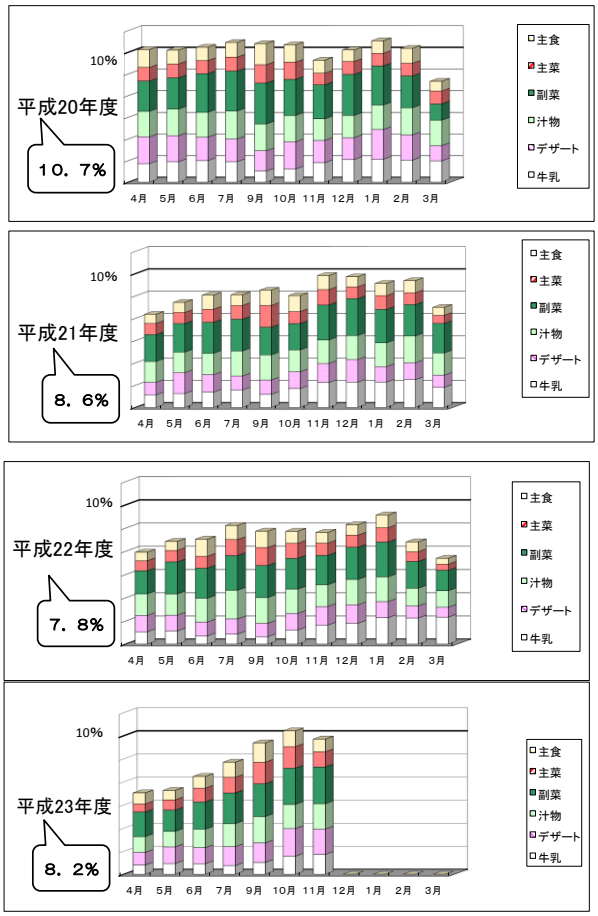


図３　平成 20 年 4 月～平成 23 年 11 月残菜調査

②　食生活アンケート

平成 21 年度調査からの推移を見ると、わずかずつではあるが「朝食を毎日食べる」生

徒の割合に改善がみられた（図４）。

一方、「ほとんど食べない」生徒では大きな改善が見られなかった。朝食の内容に関しても、今年度になって再び「主食」「主菜」「副菜」のそろった食事が減少して簡便傾向が強まり、指導・啓発の成果は見られなかった（図５）。

最も改善が見られたのは不定愁訴の有無で、今年度すべての値が 50%を下回り、「特にない」が 20%を超えた（図６）。

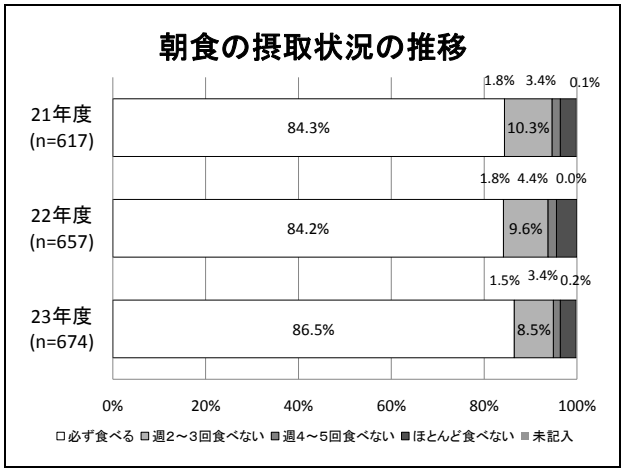


図４　平成 21～23 年度　朝食の摂取状況の推移

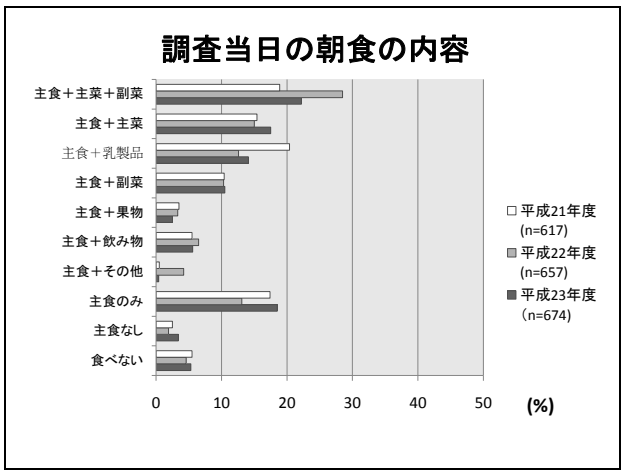


図５　平成 21～23 年度朝食内容の割合

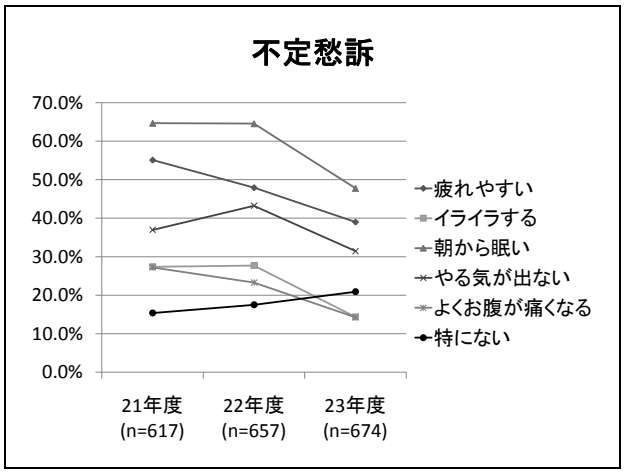


図６　平成 21～23 年度不定愁訴の推移

これらの単純集計の結果を、養護教諭・給食主任をはじめとする校内の教職員や、学区の小学校の栄養教諭、学校薬剤師に報告し、意見を求めたところ、「不定愁訴と他の要素の関わりを知りたい」「残菜の原因や朝食抜きの原因を、直接訊ねてはどうか」「食べることの楽しさを味わえるような指導を深めてはどうか」等のアドバイスを受けた。そこでより考察を深めるため、関連が予想される各要素についてクロス集計を行った。

朝食の摂取と不定愁訴の関係（図７）では、不定愁訴が「特にない」生徒の 9 割以上が朝食を毎日摂っていた。「やる気が出ない」「イライラする」といった精神面の不定愁訴要素に、朝食をとらないことがある生徒が比較的多く見られた。

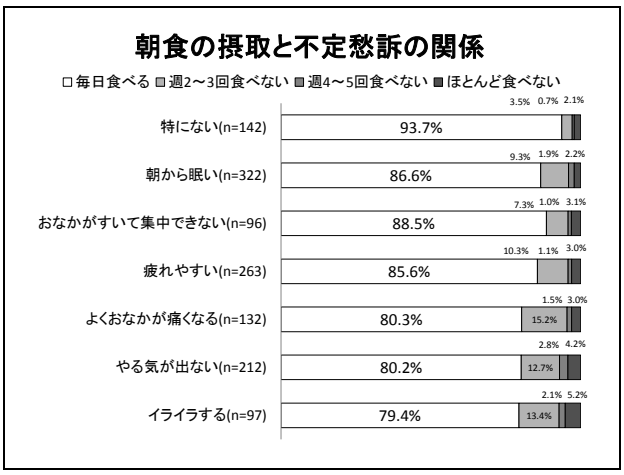


図７　朝食の摂取と不定愁訴のクロス集計

睡眠時間は８時間以上９時間未満で最も不定愁訴の出現率が低かった。（図８）。

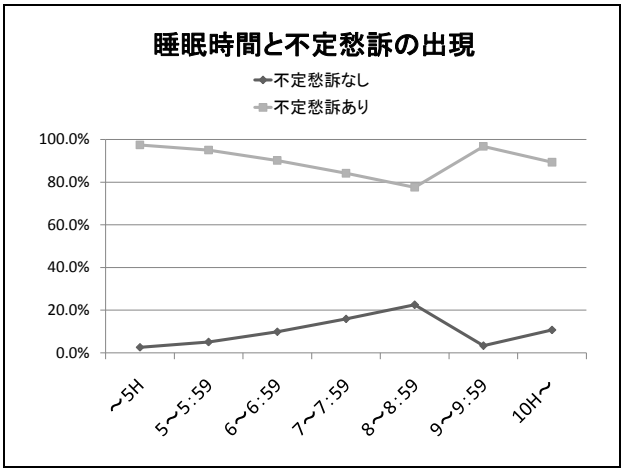


図８　睡眠時間と不定愁訴の出現のクロス集計

排便が「毎日ある」、運動を「毎日する」と答えた生徒のグループで、「朝食を毎日とる」と答えた生徒の割合が最も多かった。「朝食を食べないことがある」グループに着目すると、運動習慣とは必ずしも結び付かなかったが、排便習慣では、「排便のない日」の頻度ごとに割合が高くなる傾向があった（図９）。

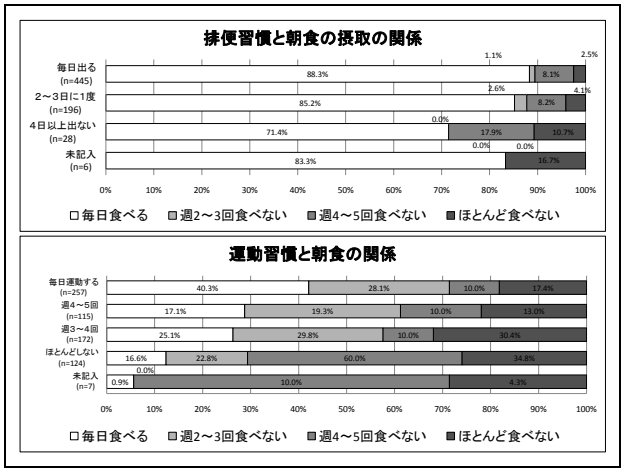


図９　排便・運動と朝食摂取のクロス集計

また、食生活に関する調査に加えて、今年度新たに設定した調査項目の一つ「給食が好きかどうか」の結果との不定愁訴の関連では、給食を「好き」と答えた生徒において最も「不定愁訴なし」の割合が高かった（図 10）。食事を楽しんでいることが体調にも関わっていると言えるかもしれない。

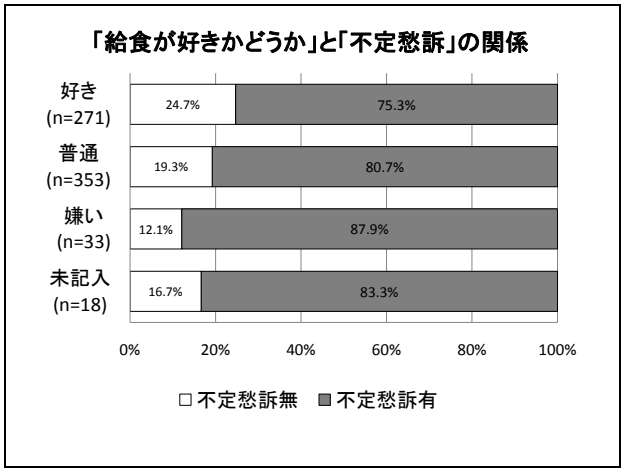


図 10　給食が好きかどうかと不定愁訴出現のクロス集計

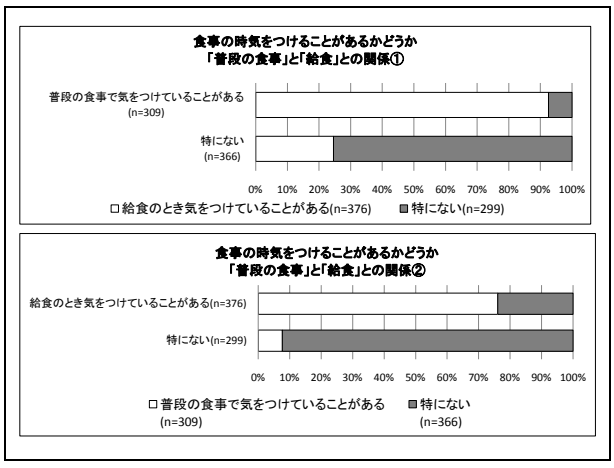


図 11　食事の時気をつけることの、給食時と普段の食事時のクロス集計

さらに、「食事の時気をつけていることがあるか」を問うと、「普段の食事の時」では 45.8%、「給食の時」では 55.7%の生徒が「ある」と答え、学校での日ごろの給食指導の成果が見えた。他方で、この 2 問をクロス集計してみると、「普段の食事」で気をつけていることがある生徒の 90%が「給食の時」にも気をつけていることがあるが、その逆では 80%未満にとどまり（図 11）、家庭での食育の重要性も示唆された。

（２）教職員への調査結果と考察から

本校教職員を対象に「食に関する指導」の意識調査を行った。おおむね「食に関する指導」が行われ、適切な学校給食が実施されているとの判断が見られた（図 12）が、一部「無回答」の教職員からは、「出されている情報が活用されているか疑問」「生きた教材として活用できているかと問われると判断しかねる」等の声も寄せられた。

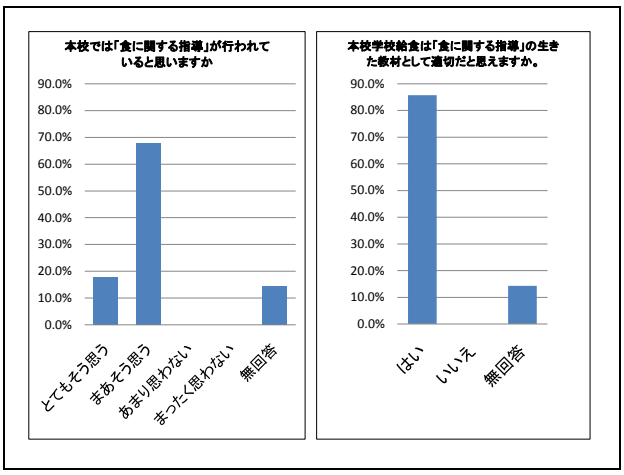


図 12　本校での食育・給食に対する評価

また、「どのような場面で食に関する指導を行うことが大切か」という問いには、給食指導を中心としさまざまな分野に回答が寄せられたが、「自分自身が食に関する指導を行っていると思う場面」ではまだ「特にない」という回答もあった。食育に関する具体的方法の提示を含めて啓発していく必要性を感じた。

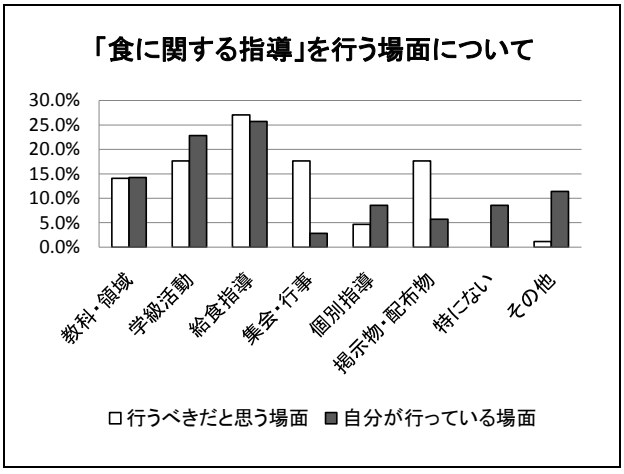


図 13　食に関する指導を行う場面

教職員が「本校生徒に指導が必要」と考えることの調査結果と、生徒が「給食の時に気

をつけていること」の調査結果を合わせて見ると、生徒と教職員の意識のつながりが垣間見える（図 14）。例えば 2 年生で「あいさつ・会話」「食器の使い方・姿勢」に気をつけている生徒の割合が他学年より高かったが、2 学年の教職員が全員大切だと考えていたのが「マナー」である。指導にあたる教職員の意識が生徒の食事に対する意識に反映することを示唆している。

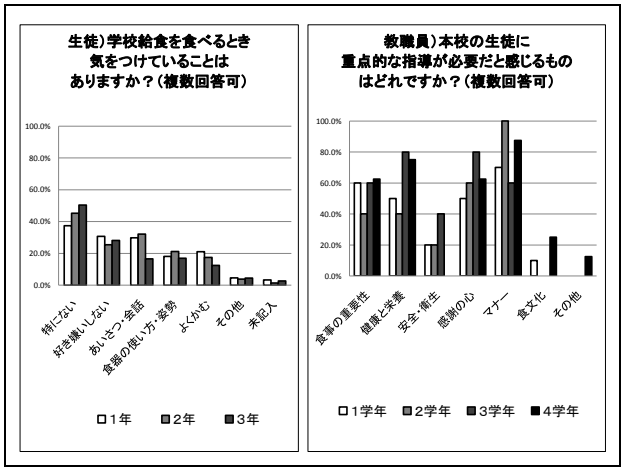


図 14　給食時の生徒の意識と食育に関する教職員の意識

（3）保護者への調査結果と考察から

試食会に参加した保護者へのアンケート調査を行った。グラフは、自由記述を抽出し集計したものである。「食育の取り組みがわかった」「勉強になった」「家庭でもがんばりたい」等、試食会への参加により食育への関心が高まったと思われるコメントが多く寄せられた。一方、家庭で配慮されていることは、ほとんどが「野菜を多く取り入れる」「栄養バランスに気をつける」等、作り手としての悩みを含んだ内容であった。「食事を提供する立場からの配慮」は感じられたが、生徒自身への指導・啓発的な声掛けが少ないことが予想され、マナー等に関する啓発の余地があると感じた。

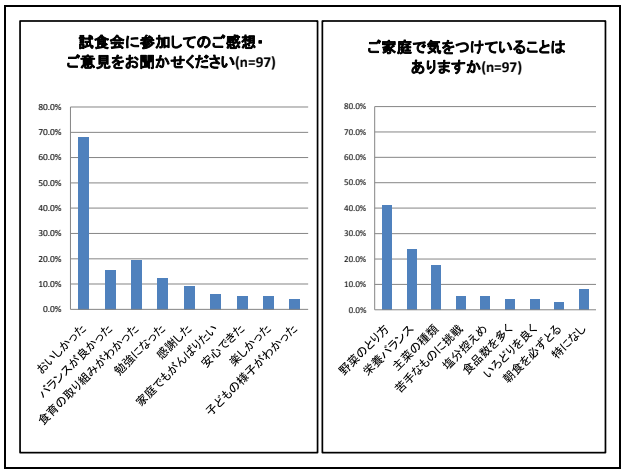


図 15　試食会における保護者アンケートより

試食会での交流の中では、食育だよりのレシピや情報提供への感想等を聞くことができ、保護者への啓発のための資料が少なからず活用されていることを実感した。

8　まとめ

各領域への実践の成果と課題を述べてきて深く感じたのは、「大人の意識と子どもの意識のつながり」である。

生徒への調査では、主な成果として、給食残菜率の低下や不定愁訴の減少があった。この成果は、教職員が栄養教諭からのたよりをはじめとするさまざまな情報を得る中で、食育の重要性や必要性を感じて日々の指導を行ったことから得られたものだと感じている。

これに照らし合わせると、家庭の協力が欠かせない「朝食内容」や「生活習慣」の改善については、さらなる工夫をもって家庭への啓発に臨まなくてはならないと感じた。学校教育活動を通じての家庭への啓発は容易ではないが、大人と子どもの意識は一方通行ではない。「大人から子どもへ」そして「子どもから大人へ」と、食への意識は、生活の一部であるからこそ、相互に影響しあうと考える。栄養教諭が更に「広がる」「つながる」活動をコーディネイトすることにより、一層のムダ・ムリ・ムラのない食育の実践につながるであろうと考えた。

9　おわりに

学校 1 名の栄養教諭としてどのように食育をコーディネイトできるか。日々の給食運営と並行して無理なく継続的に行うには、ネットワークづくりが欠かせないと考え、モデルを構築して実践に取り組んだ。簡単なモデルだが、実際には、「多くの人の力を借りる」ことであり、コミュニケーションを繰り返しながら根気よく取り組む必要がある。この時、さまざまな実態データを提示し、それぞれの立場からできる「小さな食育」を実践してもらうことが、何より確かな成果につながると感じた。また、調査結果をくまなく眺めて、改めて「食べることは生きること」、つまり生活そのものだと感じた。生徒が勉強や運動にいきいきと取り組むための礎として、健康な心身を育むことができるよう、より広く固いネットワークを構築していきたい。

【参考文献】

文部科学省（2010）「中学校学習指導要領」
内閣府（2011）「食育白書」
内閣府（2011）「第二次食育推進計画」

【実践記録】

金杉台校区における小中連携教育の展開

－学ぶ意欲と豊かな表現力を身につけた児童生徒の育成をめざして－

船橋市立金杉台中学校　　主幹教諭　齊藤　浩憲

１　はじめに

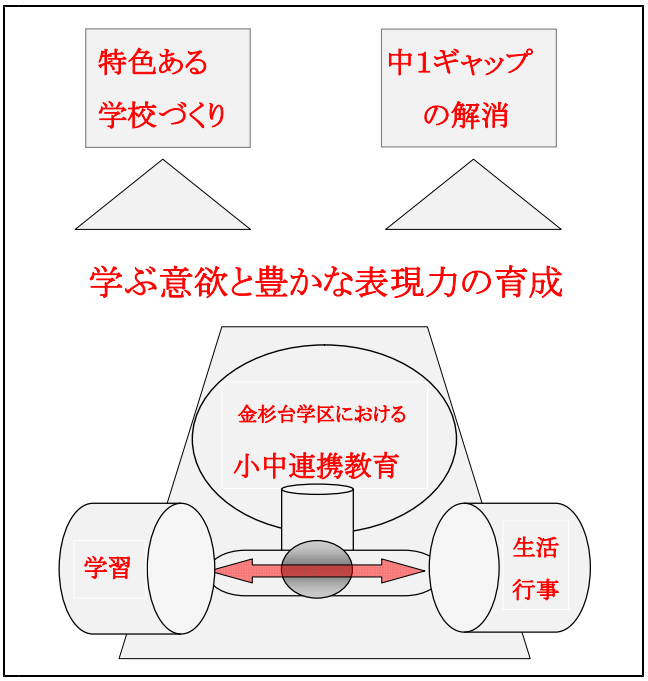
小学校から中学校へ進学することは，児童生徒が成長の喜びを自覚するとともに，学校生活の再スタートを決意するよい機会でもある。その一方で，学習や生活の違いから，不安やとまどいを覚え，いわゆる「中１ギャップ」に陥りやすい。国は，中央教育審議会の答申の中で，「学校段階の接続の問題としては，小１プロブレム，中１ギャップなど集団への適応にかかわる問題」と指摘している。そのあらわれとして，平成２２年度に文部科学省が行った「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば，年間３０日以上学校を欠席したとの報告件数は小学校６年生で 7,154 件であるのに対し，中学校１年生では 21,084 件と急増していることにみることができる。また小学校で培われた個性や能力，興味・関心を中学校という新しい環境の中でいかに伸ばしていくかという課題もある。これらの背景から，平成１０年の学校教育法の改正により中高一貫教育制度が導入されたことに伴って，小中でも一貫教育や連携教育の取り組みの重要性が指摘されるようになり，全国各地でさまざまな形態をもって実践が行われている。

船橋市でも，平成１７年度より小中連携教育推進校として若松小・中，豊富小・中，小室小・中が指定を受け，その後飯山満南小・飯山満中の連携も行われ，船橋市による小中連携・一貫教育がスタートした。さらに『船橋の教育』－船橋市教育振興ビジョン及び教育振興基本計画－（平成２２年）の中でも，「推進目標４　新しい学校体制づくりの推進」の施策２として，「小中連携教育の推進と小中一貫教育校の設立」が示され，本市における小中連携教育や一貫教育の研究の推進とその成果の普及を求めている。

金杉台小・中学校は，小学校卒業生のおよそ半数が別の中学校へ進学する「１小２中」の状況のもと生徒数が減少する中で，平成２０年度に船橋市教育委員会より小中連携教育の研究校として５年間の指定を受けた。

以下は研究を進めるにあたっての全体構想図である。

研究全体構想図



本研究は，学習，生活・行事両面にわたる取り組みにより「学ぶ意欲」と「豊かな表現力」を育成することをねらっている。「学ぶ意欲」は連携を通して中学生には有用感を，小学生には具体的な目標を意識させることで高まるものであり，「豊かな表現力」は具体的な活動を通して自分の考えを持ち，相手に伝え，相手の考えを理解して調整を図るというコミュニケーション能力であると捉えている。

研究１年目は，「確かな学力」をテーマに，学習部，道徳人権部，生活部，交流部の４つの部会を設置し，研究を進めた。２年目は，組織を学習部，生活交流部の２つの部会に改変し，テーマも「確かな学力」の基となる「学習意欲」に限定した上で「豊かな表現力」に着目し，実践を進めた。研究３年目からは，テーマ・組織を引き継いだ上で，「研究推進の重点と具体化の視点」を確認し，活性化を図ってきた。そして

昨年度には中間発表を行い，これまでの研究の成果や課題を明らかにした。

これらを踏まえて，今年度は特に学習面に力を入れ，研究を推進しているところである。この連携教育の取り組みを通して，「中１ギャップ」の解消と「特色ある学校づくり」を進め，生徒・保護者・地域にとって魅力ある学校づくりを実現していきたい。

２　研究の目的

小中連携教育を通じて「中１ギャップ」の解消を図り，あわせて「特色ある学校づくり」を進める。

○研究推進の基本方針

研究の目的にせまるために，以下の３点の方針を設定し，その具体化を図る取り組みを行った。

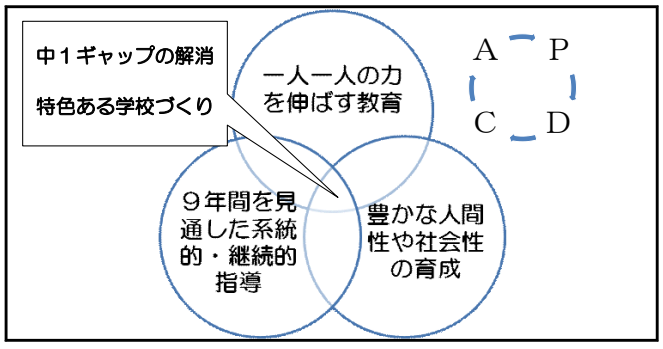
（１）小中連携教育を通して，職員全員が児童生徒一人一人に関わりを持ち，その長所や能力・適性を見つけ，児童生徒に沿った教育を実践する。（子供たちが主人公）

（２）小中連携教育を通して，リーダー性や思いやりの心を育み，地域を愛し，誇りに思い，感謝する心を育て，豊かな人間性や社会性を育む教育を実践する。

（３）小中連携教育を通して，小中９年間を見通した系統的，継続的な指導の実践を図り，小学校から中学校への教育課程のスムーズな移行を行い，基礎・基本の定着を進めて，確かな学力が身につく教育を実践する。

以下は，この内容を図式化したものである。

図　研究推進の基本方針



３　研究の方法と内容

（１）研究の方法

①研究推進の重点と具体化の視点の設定

実際に取り組みを進めていくにつれ，職員間で小中連携について考えやとらえ方に違いがあらわれ始めた。そこで研究を進めていくにあたって，小中学生がさまざまな場面で一緒になって活動する交流活動を通して連携を深めることを中心に据え，その他研究推進にあたってのフレーム　（枠組み）を以下の３点を設定し，これを研究推進の重点と具体化の視点として確認し合った。

１　児童生徒や小中の職員が共通のねらいをもち，中学校を中心とした金杉台校区で活動することで「金杉台で学ぶ（金杉台の中で学ぶ)」教育を推進する。

２　小中の教育活動全般にわたって交流の場面を可能な限り設定することで「金杉台に学ぶ（金杉台でともに学ぶ)」教育を推進する。

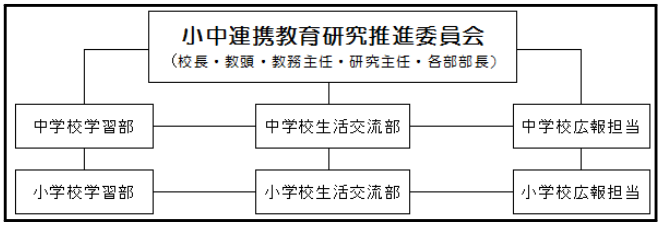
３　地域との連携を進め，教材として地域を取り上げたり，学習活動に地域の人材を活用したりするなどして「金杉台から学ぶ」教育を推進する。

この確認により，職員の実践を束ねる効果を生みだした。

②研究の組織化

以下は本研究にあたっての組織図である。

研究組織図



本研究が学校全体をあげた取り組みになるよう，組織上部に管理職・研究主任・教務主任等で構成される研究推進委員会を位置づけた。その上で学校規模を考え組織の細分化を避けるため，学習部と生活交流部の２つの部を設け，小中各職員を配置することにした。これは研究を推進するために各部が取り組みを企画・立案し，小中連携教育推進委員会で調整を図るボトムアップ方式と，逆に推進委員会で原案を作成したものをそれぞれの部が実施するといったトップダウン方式とで進めることを同時にねらったためである。

③計画性をもった研究の推進

小中連携に関する新規の取り組みを立ち上げることは、両校の学校事情により容易ではない。そこでできるだけ既存の行事に小中連携の視点を加えた取り組みを行うことにした。年度初めには各取り組みを年間計画に位置づけ，その上で毎月の推進委員会で取り組みを具体化し，全体研修会，職員会議及び学

年会等で共通理解を図り，計画的に推進することにした。推進にあたってはＰＤＣＡサイクルを働かせ，改善を図りながら実践を進めた。

（２）研究の内容

＜学習部の取り組み＞

①交流授業の実施

児童生徒が同じ教室で机に向き合い，一緒に授業を行う「交流授業」の実践を進めた。これまでに国語，算数・数学，生活科及び道徳で取り組んできた。実践にあたっては，指導計画に位置づけ，小中職員で一つの指導案を作成して展開し，事前・事後の検討会を行うなど，小中合同授業研究の形式をとって実践した。この取り組みを通して，児童・生徒が交流を深めるとともに，中学生が‘ミニ先生’となって児童の理解を助ける役割を通して有用感を自覚し，意欲やコミュニケーション能力を高めることができた。

交流授業指導案の実際

５　本時の指導　　小学校（１８/２０）中学校（７/９）

（１）目標

【小学校】

（関心・意欲・態度）　○パーティーに楽しく参加することができる。

（気付き）　○中学生と交流することで，人とかかわることのよさに気付くことができる。

【中学校】

○小学生との交流授業に必要な組織について話し合いを行なう中で，互いの個性を尊重し，役割を分担して協力し合うことの大切さを学ぶ。

○小学生との交流授業を通じて自己をより深く理解する機会とし，あわせて他者の個性を理解し尊重することを通して，他者への思いやりを深め心の豊かさを育む。

○学校園で栽培したいもを活用しゲームを交えたパーティーを行なうことにより自然への感謝の気持ちや奉仕や協力・協調の精神を養い，好ましい人間関係や明るい社交性を育む。

（２）展開

時配	学習活動と主な児童の反応	教師の支援（・）と評価（☆）
３	１．学習課題を確認する。 サツマイモパーティーをしよう	・本時の学習課題を確認し，意欲を高めるような言葉かけをする。 ☆小中学生が互いに喜んでもらえるようなパーティーにしようと意欲を持つことができる。
７０	２．〈第２部の構成〉 ○サツマイモパーティーをする。 ・はじめの言葉 ・会食 ・出し物〈小学生・中学生〉	・自分の役割を自覚し，進んで活動できるように，プログラムを掲示しておく。 ☆感謝の気持ちと思いやりの心を深めることができる。
	・おわりの言葉	☆互いに交流できてよかったと感じることができる。
１０	３．片付けをする。	・みんなで協力してして片付けたりゴミを拾ったりするように促す。
７	４．移動	

②共通した研究主題に基づく授業実践

各学校における日常の授業では「学習意欲を高め，コミュニケーション能力を育てる授業実践」という小中共通の研究主題を設け，日々の実践にあたっている。これは，毎日の授業で「確かな学力」を育てるとともに，小中９年間にわたり共通のねらいをもった継続的な指導を行って，円滑な中学校への接続を図ることをねらったものである。授業研究においては，小中職員が参観し合い児童生徒の様子を観察するほか，主題をねらった取り組みを指導案に明記し，意見交換して職員全員の授業力向上を図っている。

指導案の実際

過　程	学　習　内　容	時配	指導上の留意点や支援・評価
導　入	日本をおそった世界恐慌の様子 世界恐慌による鉱工業の推移 「日本のグラフの推移から読み取れることは何か」 イギリス　アメリカ　フランス　ドイツ　ソ連及び日本	１０	グラフ「世界恐慌による各国の鉱工業生産の指標」を示す。 グラフから生産の推移を読みとることができる。（資料活用）
	東北地方で「娘の身売り」が行われていたことを示す。		１９３１年から生産が改善していることを確認する
展　開	学習課題の提示 日本はこの不況をどのように乗り越えようとしたのか。	３０	○研究主題に向けた取り組み ４人グループの調べ学習をさせる
	◎必要な個別事象 いつ　１９３１年 どこで　奉天の郊外で 誰が　関東軍が 何をした　南満州鉄道の線路を爆破し中国側がしたこととして攻撃した どうなった　満州の大部分を占領した 満州国をつくらせ，事実上日本が支配した 生活に苦しむ多数の農民を集団で移住させた その後日本は国際連盟を脱退した		意欲を持って調べることができるか。（関心・意欲・態度） 調べは４Ｗと１Ｈを意識させる 国際連盟の脱退の経緯は説明する。 発言させ板書する。
まとめ	今日の学習の個別化と定着	５	○研究主題に向けた取り組み ２人１組のペアで互いに説明する 学習したことがらを説明することができるか。（知識・理解）（思考・表現）
	今日の学習を振り返って満州事変に関して，ノートに意見や感想を書く	５	満州事変に関して自分の考えを表現できるか。（思考・表現）

③英語科等の教科における小中連携授業

年間を通して，小中学校で，ＴＴによる英語の授業を展開している。これは小学校の英語活動に中学校英語科教員が指導にあたり，小学校から中学校への学習のスムーズな移行をねらいとして取り組んだものである。また小学校教員も，中学校の英語の授業に関わり，生徒の様子を観察し，支援にあたっている。

④総合的な学習の時間における小中連携

中学校の総合的な学習の時間の充実には，小学校における実践の理解が不可欠である。連携における職員間の打ち合わせを通じて，それぞれの取り組みを理解し，学習の積み上げが可能になった。「里山づくり」の取り組みでは，児童生徒が地域と一緒になって，共通のねらいをもち実践にあたっている。

⑤小中職員による全体研修

夏休み中や学期末には，学習指導等に関する合同研修会を実施している。研修テーマには，「各教科９年間の年間指導計画をもとにした指導法の工夫と改善」や「交流授業の進め方」等職員のニーズをもとに決定し，毎回活発な意見・情報交換を行っている。

⑥小中連携「漢字の取り組み」

漢字力の向上には時間がかかるものであり児童生徒が継続して粘り強く取り組んでいく必要がある学習である。その一方で，漢字力は練習すればどの児童生徒も向上させることができ，また，向上が実感しやすく，自分の学習のペースやリズムで進めることができる学習でもある。そこで両校は，月例テストを継続して行うなど，教育課程に漢字の練習を組み入れるとともに中学生が小学生に「漢字クイズ」を作成するなど交流を深め，漢字力向上の意欲づけを図っている。

＜生活交流部＞

①小中合同スポーツデーの実施

２２年度より，運動会，体育祭を一つにまとめ合同スポーツデーとして実施している。小学生は，中学生のダイナミックな動きを，中学生は小学生のかわいらしくも精一杯な取り組みを目の当たりにし，目標を見つけ自身の成長を自覚できる貴重な学習の場となっている。また多くの地域の方の御来場の下，小中連携教育の取り組みを見学していただく絶好の機会でもある。

②兄弟学年を主体とした交流

○交流レクリエーション活動

年度の初めの時期に，児童生徒を３つのブロックに分けてレクリエーション活動を行っている。これは互いの名前や顔を知り，意欲を高めるねらいをもっている。実施にあたっては企画の段階から小中学生が話し合いをもち運営にあたり，自覚と自信を深めている。

○「米やいもの栽培」

小中学生が一緒に互いの学校で，米やいもの栽培を実施している。秋には収穫祭を行うほか、食育の観点から収穫物を給食食材に提供している。

③杉の子・白鷺フェスティバルの実施

児童生徒全員が参加して発表会を実施している。小学校５年生以降の総合学習の発表のほか小学校各学年の歌の発表，中学生による太鼓や琴の演奏，そして小学校高学年と中学生による合同合唱等多彩な取り組みである。参加していただいた保護者の方々からは「たいへん感動した」「毎年実施してほしい」との声を多数頂戴している。

④児童・生徒会交流

児童・生徒会がアイデアを出し合い，主体となっている取り組みがいくつかある。これらは教員の発案ではなく，児童・生徒が考えた小中連携の実践であり，研究の活性化につながっている。

○募金・あいさつ運動

○プルタブ・キャップ集めのエコ活動　等

⑤小中給食体験会の実施

中学校給食委員会が中心となって小学生に中学校ランチルームに来てもらい，給食体験会を行っている。これは中学校学校への親しみを育てるとともに，準備段階から食育やコミュニケーション能力を深めるねらいをもっている。

⑥小中合同保健委員会の開催

小中の校長，養護教諭及び学校医が参加し，児童生徒の発育状況，食生活及び生活習慣等について現状や課題について話し合う機会を設けている。保健・安全面について，小中で情報交換を行い連携してあたるほか，必要な内容は保健だより等を通して保護者に周知している。

⑦ＰＳＷ（ポジティブ　ステューデント・ガイダンス　ウィーク）の実施

中学校全生徒を対象に年間３回，ＰＳＷの期間を設けている。これは生徒のがんばりを教員が観察し発見して，生徒の努力を認め，自己存在感や成就感を持たせる取り組みである。がんばりが見られた生徒は本人とともに保護者にも伝えることになっている。これは中１の生徒への観察や支援も兼ね，「中１ギャップ」解消の取り組みの一つであると同時に，自己肯定感を高めるねらいがある。

⑧地域と連携した活動

本校区の豊かな自然環境や人材を生かして地域の方々と連携した活動を実践している。

○里山体験活動

中学校の裏手に広がっている谷津田を活用して小中学校と地域が連携した活動を推進してきた。この場所は以前大変な荒れ地だったところを，地域の方々と小中学生が協力して整備を進め，今では貴重な自然が残されている緑地として，地域の方々の憩いの場となっている。ここでは生活科の授業で小学生が田植えの学習を行うほか，総合的な学習の時間に地域の方を講師として招いたり中学生の毎朝のランニングコースに利用したりと，さまざまな取り組みの中で地域の自然や人材を活用させていただいている。

○敬老祝賀会

中学校を会場として，小中学生が演奏や踊りなどの発表等を披露している。毎年，地域の高齢者の方々の参加をいただき，貴重な交流の機会となっている。

○自治会との合同地域清掃活動

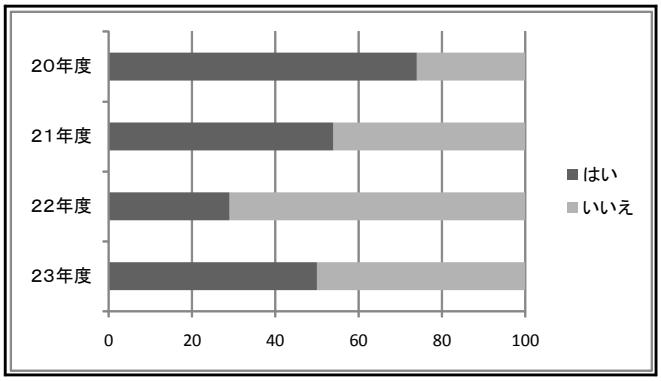
地域自治会と小中学校合同で行う地域清掃活動の取り組みがある。われわれが過ごす地域を大切にしようとする心情を育てるとともに，小中連携教育を地域にアピールする機会となっている。

４　研究の結果

以下のグラフは，研究の始まった平成２０年度から行った「入学する前に中学校生活に不安を感じていたことはありますか。」に対する回答をまとめたものである。

中学校生活への不安について　　※数字は割合

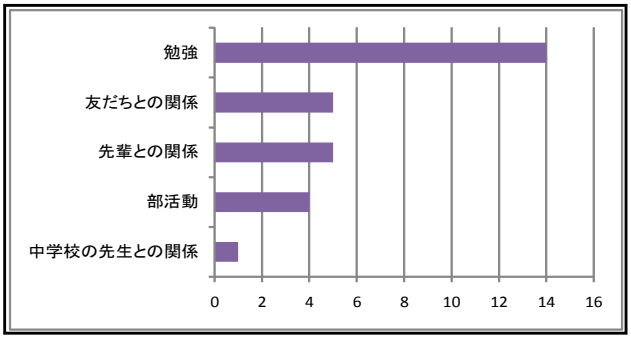
（中学校１年生対象）



グラフを見ると，不安を抱え入学した生徒が研究初年度には７４％いたが，年々その割合が少なくなっていることがわかる。平成２３年度は，新入生の半分が不安を感じているとの結果だったが，「中学へ入学してからそれまで不安に感じていたことはなくなりましたか。」の質問に９割の生徒が解消したと回答している。これまで推進してきた小中連携教育の取り組みの成果を垣間見ることができる。また２３年度の新入生の不安の内容は以下の通りである。

新入生の中学校不安調査　　※数字は人数

～「はい」と回答した生徒の不安の内容～



グラフを見ると，不安を抱えた生徒の多くが学習面への不安であると答えている。解消した理由の主なものは「しっかり授業を聞いている」「家庭学習に力を入れた」「あまり難しくなかった」「先生がわかりやすく教えてくれる」等の回答が見られた。生徒にとって中学校への不安の中心が学習面であることを考慮して，今年度から小中共通の研究主題を設定し実践にあたるなど学習面に関する取り組みに力を入れている。今後さらに改善を図っていきたい。

５　研究のまとめ

〈成　果〉

（１）小中連携教育の推進を通して，教育活動全般の改善が図られ，ねらいとするところの特色ある学校づくりを実現することができた。

（２）研究４年目を迎え，各取り組みを年間計画に位置づけ，見通しをもって実践することができるようになったほか，ＰＤＣＡサイクルを意識した取り組みを通じて研究組織・研究内容等の改善が図られ，あわせて小中学校の職員の創意工夫が生かされた研究を展開することができるようになった。

（３）取り組みを通じて小中学校の職員が学校種をこえて児童・生徒に関わることができる場面が増え，児童・生徒理解を深めることができた。

（４）小中学校の職員による交流授業や研究授業における指導案作成や事前・事後検討会の意見交換を通じて，小学校で行われている主体的な学習の展開や発表の仕方等の学習規律の徹底，あるいは中学校における専門性や計画性及び課題設定の仕方等互いのよさを直に観察し，これらを日常の授業実践に生かすことができるようになった。

（５）研究推進にあたっては，小中学校で行われていた行事・実践等に，小中交流の場面や視点を導入していくことが本研究を支障なく滑らかに進めていく上で有効であることが確認できた。

〈課　題〉

（１）新入生は進学にあたり，主として学習面について不安を抱えている現状から，共通研究主題に基づく日々の実践を積み重ねるほか，引き続き合同の研究授業や交流授業を通して，生徒理解や指導法の工夫・改善を図る必要がある。

（２）これまでの実践を基礎として，より小中連携教育を深化させるためには取り組みの質を一層高める必要があり，そのためには事前の入念な準備が行えるように実施計画の改善を図るとともに，計画性や組織力を高める必要がある。

６　おわりに

平成２０年度から始まった本研究は４年目を迎え，この間さまざまな取り組みを行ってきた。本研究に限らず学校をあげた取り組みは，組織性と計画性が重要であるといえる。組織についてはこれまでも述べたが，管理職を含めて，学校全体の力が集約できる組織づくりを工夫してきた。これまでを振り返ると，研究推進にあたっては，あらためて管理職のイニシアティブが重要な要素といえる。本研究はこれまで「１小２中」という条件や職員間の考えやとらえ方の違い等によりさまざまな障害を迎えたが，そのたびに「この取り組みを契機に学校改善を図る」との姿勢を管理職が明確に示したことで前進につながった。また推進していく上で徐々に取り組みが熟成され，トップダウンからボトムアップに変化してきた。今では，職員一人一人の創意工夫が随所に見られ，教育活動全般の改善につながり，ねらいとするところの「特色ある学校づくり」を実現でき，地域から高い評価をいただいている。何よりも児童生徒が，職員を含めて，互いに笑顔で挨拶を交わすことができるようになった点に成果が表れている。

本研究は，主として，学習面における課題が残されているところから，引き続き連携教育を深める中で学習意欲の向上を図り，同時に確かな学力が定着するよう工夫・改善を図りつつ，来年度の本発表に向けさらに研究を推進したい。

【参考文献】

『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』　文部科学省

『学習指導要領等の改善について』
中央教育審議会　答申

『船橋の教育』－船橋市教育振興ビジョン及び教育振興基本計画－　船橋市教育委員会

【研究論文】

今を生きる中学生の「笑いの力」と「健康」との関係はどのようなものか

－養護教諭の視点から本校生徒の実態を探る－

船橋市立法田中学校　養護教諭　松田和枝

１研究の主題

今を生きる中学生の「笑いの力」と「健康」との関係はどのようなものか

－養護教諭の視点から

本校生徒の実態を探る－

２研究の動機

近年、社会環境や生活様式の急激な変化は、子どもたちの心身の健康に大きな影響を及ぼしている。いじめや不登校、ストレスなどのメンタルヘルスに関する課題やアレルギー疾患の増加、生活習慣の乱れなど現代的な健康課題が挙げられる。そのような中、中教審答申（H 20. 1）から養護教諭の職務として、学校保健計画及び学校安全計画、保健管理、保健教育、健康相談、保健室経営、組織活動の役割が出された（＊1）

子どもたちは現代的健康課題に加え、中学生の時期にほとんどの生徒が二次性徴を迎え、心身ともに急成長し大きく変化していく。また、スキャモンの発育曲線からも、身体の大きさという外観だけでなく、内分泌系統や生殖器系統の変化が著しいことにより、心身の変調をきたしやすいと言われている（＊2)。

本校でも、保健室に来室する理由はただ単にケガや身体不調だけでなく、何となく・友人とのトラブルによる精神的不安定さなど、「心の健康に問題がある」と養護教諭が判断し対応することが多くなっている。

養護教諭が行う中学生での健康相談内容をみると（＊3)、友人関係に関することや性格・行動等の自分自身に関すること、発育・発達・身体に関すること、部活動に関すること、家族の問題に関することが多いとの結果が得られている。

本校の生徒も、病気の訴えの中に約３割前後で悩みやイライラ・怒りがあり、その理由として勉強や友人関係・家庭のことを多く挙げている。

このような状況の中で健康相談を含めた養護活動を充実させるためには、とりわけ生徒とのコミュニケーションを図ることが大切である。そこで、笑いやユーモアを介することにより、コミュニケーションがより一層高まり生徒の健康の保持増進を支援できるのではないかと考え研究を行うことにした。

３研究の目的

中学生の日常生活における笑いが健康にどう関係しているのか、「ヘルスチェックアンケート」「笑いのアンケート」「笑いのワークシート」の結果をもとに実態を分析することで、生徒の健康度を上げるための方策や養護活動を明らかにする。

４研究の仮説

(1) 養護教諭が保健室で行う救急処置や健康相談活動などで、面白く楽しい会話やユーモアから生徒の健康度がいつの間にか上がり、教室で学習ができるようになる、ということをしばしば経験する。そのようなことから、養護教諭自身が作成したアンケートやワークシート、実践から中学生における笑いや健康度の実態を探ることで、健康相談活動を含めた養護活動のアセスメントに役立てることができるであろう。

(2) 生徒が楽しい笑いやユーモアを経験することによってその大切さに気づき、周りとよりよいコミュニケーションが図れるようになり、心身の健康が向上するであろう。

５研究の経過と内容

(1) 研究計画書の内容（＊4）

①テーマ　②キーワード　③研究者　④研究の背景　⑤研究のオリジナリティ　⑥研究の動機　⑦研究の意義　⑧研究の目的　⑨研究の倫理的側面　⑩言葉の定義　⑪研究のデザイン　⑫研究の方法　⑬タイムスケジュールなど

(2) 研究経過

・実態調査１：ヘルスチェック調査（平成 23 年 7 月）
・実態調査２：日常生活における笑いと健康に関する調査（平成 23 年 10 月）
・実態調査３：一日を振り返って笑いと元気度調査（平成 23 年 10 月・7 日間連続）
・実践・評価 1：笑いじゃんけんと笑いの効果（平成 23 年 11 月）

＊調査は本校１学年の１クラスを抽出し、分析を行った。

６研究の成果と考察

(1) ヘルスチェック調査

「A 食事・B ストレス・C 運動・D 生活リズムと体調・E 笑顔や笑い」の 5 つの観点について、それぞれ 5 つの調査項目を設定し調査した。

評価点数は、回答のよいほうから 3･2･1 点とし、A～E の各観点の 1 人の満点が 15 点、全体の満点が 75 点になるよう設定した。

調査対象人数 32 名（男子 16 名、女子 16 名）で有効回答率は 100%であった。

調査後、各自のレーダーチャートに各項目の合計点を表すことで、生徒に自らの健康状態を把握させるとともに健康満足度の実態を探った。また、回答を得点化することで、全体の健康満足度の傾向を見た。結果は、対象者全員の合計点と得点率を表 1 に示した。なお、調査は、船橋市養護教諭会あゆみ（＊5）を参考にした。

① 健康満足度の結果

健康満足度の高い順からストレス→食事→運動・笑顔や笑い→生活リズムと体調だったが、差はあまり見られず、得点率の全体平均は 86.0%と高いものであった。ただし、生活リズムと体調にやや問題が見られた。

中教審答申（H20）において、児童生徒の健康課題の一つにメンタルヘルスに関する問題がある。ヘルスチェックでストレス項目の点数が低いと予想していたが、違う結果が表れた。

② 浮き彫りになった健康課題

A～D の項目別得点率と「よくある」「ときどき」の答えから 6 つの問題点が明らかになった。それは、「物事に集中できずイライラ、怒り、腹が立つことがある」「身体がだるいと感じる」「授業中（朝から）眠くなる」「食べ物の好き嫌いをする」「スナック菓子をよく食べる」「体力に自信がない」であった。

別の調査で、生徒自身がこれから気をつける事として挙げたのは、男女ともに食べ物の好き嫌いをなくす・スナック菓子を食べないなどの食生活と夜更かしをしないなどの生活リズムの見直しや改善がほとんどだった。

平成 17 年度に実施した本校でのヘルスチェック調査でも、問題点は食べ物の好き嫌い・スナック菓子、物事に集中できずイライラする、体力に自信がないで、健康課題は変化が見られない。

③ 笑いの実態

E の笑顔や笑い調査から全体的に 7 割と多くの生徒がよく笑っている様子が見られ、男子より女子の方がよく笑っていることが分かった。

「嫌なことがあっても笑い飛ばす」で「よくある」と答えた者は全体の 34.4%少ない。また、別の調査で質問した「楽しい笑いは自分やまわりが心や身体が生き生きして元気になると思いますか」では、男女とも 88.0%が「そう思う」と答えていた。

表１　ヘルスチェック「A 食事・B ストレス・C 運動・D 生活リズムと体調・E 笑顔や笑い」の調査結果　（n=32）

観点	項目	よくある	ときどきある	ほとんどない	項目別得点率	合計得点 / 得点率
A	１日３食きちんと食べない	0	10	81	95.0%	
	食欲がなく食事がまずい	0	14	75	92.0%	417
	食べ物の好き嫌いをする	**6**	**26**	39	73.0%	87.0%
	スナック菓子をよく食べる	**3**	**34**	36	76.0%	
	ダイエットを時々する	1	2	90	97.0%	
B	学校が楽しくないと思う	0	14	75	92.0%	
	朝学校へ行きたくないと思う	2	14	69	89.0%	426
	人と一緒にいるのが嫌になる	0	6	87	97.0%	89.0%
	物事に集中できずイライラ、怒り、腹が立つことがある	**2**	**26**	51	82.0%	
	悩みや心配、不安がある	3	20	57	83.0%	
C	体力に自信がない	**2**	**46**	21	72.0%	
	運動や部活動が楽しくない	0	10	81	95.0%	414
	進んで運動をしない	1	14	72	91.0%	86.0%
	体を動かすのが面倒に思う	0	20	66	86.0%	
	運動をするとすぐに疲れる	2	22	57	84.0%	
D	睡眠時間が７時間未満である	8	10	57	78.0%	
	何となく夜更かし（12 時過ぎ）	1	20	63	88.0%	394
	身体がだるいと感じる	**3**	**30**	42	78.0%	82.0%
	授業中（朝から）、眠くなる	**6**	**24**	42	75.0%	
	便秘や下痢をする	1	12	75	92.0%	
E	いつも笑顔でニコニコ	72	14	1	91.0%	
	友だちとの会話等でよく笑う	75	14	0	93.0%	414
	家族の会話等でよく笑う	54	26	1	84.0%	86.0%
	笑うことが楽しい	72	14	1	91.0%	
	嫌なことがあっても笑い飛ばす	**33**	32	5	73.0%	

＊A,B,C,D（よくある１点・ときどきある２点・ほとんどない３点）
＊E（よくある３点・ときどきある２点・ほとんどない１点）
＊１項目満点（96 点）　＊観点別満点（480 点）

本調査で、生徒自身がレーダーチャートに結果を表したことで、その中から健康生活の問題点や自己の様子を見つめ、発見・見直しのきっかけになった。

(2) 日常生活における笑いと健康に関する調査

「日常生活における笑いと健康」に関する 11 項目を調査した。調査対象人数32名(男子16名、女子 16 名) で有効回答率は 100%であった。

以下に特徴的な内容を示す。

① 男子の笑いと女子の笑い

日常生活での笑いの男女別の状況をアンケートで調査した。その結果、笑いの頻度や笑い方などから全体的によく笑っていること、更に女子が男子に比べよく笑っていることがわかった。

1 日の笑いの回数、笑い方 (図 2)、笑いの反応をみると、女子の方が素早い反応で、声を出し多く笑っている。ほとんどの者は笑うことを好んでいるが、約1割に笑いをあまり好まない者もおり、男子にその傾向が強かった。

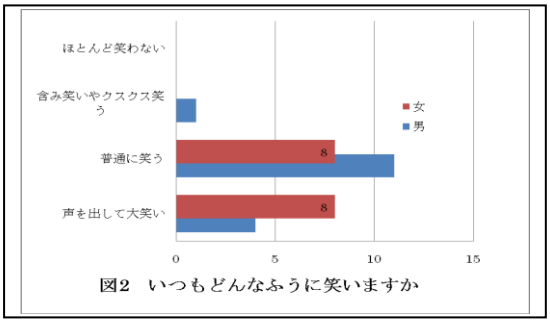


図2 いつもどんなふうに笑いますか

② 新たな笑いのコミュニケーションスタイル

誰とよく笑っているかでは、図 3 (複数回答) の通り男女とも 94.0%と圧倒的に友だちと多く、次に部活の仲間や先輩 (男子が多い)、家族 (女子が多い) となった。また、一人でいるときと答えている者が 13.0%おり、一人笑い (個、弧) というところが気になるところである。

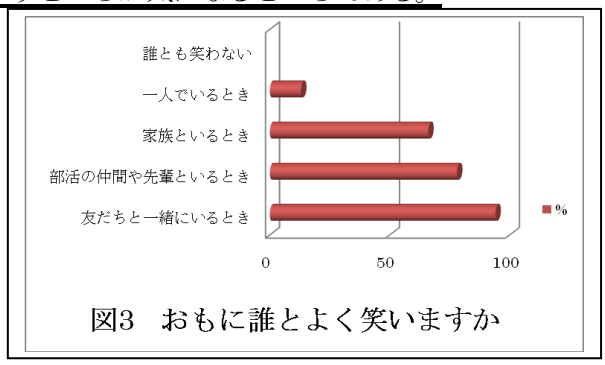


図3 おもに誰とよく笑いますか

どんなことでよく笑っているかでは、図 4 (図 2 複数回答) の通り男女とともに友だちや家族の会話やしぐさが 94.0%と最も多く、周りの人との繋がりやコミュニケーションが取られていることが読み取れる。次いでテレビを見ていてが 81.0%となっている。そして、新たな傾向として PC や携帯、スマートフォンでのメールが 28.0% (女子にやや多い)、ゲームをしていてが 16.0% と、最近の子どもの笑いが携帯・PC 等のメディアツールを介したものへと変化していることがわかった。

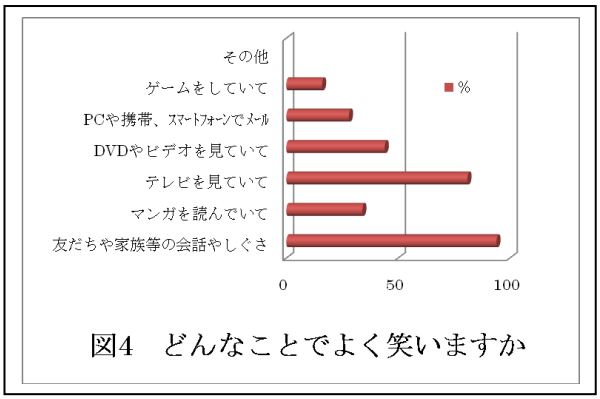


図4 どんなことでよく笑いますか

③ 隠れていた笑いと心身の関係

笑った後に体や頭がスッキリしたり元気になることが多いかどうかでは、図 5 の通り、「多い」と「普通」を合わせると 96.0%になった。

その他の調査で、笑う側面だけでなく「自分で自分を追い詰めたことがあるか」「笑ったけれど、何となく悲しいことがあるか」という悲しみの感情面についても質問した。

具体的な事柄をカテゴリー別に集約分析したところ、友だち関係、部活や勉強、忙しさ、自尊感情の低さなどから自分自身を追い詰めている傾向があることがわかった。笑っていても周りの空気に合わせている、友だちの言動にイライラしながら自分の気持ちを抑えているなどから、悲しみがおき周りに気を遣う様子が垣間見えた。

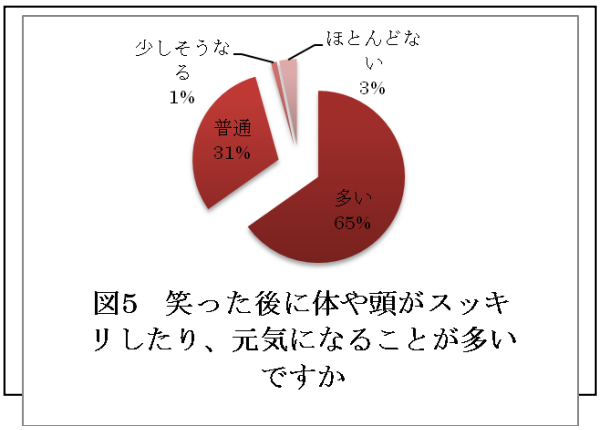


図5 笑った後に体や頭がスッキリしたり、元気になることが多いですか

友だちや仲間・家族との親密度や関係性、コミュニケーションがどのように図られているかでは、友だちとの繋がりを特に重要視している様子が窺えた。本調査における結果から、中学生は心身の発達段階の差が著しく思春期特有の多感期であることも影響し、いろいろな場面や些細なエピソードにおいて笑いを敏感に感じ取り多くの反応を示していると推測できる。

(3)「一日を振り返って笑いと元気度」に関する7日間連続の調査

「一日を振り返って笑いと元気度」に関する調査をワークシート記入形式で 7 日間連続行った。調査対象人数 31 名（男子 16 名、女子 15 名）で有効回答率は 100%であった。
シートは資料１、結果は表２、図 6･7 の通りである。
＊笑顔のイラストはあゆみ第 36 号を引用（＊6)。

① 7 日間の笑い傾向

「1 日の笑いの回数」は、0（ゼロ）「ない」・A「1～3 回」・B「4～6 回」・C「7～9 回」・D「10 回以上」の 5 つの中から選択させた。

7 日間の結果は図 6 の通り D の 10 回以上が 115 と一番多く、C>B>A >0 と笑いの回数が少なくなるほど減少していた。中には 7 日間で 1～2 日しか笑っていない者も見受けられた。男女別の状況としては、男子は 10 回以上の笑いが延べ 44 あるのに対して、女子は延べ 77 と女子のほうが多く笑っていた。

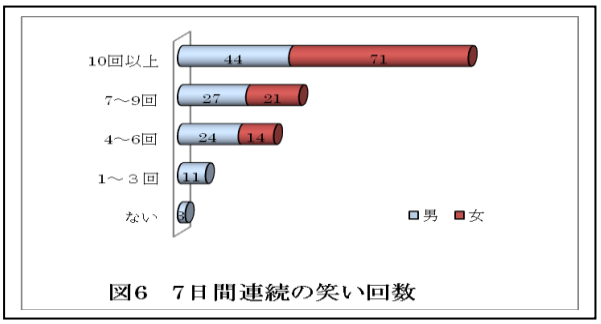


図6　7日間連続の笑い回数

② 朝・寝る前の笑いや笑顔の変化

「朝、鏡に向かって笑いや笑顔で 1 日のスタートができた」と「寝る前、笑いや笑顔で 1 日のフィニッシュができた」は笑う・ニコリ・しょんぼり顔の表情イラストから 1 つを選択させた。

結果は朝も寝る前も女子が「笑い」のイラストに、男子は真ん中の「ニコリ」のイラストに印を多くつけていた。ただ、男子は朝の笑いは 21.0%であったが、寝る前の笑いは 36.0%に上がっていた。

≪資料１≫

③ スケール度エリアで見る 10 代のパワー

「元気度スケール」を評価するために、1 日の様子をスケールに合わせ黒丸で表記させた。

評価は－10～＋10 とし、0 を基準で 5 ポイントずつ区切り 5 グループに振り分けた。
ただし、黒丸●がポイント上にない場合はでその位置により点数を判断した。

全体の結果は図 7 のように、1～10 のエリアが約 6 割、マイナスのエリアが約 3 割だった。個人を見ると 7 日連続 6～10 では笑いの回数等も多かった。－6～－10 は 1 割未満と少ないが、そのほとんどが女子だった。

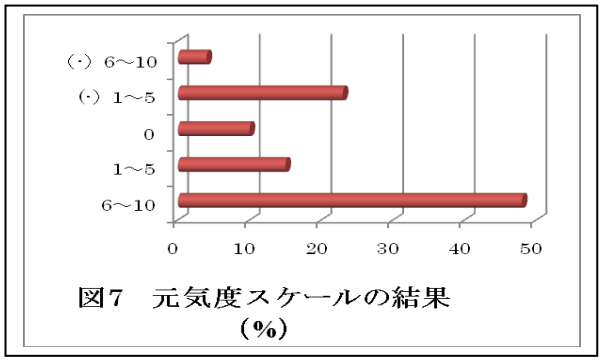


図7　元気度スケールの結果（%）

④ スケール度のエリアコメント

コメントをポジティブ傾向とネガティブ傾向に分け、スケールエリア毎に集約したところ、表 2 のようになった。
＊スケール 10 は言葉の数とポジティブなものが多かったので、別にした。

＜表２＞

スケール	言葉の傾向		
	ポジティブ傾向	ネガティブ傾向	主な言葉
10	18	0	・笑って過ごせた・元気・楽しくすごせた等
6～9	8	6	・元気・あまり笑えなかった・疲れた・頭痛・腹痛
1～5	11	5	・のどの痛み等
0	6	2	・普通・寝不足・だるい等
－1～5	1	12	・だるい・悪心・頭痛・腹痛・疲労　・体調不良　・腰や足の痛み　・イライラ等
－6～10	0	6	

「－1～－10」では心身不調に関する言葉がほとんどであった。スケール度が 9 から下がるほど心身不調のネガティブな言葉が多く現れるようになった。全体的に元気度は高いが心身で感じている健康状態とは一致しなかった。

(4)　実践・評価「顔じゃんけんと笑いの効果」

笑いのワーク「顔じゃんけん」と笑いの効果についての検証を行った。
実践対象人数 31 名（男子 16 名、女子 15 名）でワークシートの有効回答率は 100%であった。

・指導者：本研究者
・実践内容

① ワーク：みんなで「顔じゃんけん」、心も身体もワハハ！（顔じゃんけんシート資料 2）
② 評価：顔じゃんけん前後のワークシート
③ 笑いの効果説明「笑いが健康に与える効果について（＊7）」

・笑って難病（膠原病）を克服「ノーマン・カズンズの事例（1915 年～1990 年）」
・笑ってストレス低下：NK細胞の活性化
・脳の活性化：脳の血流がよくなる「α波（リラックス）β波（考え事・緊張）」
・笑って遺伝子のスイッチON　「プラス思考で能力アップ」

評価は顔じゃんけん実施前後のワークシートの自己評価による前後比較と感想文のカテゴリー別集約分析により行った。

① 顔じゃんけんとは

顔じゃんけんは男女別に分かれ、2 人で 1 チームを作り 2 回戦制で男子から始めた。資料 2 の様にルールはスタートを「パー」から行い、「最初はパー、じゃんけん○○、あいこで○○･･･」と言いながら相手の顔を見てしっかり顔を作り勝負する、グー、チョキ、パーがよく分からない表情は負け、とした。オーバーに表情をつくることが顔じゃんけんのコツであることを説明すると共に、開始前と終了後にレベルをシートに記入させた。

＜資料 2＞

② 顔じゃんけんでの変容

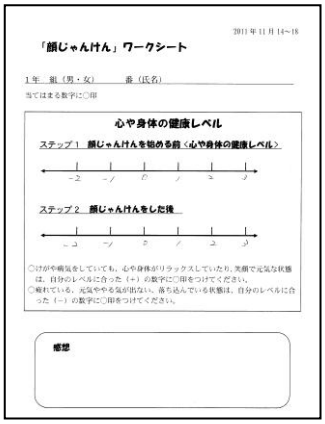
健康レベルは 0 を基点に - 2～3 までとし、該当数値に丸印をつけさせ、合計点を算出して比較した。

結果は図 8 に示す通り、実施前は男子がやや高かったが、実施後は女子の方が高くなった。

個人でどのような増減があったかをみたところ、7 割の者のポイントが増えていた。変化のなかった者は 2 割、逆にポイントが下がった者は 1 割となった。

レベルに変化はないが、感想で資料 4 の様に「笑って楽しい気持ちになれた、面白かった、楽しかった等」、と概ね 9 割の生徒がプラスの感想を書いている。一方、下がった生徒の感想によると「つまんなかった、やる気になれなかった・最初は楽しそうと思ったけれど、やってみたら意外にそうでもなかった。表情をつくるのは難しかった」などがあった。

＜資料 3＞



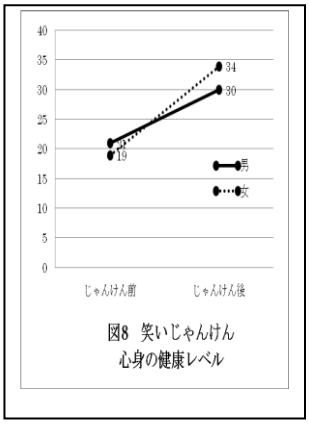


図8　笑いじゃんけん
心身の健康レベル

資料 4（感想の一部）

・相手の顔を見て笑ってしまった。面白かった。
・疲れたが、楽しかった。
・とても面白かった。笑いすぎて疲れた。楽しかった。
・楽しくてとても良かった。顔の筋肉も鍛えられるから良かった。じゃんけんで笑ったのは初めてかもしれない。
・こんな簡単なことで心がウキウキしていた。はずかしかったけれど楽しいのでやみつきになった。今度ももう一度やってみたいと思った。心が軽くなった。
・顔じゃんけんをしたら、楽しくなりました。顔を動かしたので疲れた。

生徒の感想や実施前後の心身の健康レベルの変化からも、心身の健康状態が向上したことが確認できた。顔じゃんけんは、楽しく、誰でもどこでもできるという手軽さがあり、顔のストッレチを兼ね筋肉もほぐれるという効果も期待できる。また、コミュニケーションも図ることができ、実践は効果的だったと思われる。

7研究のまとめ

(1) ヘルスチェックシートで笑いや笑顔を含めた健康生活満足度を見た結果、ほとんどの生徒は健康満足度が高く健康的であった。しかし、生活習慣・心の健康・体力面では問題が明らかになった。健康寿命(＊8)を考える上でも、今のうちからQOL（生活の質）の向上が求められる。チェックは健康生活の仕方や改善・見直しのきっかけになったことは、記入されたデータから確認することができた。

＊8（健康寿命：寝たきりにならないで、一人でほぼ自立できる寿命。WHOの提唱。）

(2) 笑いや笑顔の表出は、置かれている環境や個人の特性・条件などから特徴や違いが出る。調査結果から次のようなことが言える。

① 全体的に多くの生徒がよく笑う。笑いの頻度や声の出し方、反応で男女に違いがあったが、男女ともに多くの生徒が笑いで元気になっている。

② 笑い合える友だちとのつながりを重要視しており、お互いに影響しあっている。子どもが笑えるかどうかは、友だちがいるかどうか、友だちや親などが自分を認めてくれるかどうか、支えてくれる人がいるかどうか、というところで大きく左右される。（＊9）。一人笑い（個、弧）があり、注意する必要がある。

③ 新たな笑いのコミュニケーションスタイルとしてPCや携帯、スマートフォンでのメールといったメディアツールを介したものがあることが確認できた。

④ 嫌なことがあっても笑い飛ばす者が少ない。このことで井上（＊10）は、笑って事態が良くなるのではないが、落ち込んでいる自分を笑いの力で変えられ、新しいエネルギーが出て心にゆとりができる、としている。子どもは友人関係や勉強などから、イライラしたり悩んだりと心の問題をよく出現させるが、心のケアのためにも思い切って笑い飛ばす元気が大切であると考える。

⑤ 笑いの力と健康力の関係は、笑った後に9割近くが体や頭がスッキリして元気になると答えている。また、笑いじゃんけんの実践後の感想からも楽しかった・面白かった・心が軽くなったなど、楽しくコミュニケーションを取り合い笑うことで心身に活力が生み出されることがわかった。

⑥ 笑いは単に可笑しい、面白いことだけでなく、悲しみや怒りと言ったさまざまな感情でも起きていた。自分で自分を追い詰めたとき、笑ったけれど何となく悲しい出来事のとき、周りの空気に無理に合わせたとき、友だちの言動にイライラしながら自分の気持ちを抑えているときなどに見受けられた。特に女子では周りに気を遣っている傾向が顕著だった。瀬沼（＊9）は、楽しいを重視している若い世代で自分をキャラ化し自他の傷つきを恐れているのではないかと指摘している。

・紙面の都合上、結果の一部を割愛した。

・結果は今後、調査対象の生徒に直接知らせるとともに、アンケートやワークシート等をポートフォリオで活用する予定である。

8研究の課題

(1) 養護教諭の職務（H 20. 1　中教審答申）、健康相談については、特に、コミュニケーションをいかに取るかが鍵となる。生徒とのコミュニケーションを充実させるために、笑いやユーモアの活用法を更に探求する必要がある。

(2) 笑いは年齢層が上がるほど減少するといわれている。今回は、1年生を対象に調査･研究を行った。発達段階に応じた対応が必要となるので、2･3年生の実態も調査する必要がある。

(3) 笑いの力と健康との関係は、養護教諭の健康相談だけでなく、学級経営・教科指導・生徒指導を担当する者にとっても理解しておくことが大切である。今回の調査・研究の内容を学校全体にいかに啓発していくかが課題である。

【参考文献】

＊1 保健室経営計画作成の手引き第〈3版〉：財団法人　日本学校保健会　P7

＊2 養護教諭の行う健康相談活動〈第3版〉：東山書房　P51

＊3 健康相談活動における課題と対応-実態調査を通して(平成21年：千葉県養護教諭会 P37

＊4 夏季研修会記録（平成16年）：千葉県養護教諭会　P12～13

＊5 平成14・18年度「あゆみ」第32・36号号：船橋市養護教諭会

＊7 大阪発笑いのススメ（平成18年）：大阪府　P10、14、18～19、23

＊8 伊藤一輔（平成21年）よく笑う人はなぜ健康なのか：日経ﾌﾟﾚﾐｱﾑｼﾘｰｽﾞ P16

＊9 松田和枝（平成21年）4月から各学年100名の計300名を保健室の来室記録より調査

＊10 井上宏（平成22年）笑いの力：関西大学出版部　P158、163

＊11 笑いの世紀（平成21年）：創元社 P338～348

【実践記録】

体力づくり環境劣悪の中での体育指導

― 環境改善を工夫した実践記録 ―

船橋市立葛飾小学校　教諭　石澤　広大

1　はじめに

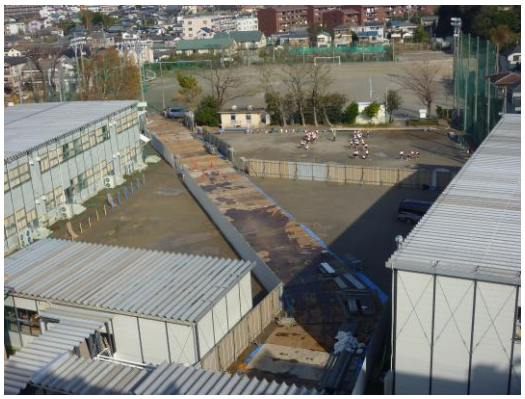
本校は、全校児童 1472 名（平成 23 年 12 月 5 日現在）という日本一児童数の多い学校です。また、校舎の耐震工事と校舎建て替え工事が行われるために、教室が不足し校庭にプレハブ校舎が建設されました。その影響で校庭の面積が大きく減っているという現状です。

また、今年度から完全実施となった新学習指導要領では体育は低学年が 120 時間、中学年以上は 90 時間という授業時間のために、低学年は週 3 時間、中学年以上は週 2.5 時間になりました。本校では、学級数も 45 学級と多いために体育館体育は 2 クラス、グラウンド体育は 3～4 クラスで使用するという状況にあります。

体育の時間以外に外で体を動かすことのできる機会の業間休みと昼休みがあります。しかし、安全面の理由から「曜日によって校庭に出ることのできる学年を低・中・高に分ける」「ボールを使うことは禁止」「走ることは禁止」と生徒指導部会で決まったために児童が身体を動かすことのできる環境は極めて厳しい現状であると言えます。

今回は、児童の体力向上のために、現在の本校の厳しい環境では環境の改善や行い方の工夫が大切になると考えたため試みた実践の記録です。

小学校校庭



2　実践の目的

現在の葛飾小学校の実態の中で、できることを考え実行し、環境の整備や指導時間の工夫・改善を図り、児童の体力向上を目指していきたいと考えました。

3　実践の記録

（1）正課時体育の充実

①題材について

「学習カードの共有」

「体育科年間計画の工夫」

「評価規準の整理」

「学習資料の充実　鉄棒　跳び箱　マット」

体育部で、「体育学習カードファイル」を作成しました。昨年度までは、各学級担任が単元に応じてそれぞれが学習カードを作成して使用していました。しかし、昨年度その都度作成するのは大変だとの声がありました。そこで、学校で共通のファイルを作成し、学年別にファイリングしました。そこで、学級担任がいつでも自由に取り出して使用できるようにしました。

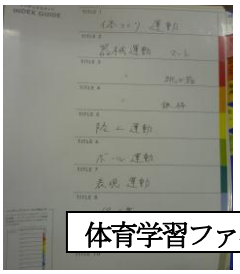
鉄棒　掲示資料①

鉄棒　掲示資料②

跳び箱　掲示資料

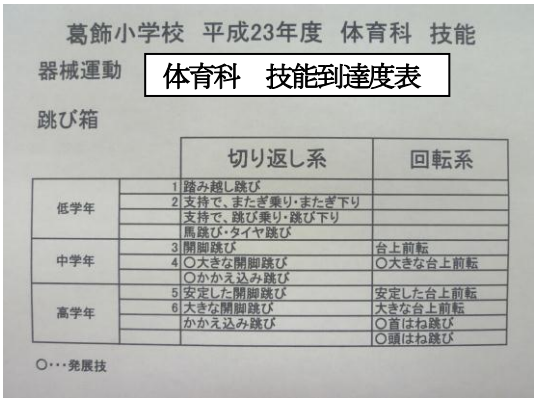
マット　掲示資料

体育科の年間計画を、葛飾中学校のグラウンドが使える時期にボール運動（広い場所が必要な単元）を設定しました。



体育学習ファイル（種目別）

体育の各単元に対して、学習指導要領に沿って技能の到達度を表にまとめました。各学年で「この運動では、ここまでできるようになってほしい」とわかりやすくまとめたものを職員に配布しました。



葛飾小学校　平成23年度　体育科　技能

器械運動

体育科　技能到達度表

跳び箱

		切り返し系	回転系
低学年	1	踏み越し跳び	
	2	支持で、またぎ乗り・またぎ下り	
		支持で、跳び乗り・跳び下り	
		馬跳び・タイヤ跳び	
中学年	3	開脚跳び	台上前転
	4	○大きな開脚跳び	○大きな台上前転
		○かかえ込み跳び	
高学年	5	安定した開脚跳び	安定した台上前転
	6	大きな開脚跳び	大きな台上前転
		かかえ込み跳び	○首はね跳び
			○頭はね跳び

○…発展技

学習の資料として、「鉄棒」「マット運動」「跳び箱」の技の連続写真と技能ポイントをまとめたものを大きく印刷しました。それらを掲示資料として、校庭の鉄棒のわきと体育館の壁に掲示しました。授業中は、それぞれの技の習得のために資料として活用され、鉄棒の学習掲示板は授業中だけではなく、休み時間では鉄棒で遊ぶ児童の姿がよく見られました。

②児童の行動・反応・変化

学習カードを「いつでも誰でも取り出せるファイル」にまとめたことで、体育授業での学習カード使用率が大きく向上しました。学習カードを使用することによって授業中だけでは難しい、児童一人ひとりの振り返りを、担任がしっかり評価できるという効果がありました。

また、学習資料掲示版を作成したことによって、児童に対してそれぞれの技を視覚的に、イメージすることができました。その結果、運動能力が高い児童は休み時間に難しい技を知ることができ、挑戦する姿が見られました。また、鉄棒が苦手な児童も視覚的に技をイメージすることができ、練習に取り組みました。

（2）遊・友スポーツランキング千葉への参加

①題材について

千葉県教育委員会が主催している運動に参加しました。ねらいは「児童の体力向上を図るために、授業や業間・昼休みの時間に児童が取り組める運動種目を紹介し、積極的に外遊びや運動する機会を奨励する」と「仲間と楽しく集団で協力し合いながら運動に取り組むことにより、記録（ランキング）を公表することにより、活動の意欲化と継続性を図る」ことがあげられます。

②児童の行動・反応・変化

楽しく無理のない種目ばかりなので、とても意欲的に取り組む児童の姿をみることができました。また、記録を更新しようと、体育の授業のみならず、休み時間にも積極的に練習に取り組もうとする学級も見られました。

（3）朝体育の導入

一年間を通じて運動する機会を設けるために、二学年ずつペアを組み実施しました。

①題材について

朝モジュールとして、

月	火	水	木	金
×	3，5年	1，6年	2，4年	予備日

8:10～8:15　健康観察・朝の会
8:15～8:20　移動
8:20～8:35　体育（15分間）
8:35～　移動
8:45～　1時間目開始

以上のように、週一回の朝体育を今年度より実施しました。葛飾中学校の校庭が空いている「部活動の朝練習の終了時間～1時間目の開始まで」の隙間の時間を有効活用するために行いました。15分という限られた時間なので、種目も体育部から提案し、「遊・友スポーツランキング千葉」の種目を実施しました。

今月の運動

５月	長縄８の字連続跳び
６月	長縄８の字連続跳び
７月	連続馬跳び
９月	連続馬跳び
１０月	持久走
１１月	持久走
１２月	ボールパスラリー　５ｍ
１月	ボールパスラリー　５ｍ
２月	みんなで短縄跳び
３月	みんなで短縄跳び

②児童の行動・反応・変化

毎週の決まった曜日に、朝運動があることを楽しみにしている児童が増えまし

た。また、短時間で取り組めるので集中して取り組むことができました。また、教室から移動の際に整列をきちんと行う事や、列を乱さずに歩行することなどの「集団行動」を意識して移動することもできました。

児童はそれぞれの種目に、意欲的に取り組み記録が伸びることによって「できた」という成功体験を得ることができました。

朝運動の様子
（長縄８の字連続跳び）

（4）体力強化月間の設定

①題材について

・マラソンカード

・マラソン大会

10月25日～11月22日までの約１ヶ月間を「体力強化月間」として設定しました。朝の葛飾中学校の校庭を使用して、低学年が５分、中学年が７分、高学年が１０分の時間走を行いました。児童は「１０分で３００ｍを１１週走る」というような目標を立て練習に取り組みました。また、健康観察カードを使用し、保護者に児童の健康管理を行ってもらい、寒い時期に走るということで安全にも配慮しました。

児童の意欲を高めるために、葛飾中学校１周（約300m）を走るごとに１つ色を塗れる３種類のマラソンカードを用意しました。

マラソンカード
①ちーばくん
②世界の国旗
③たんけん

また、体力強化月間のまとめとして、11月22日に中山競馬場のけやき公苑でマラソン大会を行いました。平成21年度までは葛飾中学校・小学校内で行っていましたが、昨年度より、耐震工事によりこれまでの走路が使えないことなどの理由から場所を変更して行っています。中山競馬場に隣接するけやき公苑は、本校からは徒歩で30分ほどかかる場所にあり、児童の移動は大変です。しかし、直線が長く走りやすいことや、けやきの木が多く景観が素晴らしく走ってとても気持ちがよいこと、スタートとゴールの位置がわかりやすいことなどの理由から、けやき公苑での実施にすることにしました。

低学年は約800m、中学年は約1200m、高学年は約1500mの距離を設定し実施しました。

けやき公苑でのマラソン大会の様子

②児童の行動・反応・変化

多くの児童が意欲的に取り組みました。児童からは、「マラソンカードに色をたくさん塗りたい。」「マラソン大会でいい順位になりたいから頑張る。」と言った声を聞くことができました。現在、担任をしている５年１組でも33人中23人がマラソン練習皆勤賞でした。

実際に、2年間マラソン大会をけやき公苑で行ってみて児童からは「１５００ｍ走のタイムがあがった。」「たくさん走ったので、息が苦しくなくなった。」などの意見が出ました。また、保護者からも「観戦・応援がしやすくてとてもよい。」といった肯定的な声が多く、けやき公苑での実施はとても充実したものになりました。

（5）遊びの紹介

①題材について

・めんこ

・体力向上プログラム

児童の体力向上において体育の授業ももちろん大切ですが、そのことよりも日常の遊びの中で「身体を動かす」ことが大切だと考えています。そこで、大事になってくるのが業間休みや昼休みに外に出て身体を動かし遊ぶことです。そして、小学生の発達段階を

考えた時に、学級担任の影響はとても大きいと思います。担任が児童と一緒に外に出て遊ぶことが一番の「児童が外に出て元気に遊ぶ」きっかけになると考え、毎日外に出て一緒に遊びました。学校の全学級担任が休み時間に外に出て、児童と一緒に遊ぶことが理想ですが、なかなかそうはいかないのが現状です。

そこで、「体力向上プログラム～楽しく！無理なく！継続的に！」という冊子を作成し、全職員に配布しました。内容は、運動を遊び感覚でできるゲーム的な内容や挑戦意欲がわくような内容を紹介されているものです。

高めたい体力

力を強くする 例：ひっぱりっこ　腕相撲、足相撲
身体をやわらかくする 例：ジャンケン負け開脚
素早く動ける 例：あんたがたどこさ　帽子とり
長く続けて運動できる 例：ものまね走り　鬼ごっこ
速く走れる 例：ケンケンパ　猫とネズミ
高く・遠くにとべる 例：馬跳び競争　ゴム跳び
遠くまでコントロール良く投げられる 例：めんこ遊び　らっかさん投げ

上記のように、高めたい体力別に遊びが紹介されています。また、休み時間にできるもの、家でできるもの、一人でできるもの、友達とできるものなどの項目ごとに種目があります。これらを、体育の授業の補助運動だけでなく、児童の休み時間の遊びの種目として紹介しました。

めんこ

そして、工事の関係で校庭に出られる時間が限られ室内遊びの時間が多くなった時にできる遊びのような運動がないか考えました。そこで、本校の児童のスポーツテストの結果からも「投力」の数値が低いとわかっていたこともあり【めんこ遊び】を取り入れました。

めんこ遊びは、めんこを地面に思いっきりたたきつけるので楽しみながら、投力を鍛えるには最適です。そこで、1クラスに27枚ずつ配布し、休み時間に遊べる環境を作りました。

②児童の行動・反応・変化

児童達は、遊び感覚で取り組める運動に楽しんで取り組んでいました。また、高めたい体力別に運動を紹介しているので、特に高学年に児童はスポーツテストの結果に応じて、自分の足りないところを補う運動を選択して行うことができました。

めんこ遊びの紹介は、こちらの予想以上に意欲的に取り組む児童が多く、各クラスでめんこの奪い合いになるといったこともありました。また、クラスによっては自分たちでオリジナルメンコを作成して取り組むようにもなりました。床に置いてあるメンコを、ひっくり返すには真下に叩きつけなければいけません。そこで、肘を高く上げしっかり腕を振ってなげるフォームが身についた児童が多くいました。

学級でめんこ投げをする様子

（6）縄跳び強化月間の設定

①題材について

・なわとび大会

年間指導計画で、1月～2月に縄跳び運動を設定しました。縄跳び運動の学習は、比較的狭い空間での展開が可能です。本校は12月より新校舎建設のために、校庭の使用面積が約3分の1になったこともあり、本校の体育環境では必須の単元でした。

また、児童の意欲向上のために「遊・友ランキング千葉」の“長縄8の字連続跳び”と“みんなで短縄跳び”に参加し、記録を伸ばす喜びを味わえるようにしました。また、学年ごとに学習カードを用意し、短縄跳びに一生懸命に取り組めるようにしました。

長縄跳びは、2月下旬に運動のまとめとして、学年ごとに「長縄跳び大会」を行う計画を立てています。

（7）葛飾中学校との連携

①題材について

本校の隣に隣接する葛飾中学校と両校の児童生徒の運動量確保のために、連携を図りました。平成20年度までは、マラソン大会の時のみ借りていました。平成21年度からは、プレハブ校舎の建設のために、5月の運動会と運動会練習の際に借りました。

平成22年度からは、プレハブ校舎建設で更に小学校校庭が狭くなったために、体育授業の児童の運動力確保と「低・中学年ゲーム高学年ボール運動」の実施が困難になりました。そこで、新年度が始まる前に葛飾中学校と体育の年間計画を互いに作成・協議し「5月の運動会の時期」と「9月中旬（中学校の体育祭終了後）～11月下旬」「朝（中学部活動朝練終了時刻～1校時開始時刻）」に葛飾中学校校庭を使用できるようにしました。

小学校の体育科年間計画では、中学校の校庭が使用できる時期に、「低・中学年ゲーム」「高学年ボール運動」を配当しました。また、その時期は業間休みも中学校の校庭で思い切り遊ぶことができました。反対に中学校の陸上部の走り幅跳びの練習に小学校の砂場を貸したり、中学校の体育館が耐震工事で使用できなかった平成22年度の夏季休業中には小学校の体育館を貸したりしました。

中学校の校庭で活動中

②児童の行動・反応・変化

児童は、広い校庭でのびのびと体育授業に取り組みました。5学年の、ボール運動では「ゴール型【サッカー】」「ベースボール型【ティーボール】」を実施しました。どの種目も、狭い校庭では実施が難しいものです。本校は、学級数が多いことから4クラスで外体育の実施になっています。そのため広い葛飾中学校で体育授業が行えることは児童にとても好評でした。葛飾中学校での体育を行った児童は「広いから、サッカーのコートが広くて嬉しい。」「他の子とぶつかる心配が減った。」「ずっと中学校の校庭が使えたらいいのに・・。」と言った感想を持っていました。

（8）市民陸上・駅伝への取り組み

①題材について

児童の体力向上の一環として、積極的に校外行事に取り組みました。校外行事とは、春季市民陸上・秋季市民陸上・駅伝大会です。本校では、運動技能が高い児童が大会に出るだけではなく、練習に参加したいという希望がある児童も一緒に練習を行ってきました。運動に対して意欲のある児童の「心の強さ（礼儀・挨拶・感謝の心）」「体力」・「運動技術」を鍛えることによって、その児童が学級に戻ったときに、体育授業で学級のリーダーとして活躍してほしいという願いも込めて取り組んできました。

春・秋季市民陸上大会に向けては、種目ごとに全校職員で担当を決めて指導にあたりました。春は22年度の3月14日～4月30日の朝と、昼（春休み中は午前中練習）に練習を行ってきました。秋季に向けた練習は、7月25日～9月24日までの約2ヶ月間行ってきました。夏休み中は午前中に、9月以降は春と同様に朝と昼に練習を行いました。夏休みには、工事が本格的に始まっていたので小学校の校庭がほとんど使用できない状況でした。そこで、葛飾中学校の陸上部から協力をいただき、中学校の校庭で短距離種目の練習を行いました。また、800mの練習は行田公園の周回コースで行いました。

駅伝大会には、12月8日から練習を行っています。これも、葛飾中学校の坂道を走ったり、小学校の体育館で走ったりしました。毎週金曜日の放課後には、行田公園や運動公園の周回コースで練習を行いました。

秋季市民陸上　種目別　入賞

5年男子　800m	優勝
5年男子　走り幅跳び	2位
6年男子　100m	3位
6年男子　走り幅跳び	2位
共通男子 60mハードル	5位
5年男子　4×100mリレー	2位
共通男子　4×100mリレー	2位
5年女子　800m	7位
5年女子　走り幅跳び	2位
6年女子　走り幅跳び	2位
共通女子　60mハードル	2位
共通女子　走り高跳び	優勝
5年女子　4×100m　リレー	8位
共通女子　4×100m　リレー	4位

②児童の行動・反応・変化

陸上運動に意欲が高い児童が多く、とても充実した取り組みになりました。5、6年で毎回100名程度の参加がありました。そして、結果として多くの種目で入賞することができました。このような結果が残せたのは、大規模校のために児童の存在が多いからという理由だけではなく、陸上に対してとても意欲の高い児童と、練習環境が悪いながらに、工夫して指導した職員の努力があったからだと思います。

大会に出て結果が出た児童だけではなく校外行事（市民陸上・駅伝）の練習した児童は、練習を頑張った自分に自信を持てるようになりました。そのことで、体育の授業にも意欲的に取り組むようになりました。

４　実践の成果と課題

（1）実践の成果

①正課時体育の充実

学習カードを使用する学級が増加することで、児童のめあてやできばえを教師がしっかり把握することができるようになりました。「指導と評価の一体化」につながり、充実した授業を展開することができました。また、学習掲示板を使ったことで、器械運動において児童が視覚的に技をイメージすることができたので、以前よりも技の習得率が上がりました。

②小中連携の強化

昨年度よりも、葛飾中学校と連絡を取り合う回数が大幅に増えました。これまでは、年度の初めに中学の校庭を使える時期の確認を行うだけでした。しかし、今年度は児童達に「1時間でも多く広い葛飾中学校の校庭で体育をしてほしい」「週に1日でもいいから広い校庭で思いっきり遊べる環境をつくってあげたい」という願いがありました。その理由から、毎週「次週で中学校を使えるのはいつか？」と連絡を取り合うようになりました。その結果、中学校側にも小学校の実態をわかってもらえるようになり相互理解が深まりました。

③遊びの中での体力向上

体力向上につながる多くの遊びを紹介したことによって、これまで室内では「トランプやウノ」などのカードや読書をしていた児童が、投力を鍛える「メンコ」や「紙鉄砲ならし」、柔軟性を鍛える「じゃんけん負け開脚」などの遊びをするようになりました。

（2）実践の課題

①来年度以降の運動場の確保

本校の新校舎建設工事は、平成25年3月までの予定です。それまでずっと葛飾中学校の校庭を使えればよいのですが、中学校も新学習指導要領の完全実施により体育の時数が増加するので、厳しい状況にあります。

（3）課題への対応

①葛飾中学校との更なる連携

現在ある環境を有効に活用するためには、葛飾中学校と連携をとり、中学校の校庭をできる限り使わせてもらうことだと考えます。中学生が使っていない時（中間期末テスト前の諸活動停止・代休等で不在時など）を把握し、毎週金曜日には中学の体育主任とFAXで連絡を取り合います。次週の使える時間を1時間単位で確認して小学校職員に周知していきます。

②狭い校庭でもできる単元の開発

常に中学校の校庭を借りることはできないので、狭い小学校でもできる単元の工夫が必要になってきます。比較的、面積を必要としない「なわとび」「体つくり運動」「鉄棒」を中心に考えていきます。

③体育館体育の更なる充実と児童の運動量確保

来年度は「器械運動強化月間」を設けて、朝に体育委員会の児童と一緒に鉄棒・マット・跳び箱の用具を準備します。準備と後片付けも授業の一環であることは百も承知です。しかし、児童の運動量を第一に考えたときに、用具の準備と後片付けに10分以上かかる時間を、運動する時間に変えることができれば児童の運動量の向上につながると考えました。

５．おわりに

葛飾小の体育環境のことを、市の教育委員会の保健体育課の先生も「最悪の環境」と言っていたのが本校の実態です。

しかし、「苦境こそチャンスである。」と思います。中学校と連携を深めるために、これまでよりもさらに密に連絡を取り合い協力体制を確立していきたいと思います。さらに、授業の質を高めるために、全教職員の共通理解を図り、体育授業の職員研修会を開くなどしていきたいと考えています。

常に、よりよい方法を模索しながら児童の体力向上・維持に努めていくことが大切であると実感し本論文のまとめといたします。

【実践記録】

社会参画力の育成を目指した社会科学習

－「ごみの処理と利用」の実践を通して－

船橋市立西海神小学校　教諭　三浦　義正

１主題設定の理由

（１）社会参画力とは。

学習指導要領の小学校社会科の目標は、以下の通りである。

> 広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

目標の中に「公民的資質の基礎を養う」とある。この「公民的資質」とは「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を含むものである」と学習指導要領の解説編に明示されている。よりよい社会の形成に参画する資質や能力を社会参画力と考えた。

また、社会参画力として身につけてほしい力を以下の２点とした。

> ①今自分に何ができるかを考えて、行動する力
> ②暮らしている地域に関して積極的にかかわりを持とうとする力

現在の日本ではさまざまな国籍や年齢、障害の有無などたくさんの価値観の人々が暮らしている。価値観の多様化に伴い、お互いの価値観が相容れないことも多くなっている。しかし、価値観が違うにもかかわらず、お互いがお互いを認めつつ助けあうことができる子どもに育てたいと日々考えている。もし困っている人がいたら、今の自分に何ができるかを考え、そっと優しく手を差し伸べる優しさを一人一人が持つことができる社会。その形成の一端を担ってほしい。こういった社会を実現させるための一つの能力として「①今自分に何ができるかを考えて、行動する力」が必要であると考えた。

次に、環境問題、高齢者問題などさまざまな社会的な問題があるが、その問題について深く考え、行動を起こさなければならないのは、その問題が起こった地域に暮らす住民である。ある程度、政府や行政を頼ることは必要であると考えるが、現在自分達で何ができるかを考えることも必要である。そこで自分達で、地域にある身近な問題を解決することができる力を身につけさせたいと考えた。小学生段階の今、まずはその基礎となる「②暮らしている地域に関して積極的にかかわりを持とうとする力」を身につけさせたい。そして、自分達で自分たちの住んでいる街や地域をよりよくしていこうという気持ちを持たせていきたい。

今回の実践で、児童に身につけたい社会参画力を具体的に定義すると、「自分達でごみを減らすための方法を考え、地域の人々にそれを伝えることができる力」となる。

２実践の目的

社会科「ごみの処理と利用」の学習を通して、社会的な問題を自分自身のものととらえさせることによって社会参画力を身につけさせる。

３研究の仮説

> 社会的な問題を自分自身の問題として捉えることができれば、児童に社会参画力を身に付けることができるだろう。

児童は、社会的な問題に対して、学習するものであり、それが自分自身とどうかかわっているのかを意識する場面が少ないのではないかと考えた。社会科の前時の水の学習においても、水はどうやってきれいにするかという問いに対し、水は浄水場できれいにされており、さまざま努力や苦労があったことを学習したのだが、その後で水を大切に使おうという気持ちを持たせたりすることが充分ではなかった。そこで、社会的な問題を自分自身の問題ととらえさせれば、身近な地域に対して、自分達で何か行動を起こそうという気持ちを育むことができるのではないかと考えた。

４実践の手立て

児童の社会参画力を育成するために、二つの手立てを取った。

①体験活動を取り入れる

ごみ出しの手伝いや家や学校で出るごみ調べ、収集ステーションや清掃工場の見学などさまざまな体験活動を取り入れる。体験活動を取り入れることによって、児童一人一人が自ら学習に取り組むことができ、教師主導ではなく、児童が中心となるような学習になるのではないかと考える。そのことから、意欲的に学習に取り組み、学習の中で気付いた問題を自分自身のものとして捉えることができるのではないかと考えた。

②人とのかかわりを意識させる

児童の気付かないところで街をきれいしている地域の人々や、捨てられたごみを処理している清掃工場の職員など、多くの人がごみを処理するためにさまざまな努力や工夫を重ねている。しかし、その努力や工夫に気が付いている児童は少ない。そこで、実際に仕事の様子を見学したり、話を聞いたりすることで、努力や工夫に気がつき､その人達の気持ちを想像することで、自分も何かできることはないかという気持ちを持たせたい。

５実践の経過と内容

指導計画

	学習活動と内容
つかむ・たてる（2）	ごみの収集について知っていることを 学校のごみの種類について話し合う ごみ倉庫を見学する ごみ調べの仕方について説明する
	ごみ調べをして気がついたことを発表しあう。 単元全体の学習問題をつかむ ごみの処理方法を予想する
調べる（7）	収集ステーションについて知っていることについて話し合う 収集ステーションで見学してくることを話し合う 収集ステーションに見学にいく 見学して気付いたことを話し合う
	収集ステーションから集められたごみはどこへ行くのか話し合う。 清掃工場見学で調べる観点を考える
	南部清掃工場を見学する
	見学したことのまとめ
	ごみの再利用について調べる ペットボトルの再利用について
	市のごみの量の変化について調べる
まとめる（3）	ごみを減らすために自分ができることを話し合う 地域のごみを減らすために自分たちができることを話し合う。
	前の時間の話し合いを基に、グループや個人でポスターなどを作成する。
	自分たちの計画をクリーン推進課の人達に聞いてもらう。

①体験活動を取り入れる

〈ごみ調べ〉

学習の導入に、それぞれの家庭での出るごみの量の多さを実感させ、また、ごみにはさまざまな種類があることを知るためにごみ調べを行った。児童は、それぞれの家庭で１週間にどれくらいのごみが出るのかを調査した。

児童の感想

ごみにこんなに種類があるなんて、知りませんでした。どうして、こんなにごみに種類があるのかを調べてみたいです。ほかにどんな種類のごみがあるのかを調べてみたいです。どうやってごみを処理しているのか調べてみたいです。いろんなごみがあっておもしろいです。
人はいろいろなごみを出すのだと初めて知った。人が食べたもののごみが多い。なんか人は、使えなくなったものは、すぐに捨ててしまうんだとわかった。ごみ袋にはいろいろな種類があることがわかった。ごみを減らすにはどうすればよいだろう？

ごみ調べをした感想から、ほとんどの児童は、家庭で出されるごみの多さに驚く記述をしていた。また分別していることを初めて知った児童も多かった。「どんな種類のごみがあるのか。」「どうやってごみを処理しているのか。」などごみについてたくさんの疑問を持ち、これからの学習への意欲をうかがえる物が多かった。学習の導入において、たくさん問題

意識を持つことができた。中には、「ごみを減らすにはどうすればよいだろう？」と早くもごみを減らすこという問題を持つことができた児童もいた。

〈収集ステーションの見学〉

収集ステーションには、マナーを守ってごみを出したり、きれいに使ったりするためのさまざまな工夫があることを調べるために、見学を行った。学校の近くにある収集ステーションを見学に行き、その後自分の家のごみを出す収集ステーションの見学をさせた。

児童の感想

収集ステーションの見学をして、カラスにゴミを食べられないようにネットをつけたり、ゴミを出す日を看板に書いてあったりといろいろな工夫がしてあった。しっかりとゴミを出す日を守りたいと思う。
ちょっと歩いただけで、収集ステーションがたくさんあって、どうしてこんなにあるのだろうと思った。だいたいみんな家から１分以内に収集ステーションがあるとわかった。燃えるごみは週３回だけどほかのごみは月に１回だったりするのだろう。

収集ステーションのさまざまな工夫を見て、「しっかりとゴミを出す日を守りたいと思う。」と自分自身もしっかりとごみを出す日を守らなければと記述していた。この感想から、ごみの捨て方について自分自身がしっかりとゴミ出しのマナーを守ろうという気持ちを持っていることがわかる。すなわち、ごみのマナーの問題を自分自身の問題と捉えていると言える。また、多くの児童が、収集ステーションにあったごみの分類の看板に興味をもち、「どうして燃えないごみの日は少ないのだろう」や「粗大ごみは申し込みをしなければならないのはどうして」などの新たな疑問を抱いていることがわかった。

以上のような結果から、体験活動を取り入れることによって、ごみの問題を自分自身の問題とすることができたのではないかと考えた。

②人とのつながりを意識させる

〈南部清掃工場の見学〉

南部清掃工場へ見学に行き、ごみを処理する施設を見学し、働いている人の話を聞いた。その後、見学したことをもとにして新聞にまとめた。

新聞の感想から

ごみを処理するのは大変なんだなと思いました。１日に１kgもごみを出すと知って、少しでもごみを減らそうと思いました。清掃工場では、灰なども処理したり、リサイクルしたりしているのはすごいなと思います。清掃工場の中は、いろんな仕組みがあるので、もっとごみを早く処理したり、リサイクルができるようになったらいいなと思いました。
ごみクレーンがこんなに大きいなんてびっくりしました。ごみピットもたくさんごみがあってびっくりしました。煙突も５９ｍあるなんて知りませんでした。また清掃工場に行きたいです。

清掃工場見学後に書いた新聞の感想をみると、清掃工場で働く人々の苦労を知り、自分自身も何かしなければと考えた感想を書くことができた児童が増えてきた。ごみの問題を自分自身の問題として捉え、何とかしようという意識の高まりが見られた。

その一方、施設やごみの処理の仕方に驚いたという感想も多かった。もう少し、働く人に目を向けさせられるような工夫が必要であると感じた。

〈クリーン推進課の人の話を聞いて〉

クリーン推進課の方々にゲストティーチャーに来ていただき、船橋市のごみを減らすためにしていることついて話を聞かせていただいた。また、自分達のごみを減らそうという取り組みについての発表も聞いていただいた。

児童の感想

船橋市で一番ごみが出ているのは、生ごみで４５％二番目が２５％で紙だそうです。私たちができることは、まず給食や朝食・夕食を残さずきれいに食べることだそうです。わたしもこれから、食事を残さずに食べようと思います。
市役所の方がごみを捨てるではなく、ごみを出すとおっしゃっていたのが印象に残りました。これから僕もごみを「捨てる」ではなく「出す」と言いたいです。市役所の人の話を聞いてもっとエコに取り組もうと思い

ました。これから船橋市のごみをなくしたいと思います。

クラスのほとんどの児童が、何らかの形で自分もごみを減らしたい、エコ活動に取り組んでいきたいとの感想を書くことができていた。今回は、自分たちの取り組みを評価してもらい、また直にごみを減らすためにさまざまな活動をしている方の話を聞くことができたので、児童がごみを減らそう気持ちを持つことができたのではないかと考える。

以上のような結果から、清掃工場やクリーン推進課の人達の話を実際に聞いたりして、その工夫や努力に気がつくことで、ごみが多いという課題を自分自身の問題として捉えることができたのではないかと考えられる。特にクリーン推進課の方々の話を聞いた後の感想では、船橋市のごみを減らしたいと思う児童がほとんどであった。これは、まさにごみの問題を自分自身の問題として捉えられたということである。

③児童のごみを減らすための取り組み

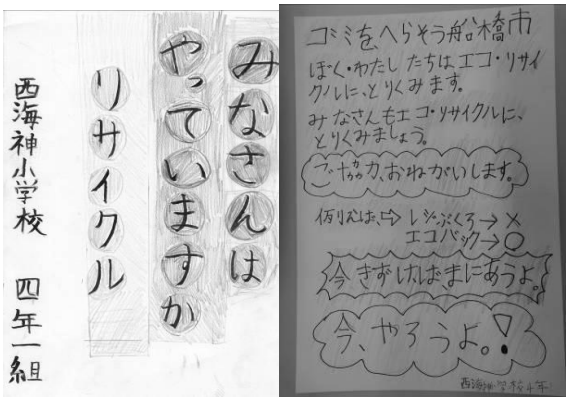
学習のまとめとして、自分たちが地域のごみを減らすためにできることを考えた。多くは、ごみを出さないための方法を地域の人達に伝えたいという思いを持って活動した。今まで学習してきたことを生かしながらその方法を考え、意欲的に活動に取り組んでいた。児童の活動は以下のようなものである。

〈エコバッグの使用を推進するポスター〉

学校の近くにある商店街のスーパーの店長に、児童の取り組みについてお話ししたところ気持ち良く、店頭にポスターを貼ってもらうことができた。実際に話を聞くとエコバッグを持って買い物に来る客は、実感としてまだまだ少ないとのことであった。今後このポスターがきっかけになりエコバッグを持つお客様が増えればよいとお話をされていた。

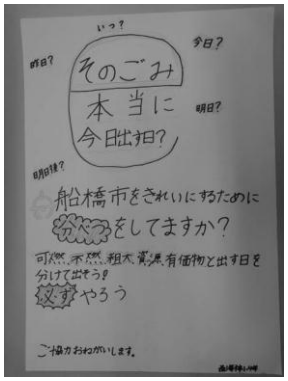
〈ゴミを減らすためのポスター〉

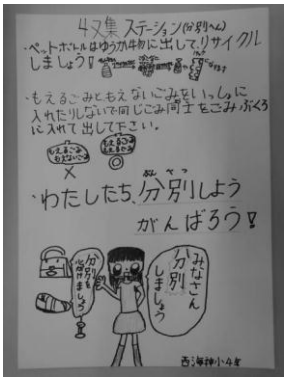
標語とゴミを減らすためのポスターを、学区の自治会長さんにお願いして、地域の掲示板に貼らせてもらった。児童は自分の作ったポスターが、実際に掲示板に貼られている様子を見てとても嬉しそうであった。また地域の人から、取り組みについて褒められたと喜んで報告してくれる児童もいた。



〈ゴミの分別を呼び掛けるポスター〉

収集ステーションを管理している方にお願いして、収集ステーションにポスターを張らせていただいた。



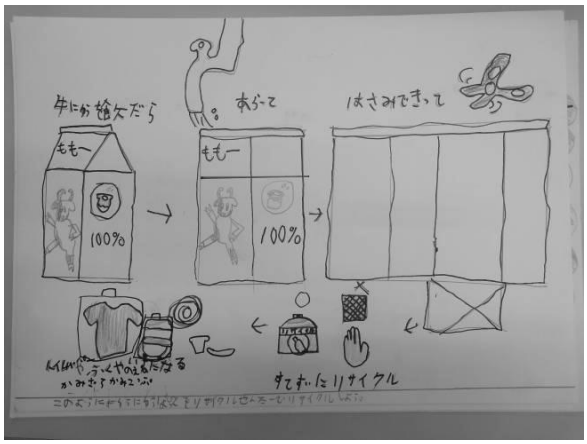


〈エコを呼び掛けるうちわ〉

このグループは、最初チラシを作成する予定だったのだが、読んだチラシはすぐに捨てられて、またごみになってしまうことに気がついた。そこで、捨てられないものを作ろうということになり、自分たちでアイディアを考えうちわにメッセージを書いて配ることにした。チラシがすぐにごみになるという着眼点が学習したことがまさに生きていると感じられた。

〈牛乳パック回収を呼び掛けるポスター〉

学校で PTA が設置した牛乳パック回収箱があるのだが、よりみんなに協力してもらえるようにと、牛乳パック回収を呼び掛けるポスターを作成し、掲示した。



どのグループや個人も、自分たちの思いを込めてポスターなどを製作していた。地域のみんなに呼びかけるという意見もあったのだが、時間や場所、方法などを自分たちで考えた結果断念してしまった。どのポスターや標語を見ても、児童の思いが伝わるものであった。また、地域の自治会長さんから素晴らしい取り組みだとのお言葉を頂く事ができ、児童は喜んでいた。

６成果と課題

今回の実践では、一人一人が自分の考えた方法で地域の人々にごみを減らそうというメッセージを送ることができた。そのことから、児童に身につけさせたい社会参画力である「自分達でごみを減らすための方法を考え、地域の人々にそれを伝えることができる力」を身に付けることができたのではないかと考えられる。体験的な活動を学習に取り入れることにより、それぞれがごみの問題について疑問を持ち、それを意欲的に追求していこうという気持ちを学習の最後まで持ち続けることができた。また、意欲的に学習に取り組む姿が最後まで見られた。ごみを処理するさまざまな人達とのかかわり合いや、自分達で調べたりすることで、ごみの排出量が多いという問題に気が付き、問題を自分自身の問題として捉えることができたからである。また、そのごみの多さを何とかしなければという問題意識が地域の人たちへごみを減らそうというメッセージを伝える原動力になった。今後もこのように学んだことを自分自身の問題と意識させられる学習にしていきたい。

地域に伝えることだけに目が向き、身近な家庭や学校に伝える場が充分ではなかったように感じた。児童に一番身近であるはずの、

家庭のごみを減らすための取り組みが不充分であった。また、児童から地域に向けて一方通行のメッセージとなってしまった感がある。地域からの声を受け、さらにそれを生かしながら取り組むという学校と地域の学びの循環を創造することを今後は目指していきたい。

７終わりに

今回の実践では、地域の自治会長やスーパーの店長、クリーン推進課の方などさまざまな人々に協力していただくことができた。多くの人々の協力に心から感謝している。

学校が地域社会とかかわり、働きかけることによって、児童は学校で学んだことが実社会で生かされるよさを感じることができたのではないだろうか。そして、そのことが学習することの意義にもつながっていくのではないかと考える。今後も地域とのより深いつながりを求めながら学習に取り組んでいきたい。

【参考文献】

・文部科学省（2008）「学習指導要領解説　社会編」東洋館出版社
・船橋市小学校社会科副読本編集委員会（2011）　「平成 23 年度版 わたしたちの船橋　指導の手引」
・唐木清志（2008）「子どもの社会参加と社会科教育―日本型サービス・ラーニングの構想」東洋館出版社

【実践記録】

言語活動の充実を目指して

― 国語科、算数科での実践記録 ―

船橋市立葛飾小学校　教諭　松本　侑里香

1　はじめに

平成 20 年 3 月に、新小学校学習指導要領が告示され、その特色の一つとして「言語活動の充実」が掲げられました。国語科はもとより、国語科以外の各教科等の授業においても、言語活動を充実させることが求められています。言語活動の充実が求められるようになった背景には、様々な理由が考えられていますが、中央教育審議会答申の「子どもたちの現状と課題」で示されているものは次のようなものです。

- 平成 15 年実施の教育課程実施状況調査の結果から、国語の記述式の問題の正答率が低下していたこと。
- 平成 15 年のＰＩＳＡ調査で、読解力や記述式問題に課題があること。文部科学省「読解力向上プログラム」によると、ＰＩＳＡ調査では、とりわけ「自由記述」で無答率が高いことが明らかにされている。
- 平成 19 年の全国学力・学習状況調査結果から、説明文で述べられている事柄を要約すること、資料から必要な事柄を取り出して与えられた条件に即して書き換えることについて課題がみられたこと。

このような実態に対して、習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用することを通じて、思考力・判断力・表現力等を高めていくことが求められています。言語の能力を育成することは、思考力・判断力・表現力の育成につながるものと考えられています。

実際に、私が担任している 4 年生の子どもたちも、先に挙げた課題のように、記述することに苦手意識があります。例えば、ある算数の授業で、式をたてて答えを出せた子どもに、「なぜその式になるのか」と問うと、そのわけを論理的に書くことができませんでした。他の子どもたちも、多くが答えを出すことができていたのですが、式の意味を書いたり、説明したりすることを求められると、悩んでノートに向かう姿がみられました。

このことから、まずは課題を強く感じた算数科において、子どもたちが根拠を明らかにして考えることや、考えたことを相手にわかりやすく伝えることができる力を育てていく必要があると考えました。そして、そのための言語活動の充実を図っていくことを、算数科での実践を通して研究することにしました。

しかし、算数科での実践を進める上では、やはり言語活動の核となる国語科における、言語活動の充実を目指すことは不可欠であるといえます。そこで、本研究では国語科と算数科での実践を記録し、検討することで言語活動をどのように設定し、充実を目指していけばよいのかを探りたいと考えました。

2　実践の目的

国語科や算数科の授業の中で、積極的に言語活動の充実を図ることで、自分の考えを様々な方法で表したり、相手にわかりやすく伝えたりする表現力を育成することを目指します。

3　実践の経過

（1）国語科の実践

「一つの花」での指導

言語活動の充実を図る上で、国語科において言語活動を行うための言語能力を育成することが求められています。そこで、どのような言語能力を育てるのかを明確にして、言語活動を設定することが必要だと考え、実践しました。

◎単元　「願いを受け止めて読む」

◎教材　「一つの花」（9 時間）

◎指導目標

時代の状況や場面の様子がわかる言葉をもとに、お父さんやお母さんの思いを考えながら読む。

◎指導事項

読むこと

- 内容の中心や場面の様子がよくわかるように音読すること。…C（1）ア
- 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物

の性格や気持ちの変化、情景などについて叙述を基に想像して読むこと。…C（1）ウ

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

・指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。
…伝国(1)イ(ク)

◎言語事項

読むこと

・物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。
…C（2）ア

◎言語活動の工夫

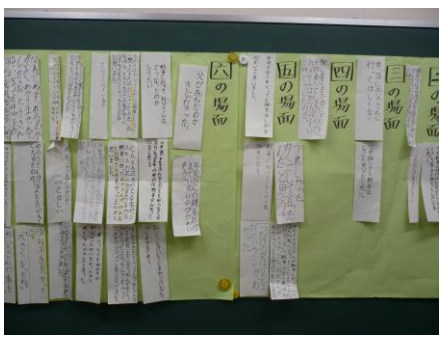
本教材は、戦争の中での日々と、ゆみ子と父との別れが描かれている部分、そして、十年後のゆみ子の生活が描かれている部分というわかりやすい場面に分かれて物語が展開しています。時の移り変わりを正しくとらえ、それぞれの場面の状況やできごと、登場人物の気持ちの変化を想像しながら読ませたいと考えます。そのために、次のような言語活動を設定しました。

1　物語を読んで感じたことや考えたことを発表し合う。さらに、友だちと比べて、似ている考えや違う感じ方を知り、思ったことを伝え合う。
2　登場人物の気持ちの変化や情景を想像して読むために、考えを書く。
3　戦争中と十年後の場面を対比させて、読み取った違いを話し合う。
4　「お父さん」へ手紙を書き、グループで読み合って、感想を交流する。

◎授業の展開

第1・2時…文章が6つの場面ごとに分かれることをつかみ、それぞれの場面ごとに感想を紹介し合う。

全文を読んで初発の感想をノートに書き、短冊に書かせました。自分の思ったことや疑問点はどの場面のどの文章を読んで思った事なのかを発表させて、場面ごとに分けて短冊を貼らせました。



場面ごとに感想を発表し、友だちと比べて感じ方が似ているところや違っているところに目が向けられるように、共通している点は整理して板書にまとめていきました。子どもたちの中には、短冊を貼った模造紙をみて、「六場面で、お父さんが亡くなったのかな、と思っている子が多いです。」「私もなぜゆみ子が一つだけちょうだいと言うのか疑問に思ったけれど、同じことを疑問に思っている子がいました。」といった児童の発言がみられ、短冊で整理をしたことで感想を比べやすくなったようでした。

第3時～第6時…言葉や叙述に基づいて、登場人物の気持ちの変化や情景を想像し、考えを書く。

・戦争中の厳しい状況を読み取る。
・お父さん、お母さんのゆみ子に対する思いを読み取る。
・見送りの日の家族の様子から、お父さん、お母さんの思いを想像する。

「読むこと」の指導事項である「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて叙述を基に想像して読むこと。」にもあるように、自由に想像して登場人物の思いを書くのではなく、文章に常に戻り、描かれている様子や会話から考えるようにすることを確認しながら進めました。具体的には、以下に示すような子どもの反応がありました。

T「お父さんがあげた一輪のコスモスには、どんな思いがこめられていると思いますか。」
A さん「コスモスのように強く生きてね、という思いです。」
T「どこを読んでそう思ったのですか。」
A さん「〇ページ〇行目の、プラットホームのはしっぽの、ごみすて場のようなところに―という文を読んで、コスモスも厳しい環境で生きているから、ゆみ子も頑張ってほしいと願って、お父さんはコスモスをあげたと思いました。」
B くん「ぼくも、コスモスがごみすて場のようなところに咲いていたから、ゆみ子も戦争の中で耐えて生きてね、という思いであげたと思います。」

子どもの考えが、どの叙述に基づいているのかを文章に戻って確認しながら、文章中の表現に着目していきました。叙述から、登場人物の思いを想像させ、ノートに書くことにつなげていきました。

第７・８時…戦争中と十年後の場面を対比させて、読み取った違いを話し合う。

戦争中と十年後の場面での、対比的な表現を見つけるために、「一つだけ」から「お肉とお魚」のように「○○○」から「○○○」という表現で変化したものをノートに書き出すようにしました。それをもとに意見を交流すると、次のように子どもたちは表現していました。

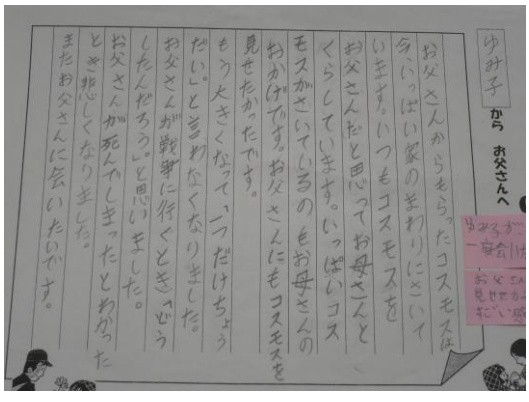
・「配給されるおいもや豆やかぼちゃ」から「お肉とお魚」
・「配給」から「買いもの」
・「ばくだんの音」から「ミシンの音」
・「一輪のコスモス」から「コスモスのトンネル」
・「戦争」から「平和」

このように時間の経過とともに変化しているものに目を向け、言葉で表現することを通して、平和なくらしになっていることを感じることができたと考えます。また、一輪だったコスモスがトンネルとなっていることは、どういうことなのかという発問をしながら、父親の思いがコスモスに残っていることへつなげるようにしました。

第９時…「お父さん」へ手紙を書き、グループで読み合って、感想を交流する。

手紙という形で表現させることで、自分なりの言葉で、読み取って感じたことをまとめることができると考えました。ここまでで読み取ってきた登場人物の気持ちに基づいて、「お母さん」や「ゆみ子」の立場から「お父さん」への思いを手紙に表現する活動を設定しました。

また、書いた手紙を４～５人のグループで読み合い、感想を付箋紙に書いて渡しました。そして、付箋紙に書いてある感想を読んで感じたことや、友だちの手紙を読んで思ったこと、自分が手紙を書いて思ったことをノートに書かせました。



ノートの感想には、次のようなものがありました。

・「ゆみ子の気持ちをよく読みとっていてすごい。」と書いてもらえた。
・自分の手紙を読むと、初めの感想よりいい文になっていて良かった。
・手紙に書くことが思いつきやすかった。
・はじめよりくわしくお母さんの目線になって書けた。
・○○くんの手紙は、ありがとうの気持ちがこめられていて、わたしが書いた手紙とはちがった。

最後に書かせた授業後の感想は次のようでした。

・くらしが楽になって喜びがうまれているのをみて、お父さんはとても喜んでいるだろうと思った。
・ゆみ子が戦争にたえて強く生きていると思った。
・今はたくさん食べられるので、もう「一つだけちょうだい。」は言っていないと思う。
・自分のあげたコスモスがふえて、お母さんやゆみ子が大切に育てたことが、お父さんに伝わったと思う。

◎授業後の考察

子どもたちの発達段階をふまえると、人物になりきって語りかける表現に、楽しみながら積極的に取り組めるだろうと考え、単元の最後で、手紙を書く言語活動を取り入れました。読みとってきたことをもとに、手紙を書いたことで、多くの子どもが主題に迫ることができたと感じます。手紙を読むと、多くの子どもが「平和」になったことへの思い、お父さんの愛情への感謝の気持ちを書いていました。

しかし、この活動では「ゆみ子」もしくは「お母さん」の立場になって「お父さん」に手紙を書くという設定にしましたが、立場を「ゆみ子」か「お母さん」のどちらかで明確に決めて、単元の最初に見通しをもたせたほうが、より読む視点が定まったように感じます。見通しを持たせることで、書くために読むという意識が強まり、目的をもって主体的に読み取りを進められたと思われます。

このことから、やはり単元の構想をたてる段階で、読みを深めるための言語活動をどのように設定し、子どもたちにどう見通しをも

たせて取り組ませるかということを明確にしておくことが重要であると考えました。

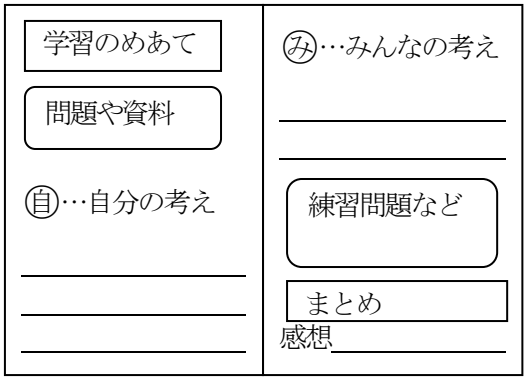
また、手紙を書いた後に、友だち同士で交流することで、多くの友だちの考えや感じ方にふれる場となったように感じます。子どもたちは手紙を読み終えると、次々に付箋紙を手に取り、感想を書き合っていました。

単元の終わりに、もう一度感想文を書かせて深まりを確かめましたが、やはり文章で書かせることで、初発の感想とも比べやすく、自分なりの読みの深まりが実感しやすかったと感じました。

（2）算数科の実践

①ノート指導との関連の中で

4月の初めの授業で、「ノートの約束」を子どもたちに話しました。授業の進め方を想定し、それに合うノートの構成の型を次のように決めて子どもたちに示しました。



まずは自分なりの考えや解き方を書くことにし、言葉だけでなく絵や図、数字などを使った表現を考える場にしました。言葉で書き出せない児童は、図や絵を書いてみることを促しました。そして自分の書いた図や絵の意味を説明する言葉をつけたして、徐々に説明する文章につなげていけるようにしました。

そして、言語活動を豊かにするために、「まず、はじめに」「次に」「そして」「さらに」「最後に」などの言葉はあらかじめ黒板に示し、はじめのうちはこの書き出しに続く形で文章を考えさせることにしました。また、「だから～」「なぜなら～」など、根拠を述べる言葉の提示もしました。

さらに、友だちの考え方や意見を聞いて、参考になったものも書きます。ここで、自分の考えが思うように書けなかった児童は、友だちの書き方を写してよいことにしました。

最後に、学習を終えての感想を書いて、わかったことや、発表はできなかったけれどこう思った、ということ等を書きます。

このようにノートの基本の型を決めて、継続的に考えを書かせる機会をつくっています。言葉で表現できない子どもでも、書くことで言語活動の基礎を固めることができると考えています。また、自分の考えが言えない子どもも、ノートをみながら発言することができるので、やはりノート指導は今後も続けていきたいです。

このようなノート指導を通して、問題を解決し、その解決方法や自分の考えを説明するために、算数固有の言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いた表現力を育成すること、そして、考えたことを伝え合うことの手がかりになるようにしたいと考えています。

②「2けたでわるわり算の筆算」での指導

◎単元目標（12時間）

2位数でわる筆算の仕方を理解し、答えを求めることができる。また、わり算について成り立つ性質を知り、活用することができる。

- 商が2位数になる除法の筆算の仕方を進んで考え出そうとする。（関心・意欲・態度）
- 商が1位数になる除法をもとに、商が2位数になる除法の筆算の仕方を考える。（数学的な考え方）
- 何十でわる計算や2位数でわる筆算ができる。（技能）
- 2位数でわる計算の仕方や除法に関して成り立つ性質がわかる。（知識・理解）

◎展開の授業（第3時）について

子どもたちは前時の学習で、（何十）÷（何十）のわり算の仕方について学んでいます。10を単位として10円玉の模型を実際に操作することにより、10円玉の個数に置き換えて求めていく方法を考えてきています。第3時では、（3位数）÷（2位数）で商が1位数の、わり切れる場合とわり切れない場合の計算が暗算できることと、余りが出た時の答えの確かめができることがねらいです。

◎言語活動の工夫

- 具体物として10円玉の模型を用いて計算の意味を説明させる。
- 商を求めた式から、どんな解き方をしているのか考え、それをノートで文章化して説明につなげる。
- 根拠をもとに、自分の考えを伝えて、話し合うことができる。

◎学習の展開

まず問題を読み、120円で1本20円のあめを買う場面を把握し、120÷20の立式をし、

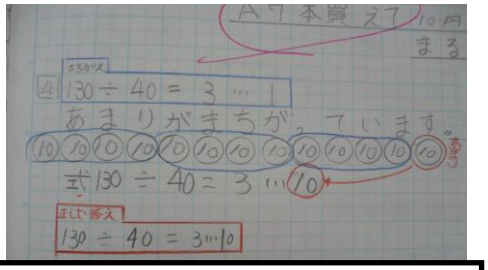
計算の仕方を考えました。ここで、具体物として10円玉の模型を12個黒板に並べて示し、実際に数えてから、120÷20の式に結びつけました。

その後、ノートに10円玉の模型を絵や図にして、それを基に文章で計算の仕方をまとめました。

絵や図が書きだせない子どもに対しては、机間指導の中で、一緒に12個を数えながら10円玉の絵を書かせ、2個ずつ線で囲ませました。また、絵や図が書けても、文章につながらない子どもに対しては、絵や図を書いた順を説明するような文を書いてみようと声かけをしました。例えば、「まず、10円玉12個を2個ずつにわけます。すると、10円玉の個数で考えると12÷2となります。」というように、絵や図にしたことの説明から、式の計算方法の説明につながるように意識しました。

そして、ノートに書いた「自分の考え」をもとに、計算方法を話し合いました。子どもが書いた絵や図も紹介し、数名の子どもの考えを取り上げました。その中で、共通していた10円玉の個数で考える方法を、「みんなの考え」としてまとめました。

次に、「130÷40＝3 あまり 1」について、間違えているところを話し合いました。これまでのように、10円玉を使って自分なりの絵や図、式を使って正しい答えを求め、余りの違いに気付かせることにしました。子どものノートをみると、120÷20の考えを書いたことを振り返って、10円玉の絵を使って、余りの間違えを説明しようとする姿勢がみえました。



10のまとまりで計算すると、13÷4で計算することができることを理解し、余りの考え方についても、図を基に説明することができた。

◎授業後の考察

・具体物を用いた操作を式につなげること

具体物として、10円玉の模型を用いて計算の意味を説明させることで、式の意味理解を深めることにつなげることができました。10円玉を操作することで、10のまとまりで考えると計算しやすいことも、視覚的に実感できたようです。

・ノートで文章化して説明につなげること

自分なりの考えを書かせる時に、まず具体物操作を、絵や図として書き表し、それを基にして文章での説明を書くことを指導しました。

子どもたちは、ノートに自分の考えを書く際に、操作した10円を絵にしてかき、線で囲んだり数えたりすることができました。さらに、自分でかいた絵や図をもとにして、「はじめに、この図で示したように、10円玉を2つずつに分けました。すると、10円玉の個数で考えることができ、12÷2で計算できます。」といった計算の仕方を説明する文章を書きました。その文章が、友だちに考えを伝えるときの手がかりとなり、発表する児童は順を追って自分がどのように計算の仕方を考えたのか話すことができました。

聞いていた児童には、自分の考えと比べてどうだったかと問うと、「10のまとまりで考えると暗算しやすい式にできるという考えが同じだった。」「○○さんと同じで、10円で考えるとあまりを間違いにくくなることに気がついた。」といった声が聞こえました。自分の考えをノートに整理することで、その後に聞いた友だちの考えと比べることがしやすく、共通していた点や、新たに発見した点が見つけやすくなってきたようでした。

また、これまでの学習でも、自分の考えを絵にすることはできても、まだ文章での説明を書けない子がいました。そういった子どもには、友だちの考えを聞いたり、板書をみたりして、同じように書くように声かけをしてきました。絵や図で示したことを、文章化するためには、ある程度の書き方の型を覚えて、生かしていくことが必要であると考えます。そのため、文章化ができない子どもも、繰り返し書き方の型を練習することで、少しずつ自分なりのまとめ方に生かしていけるようにしたいと願って支援しています。

最後に、ノートを基に行った計算方法の話

し合いと、考えの共通点を出し合う活動から、学習のまとめにつなげることができました。

自分の考えを整理する際に、言葉だけではなく、自分なりに絵や図を用いて、説明につなげることができる足跡が、ノートに表現していけるように、今後も指導を続けていきたいです。

４　実践の成果と課題

（1）　実践の成果

① 言語活動の充実を図ることで、授業でのねらいに迫ることができた。

単元のねらいをふまえて、どのような言語活動を設定するのかを検討することで、子どもたちにつけたい言語能力を明らかにすることができました。また、子どもたちの発達段階にあわせて言語活動を取り入れることで、活動における子どもたちの意欲が高まり、その時間のねらいの達成に、主体的に向かうことができるようになったと感じます。

② ノート指導で、自分の考えを様々な方法で表すことができるようになってきた。

ノートの基本の型を決め、自分の考えを中心に書かせることを継続的に指導することで、自分の考えを文章で書くことに苦手意識をもち、なかなか書き出せなかった子どもたちが、図や絵、数式、文章などといった表現方法を考えながら書けるようになってきました。それは、自分の考えの「書き方の型」が定着してきたからだと考えます。「書き方の型」とは、考える道筋ともいえます。子どもたちの段階に応じて、絵や図等を示し、自分なりに考えていくための道筋をたてることが必要であると感じました。

やはりノート指導は、書く力、考えを表現する力の育成につながる手だての一つとしてとらえ、その授業のねらいに迫るために生かしていくことが重要であると思います。

③ 文章化したことを説明につなげることができた。

ノートに自分の考えを書き、それをもとに説明することで、絵や図などの視覚にうったえる資料を提示しながら、言葉での説明を加えることができるようになってきました。このように、書く活動から話す活動へつながりがスムーズになり、ノートに表現したものが、子どもたちの自信となり、発表を促すことにつながったと考えています。

（2）　実践の課題

① 国語科での言語能力の育成を一層充実させること。

言語活動はさまざまな場面で展開されていますが、やはり基礎となる言語能力を育てるためには、国語科での指導の一層の充実が必要であると考えます。

② 各領域のバランスを考えて計画すること。

言語活動を設定する上で、年間を通して「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のバランスを考えて、計画していくことが必要であると感じます。

③ どのような言語活動を設定するのかを、各教科・領域にわたって検討すること。

今回実践した国語科、算数科だけでなく、全ての教科・領域において、言語活動を見直していく必要があると考えます。活動ありきではなく、どのような言語能力を育成したいのか、またそのためにはどのような活動が有効であるのかを検討していくことが、重要な課題であると思います。

５　おわりに

これまでの実践を通して、言語活動についての工夫や充実を考えてきました。その中で、自分自身が、ただ活動を取り入れるのではなく、何のための活動なのかを明確にして取り組むことの重要性に気付くことができました。言語活動は、目標を達成するための手立てであり、その活動によって子どもの思考力・判断力・表現力が育成されることで、充実したものとなるのではないでしょうか。

今後も教材研究の中で、言語活動の充実を目指して検討を重ね、子どもの実態に合った活動を設定していきたいと考えています。

【主な参考文献】

・中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
・赤井利行　編（2009）「表現力を育成する新算数科教材開発　第４学年編」明治図書
・北俊夫　編著（2011）「言語活動は授業をどう変えるか」文溪堂
・早坂五郎　著（2011）「すぐ使える言語活動のアイディア」東洋館出版社

【実践記録】

自己の生き方についての考えを深める道徳の時間の工夫

―他の教育活動との関連を図って―

船橋市立葛飾小学校　　教諭　　赫多　藍

１．はじめに

今日、子どもの心の現状をみると、生命尊重の心の不十分さ、自尊感情の乏しさ、規範意識の低下などがあげられる。このような状況をふまえて、豊かな人間性の育成が強く求められている。

今回の学習指導要領改訂では、新たに「自己の生き方についての考えを深め」が加えられ､「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする」と示されている。

「自己の生き方についての考えを深める」とはどのようなことであるか、次のような例が小学校学習指導要領解説道徳編に示されている。

○児童がよりよくなろうとする自分を感じ、自己を肯定的に受け止められるようにする。
○他者とのかかわりや身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。
○現在の生活及び将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにする。

さらに、上記にあるように学習指導要領では、道徳の時間は学校の教育活動全体で行う道徳教育を基盤とし、それを補充、深化、統合する時間と定められている。

このことを意図し、道徳の時間を構成することが、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めることにつながり、児童に道徳的実践力をはぐくむことができるのである。

昨今､児童を取り巻くさまざまな事件などを聞くにつけ、自他の生命を軽視した衝動的な言動が多いことは極めて悲しいことである。

しかし、今年３月に起こった、東日本大震災という未曾有の災害を経験し、児童はこれまで以上に「生命」の尊さについて考えさせられたのではないかと思う。

生命の大切さはどれだけ強調しても、し過ぎることはない。すべての道徳性は、生命が大切にされてはじめて成り立つものである。その生命も人間だけではなく、生きているものすべての生命に対する尊重の精神が必要である。

生きとし生けるものを慈しみ、自他の生命を尊重することは、もっとも基本的なことである。

そこで、今回は、5 年生の児童が生命尊重についての道徳的価値を深めていくために道徳の時間と他の教育活動の関連をどのように図ったら効果的かを考え、実践を行った。

２．研究の手立て

○自己の生き方についての考えを深める道徳の時間を充実させるために、ワークシートや話し合いの工夫を行う。
○他の教育活動で意図的に道徳教育を行うことにより道徳の時間をより充実させる。

３．実践の方法と内容

（１）読書活動との関連

生命尊重は、児童にとって、直接経験の少ない内容項目である。そこで、生命尊重について考える本に意図的にふれさせることによって、より自分とのかかわりで道徳的価値をとらえることができるようにさせる。

（２）教科学習（理科）との関連

人の誕生についての学習を通して、人の生命の誕生と母体内での子どもの成長のすばらしさについて考えることを通して、命の大切さを考えさせる。

（３）特別活動との関連

「いじめゼロ宣言」（４月）や「食生活を見直そう」（９月）について指導する際、命の大切さについても考えさせる。

（４）道徳の時間の充実

資料選定や話し合いを工夫することにより、道徳の時間を充実させる。

４．実践の内容

〔実践１〕読書活動との関連

１０月から１１月末まで、船橋市内の図書物流制度を利用し、教室に生命尊重について考える本を用意し、朝読書や休み時間を活用して読書活動に取り組ませる。

今回の読書活動では以下の本を用意した。

☆誕生の喜び・神秘☆

・おかあさんがおかあさんになった日
・おとうさんがおとうさんになった日
・生まれてきてくれてありがとう
（他５冊）

☆苦しむ人たちとともに

・ぼくとチェルノブイリの子どもたちの５年間
・マザーテレサ　かぎりない愛の奉仕
（他２冊）

☆命の輝き☆

・いのちのいろえんぴつ
・はしれ江ノ電ひかりのなかへ
・アシェリー
（他６冊）

☆人生について考えるヒント☆

・１００万回生きたねこ
・葉っぱのフレディ
・いのちのまつりヌチヌグスージ
（他２冊）

☆死と向き合う☆

・「死」ってなに？
・スカイメモリーズ
（他４冊）

☆死の悲しみをのりこえるために☆

・いのちのあさがお
・わすれられないおくりもの
・ずーっとずっとだいすきだよ
（他６冊）

本は、分類ごとに整理し、児童が手に取りやすいよう工夫した。また、子どもたちには読書カードを配布し、読んだ本にチェックさせ、一言感想を書かせた。

読書カードの感想（抜粋）

「１００万回生きたねこ」
・１００万回目でやっと大切なものがわかったのかな。
・最後、ねこは死んでしまって悲しそうでした。自分も大切な人が死んだら、１００万回泣きたくなりました。
・私は、永遠の命なんていりません。ただ、自分の生きている時間を大切にしたいです。

「わすれられないおくりもの」
・アナグマの知恵がみんなの悲しみを吹き飛ばすのがすごいと思いました。
・大切なものがいなくなっても思い出は残るんだなと思いました。
・アナグマは死ぬまでにたくさんの大切な物を残してすごいなと思いました。
・死んで体はなくなっても、心は残ると思った。

「いのちのまつりヌチヌグスージ」
・命はつながっているんだと思った。
・ご先祖様からもらった命を大切にしようと思った。
・命は終わらないと思った。
・命がこんなにつながっているなんて初めて知りました。

〈考　察〉

児童は、短い時間の中でも集中して読書活動を行っていた。また、読書カードを渡したことにより、本を選ぶ際の目安になり、本がなかなか決まらずに本の前で立っている児童は少なかった。１５分程度の限られた時間ということもあり、絵本から読んでいく児童が多かった。一言感想を書かせていくことで、読んで終わりにするのではなく、各自が自分なりに読んだ後に内容を振り返ることができたのではないかと思う。また、感想を取り上げた３冊はほぼすべての児童が読んでおりさまざまな思いを書いていた。道徳や国語の時間に取り上げられることも多い話のため、児童は興味関心をもちやすかったのではないかと考えられる。

〔実践１〕理科学習との関連

５年生の理科には、生命尊重に関する内容が多数含まれるが、ここでは人の誕生についての実践を紹介したい。

単元名「生命のたんじょう」
単元の目標
　人の母体内での子どもの成長から誕生までの過程について、資料などを活用して調べて、変化の様子をまとめ、人は母体内で子どもが成長してから、うまれ出てくることをとらえさせる。また、人の生命の誕生と母体内での子どもの成長のすばらしさについて考えさせる。

〈養護教諭を招いて〉

　人の母体内での子どもの成長を資料などで調べる活動のときに、養護教諭に出産を控えている方がいたため、ゲストティーチャーに招いて、赤ちゃんの成長について、児童と質疑応答する形で授業を進めた。

授業の終わりには，数名の児童がお腹を触らせてもらった。

　授業中は、みんなとても興味深く話に聞き入っていた。また、お腹を触らせてもらう場面では、とても緊張した様子や、照れくさそうにする様子も見られた。以下、児童の授業後の感想の一部。

・僕は、こういう経験をしないからわからないけれど、不便なことよりも生まれるうれしさの方が大きいと思った。
・僕は、子どもを産む前のつらさと産んだ後のうれしさを知ったので、もっと家族と自分の命を大切にしたいと思った。
・お母さんはすごいなと改めて感じた。また、人間の体は不思議だと思った。
・赤ちゃんが無事に生まれてくるためにはいろいろな努力をしていることが分かった。
・赤ちゃんが生まれるときにつわりというものがあるのを知らなくて、本当に体にもう一つの命が芽生えるって重大なことなんだなと改めて感じた。
・人生の中で、一番痛い思いをして、とても幸せでうれしい思いをして生まれた赤ちゃんは、とてもかわいいんだろうなと思いました。先生のお話を聞いて、命って大切だなと思いました。もっと自分を大切にしようとも思いました。

〈考　察〉

　この学習を通して、命の尊さはもちろんだが、母への感謝の気持ちを語る児童も多くいた。思春期を迎え、日ごろの生活の中で、なかなか素直に自分の気持ちを表現しにくくなっている子どもたちではあるが、授業を進める中で、家族と話す機会をもったり、周りの人たちに大切に守られて生まれてきたことを知ったりすることで、少し照れくさい様子の中にもうれしそうな顔が多く見られた。

〔実践３〕道徳の時間の充実

主題名　尊い命
資料名　稲むらの火で命を救え
ねらい　生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。
資料の概要
　本資料は、江戸時代に現在の和歌山県の海辺の広村に大津波が押し寄せてきたとき、浜口梧陵が暗闇の中で稲村に火をつけて、丘への登り道の目印としたおかげで多くの村人が命拾いをしたという実話である。

（１）資料の活用の工夫

・実話であることの意識やイメージがもてるように、導入では、時代背景、稲むらの大切さ主人公梧陵について知らせ、資料への興味関心を高める。
・資料が大変感動的な内容であることを生かし、児童が感動した場面を取り上げ授業を進める。

（２）話し合いの工夫

・範読後、十分時間をとり、感動した場面について考えさせる。ネームプレートを活用し、誰がどの場面で心を動かされたのかをはっきりとさせたうえで話し合うことで意図的指名をし、理由や気持ちをより深く聞けるようにする。

（3）ワークシートの工夫

・授業の終わりに「今日の授業を通してどのようなことを考えたか。」という部分を記入させることで、児童が改めて本時での学びを振り返ることができるようにする。

（4）展開の大要

	学習活動（主な発問）	指導上の留意点
導入	１．資料の時代背景や稲むらについて知る。 ・時代背景 ・稲むらの大切さ ・梧陵の立場	・歴史的な事実であることがわかるように、浜口梧陵の銅像の写真や広村の位置の地図、稲むらの写真などを提示することにより、資料への興味関心を高める。
展開	２．資料「稲むらの火で命を救え」を読んで話し合う。	・場面絵を提示し、児童が場面の確認をしやすいようにする。
	○心を動かされた場面はどこか。	・自分が一番心に残った場面絵の下にネームプレートを貼ることにより、話し合いのときの意図的指名に役立てる。 ・ワークシートを活用し一人一人がじっくり考えられるようにさせる。
	◎なぜ、その場面で心を動かされたのか。	・稲村に火をつけた場面では、梧陵の素早く適切な判断、行動が多くの命を救ったことに気付かせる。 ◇評価（発言・ワークシート）
	○他の人の意見を聞いてどう思ったか。	・他の人のさまざまな意見を聞き、考えを深めさせる。
	３．今までの生活を振り返り発表し合う。 ○今までに、命の大切さについて考えたことはあるか。それは、どのようなときか。	・自他の命について考えた経験を振り返り、今までの自分を見つめ直させる。 ・その時、どのような気持ちだったか、なぜそう思ったのか、それから気を付けたことはあるかなども発問し考えを深めさせる。 ◇評価（発言）
終末	４．教師の話を聞く。	

（5）授業の実際（抜粋）

Ｔ：今日は、話を聞いて一番心に残った場面を聞くからね。範読

児童は、実際にあった話と聞いて、とても興味をもって真剣な表情で話に聞き入っていた。

（範読後、場面絵を提示）

○発問１

Ｔ：どの場面に一番心を動かされましたか。自分が一番心を動かされた場面の絵の下にネームプレートを貼りましょう。

○中心発問（ワークシートの活用）

Ｔ：なぜ、この場面で心を動かされたのです

か。ワークシートに書いてみましょう。書きながら、選んだ場面が変わった人はネームプレートを変えていいですよ。
（５分くらいワークシートを記入する時間を取る。）

Ｔ：では、聞きます。選んだ人の少ない場面から理由を発表してもらいたいと思います。（意図的指名）

（堤防を築いた部分を選んだ子ども）

Ｃ：人々を救うために莫大なお金を使って堤防を作ったから。

Ｃ：梧陵も被害者なのに。

Ｃ：自分も被害者なのに村人のためにお金を使ってえらいな。

（津波が襲ってきた場面を選んだ子ども）

Ｃ：梧陵があわてずに村人を救った。勇気があるな。

Ｃ:自分も助かるかわからないのに。すごい。

Ｔ：どうして、すごいの。

Ｃ：自分にはできない。

Ｃ：自分も、のまれてしまうかもしれないのに、ほかの人を救おうとする姿が勇敢だと思う。

Ｃ：自分も助かるかどうかわからないのに、ほかの人のことも考えている。

（村人数人と行方不明の村人がいないか探している場面を選んだ子ども）

Ｃ：梧陵は、無事に逃げられたのに戻ってきてえらい。

（稲むらに火をつけた場面を選んだ子ども）

Ｃ：人を助けるために、稲むらを燃やすなんてすごい。

Ｔ：どうして。

Ｃ：来年の大切な肥料を使って命を助けた。

Ｃ：自分も津波で大変なのに、稲むらに火をつけてみんなを救うことを考えられてすごい。

Ｃ：みんなで命を救っていた。

Ｔ：どうして。

Ｃ：梧陵が稲むらに火をつけたときに村人が文句を言わなかったっていうことは、村人も命を救うために貴重な肥料を燃やすことを我慢してる。

Ｃ：村人の貴重な肥料を燃やしてまで、数多くの命を救ったところがすごい。

ネームプレートで自分の選んだ場面を明確にした後にワークシートに記入させることで、自分の意見をしっかりと考えることができた。
また、ワークシートで自分の考えを整理してから友だちの話を聞くことで、自分の考え方と比較して友だちの意見を聞くことができたと考えられる。

○発問３

Ｔ：いろいろな友だちの意見を聞いてみてどう思いましたか。

Ｃ：みんないろいろ違った意見があって不思議だった。

Ｃ：僕は、津波の場面を選んだけれど、違う場面を選んだ友だちの意見も知れてよかった。

Ｃ：ネームプレートが貼ってある場面を見て、この場面を選んだ人はどんな考え方をもっているんだろうと思って、話を聞いた後、そういう考え方もあるんだなと感じた。

Ｔ：では、今日の話はここまでです。今度は、皆さんの今までの生活を振り返って、命は大切だなと考えたことはありますか。それは、どんなときですか。

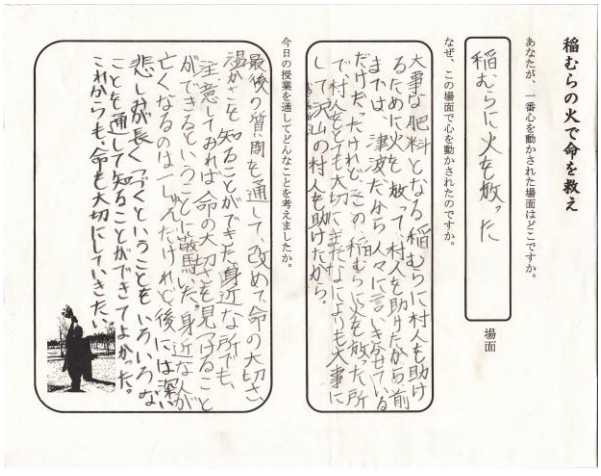
Ｃ：赤ちゃんが生まれたとき。

Ｃ：自分の妹が生まれて３日目くらいに死んでしまいそうになったとき。

Ｃ：いとこが生まれるときに、お腹の大きなところを見て、自分もそうだったのかなと思った。

Ｃ：水の中で息が吸えなくて、苦しい思いをした後に、息が吸えたとき。

授業後のワークシート


稲むらの火で命を救え

あなたが、一番心を動かされた場面はどこですか。

稲むらに火を放った　場面

なぜ、この場面で心を動かされたのですか。

大事な肥料となる稲むらに村人も助けるために火を放って村人を助けたから前まずは津波だから人々に言いきかせているだけだったけれどこの稲むらに火を放った所で村人をどうでも大切にまたなによりも大事にして村人の村人も助けたから。

今日の授業を通してどんなことを考えましたか。

最後の質問を通して、改めて命の大切さ温かさを知ることができた身近な所でも注意してみれば命の大切さを見つけることができるということ死に敏感いた身近な人が亡くなるのは悲しいけれど後には涙が悲しみが長く引くということをいろいろなことを通して知ることができてよかった。これからも命も大切にしていきたい。

今日の授業を通してどんなことを考えましたか。
（ワークシートより）

・命についてそんなに考えたことがなかったけれど、今日の授業の話（稲むらの火で命を救

え）で、もっと自分の命も他人の命も大切にしていかないといけないんだと思いました。
・最後の質問（振り返り）を通して、改めて命の大切さ、温かさを知ることができた。身近な所でも注意してみれば命の大切さを見つけることができるということに驚いた。身近な人が亡くなるのは一瞬だけれど、後には深い悲しみが長く続くということをいろいろなことを通して知ることができてよかった。これからも命を大切にしていきたい。
・みんなの「命は大切だな。」と思ったときを聞いて、命はとても大切ということが勉強になりました。これから命を大切にしようと思いました。
・命は大切なんだとあまり考えたことがなかったけれど、今日の授業を通して命は大切なんだなと考えました。また、いろいろな意見や考えがあって面白いな、不思議だなと思いました。
・自分の命だけを大切にするのではなく、他の人の命や動植物の命も大切にしなくてはいけないのではないかと考えました。
・いつ、何があるかわからないので、１日１日を大切に生きていきたいなと思いました。どんなものの命も大切にしなくてはいけないなと思いました。

（６）考察

児童は、今年東日本大震災を経験していることや、その後津波で被害を受けた地域のニュースを見ていたことなどから、資料の話にも興味をもって考えることができたように感じた。また、資料の内容が実話であるため、児童はより感情移入しやすく、自分とのかかわりの中で考えていたと思う。

展開前半では、ネームプレートで自分の選んだ場面を明確にさせたり、ワークシートに自分の意見をまとめたりしてから話し合わせたことにより、自分の意見を考えるときだけでなく、友だちの意見を聞く際も自分の考えと似ている部分や違う部分などを比較しながら聞くことができたように感じられた。

反面、ワークシートを書くためにじっくりと時間を取ると、その後の話し合いが短くなってしまうので、時間配分の難しさを感じた。

また、今年度は先に述べたように児童が東日本大震災を経験していたため資料の把握が容易であったと思われるが、このような経験のない児童の場合は資料の選び方をまた考えていく必要があるのではないかと思う。

５．研究の成果と課題

（１）成果

今回実践を通して、改めて学校の教育活動全体で行われる道徳教育と道徳の時間の関連の重要性について考えることができた。

生命尊重の授業を行う際、道徳の時間だけではなく、そのほかの教育活動と意図的計画的に関連させていくことで、道徳の時間の話し合いもより深められたのではないかと感じた。

本文中の実践にはないが、本校では長期休み前に「いじめ」についてのアンケートを児童一人一人に行っている。その中に「いじめられたらだれかに相談したい。」や「いじめを見ても人のことだから気にしない。」と問う項目があるが、夏休み前アンケートではどちらの項目も数名ずつ「相談したくない。」や「気にしない。」という回答があった。しかし、この学習を終えた冬休み前の調査では、どちらの項目の回答も「相談したい。」や「助ける。」へと変化がみられた。児童の普段の言動を聞いても、「うざい。」など相手を傷つけるようなものはほとんど聞かれなくなってきた。

（２）課題

道徳の時間を充実させていく上で特別活動の時間との連携も欠かせないものである。しかし、今回の実践では具体的な内容を示すことができなかったので、今後もさらに研究を続けたい。

今回は、生命尊重に重点を置いて関連を図ってきたが、その他の道徳的価値についてもさらに研究を深めていきたい。

６．おわりに

道徳の時間が充実していくことで、子どもたちはお互いの意見をじっくり聞き合うことができるようになってきている。今後も、このような温かな人間関係の中で生活をおくれるよう、日々の道徳教育に力を入れていきたい。

【実践記録】

より使いやすい通知表デジタル化システムの開発とその普及を目指して

船橋市立八栄小学校　　教諭　　河西　敦史

1　はじめに

現在、本校では通知表デジタル化の２年目を迎えている。本校だけでなく、私の前任校、そして近隣校でも同様のシステムが使用されている。また、他校でも様々な形式で通知表のデジタル化が行われているという話を聞く。どのような形式であれ、通知表という性格上、より間違いがなく、簡便なものであることが求められることは言うまでもない。

一方で、手書きでの通知表作成を続けている小学校も多い。手書きの通知表には、教師の個性や温もりも感じられ、もらう側として嬉しさもあるだろう。だが、期末の忙しい中で、非常に神経を使い、作成作業に負担を感じている教員も少なくない。

今回の実践により、より使いやすい通知表システムが確立されていき、期末の忙しさが少しでも緩和され、より多くの時間を子どもたちに向けられるようになることができれば、それに勝るものはないと考える。

2　実践の目的

誰でも簡単に入力・作成ができる通知表システムを考え、改良し、システムを各校に広めていく。その上で各校に於いて、スムースな実施・運営ができるようにサポートする。

各校で実施していく中で、意見を吸い上げ、より使いやすいシステムを確立していく。

3　実践の経過

まず、デジタル化を進めるにあたり、私が初任として赴任した前任校での取り組みが非常に大きかったといえる。赴任当時の通知表は手書きであったが、次年度よりの通知表デジタル化を目指し、当時の情報教育主任を中心としたプロジェクトチームが立ち上げられた。その一員としてチームに加われたことが、本実践の出発点である。

＜1＞通知表デジタル化システムの開発

デジタル化初年度を目指した当時の基本方針は、

①システム開発のしやすさを重視する。

②入力ミスが起きないようにする。

③パソコンが苦手な人でも扱いやすいものにする。

④基本データを入力することで、通知表以外の様々なものを作成できるようにする。

⑤通知表の形式は、極力手書きと変えない。

というものであった。

①としては、エクセル、アクセスの２つの候補があったが、検討の結果、エクセルを使って作成することとした。トラブルが起きても、少しパソコンを知っている人なら修正が容易であり、その後のバージョンアップもしやすいという点からである。

②の入力ミスを少なくする点についても工夫をした。例えば、『よくできる』『できる』『もう少し』の欄に丸を入力する際、実際に通知表の枠の中に一つずつ丸を付けていくやり方をとっている学校もあると聞く。だがそのやり方では、入れ忘れや、二重入力といった事態が起こりやすい。

そこで、通知表のフォームに直接データを入力するのではなく、成績入力シートと通知表をリンクさせるようにした。入力シートの各観点に『３・２・１』という数字を入力すれば、自動的に通知表の成績欄に反映されるというわけである。これによって二重入力を防ぐだけでなく、入力した際にセルの色や字体を変えることで、入力のし忘れも防いでいる。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	W	X	Y
出席番号	氏名	前																			
		国語					社会				算数				理科				音楽		
		関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解	関心・意欲・態度	考え方	技能	知識・理解	関心・意欲・態度	思考・表現	技能	知識・理解	関心・意欲・態度	創意工夫	技能
1	児童1	3	3	3	2	2	3	3	3	3	2	2	2	2	3	3	2	2	3	2	3
2	児童2	2	2	1	1	2	3	2	2	2	3	2	1	2	2	2	3	2	3	2	2

＜図１　入力ミスを防ぐ工夫＞

成績だけでなく、出席、クラブや委員会、特別活動の記録、行動の記録、所見文なども全てデータ入力シートから反映されるシステム作りをした。その際にも入力ミスを防ぐと同時に、③にもあるとおり、誰でも使いやすいよう、入力作業をできる限り簡素化した。行動の記録などは、『１』を入力することで通知表上には『○』

が付くようになっている。

出席番号	氏名	行動の記録									
		あいさつ	健康安全	忘れ物・整理整頓	健康	体力	自主	自律	責任感	創意工夫	思いやり
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	児童1		1			1					
2	児童2								1		1

＜図２　入力作業の簡素化＞

また、作業が苦手な方にも安心して作業してもらえるように､入力箇所以外には保護を掛け、数式を消してしまうことがないように配慮した。

このように通知表を作成することによって、手書きのときには補助簿と通知表とで２回作成していたものが、前期通知表を作成すれば補助簿の前期分が完成し、後期通知表も作成すれば補助簿全体が自動的に完成するようになった。

さらに、④にあるように、通知表を作成すると同時に作れるものはないか、ということで、初年度のものは、児童名簿・緊急連絡網・名札シールだけでなく新体力テストの入力フォームまで作れるようにした｡特に緊急連絡網などは、学級の役員が自動的に連絡網の最初に入るようにするなど、工夫されたものであった。

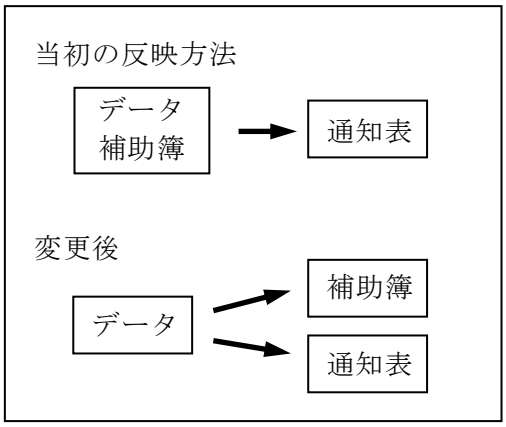
このようにシステムを開発していった訳だが、当時を振り返ると様々な苦労があった。プロジェクトメンバーは他の人に比べてパソコンが好きで、多少使いこなせる、といった程度であった。そのため、エクセルの本を購入し、放課後に集まっては、一つ一つの課題を解決していった。非常に大変な日々だったが、自身の技術の向上、そして先生方と同じ目標に向かって取り組めた貴重な日々だったとも言える。

結果、初年度のシステムとしては、非常に満足のいくものができあがった。しかし、様々なものを同時に作ろうとしたため、非常に重いものとなった。また、データ入力と補助簿が同一ファイルだったこともあり、保存するのに時間がかかるなど必ずしも使い勝手が良いとは言えなかった。

＜2＞通知表デジタル化システムの改良

２年目からは、システムを運用しやすいように、徐々に改良を重ねていった。

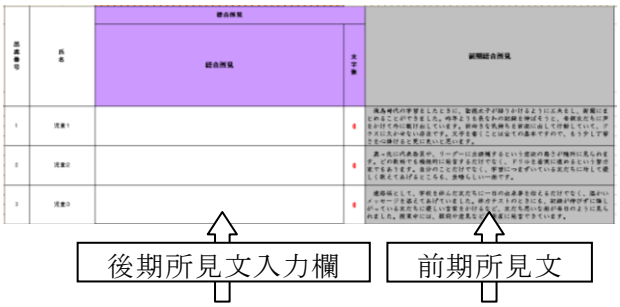
まず、初年度の大きな課題であった「非常に重い」という点を解決すべく、目的を通知表作成だけに絞り、データの反映も図３のとおりにした。結果、データを分散させることで軽くなり､保存等もスピーディにできるようになった。



＜図３　データの反映方法＞

他にも、より作成作業の負担を減らすべく、通知表の両面印刷に取り組んだ。だが、両面印刷はプリンタにかかる負担が大きく、プリンタの故障に繋がりやすかった。そこで通知表の表面をあらかじめ印刷しておき、それから各クラスで内側を印刷することとした。

また、後期通知表を作成する際に、前期に入力した項目や前期所見を、同一ページ内に表示するようにした。このことで、前期との重複を避けられるなど作業がしやすくなった。



＜図４　前期所見文章の表示＞

このように、運用していく中で、少しずつ改良を重ね、システムが確立していった。

＜3＞更なる改良と通知表デジタル化の普及

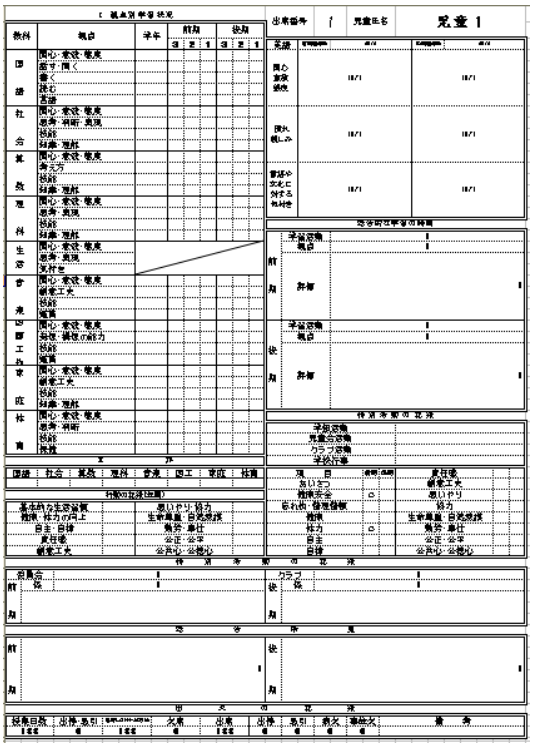
昨年度、本校に着任したことで、本校と近隣のＮ小学校の通知表をデジタル化することとなった。

両校でデジタル化を開始するにあたって留意した点は、保護者に配慮して、各校の既存の通知表形式を大幅に変更しないことである。作成作業は大きく変更となるが、保護者に出されるものは手書きの部分がデジタル化となっただけ

である。この配慮により保護者にもほとんど抵抗なく受け入れられた。

＜図５　既存の通知表とほぼ変わらぬ形式＞

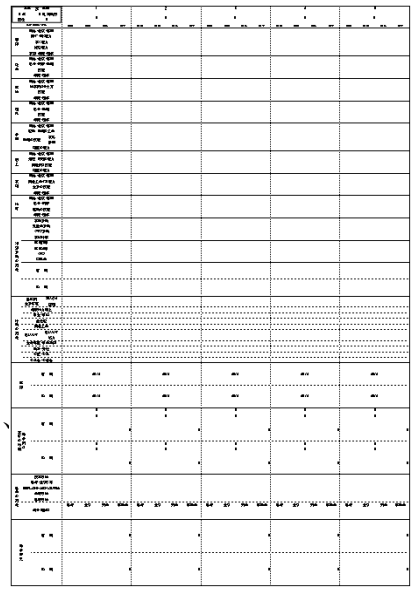
また、補助簿の形式を限りなく要録に近づけることで､要録への転記作業がしやすくなった。



＜図６　要録に合わせた形式の補助簿＞

一方でＮ小学校の場合、補助簿は１ページに児童５人分が入るようにしたいという希望があったので、そのようにカスタマイズした。

要録への転記のしやすさより、保管のしやすさを考えたものである。



＜図７　各校に合わせた補助簿＞

更に今年度より、通知表システムを新学習指導要領へ対応したものへと修正した。修正にあたり、今後通知表の文言を修正する際に、簡単に作業ができるように改良した。また、データの入力作業を行う際に、別紙の入力マニュアルを参照する手間を省けるように、データ入力シートの余白部分に入力方法や注意点などを記載した。実際に今年度より本システムを導入したＦ小学校では、私が赴いて研修などを行うことはなかったが、この変更点のおかげもあり、特段のトラブルもなく前期通知表の作成作業を進めることができた。

＜図８　入力方法や注意点の記載＞

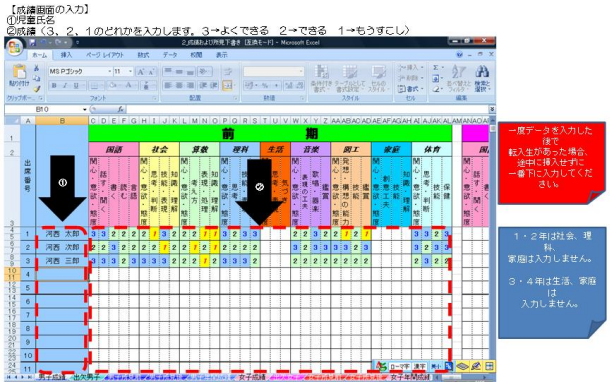
＜4＞通知表デジタル化システムの運用

システムの運用に当たり、先生方が作業に対して不安を覚えることが少なくなるように体制を整えることが重要であると考えた。そのため、本校およびＮ小学校の先生方に対し通知表作成の研修会を行った。

＜図９　校内研修会の様子＞

加えて、入力が苦手な方に対しては、学年内の情報担当を中心にフォローできる体制づくりをした。

また、昨年度までに於いては、マニュアルを作成することで、作業を安心して進めることができた。だが、前述したとおり、データ入力シートの余白部分に入力方法や注意点を記載することで、このマニュアルも不要の物となった。



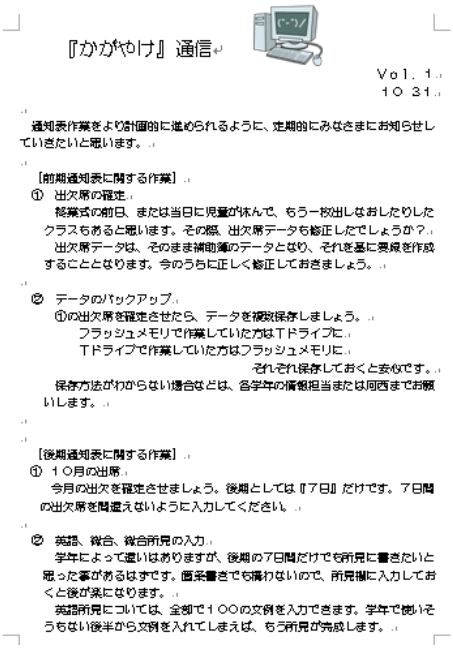
＜図１０　入力マニュアル＞

通知表のデジタル化の最たる利点は、作業をその都度進めることができることにあるといえる。今年度は、文章や項目などを新学習指導要領に対応させるために、通知表システムの完成が夏休み前になってしまった。そのため、前期は作業を計画的に進めるまでには至らなかった。だが、後期分はすでにシステムが完成しているため、通知表作成作業を進めることができる。

そこで、月に２回程度『かがやけ通信』を出して、先生方に対し通知表作業を少しずつでも進めるように促している。内容としては、以下の事柄の入力を先生方に促すものである。

①行事での入賞者や委員、作品展の入賞者
②行事、総合的な学習の時間での取り組み、
　英語学習での目立った児童の様子

これらの作業を蓄積していくことで、年度末の通知表作成作業が飛躍的にスムースになると思われる。


『かがやけ』通信

Vol. 1
10 31

通知表作業をより計画的に進められるように、定期的にみなさまにお知らせしていきたいと思います。

【前期通知表に関する作業】
① 出欠席の確定
　給食式の前日、または当日に児童が休んで、もう一枚出しなおしたりしたクラスもあると思います。その際、出欠席データも修正しただでしょうか？
　出欠席データは、そのまま補助簿のデータとなり、それを基に要録を作成することとなります。今のうちに正しく修正しておきましょう。

② データのバックアップ
　①の出欠席を確定させたら、データを複数保存しましょう。
　フラッシュメモリで作業していた方はＴドライブに。
　Ｔドライブで作業していた方はフラッシュメモリに。
　それぞれ保存しておくと安心です。
　保存方法がわからない場合などは、各学年の情報担当または同西までお願いします。

【後期通知表に関する作業】
① １０月の出席
　今月の出欠を確定させましょう。後期としては『７日』だけです。７日間の出欠席を間違えないように入力してください。

② 英語、総合、総合所見の入力
　学年によって違いはありますが、後期の７日間だけでも所見に書きたいと思った事があるはずです。画条書きでも構わないので、所見欄に入力しておくと後が楽になります。
　英語所見については、全部で１００の文例を入力できます。学年で使いそうもない後半から文例を入れてしまえば、もう所見が完成します。

＜図１１　かがやけ通信＞

４　実践の成果と課題

（１）実践の成果

通知表デジタル化を進め、改良を重ねていくうちに、現段階で十分に満足し得るものに仕上がってきている。今年度、本校では学級担任の約半数が入れ替わったにもかかわらず、問題なく作業を進めることができた。デジタル化２年目を迎えたＮ小学校では、講習会を開かずとも昨年度の経験をいかして無事に作業ができた。また、新たに導入したＦ小学校でも大きな問題もなく通知表作成作業が行われた。

実際に使用した先生方に、今年度のシステムの使い勝手を聞いてみたところ、次のとおりとなった。

【本校】
＜昨年度作成経験あり＞
　とても使いやすかった　１２人
　使いやすかった　３人
　使いにくかった　１人
　とても使いにくかった　０人
＜昨年度作成経験なし＞
　とても使いやすかった　１０人
　使いやすかった　３人
　使いにくかった　０人
　とても使いにくかった　０人

【Ｎ小学校】
＜昨年度作成経験あり＞
　とても使いやすかった　５人
　使いやすかった　１３人
　使いにくかった　３人
　とても使いにくかった　０人
＜昨年度作成経験なし＞
　とても使いやすかった　０人
　使いやすかった　４人
　使いにくかった　０人
　とても使いにくかった　０人

【Ｆ小学校】
＜昨年度作成経験なし＞
　とても使いやすかった　３人
　使いやすかった　６人
　使いにくかった　３人
　とても使いにくかった　０人

以上の結果から、このシステムが初めて使う人にも比較的簡単に扱えるものであることがわかる。また、各校の実情に合わせて少々カスタマイズする必要はあるものの、それぞれの学校

で十分に運営できるものであると言える。
　これまでに使ったことのなかったＦ小学校の場合、慣れという問題も大きいと思われる。さらに、前期の反省を活かしカスタマイズをすれば、次年度以降はもっとスムースに使えるであろう。
　但し、昨年度までに作業を経験している人の中にも「使いにくかった」と感じる人がいることも事実である。問題点に関してのシステムの改良や､他校との密接な連携などが求められる。また、使いにくいとの意見の中には、システムというより､「目が疲れる」とか「自身のパソコンスキルに課題がある」といったものもあったので、年度末に作業が集中しないように、前述のかがやけ通信などで計画的に作業を進めるように促していく。
　現段階では、同様のシステムを使っているのは４校に過ぎないが、次年度以降、デジタル化を始めたり、本システムに切り替えたりしようとする学校があれば、対応していきたいと考える。
　費用の面でも、手書きに比べて大幅に削減できた。実際に本校では、一昨年度の手書き時代には通知表印刷代が１０万円を超えていたが、デジタル化になって用紙代は２万円を切っている。レーザープリンタのトナーを１本購入したとしても、合計で５万円程であり、以前に比べると約半額となった。

(２)実践の課題

＜1＞プリンタの問題

　通知表の印刷に関して、両面印刷によるプリンタへの負担はなくなったとはいえ、全校児童数の２倍の印刷が必要である。現在、パソコン室のプリンタに関しては、使用年数の経過により業者への修理依頼が出せず、故障した場合でも、残っている部品のみでの修理対応となっている。そのために安心して使えるプリンタは校務機の１台のみとなっている。

＜2＞情報管理の徹底

　デジタル化によるデメリットとしては、情報漏洩の危険性の増加が挙げられる。フラッシュメモリなどで、簡単に持ち出せてしまう上に、ファイル交換ソフトなどによる個人のパソコンからのデータ流出の可能性が考えられる。

＜3＞各校での独自の動き

　現在、市内だけでも複数の方法でデジタル化が行われている。どの方法も一長一短があると思うが、それぞれが情報の共有もないまま、独自の方法でシステムを開発している。また、通知表自体も従来の用紙に印刷するもの、シールに印刷して用紙に貼付するもの、クリアファイルに入れるものなど様々である。

(３)課題への対応

＜1＞プリンタの問題

　デジタル化のシステムを維持運営していくためには、最低でも２台のプリンタと、その修理体制が必要である。よって、一刻でも早い新たなプリンタの配備と、その修理体制とが求められる。

＜2＞情報管理の徹底

　通知表がデジタル化であろうと手書きであろうと、情報漏洩に関しての問題は、使う人間にあるといえる。月に一度の安全点検時にもチェックしているとおり、個々が安全管理に意識を持ち、校内で作業をすることが第一である。だがそれだけでなく、学校全体として管理体制を強化し、止むを得ず持ち出す場合にも、管理職に届け出て、持ち出し簿への記載をするなどといったルールを守ることは言うまでもない。
　この便利なシステムを使い続けていくためにも、情報漏洩といった不祥事は防いでいかなくてはならない。

＜3＞各校での独自の動き

　より良いシステムを作るためには、各校で作成している通知表の情報を共有化することが必要であると考える。それによって、更に使いやすく間違いのないものとなるであろう。そのためにも、市内各校のデジタル化実施状況を捉えていきたいと考える。

5　おわりに

　改めて考えてみても、我々教員の仕事は年々増大し、時間に追われる日々が続いている。そんな中で、この通知表のデジタル化システムは教員の負担軽減に繋がると確信している。但し我々が楽をするためだけのシステムであっては意味がない。負担軽減となった分を、子どもたち一人一人の理解や教材研究といった、我々の仕事の柱である教育へと傾けることができれば、このシステムにかかわる者として嬉しい限りである。

【実践記録】

ディズニー流学級づくり

－永遠に完成しない場所,「また来たくなる」学級経営をめざした３年間の歩み－

船橋市立高根東小学校　教諭　　中澤　悠紀

１　研究のきっかけ

開園２５周年を迎えた今もなお、その勢いは衰えるところを知らず愛され続けるディズニーランド。大人も子どもも心から楽しむことができる魔法の王国である。そのリピーター率は９割といわれている。この数字を支えているのは、そこで働くキャストの接客スキルの高さである。このスキルについては震災時の見事な対応が注目され、世の中の多くの人の知るところとなっている。

千葉県生まれ千葉県育ちである私にとって、ディズニーリゾートはとても身近なものであった。記憶のないような幼い頃からベビーカーに乗せて連れて行かれ、もう何度訪れたかわからない。小学校の卒業旅行も中学校の卒業旅行もディズニーに行った。しかし何度行っても「また来たい！」と思える場所であった。

まさか自分があの場所でおもてなしをする側に立つとは夢にも思わなかった。高校までバスケットボール一筋で生きてきた私にとって、大学入学後初めてのアルバイトがこれだった。もしこのアルバイトをやっていなかったら私の人生は大きく違ったものになっていただろう。まさに運命の出会いだ。他の職種もいくつか経験したがこんなにも楽しくてやりがいのある仕事はそうそう無い。お金のためではなく、お客さんが喜んでくれることが自分の喜びに繋がるステキな職場である。

働いているうちに、「楽しくてまた来たい」と思える場所にしていたのはここで働く“人”のおかげであるということがわかった。そして後に私の本業となる“教育”と共通する点が多いということを漠然と感じていた。ゲストのために動くキャストの姿は子どものために動く教師の姿と重なる。

接客業界の中ではトップレベルといわれているディズニーの接客。その身のこなしや考え方は接客業界にとどまらず、教育界、さらには人間関係構築の基礎(コミュニケーション)に関わる大事な要素がたくさん詰まっている。

学校現場ではいじめや不登校など、日々様々な問題が起こっている。ディズニーリゾートで学んだ経験を学級経営とうまく結びつけることができれば、子どもたちにとって、学級がディズニーリゾートのようにまた来たくなる楽しい場所になるのではないかと考えた。私たち教師＝キャストにできることは何だろうか。

念願の教員という職につくことができ３年目を迎えた。まだまだ未熟ではあるが、これまでの３年間ディズニーのフィロソフィーを丸ごと受け入れて学級経営を行ってきた。改めて見直した時に良かった点と調整すべき点、自分なりに何がつかめたのかをまとめることにする。

２　ディズニーのフィロソフィーとは、そして教育との共通点について

では、そもそもディズニーのフィロソフィーとはどのようなものか。どのようなことを大切にして接客がなされているのかを先行研究も基にしつつ簡単に述べていく。それとともにわたしが考える教育との共通点を明らかにする。

（１）キャスト＝役を演じる

ディズニーには他の接客業とは一味違うユニークな言葉がたくさんある。例えば、従業員(アルバイト)のことを“キャスト”お客さんのことを“ゲスト”といい、ゲストが楽しむ場を“オンステージ”倉庫やオフィスなどがある場所を“バックステージ”と呼んでいる。これはただ働くのではなく「ディズニーランドという舞台でそれぞれの役(キャスト)を演じ、ゲストに楽しんでもらう」という大筋があることを示している。従業員一人ひとりが、各自に与えられたお土産屋さんのレジを打つ役やアトラクションを動かす役を演じているということになっている。このようなディズニーフィロソフィーを入社と同時に叩き込まれる。また、働き始める前に教わる事項として「すべてのゲストが VIP」「毎日が初演」などの言葉があるのだが、これもこの考え方をよく表しているといえるだろう。キャストはこのコンセプトを常に意識して行動することにより、ゲストのことを第一に考えて動けるようになる。日常生活でどんなに辛いことがあってもオンステージに立ったら、ディズニーランドを作り上げる“キャスト”としての役割をこなさなければならないのだ。キャストが役割を演じきることにより、夢の国の魔法が保たれているのである。

これは子どもたちの前では常に“先生”としてふさわしい振舞いをし、子どもたちのことを第一に考えて行動する教師の姿と重なることが多いのではないだろうか。教師という役を演じているという意識を持ち、子どもたちの喜ぶ姿を見て喜びを感じられるようにしたい。

また、キャストはオンステージでは常にゲストから見られているという意識を忘れてはならないとされている。立つ姿勢や身だしなみなど細部にわたって規定がある。これも夢を壊さないためのものであり、公務員の信用失墜行為の禁止とも重なる。

役割を“演じる”という言葉を使うと、心と心のふれ合いが薄まるような感じを受けるかもしれないが、それはちがう。私自身はまだまだ教師としては未熟であるがプロ意識を持って教師という役を演じきることができれば、子どもたちにとってそれは貴重な出会いとなるはすだ。子どもにとっては人生の中の貴重な１年を共に過ごすわけであるから、その責任を果たせるよう今できることを精いっぱい行い、立派な教師を目指して演じることが大事になってくると考える。

（２）キャストが目指すゴールと魔法のコツ

すべてのキャストが目指すゴールは「ゲストにハピネスを提供する」ことだとされている。

そのためには楽しいアトラクションとおもてなしをするキャストと、整美された環境が必要である。

２万人いるキャストが各々ゴールに向かって勝手に動くのではうまくいかない。実は明確な行動指針があるのだ。これは「魔法のコツ」とされすべてのキャストが共通理解し、これに則って行動している。「SCSE」と覚えやすい名前で呼ばれるこの指針があることで、一つのゴールに向かってそれぞれのとるべき行動を考えることができるのだ。詳しくは表１に示した。

表１　ディズニーの行動指針のポイント（1）

１．Safety　安全性
・安全を重視した施設設計
・すべてのキャストが、安全意識をもつ
・安全最優先のマニュアル、ルールづくり
２.Courtesy　礼儀正しさ
・３つのキーワード【笑顔】【挨拶】【アイコンタクト】
・ゲストの望みに応える
・相手の立場に立って自分から行動する
３.Show　ショー
・ディズニールックを守る
・キャストとしてプロ意識をもつ（オンステージ以外でもゲストの夢を壊さないよう気を配る）
４.Efficiency 効率
・自分の役割をムダ・ムリなく果たす
・チームワークを大切にする
・ゲストのムダ、不満をカバーする

キャストにも様々な職種がある中で、ウォルトディズニーが最も重きを置いていたのは掃除をするキャストだったという。ゲストに“楽しい”と感じてもらうには、常に清潔に保たなければならない。また常にきれいに保つことで、汚したくない気持ち、うれしい気持ちといった相乗効果も生まれる。実際に、ポップコーンなどをこぼした時の対応の早さは目を見張るものがある。

これらの考え方は学級目標および学級経営そのものに通じると考える。

３　研究仮説

前項のようなディズニーの考え方を生かした学級経営を行うことができれば、子どもたちにとって学校が「またきたくなる楽しい場所」になるのではないかと考えた。そうすれば、いじめや不登校も防げるのではないかと考えた。

４　実践の手だて

表２は、前述の行動指針のポイントを参考にし、私が学級経営の場合に置き換えて考えたものである。

表２　学級経営における行動指針のポイント

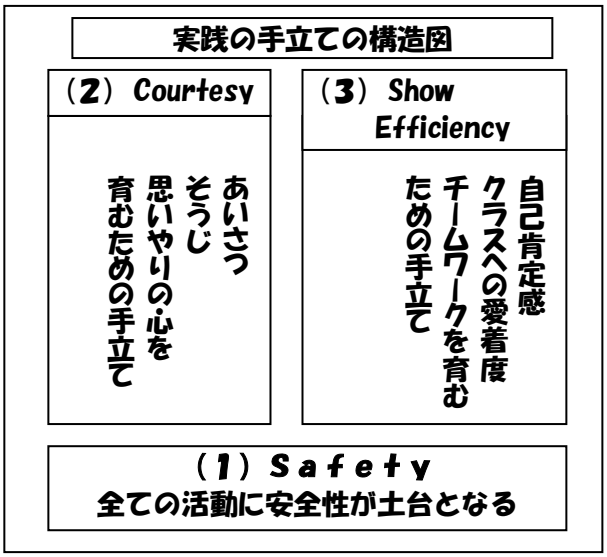
1.Safety＝安全・安心なクラスづくり
活動をする際は安全面に配慮することを第一に考える。怪我や疾病だけではなく、一人ぼっちや仲間はずれになる児童がいないようにすることも留意する。
2.Courtesy＝道徳で思いやりの心を育てる。
思いやりの心を育み、相手の立場に立って自分から行動できる人材を育成する。
3.Show＝造形活動を多く取り入れ、表現することの楽しさを味わう
児童の「おもしろそう・やってみたい」という気持ちを起こさせるような教育活動の工夫や、児童の意見を汲んだ活動を大事にする。
4.Efficiency＝チームワークをはぐくむ
協力することの大切さ・楽しさ・有用性を感じられる活動の工夫

これを元に、普段の学習活動のなかで取り入れられる場面を思いつく限り実践を行った。

「ＳＣＳＥ」が私の実践とどのような形で関

わってくるかは以下の表３のような構造で捉えている。

表３　実践の手立ての構造図



「SCSE」はこの順に優先順位があり，Safetyの土台に２本の柱が立っている。それぞれの実践を手立てに分けて説明していく。

５　実践の経過と内容

（１）Safety　安全性

活動をする際は安全面に配慮することを第一に考える。ここでいう安全とは怪我や疾病といった身体的な面だけを示すのではない。一人ぼっちや仲間はずれになり，苦痛や悲しさを味わうことなく安心して過ごせる精神面の安全も含んでいる。

いくら楽しい活動を行っていても，怪我をする子が出てしまっては台無しになってしまう。また，学級経営の中で，仲間外れになっている子がいるままでは意味がない。

全ての子どもが安心して安全に過ごせるよういかなる場合もSafetyを第一に優先し，安全が保たれない場合は，作業を止めてでも適宜指導する。また，担任として子どもたちが安心して過ごせるような温かい雰囲気作りに努める。

（２）Courtesy　礼儀正しさ

以下にに示すのは表２の行動指針のポイントのうちCourtesyの部分にあたる。ディズニーのフィロソフィーを子どもに伝え、共通理解をはかるための手立てである。

主に「あいさつ」と「そうじ」を通して思いやりの心を育むのがねらい。学級開き～３か月程で定着させる。

①＜学級活動＞これが理想の学級像！

学級開きの際、ディズニーのパークに行ったことがあるかを聞き、自身のキャスト経験を話して、このクラスもディズニーランドのように楽しくしていきたいと教師の目指す学級像を語る。そのためには一人ひとりの協力が必要だと伝える。

ほぼ９割の児童がパークに行った経験があり、ミッキーをはじめとするディズニーのキャラクターやアニメ映画は児童全員の知るところであり、教師の目指す学級像が伝わりやすかった。

その後，子どもたちも自己紹介を行い，これから共に過ごす仲間を確認する。

［ねらいと効果］

・共に作った学級目標。
・教師の目指す学級像を語り、賛同を得る。
・これから１年間共に過ごす仲間を確認し、１つの目標に向かってまとまっていこうという意識付けをする。
・自己紹介をきっかけにしたコミュニケーションを生む。

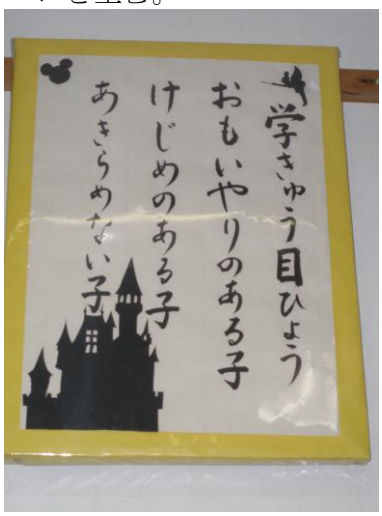


図１
＜学級目標＞
いつも見える位置にディズニーを意識できるデザインで目標を掲示している。

②＜学級活動＞笑顔の魔法～あいさつ～

実際にアルバイトの研修で行ったあいさつの練習を学級でも再現した。

まず、あいさつはいつ、どんな時に、何のためにするのかを話し合う。キャストも最も大事にしているのがあいさつであるということを話し、ディズニーリゾートで行われている上手なあいさつのコツを伝授するという形で始める。

次に、二人組になり【笑顔】【あいさつ】【アイコンタクト】の３つのうち、１つずつ欠けたあいさつをし、受け手の印象の違いを発表する。そうして３つのコツがそろってはじめて、されてうれしいあいさつになるということを実感を伴って理解する。

［ねらいと効果］

・児童は３つのコツがそろったあいさつをされた時に「自然と笑顔になってしまう」と言っていたが、「これが笑顔の魔法だよ」と伝えた。
・毎年、４月に道徳の時間をつかって行い、そ

の後は毎朝日直とアイコンタクトをしながらあいさつできるかをチェックしている。
・定着させるためには繰り返し指導が必要。朝の会ではできているのに，子ども同士や他の先生へのあいさつは，意識していないとできない。

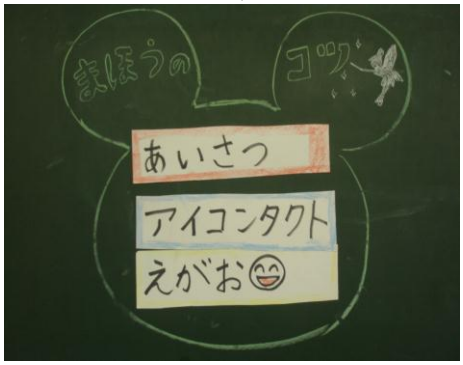


図２
＜掲示物＞
背面黒板にあいさつのコツが書いてある。

③＜道徳＞学校の掃除もプロに任せちゃう！？

４月、そうじ分担を決める前に道徳の時間を１時間使って行う。

ディズニーランドが楽しいのには秘密がある。それはそうじ上手なことだという話をする。パークでポップコーンをこぼしたことがあるかと聞くと毎年２人くらい経験があるので、その児童にその後どうしたか体験談を話してもらう。すぐにキャストが片付けてくれるのだが、それはなぜかを考えさせ、出た意見を黒板にまとめていく。そうすると見た目の問題と安全面の二種類の意見が出てくる。ゴミだらけでは楽しい気分にはならないし、ゴミだらけですべって危ないような場所には行きたくないことを確認し、「そうじって大事なものなのだ」ということをおさえる。

その上で、きれいに保たせたいだけなら小学校のそうじも子どもたちでやらないで、お金を払ってプロに頼めばいいのではと教師から提案すると、児童は口々に反対した。自分の使った場所なのだから自分たちできれいにしなければという意見が出たところで肯定し、一日のうちで掃除の時間はたった１５分間、どのように活動したらよいかと問うて終わりにする。

児童はそうじがしたくてたまらない様子で、「休み時間まであと５分だけどどうしようか」と言うと、「教室のゴミ拾いをしたい」という意見が出て、自主的に教室をきれいにしはじめた。みんなも掃除のプロをめざして頑張ろう！と声をかけ，きれいになった教室を見て，「掃除ってきれいになると意外と楽しいね」という声があがった。

［ねらいと効果］
・学校生活においての掃除の意義を改めて考え、共通理解をはかる。
・掃除を「面倒なもの」から「楽しいもの」へと意識改革し、意欲を高める。
・一時的に高まった意欲が持続できるよう日々の声かけは必要である。

④＜清掃時＞そうじ場所探検ツアー

掃除の時間が始まる最初の時間に行う。

まず、掃除の時間の前に黒板に大きく「掃除場所探検ツアー」と書く。教室から順にろうか、ほかの清掃分担場所を全員で周り、机の運び方、ほうきの持ち方、はく方向、ぞうきんの横ぶきなど、細かい手順を全員で確認する。

特に、ろうかでの横ぶきに関しては２列に並ばせ、２人ずつ教師がチェックして合格かどうか評価する。並んでそうじの順番をまつ間が少しアトラクションの待ち時間のように感じられるように場を工夫する。

［ねらいと効果］
・掃除を「面倒だ」と感じる要因には，手順が曖昧であることが挙げられるので，「こうすれば賞賛される」という正しい清掃手順を共通理解する。年度初めに時間をかけてでも丁寧に確認することが大事である。
・子どもたちは，正しい手順さえしっかりわかれば違う手順で行っている子がいても，子どもたち同士で確認し合うことができるようになった。

⑤＜学級活動＞そうじ名人認定証の贈呈式

掃除の手順を守り、かつ相手の立場に立ってすみずみまできれいにしようと努力が見られる児童には「そうじ名人認定証」を発行している。学期に二度、審査を実施し、受賞の回数を重ねる程ランクが上がっていくというシステムになっている。最終の称号はそうじの「プロ」であり，４月の話とリンクするようになっている。

［ねらいと効果］
・掃除を頑張っている児童への賞賛とさらなる意欲付け
・女子はもともとよく頑張っていたのだが、この賞を目指して男子の意欲が上がった。また、ほうきやぞうきんの扱いを子ども達同士で教え合う姿が見られたり、名人を取った子どもたちが，係活動として「おそうじ係」を作りたいという意見を出し、教室環境の保全について意識が高まった。おそうじ係は、帰りの会で掃除の時間に気づいたことを発表したり、掃除手順の講習会を開いたりと意欲的に活動している。

（３）Show　ショー＆　Efficiency　効率

以下に示すのは行動指針のポイントのうち Show,および Efficiency の部分にあたる。年度

初めから夏休み頃までで、Courtesy を身につけてから行うことで、子ども達の学びが深まると考える。子どもたちは図工が大好きだ。そこで自分の作ったもの、表現したものを教師や友だちに肯定される経験を多く積むことで、自己肯定感を養い、学級への所属意識を高めクラスの愛着度を上げるための手立てである。

① ＜図工＞こっちにおいでよ（２２年度）

表４　「こっちにおいでよ」指導計画

構想 ２時間	**作業割り振り １時間**	**作業 ８時間**
ルール作りと運営 ９月～１２月		**お別れ**

【構想】（２時間）

「段ボールがたくさんあるから、みんなが中に入って遊べるくらい大きな物を作れたらいいなと思うんだけど、何がいいかな？」と問いかけ、話し合いを行った。いきなり聞かれてもイメージがわかない様子だったので、私自身が幼少期に通っていた造形教室で行った同様の工作の活動を子どもたちに話した。たとえば宇宙船や（ボタンもリアル）回転寿司（本当に回る）ゴジラ（中に入って外が見える）を作り、どれも本当に楽しかった。是非みんなにも味わってほしいと話をした。

次に，考えてきたものを発表する。電車、ロケット、家、迷路、熊、などが挙がった。最後にある子が「スカイツリー！」と言ったのがとてもインパクトがあり、「じゃあ、スカイツリーに対抗して、１－３タワーにしよう！」と話が進み、満場一致で１－３タワーに決定した。

タワーをどんな形にするか、一人にＢ４の 1/4 の大きさの紙を配布して、１－３タワーデザインコンテストを実施した。書けた子から黒板に作品を貼っていき、全員のものが張り終わったら、その中から、誰のどの部分が気に入ったか書いて投票し、数が多い意見を併せて１－３オリジナルの形を筆者がデザインした。

【作業割り振り】（１時間）と【作業】（８時間）

翌日までに、その構想を元に更紙で模型を作り、教卓の上に置いておいた。朝来るなり、興味津々な様子で模型を眺めていた。その模型を見てイメージが沸いたらしく、早く作りたくてたまらない様子であった。

作業は班ごとに分担することにした。各班のリーダーに構想を伝え、仕事を班員に割り振ってもらった。

部屋の中（内装インテリア）部隊
すずらんテープ部隊
かべ（外壁塗装・糊付け）部隊
屋根と窓部隊・入り口部隊
段ボールカッター大工部隊【２班】

図３　＜外装＞自画像を壁面に貼った。クリスマスが近いので電飾もつけた。

図４＜内装＞　ござを敷き、上履きをぬいで入る。後日、脱いだ上履きを入れる下駄箱まで作っていた。段ボールで作った机の上で給食も食べられる。

【運営】（９月～１２月）

「全員は入れないのでルールが必要だ。」「せっかく作ったのに誰が使うかでけんかをしていたら楽しくないし意味がない。」ということから，学級会を開いて話し合いが行われ、みんなで使用上のルールを決めた。一週間交代で１号車優先期間といった形で回していく。早朝などで利用者がいない場合は、了解が取れれば他号車でも使用可。日直は建物内で給食を食べることができる。

【お別れ】

ある冬の日、屋根が落ちた。屋根を外して１か月ほど使っていたが、安全面が確保されない建物では安心して遊べないし、もしけがでもしたら大変ということで壊すことになった。

［ねらいと効果］

・協力して作品を作り上げることの楽しさと達成感を味わう。

・作品の制作過程及び、完成品の中での遊びを通したコミュニケーションの場を作り、友だちとの適切な関わり方を体験する。

・１年生という発達段階にもかかわらず驚くほど自主的に動くことができた。何したらよいかわからずたたずむ子がいない状況。内発的動機づけのすごさを実感した。

② ＜図工＞ペットボトルいかだ

着衣泳の際、１人１個ペットボトルを持ってきていたので、「これをつなげて船を作ったらおもしろそうだね。」と呟くととてもやる気になった。隣のクラスからもペットボトルをもら

ってきて、翌日渡した設計図を元に、工作が好きな子が指揮をとって造りあげた。
　次回の水泳の自由時間に浮かべて遊んだ。
［ねらいと効果］
・廃材を用いて作品を作り出す楽しさを味わう。
・水泳指導における思い出づくり。
・普段飲み物が入っている入れ物からいかだができることに感動していた様子だった。一度に３人しか乗れないので混雑したが、子ども達の中でルールを決め（１組１０秒で交代等）仲よく遊べていた。

図５＜ペットボトルいかだ＞
３人で乗ると安定した。

③ ＜図工＞だんだんだんぼーる（２３年度）
　梅雨の時期外で遊べない日に教室の後方に段ボールを置いておいた。子どもの方から「これを使って遊んでもいいですか」という声が挙がり、了承すると洞窟のようなものを作りはじめた。その中で怪談話をして楽しんでいたが，すぐに壊れてしまった。
　今回は有志だけだったので，「クラスで一つのものを作りたい」という声が上がったため，またみんなで段ボールを集め，③の実践と同様構想→作業割り振り→作業の順に進めていった。今年度は怪談話が流行っていたので「お化け屋敷風の家」ということになった。
［ねらいと効果］
・協力することの楽しさと意義を学び、チームワークを高める。
・班ごとに任された仕事を意欲的に取り組んでいた。

図６＜お化け屋敷の脱出口になるすべり台＞
段ボールだけでできており、試行錯誤を重ね、３年生の子ども達が思いっきり遊んでも壊れないような強度にした。

６、実践の成果と課題
　ディズニーリゾートは行っても行かなくてもよい場所であるのにまた来させる引力がある。学校は子どもたちにとって行かなければない場所であるのに、不登校・登校しぶりなどの問題がなくならない。
　この論文の執筆にあたり、２年間の取り組みをふり返り、今年度改善を加えて、系統的に学級経営に取り入れてきた。本学級にも６月頃から登校しぶりの傾向がある児童が１名いた。その児童の対応にも役だった。いかに楽しい場所にできるかを考えて手立てを講じてきたところ、９月から現在までしぶることがなくなった。これを成果として挙げるには他の要因もたくさんあるのだろうけれど、ひとまず安心である。

７，おわりに
　永遠に完成しないテーマパークという言葉がある。私はこの言葉が大好きで、教師という職業にも通じると考える。
　パークと学校、全く違うフィールドだが違うからこそ、ますます大事なことがあると感じた。これまで述べてきたことは学級経営の一部でしかない。けれど、確実に有用性を感じることができた。
　ディズニーリゾート側も，私が教職に就いたのと同じ３年前に現役のキャストが学校へ出張授業を行う「魔法の教室」という事業を始めている。年々，その学習プログラムが充実してきており，これからは，ディズニーが培ってきたノウハウがより教育に普及していくだろう。
　私一人ではまだまだ未熟な実践であるが，これからもずっと学び続け、新たな手立てを増やし、系統性なども考えながらディズニー流学級づくりを深めていきたい。

【参考文献】
（１）　福島文二郎『９割がバイトでも最高のスタッフに育つ　ディズニーの教え方』株式会社中経出版、２０１０年、８１頁
（２）　HP『東京ディズニーリゾートキャンパス』
http://www.tokyodisneyresort.co.jp/campas/

【研究論文】

自己を見つめ，自己の生き方を考える高学年の道徳の時間

－「自己の生活を振り返る」指導の充実を通して－

船橋市立行田西小学校　　教諭　八木橋　朋子

Ⅰ　研究主題について

「自分に自信がもてず，将来や人間関係に不安を感じている子どもたちの現状」を受け，道徳の時間の目標に「自己の生き方についての考えを深め」と示され，「自己の生き方」が，強調された。小学校段階でも，自己の生き方の指導の充実が求められている。

多くの児童が発言し，さまざまな考えにふれることを目指し，「心に響く道徳の時間の充実」を実践し，児童の関心が高まった。展開前段の資料を生かして行われる話し合いに楽しさを見出している児童が多く，話し合いも活発になった。ところが，展開後段の自分の生活を振り返る場面になると発言が少なくなる傾向は相変わらずである。これは，この場面の指導が固定化したり形式化したりし，児童が十分自分を振り返ることができないのではないかと考えた。この場面の充実を図れば,展開前段で話し合われた価値に照らして,もっと深く自分の生活を振り返ることとなり,それが，自己の生き方を考えることにつながるのではないかと考えた。

資料を通して道徳的価値についての話し合いを深め，さまざまな考えにふれさせ，自分なりの考えをもたせていくことが自分の生活を振り返ることの前提である。その上で，振り返りの場面で，道徳的価値をどういった視点で児童にとらえさせるのか，そのためにどのような発問や手法，表現方法が有効かについて，考えていくことが必要である。さらに他の教育活動との関連を考え，日常生活の中で自己を意識し，見つめていけるような取り組みを行っていく。

これらにより，児童がありのままの自分をじっくりと見つめ，これからの自己の生き方について深く考えていくことができるのではないかと考えた。さらに，児童が自分の力を信じ，未来へ逞しく歩む力へとつなげたいと思い，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

自己の生活を振り返る場面を中心として，児童が自己を見つめていくための発問や手法は，どうあるべきかを究明し，自己の生き方をより深く考える指導へと発展させる。

Ⅲ　研究の実際

１　研究仮説

資料を通して，道徳的価値についての話し合いを深め，自己の生活を振り返る場面と響き合わせる。児童が表現しやすい発問や手法，日常の取り組みなどの指導方法を工夫していくことで，児童は自分を見つめ，自己の生き方や生活に対する意識が深まるだろう。

２　研究内容・方法

(1)理論的考察

(2)実践授業を計画し，実施する。

道徳の内容に示されている高学年内容項目から今日的な課題とされている項目を取り上げ，それぞれについて各２時間の授業計画をする。道徳的価値に迫るための授業の工夫，第１時と２時のねらいとする価値の発展のさせ方，展開後段における振り返りの方法，自己の生活を見つめていくための取り組みとその活用等について，授業を実施する。（取組①とする。）　さらに，上記で取り上げた以外の内容項目の自己を見つめさせる時間の工夫をする。（取組②とする。）

ア　本研究の概要　図示すると以下の通り。

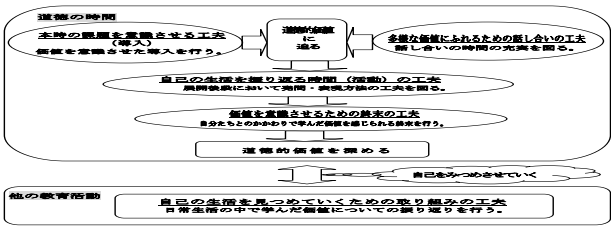


図１

イ　対象

船橋市立A小学校5年A組28名（男子13名　女子15名　うち１名は9月から転入）

ウ　期間　平成23年4月から12月

(3)実践授業についての分析と考察を行う。

ア　授業分析　児童の反応（発言等），ワークシートの記載内容の分析

イ　児童の道徳の時間並びに自己についての意識の変化

３　研究の具体的内容

(1)理論的考察－「自己を見つめる」ことの重要性－

『平成20年度小学校学習指導要領解説　道徳編』の道徳の時間の目標には，「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深める」と示されている。道徳的価値の自覚を深めることが，自己理解・他者理解・人間理解につながる。そしてそれが，道徳的価値の基盤となり，そこから自己の生き方についての考えを深めていくことができるとされている。つまり，展開前段で深めた道徳的価値を，後段において自己の生活に照らして考えさせるなどして，自己の生き方についての考えを深めていくことが必要であるということがいえる。

瀬戸は,「まず,道徳の時間に重要で不可欠の要素として『価値の把握』がある。これは不可欠な要素ではあっても,到達点ではない。到達すべきことは，次の『自己を見つめる』という機能である。自己を見つめるという方法を通して,自己を知ることになる。そして,道徳の時間は,そのためにこそあるのである。」と主張し，価値の把握だけにとどまっていては，道徳の時間の目的に達していないと述べている。自己を見つめ，自己を知ることこそ道徳の時間の到達点であり，ねらいとする価値に照らして，自分はどういう人間であったのかを考えることによって初めて自己を知ることになるとしている。道徳の時間において「自己を見つめていく」ことこそ，最も重要視しなくてはならないことなのだ。

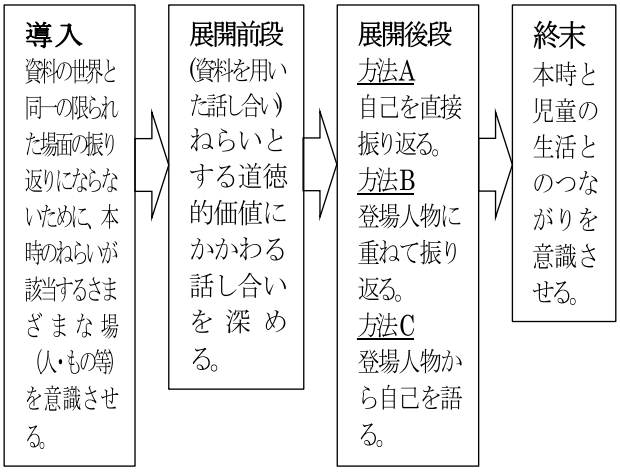
また永田は，「道徳教育は，生きる楽しさや活力を生み出すもの。」とし，「①子どもの心を揺り動かす。②子どもの問題意識を呼び覚ます。③多様な考えにふれる場をつくる。④自己をじっくり振り返る場をつくる。（自己との対峙）⑤日常生活とつなぐ手立てをうつ。」という点に看眼することが大切と述べている。瀬戸同様に，道徳の時間は，価値の把握を行った上で，自己を見つめさせていく時間であること。つまり，児童の心を揺さぶり，語り合った上で，自分自身にしっかり向き合わせていくことが道徳の時間には必要なのだ，ということを強く述べている。

さらに押谷は，「主体的なかかわりや内面的なたがやしが行われるためには，今までの自分自身との問いかけがなければ不可能です。（中略）自分自身との出会いとは，今の自分よりも一歩進めた自分への挑戦であり，それらを繰り返すことによって，より高い道徳的価値観を身につけた人間へと成長していく意欲をもてるようにすることにあります。」と述べている。

これらから，価値の把握にとどまるのではなく，道徳的価値に照らして自己を見つめ，自己に問いかけ，自己の生き方について考えさせていくことが道徳の時間の根源的なねらいといえる。そして，これこそ道徳の時間において，最も重視しなくてはならないことだといえよう。またこれは，現在強調されている自己の生き方を深めていく道徳教育及び道徳の時間に直結することといえる。このことから，本研究においては，価値の把握（道徳的価値に迫る），そして自己に問いかける場としての自己を振り返る時間の工夫を大きな柱とした。

(2)実践授業の実際

ア　本研究における学習過程の基本構想



イ　取組①　同主題での2時間の授業構成

	主題名・資料名（出典）・実践日（すべて2011年）・ねらい
1-(1)基本的な生活習慣	わがままをしないで　流行おくれ（学研）　9/8 ・自分の生活を見直し，節度を守り，節制に心がけようとする心情を育む。
	自分を育てる力　もう一度エベレストへ（文溪堂）　11/4 ・生活習慣の大切さを知り，節度節制を守って生活していこうとする態度を育てる。
価値の発展のさせ方	第1時においては節度節制の中でも，わがままな心をおさえ，物を大切にすることや整理整頓することをねらいとした，2時においては，より高いものに向かうために，自分で自分を謙虚にみつめ，力をつけていくという価値へと発展させた。
2-(2)思いやり・親切	だれに対しても思いやりの心を　「父の言葉」（文溪堂）　7/11　※外部講師による授業 ・誰に対しても思いやりの心をもち，相手の気持ちや立場を思いやりながら自分のできることをしていこうとする心を育てる。
	心の中の思いやり　花さき山（光村図書）　11/11 ・自分の中の優しい心を見つめ，相手の立場に立って親切にしようとする心情を養う。
価値の発展のさせ方	有名人の実話を活用し，「思いやり」とは何か考え，自分自身を見つめさせていった。2時においては，寓話の世界の中に引きこみ，心の内面を見つめ思いやりの心に目を向けることから相手の立場にたって考え，親切にするということへ価値を発展させた。

3-(1) 生命尊重	命のつながり　いのちのバトンタッチ(いのちをバトンタッチする会)　10/29 ・命は有限であるが，懸命に生きた命は，他の命を支えることになることを知り，命を精一杯輝かせ生きていこうとする態度を養う。	
	自他の生命の尊重　命のビザ（金の星社）　11/18 ・生命がかけがえのないものであることを知り，自他の生命を尊重する心情を育てる。	
価値の発展のさせ方	命は輝きを放つかけがえのないものあること，そして他人の命も同様にかけがえのないものであるという自他の生命の尊重へとねらいを発展させた。	

ウ　取組②　振り返りの場面の工夫

1の視点　(2)不撓不屈 (3)自由・規律 (4)明朗・誠実 (5)個性伸長 (6)創意・進取

2の視点　(1)礼儀 (3)友情・信頼 (4)謙虚・寛容

3の視点　(2)自然愛

4の視点　(1)公徳心 (2)公正・公平 (3)役割・責任 (6)愛校心

以上，13の内容項目（15時間・年間指導計画に配列されている取組①以外の内容項目）の振り返りの場面の方法を考えた。

(3)実践授業についての分析と考察

ア　授業分析

(ア)道徳的価値に迫り，深める授業の工夫

a　本時の課題を意識させる工夫

導入時において価値への興味づけを強く意識した導入を中心に行い，本時の学習内容（ねらい）を児童が意識できるようにした。また，導入で想起させた内容を振り返りの場面で活用した。これは，授業がねらいからそれることを防ぐ効果もあった。

b　多様な価値にふれる話し合いの工夫

(a)資料提示…高学年のこの時期は，理解力が高まるため，教師が範読することを主とし，内容に応じて，発表ソフトを用いた映像による提示も行った。BGM・効果音を活用し，資料の臨場感を高めた。結果，話の世界に無理なく入り，内容も理解できた。

(b)資料を活用した話し合い…さまざまな手法を資料内容に合わせて行ってきた。ディベート的な話し合いや意見をいくつかに整理しての話し合いなど，より多くの意見にふれられるようにした。これらにより，多くの児童が発言するとともに，発言できない児童も多くの友達の考えにふれることができた。児童のアンケートからも，「自分の考えが自由に言えるから楽しい。」「いろいろな人の考えにふれられるから楽しい。」と評価されている。

c　価値を意識させるための終末の工夫

それぞれの資料の特徴やねらいに合わせて，教師の説話（教師の体験談・詩の活用等）・登場人物からのメッセージ・児童の日常の姿の提示などの方法を取り入れた。児童の反応が大きかったものは，児童の日常の姿をとらえたスライドと主人公からのメッセージを組み合わせたものだった。児童は，恥ずかしがりながらも画面を食い入るように見つめていた。「自分たちが映って照れくさかったけれど，感動した。うれしかった。」という声もあがった。また，終末をこの形にした授業への評価が高かった。日常の写真の提示により，資料の世界と自分たちの生活が結びついたことが大きな理由であったと考えられる。

(イ)自己の生活を振り返る時間の工夫

a　発問の工夫

(a)方法Ａ　自己を直接振り返る

この形は多くの授業で取り入れられている発問である。この方法では児童の経験の振り返りに広がりをもたせるため，資料から完全に離れた上で発問することが多いが，本研究では，資料の主人公の姿を具体的な例として提示していった。そのため，資料と同一場面のみの振り返りになってしまうのではという懸念があったが，導入時，さまざまな場面を確認するという過程を踏んだため，問題はなかった。資料から完全に離れた振り返りでは，体験を想起できずに終わる児童が必ずいた。しかし，具体的な姿の例示や生活の振り返りカードの取り組みがあったため，全員が体験を想起できたり，発言も活発に行われたりした。

(b)方法B　主人公に重ねて振り返る

物語の主人公の姿と自分の姿を重ね，自己について考えさせていった。主人公を一つのモデルとしたため，自分との比較で振り返りがしやすかったようだ。資料の世界からの離脱がないため，一連の流れの中で自己を振り返り，展開に無理がなかった。

(c)方法C　主人公から自己を語る

主人公の視点から，自分自身について客観的に語らせていった。この時期は抽象思考が高まり，徐々に自分のことを客観的に見られるようになってくる。そのため，自分を冷静に見つめ，改善点をあげていた。またそれだけではなく，自分のよさをあげる児童も多く，自己をより深く見つめさせるという点で有効であった。

資料１　取組①における振り返りの場面の実際

	第１時		5日間の振り返り	第２時	
	振り返りの発問	振り返りの実際	○内容・記載内容・5日間終えての感想	振り返りの発問	振り返りの実際
1−(1) 基本的な生活習慣	自分のこれまでの経験を振り返って，まゆみさん（主人公）にアドバイスしてみよう。　B	・洋服をいっぱい持っているならその服でファッションしよう！整理整頓は私もできていないから，お互いに整理しよう。本は一か所にまとめていた方がわかりやすいよ。	(5日間終えての感想) 年に一回は減らさないで食べる努力をしようと思う。これからはカードは出ないけれど，エアカードでいつまでも実行していきたい。	三浦さんの生き方から学ぶ生活の仕方のポイントを考え，自分の生活の仕方はどうかを考えよう。　A	ポイント:食事・トレーニング・体調管理・強い気持ち ・トレーニングができていない。運動が苦手なので，すぐにつかれてしまう。強い気持ちはあるが，たまに面倒くさくなって最後までやりとげられない。
2−(2) 思いやり・親切	相手に対する「思いやりの心」をどんなことで届けたことがありますか。	外部講師による授業のため，研究対象外とする。	○自分の周りの思いやりに目を向けよう ・○君が「音楽の用意」と教えてくれた。 ・○年生がいじめられている時引き離したいつもは何も感じないですごしているけど，よく考えてみれば思いやりはいっぱいあった。	あなたが花さき山で咲かせた花はどんな色のどんな花で，なぜその花は咲いたのですか。まだ咲いていない人は，どんな色の花をどうやって咲かせたいですか。　A	 (咲かせたい花) 励ますときに咲く黄色 ・友だちが失敗をした時，せめないで励ます。
3−(1) 生命尊重	今日バトンタッチされたということや自分の命のことについて，天国にいる景子ちゃんにメッセージを送りましょう。　B	・生き抜くためにがんばること。最後までがんばること。このがんばりをむだにしないことなど，たくさんのことを受け取りました。どんなことでも最後まであきらめずにがんばった景子ちゃんの気持ちをむだにせずに，今輝いているそのお父さんの輝きもやっぱりむだにするわけにはいかないな。	○今日の自分の命の輝き ・手をピンとあげて発表しただけで輝いていると思った。 自分の輝きは8日間でも書ききれないくらいありました。よかった。	人のことや人の命を大事に思って行動できたことはありますか。　A	・具合の悪くなった友だちの様子をみてあげた。 ・友だちがけんかをしそうになったので止めた。 ・低学年の子が廊下を走っていた時に注意した。 ・教室でふざけている友だちを注意した。 ・危険な遊びをしている人にあぶないよと教えた。

資料２　取組②（年間指導計画中の取組①以外の道徳の時間）における振り返りの場面の工夫の実際

回	日	主題名 ［ねらい］／資料名	上段：振り返りの発問　下段：児童の反応	特長
2	4/22	気持ちのよい習慣 1-1 「父がぼくに教えたかったこと」（学研）	自分の生活で直したいことはどんなことですか。 ・整理整頓・忘れ物はしない・素早く行動する・時間を守る・イスを出しっぱなしにしない・だらだらしない	長期間にわたっての振り返り A
3	5/6	はなれていても大切な友だち 2-3 「友のしょうぞう画」（光村図書）	正一くんのようなあなたのかけがえのない友だちのことについて教えて下さい。または，あなたにとってのかけがえのない友だちはどんな友だちか教えて下さい。→時間超過のため未実施	直接見つめるA
4	5/13	あいさつの大切さ 2-1 「オーストラリアで学んだこと」 （東京書籍）	「わたし」のように，挨拶されてよい気持ちになったことはありますか。また，校長先生の話にあった挨拶の姿のどれにあてはまりますか。 ・近所の人に「おはよう」と言われたけれど，知らない人だったので言えなくて後悔した。次言われた時，ちゃんと言えてよかった。 ・今日の評価は2　教室に入った時，先生に自分から挨拶できた。	管理職の協力　A
5	5/20	自分の役割を果たす 4-3 「移動教室の夜」 （学研）	自分の仕事を今日の主人公とは逆にきちんとできたことを教えて下さい。また今日の主人公は，あなたの仕事ぶりについて「よくできている」「まあまあ」「がんばろう」のうち，どの評価をしてくれると思いますか。（挙手で評価。） ・給食当番を忘れていたら，誰かが教えてくれて間に合った。・委員会の仕事を休んだ人の分まで進んで行った。	直接自己を見つめるA+ 主人公からC
6	5/27	くじけずに 1-2「キャプテン」（文溪堂）	努力のキャプテン谷口くんからあなたに手紙が届きました。どんな内容の手紙でしたか。→時間超過のため未実施	主人公からC
7	6/10	みんなで使う場所は「ふくらんだリュックサック」（文溪堂）	主人公からあなたの自分の公共の場の使い方についての手紙が届きました。どんなことが書いてありましたか。→時間超過のため未実施	主人公からC
8	6/24	本当の自由とは 1-3 「うばわれた自由」 （文部科学省）	自分では「自由だ」と思ってやっていたけれど，あれは自分勝手だったな…と思うことはありますか。また，本当の自由とはどのようなことだと思いましたか。 ・好きに遊んでいいよと言われ，自分ばっかり道具を使って人に迷惑をかけていた。・バイキングで取りすぎて残してしまった。【本当の自由】「自分だけ」ではなく，みんなのことも考えること。	資料中の言葉の活用　A
9	7/1	工夫し続ける 1-6 「バッドに願いをこめて」 （文溪堂）	工夫できたこと，できなかったこと，今工夫していることなどを工夫を続けた久保田さんに知らせてみよう。 ・今，節電の時期だから窓を開けたりして工夫しています。学校でやっている図工の絵の具の振り方(振って塗る)を工夫しました。習い事の時間を忘れないようにカレンダーに書いています。学校で持ち物が多い時には連絡帳にチェックしています。	主人公へB
11	7/14	守りたい自然 3-2 「ひとふみ十年」（文溪堂）	自分たちの周りで大切にしたい，守りたいと思う自然はありますか。 ・行田公園の自然・学校にある自然や花壇・学校や行田公園の桜・樹齢何年とかの樹・富士山を守りたい	直接見つめるA
14	9/16	男女の協力 2-3 「言葉のおくりもの」 （文溪堂）	一郎君が，あなたの友だちへの接し方について言葉を送ってくれました。どんなことを言ってくれましたか。 ・人の傷つくことは言わないようにして友だちを大切にして下さい。あとやられたら，やり返したい気持ちはわかるけれど，感情にまかせて暴力をふるわないようにしようね。それと自分がちょっとしたことをすぐにごめんねっていえるのはいいね。	主人公からC
15	9/30	自分ができることを 4-3 「どこかでだれかが見ていてくれる」（文溪堂）	あなたが今行っている役割（仕事）について福本さんから手紙がきました。どんなことを言ってくれていますか。 ・飼育委員の時，うさぎのためにタンポポの葉を毎週つんであげるのはいいことだよ。でも，たまに忘れてしまうのは直そう。係の人がみんな帰ってしまった時に，次の日のゲームを決めたのは良かったと思うよ。たまに忘れてしまう時があるから気をつけようね。	主人公からC
16	10/7	へん見をもたない 4-2 「消えたマイケル」 （文溪堂）	マイケルの考えを聞かずに自分の考えを通した「ぼく」に自分の経験を思い出しながらアドバイスしよう。 ・人に不公平にしても，人もいやな気持になるし，あとで後悔するからしない方がいいよ。自分も意見を無視されたり，聞いてくれなかったりした時にすごくむかついたから。不公平にしない方が自分もうれしいし，友だちは気持ちがいいから,そうした方がいいよ。	主人公へB
17	10/11	自分のよさを生かして 1-5 「ぼくの金メダル」 （自作資料）	わたしからわたしへエールを送ろう！自分ののばしたいところはどんなところですか。 ・もっとよく発表する（そのために）→色んなことを考えて発表する。・係の仕事をもっとみんなの役にたてるようにしたい→周りを見て，素早く仕事に取り組む　・いつも笑顔でいられるように→心の広い人になる	学習過程の工夫A
18	10/20	学校のよさ 4-6 「アジアパーティー」 （文溪堂）	A小のよさや自慢，そして各学年のここがすごい！（成長したこと）を考えてみよう。 （学校）「A小祭り」で「協力して楽しんで仲良く」が自慢。（学年）1年生：一生懸命でがんばる 2年生：休み時間だいたい教室がからっぽ　3年生：ルールを守っている　4年生：元気がいい　5年生：給食を残さない 6年生：運動や音楽が上手，それにおもしろい	前時からの発展（個人のよさ→学校学年へ）A
24	12/2	誠実に生きる 1-4 「手品師」（文溪堂）	約束を守った手品師に自分のことを手紙で書いてみよう。 ・大舞台を断るのはつらかったと思うけど，いい判断してたと思うよ。ぼくは一回友だちに呼ばれたけれど，都合で行けなくなった。次の日，言おうと思っていたけれど，忘れてしまったんだ。その時からそのことは全然話してなくて，とっても後悔しているよ。約束は守らないといけないということをその時思ったんだ。	主人公へB
25	12/7	広い心で 2-4 「ブランコ乗りとピエロ」 （文部科学省）	最後にサムを許し，手を差し出したピエロ。あなたは初めと終わり，どちらのピエロに近いですか。 （初めのピエロに近い位置に印）・正直ぼくは言い争いになることが多いです。その時自分は相手の意見を聞いて，その後自分の意見を言います。でもきりがないというくらい永く続きます。解決するのはなかなか難しいです。	主人公に自分を重ねるB

注）第1・23回…道徳アンケート実施　12回…道徳の時間を振り返ろう　3・6・7回については，展開前段にて時間超過のため振り返り活動は未実施。

b 自己を見つめ振り返る場面における表現方法の工夫

(a)線分図の活用

図２

主人公の変化前と後の姿を直線上に示し，自分の位置を書き込ませた。なぜその位置なのかの理由づけも記載させることで自分の生活を具体的に振り返っている児童が多かった。評価の指標がはっきりとしているため，自分の姿を表しやすかったようである。また，周囲の友達と比較するなど自然に語り合うこともできた。

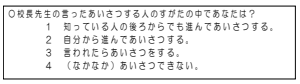
(b)色の活用

咲かせた（咲かせたい）花の色を考えさせた。一人一人の微妙な心情を表現する方法として活用した。授業では，書画カメラを使い，実際に塗った花を提示しながら発表をさせた。

c その他の工夫

(a) 管理職との連携による振り返りの工夫

本校の主題配列では，生活目標との関連した内容を該当月に設定している。これが生かされた。学校長も朝会で生活目標を意識した講話をしている。この話と道徳の時間がつながったのだ。児童から「校長先生のお話にあったことで自分を見つめてみたい。」という声があがり，校長が朝会で示した挨拶の基準(資料3)を元に児童は自分を見つめていった。



資料３

(ｂ) 学習過程の工夫

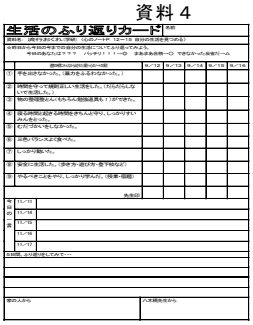
本研究においては，P.2に示した基本的な学習過程を中心に展開してきたが，「個性伸長」（ぼくの金メダル）の学習では，通常ならば終末に提示するVTRを，展開後段で提示した。自分のよさを理解するためには，他人からの賞賛が必要であるという価値の特徴から，自己を振り返る場面にて，級友が見つけた一人一人の長所のVTRを提示した。これにより，児童は自分のよさを認識していくことができた。

また，振り返りの時間においてとまどいがみられた時には，教師の説話を先に行い，物語と児童の世界をつなげてから振り返りを行うなどしていった。

(ウ) 自己の生活を見つめていくための取り組みの工夫

a 生活の振り返りカード

資料４



取組①の第１時と第２時の間の５日間にわたり，授業で行った振り返りと同様もしくは関連した内容で自己の生活を見つめていった。（資料4は1-(1)の実践で活用）日々自分と向き合う中で，「気づかないところまでわかってきた。これからも毎日注目してみたい。」と，自分に向き合い続けることに意欲的な発言があった。教師からは毎日一言書き添えた。５日間の振り返りの後は家庭に持ち帰り，保護者から励ましや称賛の言葉を書いていただいた。児童理解とともに，児童を認め励ます場にもなった。

また，4月当初に行った「基本的生活習慣」(父がぼくに教えたかったこと)の学習では，自分の生活で直したいことを考え，自分の生活を見つめた。生活習慣の育成には継続的な指導が必要である。この点から，短期間に絞った振り返りではなく，毎月一回自己評価を行う長期にわたった振り返りを実践している。（現在も継続中）その間，児童の意識が常に継続していたわけではないが，定期的に行うことで，自己の生活の見つめ直しや意識の喚起になった。

b 学習掲示物

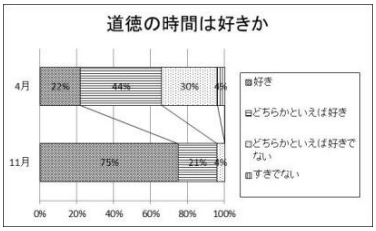
資料５

授業後に板書写真（資料5）を掲示した。道徳の時間の積み重ねを児童自身が実感するとともに，「まだ『3』の内容が少ないね。」など授業への関心も高まった。同様の価値の学習の時は，前時の学習内容を想起させる手がかりにもなった。

イ 道徳に時間並びに自己についての意識の変化

４月と11月に道徳の時間並びに児童の道徳性に関する意識を調査した。

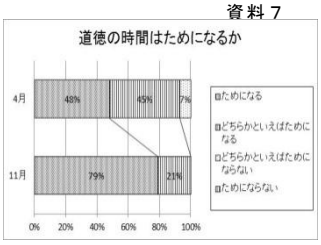
資料６



資料５においては，28名中27名が「好き」または「どちらかといえ

ば好き」を選択。その理由として「思ったことが言えるから。」と答えた児童が６割，次いで多かった理由は「みんなで話し合うことによって考えが深まるから。」であった。答えのない道徳の時間だからこそ，自分の考えが発言しやすいという。教師も一人一人の考えを丁寧に受け止めていった。道徳の時間で，児童は自分に向き合い，自分の考えをもち，伝え，そして深めていくことに喜びを見出していることがわかった。

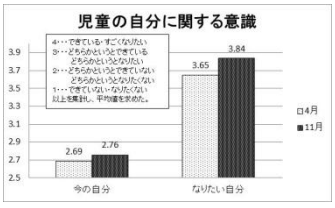
資料７



資料7では，全員が「ためになる」または「どちらかといえばためになる」と感じていた。4月当初も同様の傾向であったが，「ためになる」と感じた児童が約8割と大きく増えた。4月の段階で，「今まであんまりためになっていない」から「役に立たない」と答えた児童は，11月の調査においても唯一「道徳の時間はあまり好きでない」と回答した。だが，この質問には「勉強したことが生活に役立っている」から「ためになる」と答えた。また，11月の調査においては，「自分のことを振り返れるから。」「自分のことを見直すことができる。」「自分のことがもっと知れるから自分がよくなる気がする。」など，自分と結びつけて道徳の時間の意味を見出している児童が増えた。これは，道徳の時間において自分自身にじっくりと向き合わせたり，日常生活と道徳の時間をつなぐ手立てを行ったりしたからだろう。

高学年の22の内容項目を児童にも理解できるよう26項目にし，「今の自分」と「なりたい自分」についての調査を行った。（資料8）結果，両者とも向上がみられた。26項目すべてについて「なりたい」とした児童は，7人→15人と倍増した。また，この調査に該当した児童26名のうち，21名が，「なりたい自分」のポイントが向上。さらにそのうち14名は，「今の自分」に対する評価も向上している。ここから，自分を知り，認めていくことが，よりよく生きようとする意欲へつながることがわかった。学校の教育活動全体を通し，自分自身に向き合う機会をつくり，道徳の時間をありのままの自分を受け止める場としていったことも結果の一因と考えている。

資料８



Ⅳ　研究のまとめ（成果・課題）

１　成果

（１）取組①において，授業後，授業の振り返りの内容から発展させ，自己を見つめていくための取り組みを実施した。この取り組みを通し，授業の中で，自分の体験や心情を思い出せなかった児童も自分と向き合い，自分の生活を振り返ることができた。また，その時に振り返った経験を次の授業に生かすこともできた。生活体験にとどまらず，自分の生き方に目を向ける児童もいた。

（２）資料から完全に離れ自分の生活を振り返らせる一定の方法だけでなく，主人公から自分を語らせたり，主人公に語ったりするなどのさまざまな方法を用いて，児童の生活を振り返らせることが可能ということがわかった。

２　課題

（１）自分を出発点として，さらに多様な振り返りの方法の創造をしていくこと。

（２）今回の授業展開については，最も基本的な学習過程を用いた。この形にとらわれることなく，より効果的な学習展開について柔軟に考えていく必要がある。

（３）道徳の時間は，全教育活動で行われる道徳教育の補充・深化・統合の時間である。全教育活動と道徳の時間が響き合うことによって，児童はさまざまな場面で自己と向き合い，道徳的価値の自覚も深まると考えられる。その点からも，各教育活動との響き合わせ方，特に特別活動との関連を重視しながら，より深く自分を見つめられる多様な展開が今後，求められる。

【主な参考文献】

・文部科学省『小学校学指導要領解説書道徳編』平成 20 年
・瀬戸真『自己を見つめる道徳の時間』文渓堂 1989 年
・永田繁雄『「じぶん」「いのち」「なかま」をみつめる道徳授業』教育出版 2006 年
・押谷由夫『心を育てる学校教育の創造 新しい道徳教育の具体的展開』光文書院 1995 年
・八木橋朋子『平成 22 年度千葉県長期研修研究報告書』2011 年

【実践記録】

「物語を中心に他教科と関連した活動」を取り入れた小学校英語の実践

船橋市立古和釜小学校　教諭　小林伊津子

Ⅰ　研究主題について

「英語嫌いだよ。だってわからないもん。」そう言っていた児童が，図書室で絵本を熱心に読んでいた。英語の授業で"The very hungry caterpillar"の読み聞かせを聞いた後，その日本語訳の本を探して読んでいたのである。英語を嫌いと言っている児童が，絵本の読み聞かせに興味を示す姿を見て，絵本を英語の授業に生かすことはできないかと考えた。

「意味のある文脈の中でしか言葉は育たない（アレン玉井 2009)」と言われているが，普段，英語を日常で使う場面が少ない環境において絵本の物語には児童に英語の文をまるごと与え，文脈の中で理解させる力がある。授業の中で物語を扱い，本当の自分の思いを表現する活動をすることが,実践的なコミュニケーション能力の育成につながり，更に，学習指導要領小学校外国語活動の目標に示された「外国語の音声やリズムに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気づく」ことにもつながるのではないかと考えた。

また，本研究で実践した指導計画は，学習指導要領にも述べられている「他教科と関連させた活動」が物語と関連して取り入れられている。そして,その指導形態は読み聞かせと他教科と関連した内容の学習が組み合わせられている。このような指導計画が，児童が主体的に思考するために有効であると考え本主題を設定した。

本研究は，指導計画の作成，実践を行い，児童への意識アンケートや児童の自己評価を分析してこの実践が児童の主体的思考を高めたかを検証した実践記録である。

Ⅱ　研究目標

児童が主体的に学習するために，物語を中心とした教授法に基づいた指導計画を作成し，その有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の実際

1　研究仮説

英語の絵本を使い，物語を中心に他教科と関連した活動を取り入れれば，児童は主体的に思考することができるだろう。

2　研究方法・内容

(1) 研究主題に対する基礎研究
(2) 物語を中心とした教授法に基づいた指導計画作成
(3) 検証授業の実施
(4) 検証結果の分析と考察

3　研究の具体的内容

(1)　研究主題に関する基礎研究

ア　現在の小学校の英語活動の状況

小学校に英語を導入することには未だに賛否両論がある。英語よりも母語の習得や論理的な思考を育てる時間を優先すべきであるということや，教えるならば英語に堪能な人材が必要だとして反対する意見。それに対して，英語の導入は早ければ早いほどいいとする賛成意見。

しかし，現在の日本の状況をみると，政府の「グローバル人材育成推進会議」の中間報告（2011 年 6 月）においては，日本人の長期留学経験者を 22 歳人口の約 1 割にすることや，国際的な大学入学資格が取得できる学校を 10 倍以上に増やすなどの数値目標を掲げた。これは，業務で海外と交渉できるレベルの人材育成のためだという。このような社会的背景から，今後，世界の共通言語としての英語を身につけることは急務であるといえる。

そのような中で，平成 23 年度から新学習指導要領が施行され，小学校にも外国語活動が位置づけられた。船橋市は，平成 18 年度より英語教育特区として，1 年生から英語の時間が設けられ独自のカリキュラムで学習をしている。更に，平成 21 年度からは教育課程特例校の認可を受けその事業が継続している形となっている。各校に ALT が配置されているので，児童はネイティブの発音で学習したり，日本以外の人と触れあう機会が保証されている。船橋市教育委員会の調査によると，教員が ALT と積極的に関わるようになったり，英語を指導することへの抵抗感が薄らいできた（平成22年度船橋市小学校英語科実態調査）とあり，小学校の教員が事業の継続によって，徐々に英語の授業に慣れ，担任が T1 となって進める指導について

の意識も高まってきている様子がうかがえる。

イ　現在の英語の活動に対する児童の意識

検証授業を行った小学校の５年生(n=94)に対し質問紙によるアンケートを行った（図１）。

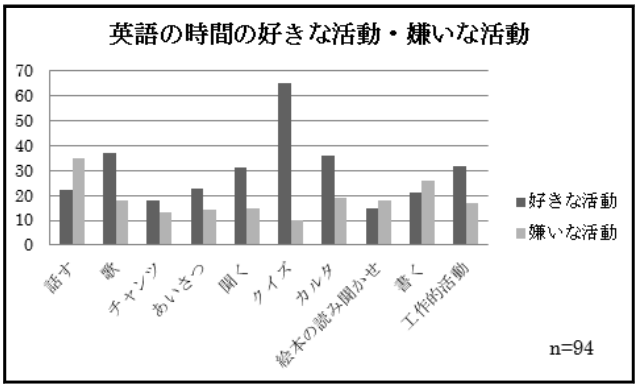


図1　児童が好きな活動･嫌いな活動　n=94

児童が最も多く好きと答えた活動は，「クイズ」である。「聞く」と答えた児童も多いことから，児童は英語を聞いて考えることを楽しんでいる様子がうかがえた。普段から，歌に対し熱心に取り組む児童が多いためか，「歌が好き」と答えた児童が嫌いと答えた児童より多い。

一方，児童が「嫌い」と答えた活動は「話す」が多く，英語を声に出すことに抵抗があるようである。英語の授業をするとき，学習した内容を児童に発話させるが，全く知らなかった言葉を数回の練習で発話することは難しい。クラッシェンの言語習得の理論によると，適正なインプットは子どもの発話能力をわずかに超えるレベルであると共に，情意フィルターを低くし，学習者がリラックスした状態でなければ言語を学ぶことはできないという。児童が自然と発話できるようなるまで，児童に繰り返し英語を聞かせられるような指導計画が必要である。

ウ　主体的な思考

児童の主体性に関して，林は，子どもたちが共同して一つの問題を追求する姿勢を児童が「授業の主体」となったときであり，子どもにとっての楽しいことのもっとも本質的な内容を,「探求への積極的な参加」だとしている(1973 p.38)。また，認知心理学の立場からは，思考力が発揮される前提を「思考過程を重視する態度」「失敗に対して柔軟に対応する態度」の二つによって把握している(若き認知心理学者の会 1996 p.90~91)。

つまり，児童が主体的に思考しているとは，まず，自分が取り組む活動について課題を明確に認識し,自らの課題を解決する課程において，児童同士が試行錯誤しながら共同で学びを深めていくことであるといえる。

そのときの教師の役割は，林が「授業とは，子どもへの問いかけを通じて，子どもの思考を一つの問題の追求にまで組織する仕事」だと述べているように，児童につけさせたい力を見極め，教材を精選したり，適切な支援・指導をすることであるといえる。更に，船橋市では ALT と JC が各校に配置されているので，担任は教師間の連携についても配慮が必要である。

エ　他教科と関連させた活動

本研究を進めるにあたりホールランゲージの考え方を参考にした。ホールランゲージは，日本では，倉澤栄吉の国語教育論，大村はまの単元学習の実践に多くの共通項を持つ 1970 年代に入ってから提唱された教育の考え方である。主体的な学習者を育成するホールランゲージの学習過程は，テーマ学習であり，他教科との関連がされている。授業の展開は，「教師の読み聞かせとそれに基づくグループの話し合い」「子ども一人一人の読書」「子ども一人一人の研究課題」の３つが大きな柱となることが多く，単元の中の活動や経験によって，言語及び認識の両者を伸長することができるので，思考力も高まるとしている（桑原 1992)。

更に，言語心理学の立場から入谷(1983)は，外国語学習のうち発音や発声・リズムやメロディーの学習を音楽や体育の時間と組み合わせて行うとか，国語や社会の時間を利用して，外国語文学の話をするなど，互いに関連性のある課題を継続的に学習させることによってプラスの転移が働き，精神の負担をそれだけ軽くすることができるとしており，他教科との関連についての有効性を示している。

また，学習指導要領　外国語活動編（平成 20 年 8 月）3　指導計画の作成と内容の取扱い(4)によると「広く言語教育として，国語教育をはじめとした学校におけるすべての教育活動と積極的に結び付けることが大切」だとし，児童が「国語科，音楽科，図画工作科などの他教科等で得た知識や体験などを生かして活動を展開」することで児童は知的好奇心を更に刺激されることになるとしている。

そこで，これらの理論をふまえ，児童が主体的に思考し学習するために，教師の読み聞かせから児童が各教科に関連したテーマを作成し，友だちと共同で解決していく指導計画が効果的だと考えた。

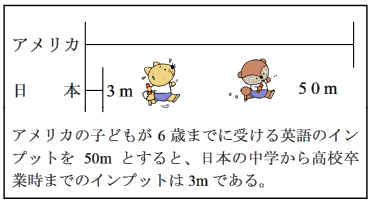


図2　子どもの英語のインプットの時間の比較

オ　絵本の有効性

西垣(2008)によ

ると，アメリカの子どもは 6 歳までに 17520 時間もの英語のインプットを受ける（1 日 8 時間とする）が，日本人は中学から英語学習を始め，高校を卒業するまでに約 1000 時間（中学で週 4 回，高校で週 7,8 回としたとき）にとどまるという。現在の日本の児童，生徒の多くは日常生活において英語を聞く機会が大変少ないことがわかる（図 2）。

では，限られたインプットを意味のあるものにするためにはどのようにしたらよいのだろう。アレン玉井（2010）は，「言葉は意味のある文脈の中でしか育たない」と言う。英語に接する機会の少ない環境のなかで，物語は「言葉が育つ豊かな土壌」を子どもに与え，言葉を成長させることができるのだという。

絵本を読むことは，まさにコミュニケーションの場である。谷川(2002)は読み手と聞き手が，空気を共有し，交流することの大切さを述べている。絵本を読むとき，話す側が一方的に話すだけではなく，聞く側が参加して初めてその話が動き出す。声を出すことだけではなく，静寂の中でもその場にいる人の表情，空気全てを共有したとき話が生き生きとしてくるのである。

更に，子どもの言語発達を促すために，マザーリーズ（母親語）での読み聞かせが挙げられる。マザーリーズの特徴は，①音声が高く，抑揚の幅が広い。②スローペースである。③数少ない，やさしい言語を使う。④文が単純で短い。⑤『今・ここ』の原則を使う。（小林 2003p.73）である。アレン玉井(2010)は，第二言語教育においては，このようなマザーリーズ的な音声を与えるのが教員の役目であるという。

以上から，絵本の読み聞かせは，児童にとって意味のあるインプットになり得ることがわかった。本研究においては，児童が主体的に思考するために，児童が絵本の読み聞かせに参加できる（ジョイントストーリーテリング）指導計画を作成して，繰り返し英語を聞く機会を設け，インプットの時間を増やしたり，ただ単語の羅列ではなく，意味を持った文章にふれさせるようにした。

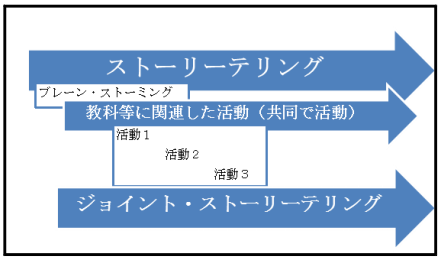


図3　本研究における指導計画のモデル

カ　物語を中心とした教授法

児童が主体的に思考するために，他教科と関連した内容の活動と絵本の読み聞かせが有効であることを述べてきた。この 2 つの点を満たすものとして物語を中心とした教授法がある。その指導計画は大まかに①ストーリーテリング②ジョイント・ストーリーテリング③他教科と関連した活動の 3 つから成る。

本研究においては，物語を中心とした教授法に基づき児童が主体的に思考できるようにこの 3 つの活動を組み合わせた指導計画（図 3）を作成し，実践した。

キ　絵本の選定

第二言語教育の場合，子どもが全ての言語の意味を理解できなくても，文脈を頼りに意味を理解することができるという。それは，話の内容を日本語で理解していること，また十分な視覚教材が準備されていることが条件である。そこで，1 年生の国語で扱った「がまくんとかえるくん」のシリーズの話を扱うこととした。このシリーズは，校内の図書室に日本語版の絵本があるので，日本語で内容を知ることも容易である。絵本なので，視覚的教材も準備しやすい。そして，話の繰り返しが多く，児童が内容を把握しやすいアーノルド・ローベル作の"A LOST BUTTON"　を選定し授業用の脚本を作成した（資料 1）。

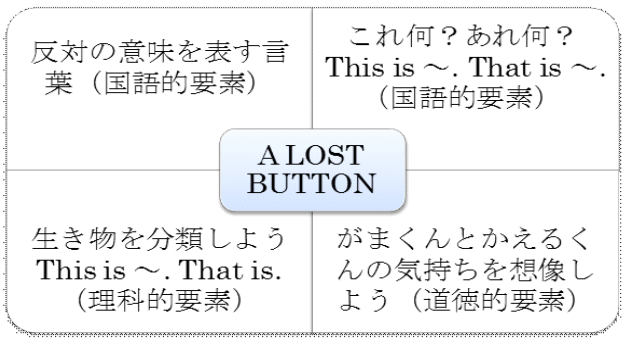
資料1　″A LOST BUTTON″ の一部

They went back to the woods.
"Excuse me," said Frog.
♪ Here is your small button!
Small button! Small button!
Here is your small button! Here you are.
"That is not my button," cried Toad.
"That button is small. My button was big."

(2)　物語を中心とした教授法に基づいた指導計画作成

図 4 に示した通りの指導計画を作成した。

図4　A LOST BUTTONと他教科との関連



(3)　検証授業の実施

ア　対象　船橋市内 A 小学校
5 年生 3 クラス（94 名）

イ　期間　平成 23 年 10 月 17 日（月）～

平成 23 年 11 月 8 日（火）

ウ　単元　A LOST BUTTON

エ　指導計画，授業の概要

各クラス　45 分× 4 回

時	学習内容	他教科との関連	目標とする表現・単語
1	反対の意味を表す言葉	国語的要素	black-white small-big square-round thin-thick

①手遊び"One Little Finger"

・meadow，river，woods の絵を指し，単語の意味を理解する。

♪ One Little Finger
One little finger, one little finger,
one little finger, tap tap tap.
Point to the meadow, point to the woods.
Put it on your nose.

②"A LOST BUTTON"の話の中に出てくる歌を聞いて歌えるところを歌う。

Here is your black button! Black button!
Black button!
Here is your black button! Here you are.
（「メリーさんのひつじ」の曲で）

③"A LOST BUTTON"の読み聞かせを聞く。

・ALT と担任で分担して読む。

ALT …ナレーション

担任…歌，チャンツ，挿絵の掲示

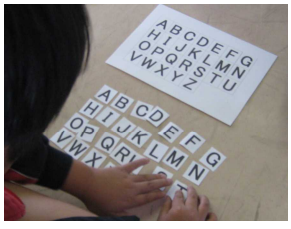
④初発の感想を書く。

⑤"A LOST BUTTON"の日本語訳の絵本を担任が読み聞かせ，児童が物語の大体の内容をわかるようにする。

⑥反対の意味を表す言葉を知る。

・絵カードを使用し，単語の意味を知る。

black-white
small-big
square-round
thin-thick



⑦アルファベットの学習

・ABC の歌をうたう。

・ABC 並べする（時間をはかる）。

⑧自己評価カードに反省を記入する。

2 3	あれ何？これ何？	国語的要素	This is ~. That is ~.

①手遊び"One Little Finger"

②"A LOST BUTTON"の話の中に出てくる歌を聞いて歌えるところを歌う。

③"A LOST BUTTON"の読み聞かせを聞く。

④ This is ~.　That is ~.　を使った文を絵カードを使い練習する。

・担任が絵カードを近くと遠くで提示して this と that の理解を助けるようにする。

⑤「This is ~.　That is ~.ボンゴ」をする。

・ボンゴ用紙にペットボトルの蓋を置く

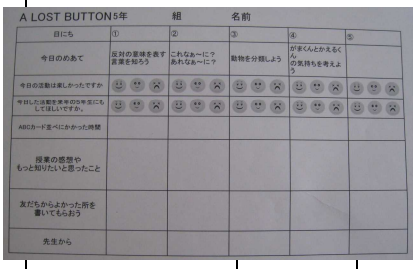
・ALT が This is a cat. などと言う。

・ねこと言ったら，その絵の上にあったふたをとる。

⑥アルファベットの学習

・ABC の歌をうたう。

・ABC 並べする（時間を計る）。



⑦自己評価カードに反省を記入する。

生き物を分類しよう	理科的要素	This is a whale . That is a frog.

①手遊び"One Little Finger"

②感情を表す言葉の入った歌をうたう。

♪"If You're Happy and You Know it"
（幸せなら手をたたこう）

③"A LOST BUTTON"の読み聞かせに参加する。

・児童が絵カードを提示する。

④ This is ~.　That is ~.を使った文を絵カードを使い練習する。

⑤「This is ~.That is ~.ゲーム」をして，「これ」と「あれ」の言い方を知る。

・３グループに分かれる。

・教室の真ん中にかご，両端に同じ種類の

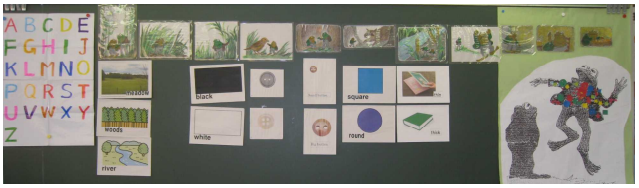
絵カードを置く。
・This と言われたら近く，That と言われたら遠くのカードをとって真ん中のかごに入れる。

⑥ほ乳類とそうでないものを分類する。
⑦アルファベットの学習
・ABC の歌をうたう。
・ABC 並べする（時間を計る）。
⑧自己評価カードに反省を記入する。

4	がまくんとかえるくんの気持ちを想像しよう	道徳的要素 クラフト	angry bored great happy sad excited worried surprised tired

①手遊び "One Little Finger"
②感情を表す言葉の入った歌をうたう。
♪"If You're Happy and You Know it"
（幸せなら手をたたこう）
③A LOST BUTTON の中の３つの画面のがまくんの気持ちを日本語で発表する。
④③で発表した気持ちを表す言葉の英語の言い方を知る。

⑤A LOST BUTTON のジョイントストーリーテリングをする。
⑥がまくんがなくしたボタンを想像して書き，自分たちのジャケットを作り，登場人物の気持ちを考える。
⑥アルファベットの学習
・ABC の歌をうたう。
・ABC 並べする（時間を計る）。
⑦自己評価カードに反省を記入する。



(4) 検証結果の分析と考察
ア　児童の主体的な思考
英語学習時の児童の主体的な思考に対する意識を，湯川の作成した「英語学習についてのアンケート」（湯川笑子「評価規準を取り入れた小学校英語教育カリキュラム構築と中学校英語教育との連携」2008　p.46）を参考に「英語に対する態度」「内的動機」「外的動機」「言葉への感受性」の４つの視点から分析した。
それぞれの項目で児童の肯定的な評価に増加が見られることから，児童は，この学習で主体的に思考していたといえる（図 5）。
特に，内的動機，言葉への感受性について肯定的な答えをした児童が増えていることから，物語を中心とした教授法に基づいた指導が，英語に対する興味を高め，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気づくことにつながることがわかった。また，外的動機について「とてもある」と答えた児童が増えたことから，外国語に触れる機会の少ない環境の中でも，英語が将来の自分の役に立つと考えるようになったといえるのではないだろうか。

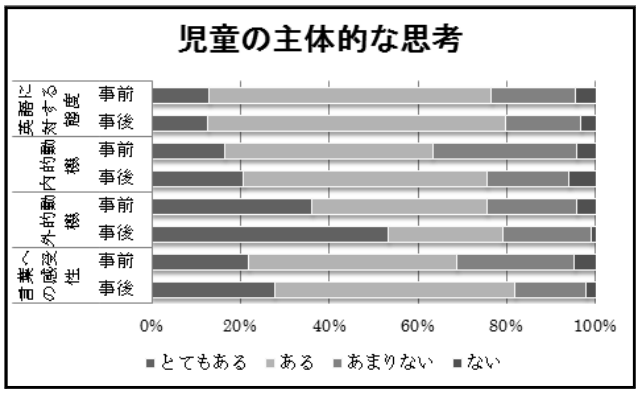


図5-1　児童の主体的な思考 n=94

イ　児童が意欲的になる活動
児童が「楽しい」と感じる活動と「役に立つ」と考える活動には高い相関がみられる（小林 2008p.53）ことから，児童は，学習した内容が今後の自分のためになると感じる活動を「楽しい」と答える。
検証授業においては，児童に授業後，「楽しかったか」と「来年の 5 年生にもこの活動をして欲しいか」を自己評価（図 6-1,6-2）させ，児童がどの活動に意欲的であったかを調査した。

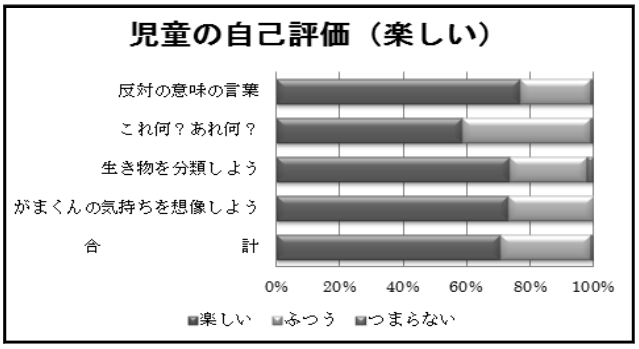


図6-1　児童の自己評価(楽しい）n=94

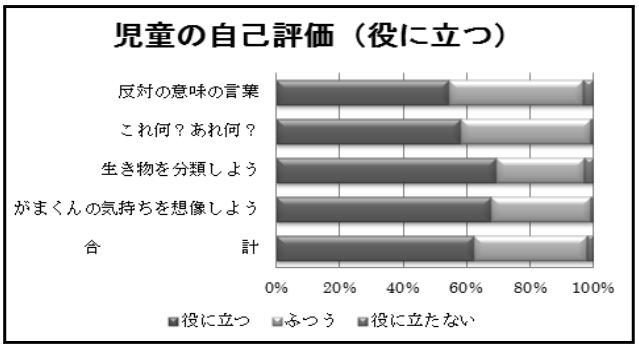


図6-2　児童の自己評価(役に立つ）n=94

児童の自己評価の結果，児童の多くが，物語を中心とした教授法による英語の活動を楽しいと感じたことがわかった。その中でも，第３時間目の学習の評価が高い。３時間目は，発話よりも聞いてわかることを目的にし，グループの友だちと共同で考える時間を設けた授業であった。児童への意識調査にもあらわれているように，英語を一人で言う活動に児童は抵抗があるが，友だちと共同で活動することに加え，聞いて考えることを主にした活動に児童は意欲的に取り組むことがわかった。

また，感想で「がまくんとかえるくんのお話を何回も聞くうちにだんだん内容がわかってきた」と答える児童もいた。英語を聞いてすぐに発話をさせるのではなく，たっぷりと聞かせ，言いたくなるまで待つような指導計画が児童の意欲を高め，それが主体的な思考をする姿につながるといえる。

４時間目の「がまくんの気持ちを考えよう」では，話の内容をもとに，自分が考えたボタンを作った。児童は英語で聞いた物語の登場人物の気持ちを考え,主体的に思考していたことが自己評価からみてとれる。ただ与えられた問題に答えるのではなく，自分の考えを表現する活動を児童が楽しいと感じることがわかった。英語の学習においても児童が自分を表現する活動をすることが必要である。

質問紙によるアンケートで検証授業の前と後に英語の時間の好きな活動を児童に聞いた結果，カルタ，読み聞かせ，工作的活動の数値に

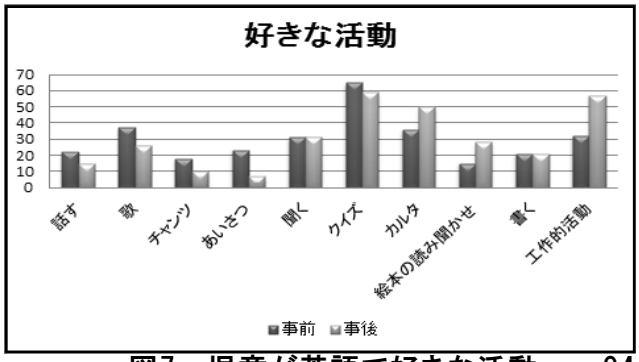


図7　児童が英語で好きな活動　n=94

上昇がみられた。これらの活動は検証授業で扱った内容である。それに対し，授業で触れなかった活動については数値の下降がみられた。これまでに，本検証授業において児童が，主体的に思考したことを述べた。図７の結果と合わせると，主体的に思考した活動を児童は「好き」と答えているのである。

以上の結果から，小学校の英語において，生きた文脈の中で児童が自分で考え学ぶ場が主体的な思考のために必要であることがわかった。

日常的に英語を使うことがほとんどなく，限られた語彙や時間の中で英語を学ぶ小学校において，物語を中心に他教科と関連した活動を取り入れることで，児童が主体的に思考し，楽しいと感じる学習をすることができたのである。

Ⅳ　成果と課題

(1)成果

・英語の絵本を使い，物語を中心に他教科と関連した活動によって授業で児童が主体的に活動することができた。
・担任が指導計画を立てることで，ALT や JC との協力体制が深まり，お互いに連携して児童の指導・支援にあたることができた。

(2)課題

・指導者によって指導のスタイルが違う（歌が得意とそうでない等）ので，一つの指導案で対応できない場合があった。そのような時 JC や学習ボランティアの協力が必要であった。

【主な参考文献】

アレン玉井光江 2010　小学校英語の教育法　理論と実践　大修館書店
桑原隆 1992 ホール・ランゲージー言葉と子どもと学習－米国の言語教育運動　国土社
小林伊津子　2009　児童が主体的に思考する英語活動を探る－英語絵本の活用を通して－　平成 20 年度千葉県長期研修生研究報告
語学教育研究所 2010　小学校英語　語研ブックレット３
Arnold Lobel. *Frog and Toad are Friends*: A Harper Trophy・Book Harper & Row, Publish

【実践記録】

デジタルカメラを活用した，ノートの表現と記録の技術の向上

船橋市立宮本中学校　教諭　横堀　肇之

1　はじめに

顕微鏡を活用した観察・実験は，児童・生徒にとって『案外難しい』ことが少なくない。その理由は「顕微鏡の使い方に慣れていない」，「全く見えない」など顕微鏡操作の未熟さや試料作成の失敗などに起因するものや「見えているのに何を見たらよいのかが分からない」など実験目的や結果の把握が不十分な場合や，教師の口頭説明のまずさなど，たくさんの原因が考えられる。

いざ観察するとき，ほとんどの生徒はどんなものが観察できればよいかは未知である。それを活動の中で見つけだしていくことは大切であるが，最後まで「目的の観察物を見つけられない」という事態にもなりかねない。観察の過程でそういった生徒には具体的な例を見せることで，観察する対象がはっきりとわかり，観察もスムーズに行えると考えられる。また，理科の授業では，実験や観察などの分野で，生徒たちの視覚に訴える内容がたくさんある。

現在，コンピュータ・メディアにおける発展は目覚ましいものがある。その中でデジタルカメラも，年々精度の高いものが出てきている。生徒たちの関心を本当の意味で高めるためには，教科書の写真や図を見て，組織や名称がわかるというのではなく，「自分で発見した！」という気持ちを持たせることが大切である。その点で「観察する」ことは非常に有効であり，デジタルカメラを使って，生徒の発見を直接，他の生徒たちにも見せることができることは，生徒の主体的な活動が保証でき，興味も高めることができる。

そのためのアイテムとしてデジタルカメラを使用することは最近の研究で報告されている。しかし多くの場合，授業の中でそれぞれの生徒が観察した結果を，テレビモニタ等を使って学級全体で確認し共有するだけである。つまり視覚情報が生徒の頭の中に残るだけで手元には残らない。その時はわかった気になっても、後日復習をするときには観察した情報が残っていないことになる。そこで，観察後すぐにプリントアウトし，観察結果を手にすることができれば，顕微鏡観察への抵抗感を取り除くこと，画像データを活用してレポートの表現力の向上につながるのではないかと考えて，本主題を設定した。

2　研究の仮説

顕微鏡観察の結果をデジタルカメラを用いて記録し，画像データを時間内に得られれば，レポートの表現力が向上するであろう。

3　研究の方法と内容

1)教材研究
2)指導計画の作成
3)検証授業の実施
4)成果と課題の分析

4　研究の実際

1)教材研究・デジタルカメラ

①デジタルカメラを選択するポイントは，記録メディアと電源を統一することである。今回は，ＳＤカードと単３型充電池を使用する機種にした。ＳＤカードは現在，市場に一番普及しているメディアで，コンビニエンスストアでも購入が可能である。また単３型充電池は，もし充電切れがおきても学校の消耗品で急場を補うことができる。ＳＤカードは，市内中学校に配備されている大型液晶テレビや実物投影装置に直接挿入して画像を提示でき，授業での活用範囲が広い。

②中古品販売店では，600万画素のものが，１台3000円～4000円程度で購入できる。

③デジタルカメラのレンズ部分の構造によって，顕微鏡撮影が難しいものがある。図Ｉのような右上にレンズがある機種は顕微鏡とカメラのレンズの光軸が一致しにくい。また，レンズと縁の段差が大きい機種は，顕微鏡の接眼レンズにデジタルカメラをつけてもピントが合いにくい。

図１

2)教材研究・画像データの処理，印刷
①デジタルカメラ，ノートＰＣを各班１台ずつ用意する。デジタルカメラは学校備品の４台に加え，新たに５台を中古店で購入した。デジタルカメラを接続するのには，ＵＳＢケーブルが必要だが，ＵＳＢケーブルの先端の形状がカメラによって種類があり，それぞれのカメラにあわせて用意しなければならないこと，ＰＣを起動する度に装置の認識をしないので，時間の短縮ができることから，カードリーダーを使用した方がよい。
②ノートＰＣは英語教育特区ＡＴ（アクティビティタイム)用に配置されたものを転用した。このノートＰＣは校内ＬＡＮに接続できるように設定してあり，生徒は英語の授業の中で利用しているので，自分のＩＤでログオンし，プリントアウトすることに対してスムーズに行える。理科室にスペースがなかったので廊下に設置した。
③プリンタは印刷時間を短縮するために，ＰＣ室のページプリンタを使用した。本校の理科室とＰＣ室は同じフロアにあり，プリントアウトした用紙を取りに行くのは比較的容易ではあったが，ＰＣ室までの移動時間の短縮と他の授業への迷惑を考えて，理科室前の廊下に移動し，延長用ＬＡＮケーブルで接続した。

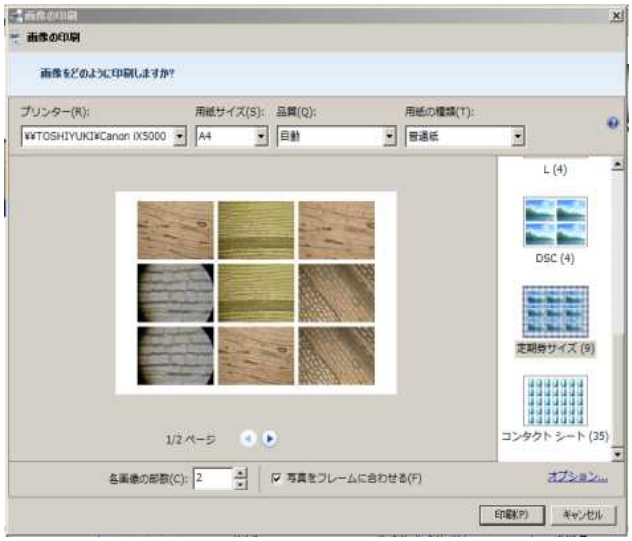


図２

④顕微鏡で観察し，対象が見えたらデジタルカメラで撮影を行う。
⑤班全員の撮影が終わったら，ＰＣに接続し印刷を行う。印刷している時間にスケッチを行う。
⑥Ａ４サイズの用紙に９分割で印刷し(図2)，切り取ってノートに貼ってデータ整理する。
3)教材研究・撮影方法
①撮影したい試料を顕微鏡で観察し，絞りやピントを調節する。
②デジタルカメラを下記のように設定する。
・ストロボ…発光禁止
・ズ ー ム…テレ側（ズーム側）
・モ ー ド…マクロ（接写）
③デジタルカメラのレンズを顕微鏡の接眼レンズにかぶせて，デジタルカメラの液晶モニターを見ながら，光軸を合わせる。
④写真を撮影して，デジタルカメラの液晶モニターで撮影した写真を確認する。撮影するときは，デジタルカメラの画面を見ながら調節ネジでピントを合わせながら撮影すると良い。⑤手ブレを起こした場合や適正露出が得られていない場合は，次のようにして再度撮影を行う。
手ブレ…露出時間が長すぎることにより起こる。ＩＳＯ感度を設定できる機種では数値を大きくして，露出時間を短くする。また，デジタルカメラを三脚等で固定して，セルフタイマーを使うことで，手ブレをかなり防ぐことができる。
露出補正…写真が明るすぎる（露出オーバー）場合はマイナス側に，暗すぎる(露出アンダー)場合にはプラス側に補正する。

4)指導計画の作成
　顕微鏡観察を多く導入できる単元として，第3学年2分野の「生命の連続性」を選択し，指導計画を立てた(図３)。ゴシック体太字の授業が顕微鏡観察を行った授業である。全１５時間中６回の顕微鏡観察が行える。
　既成のプレパラートを使って，デジカメで顕微鏡写真をとる練習として１時間，ノートＰＣを使ってデータをプリントアウトし，レポートとする授業に１時間を加えた。

「生命の連続性」

２節　生物のふえ方
(2)親の特徴はどのように子に伝えられるのか
(4)遺伝の規則性を調べよう

ファストプランツＰ（第１世代）の播種

①ファストプランツＰ（第１世代）の形質確認

①ファストプランツF1（第２世代）の播種

②ファストプランツF1（第２世代）の形質確認

１節　細胞のつくりとからだの成長
(1)細胞はどのようなつくりになっているか

③既成プレパラートによる顕微鏡写真撮影
④プリントアウトとノートまとめ

⑤単細胞生物と多細胞生物
【ゾウリムシの観察】

(2)どうやってからだは成長するのか

⑥体細胞分裂の観察【タマネギの根の観察】

２節　生物のふえ方
(1)生物のふえ方の特徴を調べよう

⑦植物の有性生殖【花粉管の伸長の観察】

⑧動物の有性生殖と発生
【ウニの受精と発生の観察】

⑨無性生殖【ゾウリムシの細胞分裂の観察】

⑩生殖のまとめ　ファストプランツF2（第３世代）の播種

⑪ファストプランツF2（第３世代）の形質確認

(3)有性生殖と無性生殖の違いは何か

⑫遺伝子からみた遺伝のしくみ・遺伝の規則性

⑬ゾウリムシの接合観察

(5)遺伝子の正体は何か

⑭ＤＮＡを取りだそう

⑮専門家からＤＮＡについて学ぼう・ＤＮＡからわかること

図３　指導計画

5)検証授業の実施

①花粉管の伸長

　ニューギニアインパチェンスを用いて観察を行った。動きや変化のない観察であったが，目的をしっかり持って観察を行うことができた。動きがない分，わかりやすい画像を得ることができた。

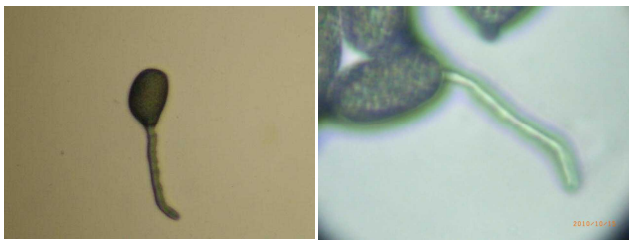


図４　花粉管の伸長(生徒撮影)

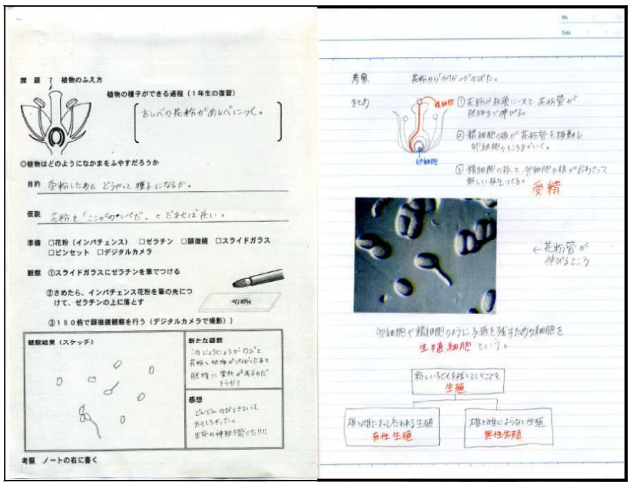


図５　花粉管の伸長　レポートノート

②ウニの発生

　生徒の目前で採取した，精子と卵を受精させて，発生の様子の観察を行った。生徒は初めて見る受精卵に，興味津々といった様子で観察を行っていた。受精卵の観察において最初の卵割を観察することができた生徒もいた。「授業時間内だけでなく，ずっと観察していたい」という感想を書いた生徒も見られた。

生徒の感想
・二つに分かれる様子を観察できて，感動した。
・自分では，割れる様子が見られなかった。自分で見たかった。
新たな疑問
・透明なからだだったけど，どういう部分がこんなに小さいからだに詰まっているのか。
・胚がどこから成体というのか知りたい。

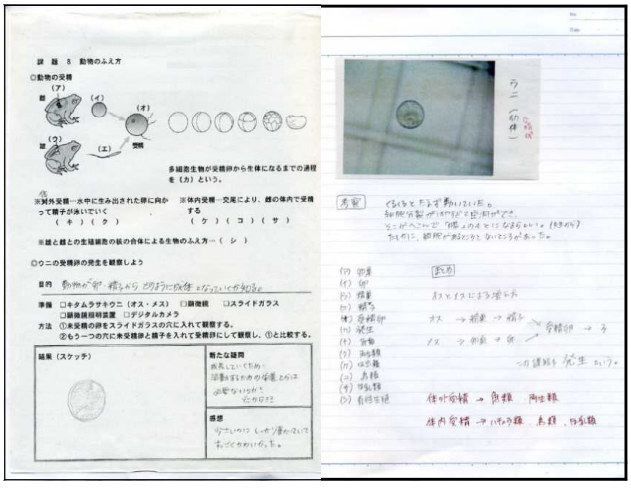


図６　ウニの分裂　レポートノート

図７　撮影・データ処理の様子

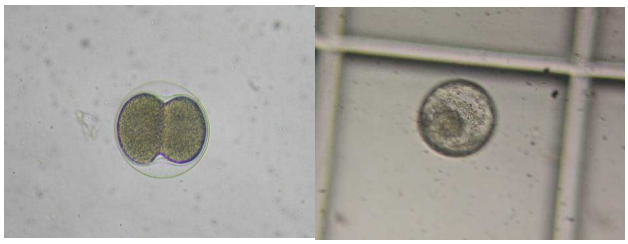


図８　分裂した受精卵(生徒撮影)

③　ゾウリムシの無性生殖

生徒一人一本，ポリプロピレン製の試験管を用意し，観察の７日前にゾウリムシと培養液を配布した。ゾウリムシが動き回る様子を，脇目もふらずに真剣に観察する様子があった。

分裂を観察できた生徒は，各学級２人であったが，大画面液晶テレビと実物投影機を用いて，観察結果の画像を学級全体で共有できた。試料を一人一人が培養したために，観察後，ゾウリムシを自宅に持ち帰り，自宅の顕微鏡で分裂する様子を観察する生徒もいた。

感想
・塩化ニッケルを加えたら動きが止まり，おもしろかった。分裂が見られなかったのが，残念でした。
・最初，繊毛をなくすのがいやで塩化ニッケル無しで観察したが，見るのが難しかった。
・気持ち悪かったけど，すごいと思った。もっと他のものも見てみたい。
新たな疑問
・分裂し続けたら小さくなって消えてしまうのでは。
・分裂したときには大核やそのほかのものは半分になってしまうのか
・一つの細胞は何回分裂できるのだろうか。
・分裂したときから全く同じなのか。
・一番小さいときから大きくなるまで，どのくらい細胞が増えるのか。
・分裂したときに核の数はどうなるか。
・近くにいたゾウリムシ同士は，何時間前に分裂したものか。

図９　分裂中のゾウリムシ(生徒撮影)

図10　データ処理・レポート作成

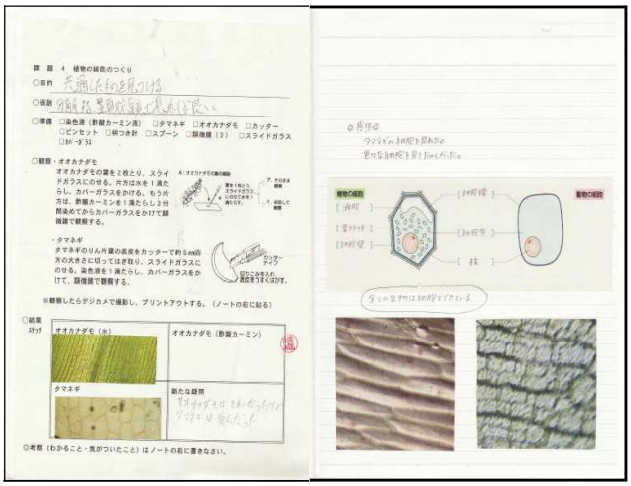
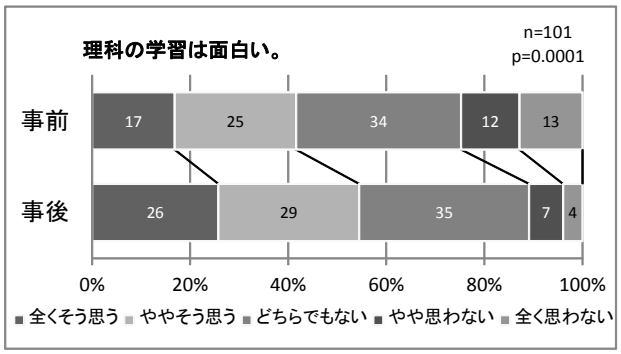
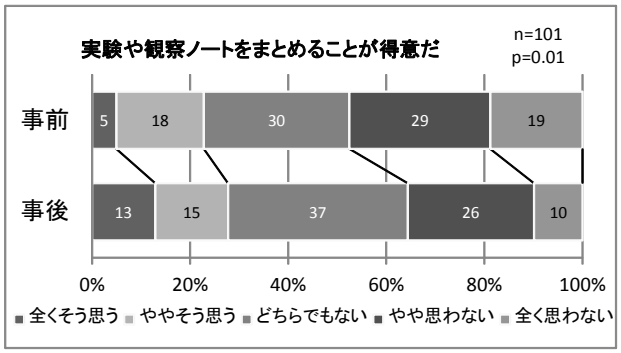


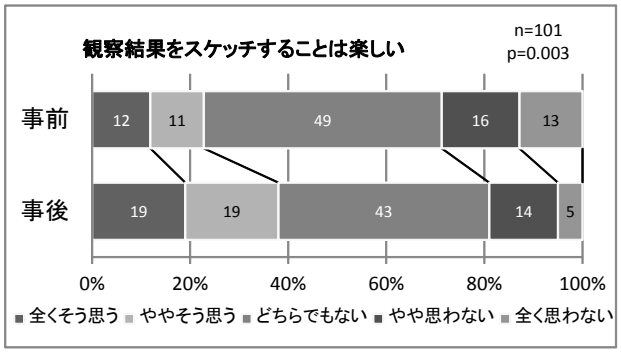
図11　植物細胞の観察　レポートノート

6)成果と課題の分析

検証授業の前後で生徒の理科に対する意識とレポート作成に対する意識をアンケートで調査した。それぞれの回答に対してｔ検定によって有意であるかを検証し，すべての項目で有意であった。



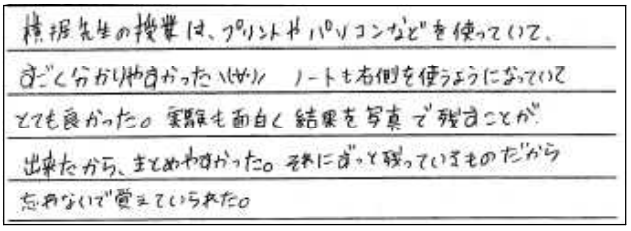




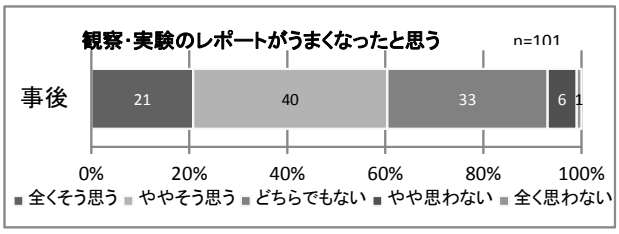
単元が始まったばかりのときには，撮影技術も未熟で，一つの観察で一枚の画像しか撮影できない生徒がほとんどであった。しかし，授業が進むにつれて，目的とする画像を繰り返し撮影できるようになった。そのため，班のメンバーで情報を共有し，自分のデータだけでなく仲間のよいデータをレポートとして残すことができた。画像データをレポート作成に有効に使えるようになり，質が上がってきたと感じていることが，回答からうかがえる。

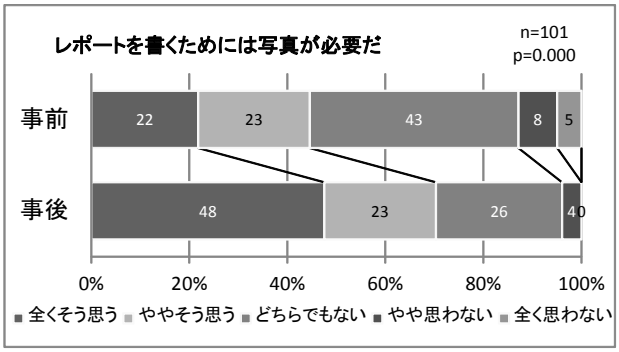
また，生徒のレポートに対するとらえ方も，肯定的な回答が多くなり，ノートのまとめが得意であるという生徒が全体の25％を超えた。また，観察でスケッチが楽しいという生徒も増えた。デジタルカメラを使うと，簡単に画像が手に入れられるので，スケッチが面倒だと感じる生徒が増加すると予想したが，逆の結果であった。理科を学ぶことが楽しいと回答する生徒が増加したことから考えて，学習活動に興味・関心が高まったことに伴い，観察・実験を楽しむことに加えて，スケッチに楽しさを感じるようになったのではないか。

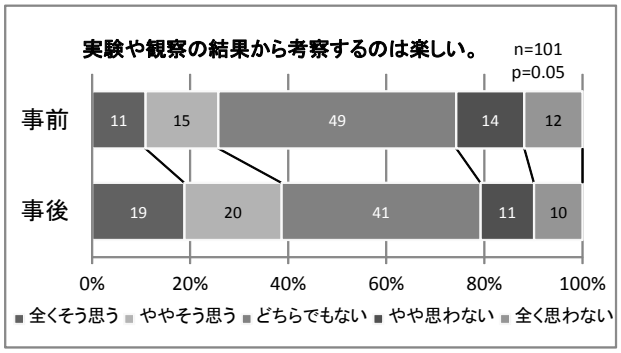
観察・実験結果から考察することが楽しいという生徒が有意に増加した。近年，考えることをいやがる生徒が多い中で，この変化は非常に喜ばしいものがある。思考するためには，何を，どのように考えるか，そのポイントが必要になる。デジタルカメラを使うことで，観察・実験の目的を持って行ったこと，それによって情報をきちんと得られたことが原因ではないかと考える。



生徒の授業後の感想より







5　研究のまとめ

1)成果

①観察･実験の記録をするうえでデジタルカメラは非常に有効な道具であることが確かめられた。

②デジタルカメラによる画像データをレポートに活用することは，レポートの内容や質を高めるために必要である事が確かめられた。

2)課題

①記録の手段としてカメラとスケッチの両方を取り入れた。しかし，時間が足りずに両方ともきちんとした結果を残すことができない状況があった。

6　おわりに

本研究においてデジタルカメラが画像の記録には適していること，レポートの内容を高めることを確かめることができた。しかし，どんなにラフでもスケッチとの併用をすべきだと思う。なぜなら線に描き起こすべき部分が認識できないまま撮影した画像を見ても，後々それが何を記録したかったのか分からなくなるからである。つまり観察の中で意図している，見てもらいたいものに気がついているかわからないのである。

生徒の観察，実験の技能面の評価をするために重要な部分であるのでスケッチを行うことで，何を見たか，どこまで理解しているかを確かめることも重要である。

だから必ず「このカット（写真）はここを観るために撮った」ということをスケッチの線を

描くことを通して確認しながら観察・実験を進めてく必要がある。自分の目で見て（インプット），どこを線にして描くのか吟味して，形を紙に再構成していくという作業(アウトプット）は，観察活動をより観察眼を養う意味のあるものにする。

理科の学習の中で，顕微鏡は１学年の生物分野から使用する。早い段階で使い方を身につければ，画像データの効果的な使い方ができるだろう。また，デジタルカメラは顕微鏡撮影だけでなく，観察･実験結果を記録する手段として様々な単元で活用できる。慣れてくればレポートだけでなく，実験結果をプレゼンテーションするためのソースの一つとして活用できるようになるであろう。

【参考文献】

1)藤枝秀樹「顕微鏡写真を簡単に撮る方法－カメラ付き携帯電話や古いデジタルカメラを活用して－」，香川県教育弘済会個人研究論文，2006

2)藤枝秀樹「教材生物の飼育法と教員研修での活用事例の紹介」，都道府県指定平成18年度都市教育センター所長協議会生物部会研究発表会要旨集，2006

3)藤枝秀樹「携帯電話のカメラで顕微鏡写真を簡単に撮る方法」，日本生物教育学会第82回全国大会研究発表要旨集，2007

4)藤枝秀樹「携帯電話のカメラで顕微鏡写真を簡単に撮る方法」，香川県高等学校教育研究会理科会誌 ，第43号 ，p31-36，2007

5)横堀肇之「平成22年度千葉県長期研修報告書」，2011

【実践記録】

豊かな表現を目指した音楽教育

ー自分の声つくりに興味を持ち、歌いたい気持ちにさせる合唱指導ー

葛飾中学校　教諭　佐々木　陽子

１、はじめに

中学校の音楽の授業において、合唱指導は不可欠である。合唱は自分の体全体を使って自分の伝えたいことを表現する。「表現力」をつける大切な学習であると考える。

今まで歌いたい気持ちにさせるために、合唱教材を精選することや歌詞の理解をし、気持ちを高める工夫をしてきた。しかし、いつも、ある段階までくると行き詰まることを感じ続けていた。それは、気持ちがあっても技術が伴わないので、深い音楽表現に行き着かないということだ。実際、自分も声楽を大学生の時に学んだが、具体的な声の響かせ方を体得するまでいかず、生徒にもいつも「こういう声で」「こういう表現で」というニーズは高く求めるわりに「ではそのためにはどうしたらよいか？」ということが教えられなかった。

しかし、幸運なことに５年前から葛飾中学校に赴任し、初めて合唱部の顧問を任されることになり、外部の合唱指導の先生や本校の校長含め３人の音楽科の諸先輩からたくさんのことを学ぶことができた。色々な先生方の授業で生き生きと歌っている生徒をみて、「もっと生徒たちに歌うことを楽しんでほしい」「世界にひとつしかない自分の声に興味を持ち、その原石を磨きダイアモンドに変えることができたら生徒はもっと生き生きと楽しんで歌うことができるのではないか？」という思いから実践を試みた。

２、研究の目的

自分の声に興味を持たせ、どの声域も自然でなおかつ楽に響く声づくりを磨くことによって、自分の目指す音楽表現ができ、歌いたい気持ちをつくる。

３、研究の手立て

１．指導者が学年ごとの指導の目標を明確に持つ。
２．楽しく、わかりやすい発声指導、音楽の表現つくりを工夫する。

４、実践経過と内容

［１年生の指導目標］

基本的な発声を身につけ、歌うことの楽しさ、満足感を味わわせる。

今までの経験から、１年生の段階で「発声の基本」と「歌う楽しさ」を教えることがとても重要であると痛感した。同じことを教えても１年生と３年生とではメンタル面での吸収の度合いが違うと感じた。新鮮な気持ちで入学してきた１年生に「中学校の音楽とはこういうものだ」と思わせることが大事であった。

［１年生の指導のポイント］

（１）口を開けさせる。

私たちは日本人なので日本語の発音からして口をそんなに開けなくても言葉が聞き取れる。そのため、口の中を大きく開けることに生徒たちはまず抵抗感を示す。しかし、授業で歌っている歌は日本語ではあるが五線譜の楽譜で西洋音楽を基盤としている。発声もいわゆる邦楽の発声（民謡など）ではない。響く声づくりには口の中を開けることが最初にやるべきことだと考えた。

※「口を開ける」とは縦に開け、口の中、のどの奥を広げることである。

①教師が手本を見せる。

「人間は生まれつき＜いい声の人＞と＜悪い声の人＞は**いない！**」「口を開けるか開けないかだけでほぼ決まる」と話し、教師が口の開けた響き（指たて２本分）と少し開けただけの響き（指１本分）とを範唱して聴き比べさせる。

②ロングトーンの発声練習をし、一人ひとりチェックする。発音は「ロー（ＬＯ)」

※「指は縦２本分」「耳の前にくぼみを作る」をチェックポイントとする

→「ロ（ＬＯ)」は「ア（ＡＨ)」よりものどの奥が広がり、「オ（Ｏ)」よりも柔らかい声になった。

③親しみのある既習曲を「ロ（ＬＯ）」で歌わせ、巡回し、口開けと歌声を個々にみる。

※毎回の授業の始めに既習曲を歌う学校が多いが、この既習曲や定番ソングを使ってＣＤで何回も連続で流し、その間、巡回しながら個々の口開けと発声をみて、ＯＫサインを出したり、できない生徒にアドバイスする。

→合格をもらえた生徒は笑顔になる。

→間違った口開けの生徒にアドバイスできた。（横びらき、開けすぎ）

＜効果のあった口開けの声かけの例＞

・「口を開ける＝その人のやる気、授業への意欲」
・「指は縦２本。耳の前にくぼみ」
・「いい声が前に出たくても歯が邪魔している。もったいない、残念」

（２）男子の変声期を配慮する。

２、３年生になってもみんなより１オクターブ下の音域で歌っていたり、音程を無視して声明のような声で地の底からうなっているように声を出して歌う男子がいる。こうした問題を解決するためにも１年生のこの時期をのがしてはいけないと考えた。

①変声期の知識を持たせる。

「この時、男子は音がはずれて当たり前。変声期を向かえた証拠だ」と教え、男子に安心させ、女子には男子に対する配慮をさせる。

※ＮＨＫが作成した変声期のドキュメンタリーのテープがあるのでそれを使うとさらにわかりやすい。

→音程がやっと合った男子に温かい拍手が贈られる場面が多くみられた。

②自分の声域を把握する。基準音「２点Ｃ（ド）」

※基準音が楽にでる人→変声期前か初期なので低音域は無理に大きな声を出させない。そのうち出るから無理をせず、言葉と息だけ出すようにアドバイスする。

図１

※基準音が高く感じる人、または出ない人
→変声期後または変声末期なので高い音を積極的に出させ、抵抗をなくさせる。

③変声期を終了したが低音域しか声がでなくてなかなか音程のとれない、声明のような生徒の指導・・・

こうした生徒は２つ原因が考えられる。一つは普段から気軽に歌う習慣や高い音を出す習慣がない場合が多いということである。二つ目は小学校高学年時に早く変声期を迎えた少年たちである。彼ら曰く、「みんなきれいな声で歌っているのに自分だけおじさんみたいな声で恥ずかしい」とか「みんなと合わないから小さな声で歌いなさいと先生に言われ、ショックを受けてもう歌いたくない」と肩身の狭い小学校時代の音楽の授業を受けた経験があったようである。どちらにしても早い対処が必要である。

♪音程をとれるようにするための実践♪

方法１

自分の普段の出しやすい音域でまず声を出させる。
↓
出した音を「ド」とし、「ドレミ、ドレミ」と３つの音程をとれるようにする。
↓
「ドレミレド、ドレミレド」
↓
半音ずつ上がっていく。

方法２

「ぼく、ミッキーだよ」などディズニーのキャラクターのミッキーマウスの声のまねをしながら裏声を出させ、裏声になれさせる。
↓
自分の出しやすい音で「ロ（ＬＯ）」と声を出させる。
↓
その音から自分の裏声最高音までエレベーターが急速に最上階へ上がるようなイメージで,「ロ～～～（ＬＯ）」と声を出す。
↓
その最高音手前あたりが基準音「２点Ｃ（ド）」だということを教える。

④男子の席順を配慮する。

男子はこの時期、変声も個々に差がある。そのため席順も意図的に仕組む必要がある。その方が指導しやすく、また変声期に入ったなどの変化もわかりやすい。

＜席順の例＞

３列目・・・変声期終了低音が出る生徒
○　○　○　○　○　○　○

２列目・・・変声中期
○　○　○　○　○　○　○

１列目・・・変声初期かボーイソプラノ
○　○　○　○　○　○　○

指導者

＜それぞれの配慮＞
（１列目）ボーイソプラノ
低音域は無理をさせず、息と言葉だけで歌わせる。今のきれいな声は希少価値だよと褒め、時にはユニゾンの部分をオクターブ上で歌わせる。
（２列目）変声初期～中期
いわゆる音程がはずれやすい子が多いので、音程を正しく取らせる配慮が必要。同じく低音はそっと歌わせる。
（３列目）変声後期～終了
変声期終了くらいの生徒。小学校時代、肩身の狭い思いをしていた生徒が多い。クラス全員の前でこの生徒たちを立派な大人の声だと大いに褒め、「１，２列目の生徒はこの声を目標にしていこう」と言葉掛けする。３列目の男子を気持ちよくさせると、堂々と声を出すようになり、合唱コンクールでは一番の戦力となる。

（３）女子の発声指導は声域を考慮して行う。

①パート分けは生徒の希望で分けない

女子のパート分けをするときに個々の希望で決めることが以前あった。問題点はソプラノに歌が好きな生徒がかたまり、アルトはなんとなく歌に自信がなく、消極的な雰囲気が漂う生徒が多いということがないだろうか。そうすると、合唱は当然、ハーモニーおかまいなしで朗々と歌うソプラノの声だけが聴こえてきてアルトが暗い雰囲気で・・・。

そういった失敗談を経て、指導者が声の質で決めるようにした。

♪ソプラノとアルトを分ける方法♪

「３点Ｅｓ（ミ♭）」で高音が楽に出るかで分ける。

Ｂ・Ｏハミング（口を大きく開けたままのハミングする）で、その全音上の音「３点Ｆ（ファ）」とトリルするように出させる。

図２

楽にトリルが回ったら→**ソプラノ**
ぎこちなければ→**アルト**というふうに分けた。

※分けた段階ではその音がぎこちなくても、訓練次第では、もっと上の音も出るようになるのでこれにこだわりすぎない。

※地声で歌える音域がきれいな響きの生徒はアルト。

アルトは「２点Ｃ～Ｇ」まで地声で汚くなりがちなので、この音域がきれいな響きの生徒をたくさんアルトにし、模範とさせる。

→きれいな声で歌っている生徒が近くにいると良い声の生徒が増えた。

②簡単な合唱の音取りは両方歌わせる。

ソプラノは低音域が苦手で、反対にアルトは高音域が苦手なのでどちらも歌わせ、苦手意識をなくさせる。

→ソプラノは裏声と地声の極端な響きの差が目立たなくなってきた

→アルトは高音域に苦手意識が少なくなり、次の曲はソプラノを歌いたいと意欲を持つ生徒がでてきた。

③アルトとソプラノの両方の音色の美しさ、役割を教える。

「私は絶対ソプラノがいい！」などとこだわる生徒がいるが、音楽性の幅を広げることはできない。それぞれのパートの良さを伝え、柔軟にチャレンジさせたい。

♪納得させ効果があった言葉掛け♪

ソプラノを嫌がる生徒に・・・

「ソプラノは天使のようなきらきらした声」

「あなたの声は高音が軽やかにでるね。こんな高い音が楽に出る人は珍しい」

アルトを嫌がる生徒に・・・

「アルトは聖母マリア様のような女性本来の温かみのある優しい音色」

「アルトが合唱の深みを作る重要なパート」

「あなたは地声が美しいね」

（４）授業をシステム化させ、テンポよい授業展開を工夫する。

①３分前学習で音楽の気持ちにシフトする。

声はその時の気持ちがダイレクトに反映する。授業の前に嫌なことがあったり、一時間目で寝起きだったりすると声が出ない。授業の始めは運動など、体を楽しく動かすと気持ちがリフレッシュする。

本校は「３分前学習」がよき伝統となっており、それが落ち着いた授業の基盤を作っている。音楽の授業ではこの３分間学習でストレッチとブレス（腹式呼吸）トレーニングを係生徒で運営できるようシステム化した。その後、決まった発声練習行うことで、音楽の授業へ気持ちがシフトしていくようにしている。

②リーダーを育て、主体的な学習展開が行えるようにする。

各リーダーを育てることによって合唱コンクールで生徒主体の練習ができるようになってくると考えた。

音楽教科リーダー
・３分前学習を指示する。
・必要な拡大歌詞、音源を準備する。
・授業後の音楽室の椅子の整頓
指揮者
・新曲の一斉音取りの指示
・合唱コンクールでの曲作り
※指揮者は（音楽センス）と（大きな声）と（信頼）が必要条件。指揮のテストを四月初旬に行い、候補者を数人ピックアップしておき、担任と相談して決定していく。
伴奏者（複数いると交代でできてよい）
※２、３カ月前に曲を渡しておく。
パートリーダー
・パートメンバーの口あけ、ブレス、音程をチェックし、パートの音色を揃える。
・パートで話し合いをしながら、曲想付けをリードしていく。
パートピアノ
一斉同時音取りを行うため、片手で簡単なメロディが弾ける生徒を各パートに一人つけるようにする。（１年時から育成する）
※いない場合は伴奏者を含め最低３人いるとよい。
③一斉同時展開の音取りをし、効率よく音取りを進める。
・新曲を音取りするとき全パート一斉に指揮者が指示をだし､テンポよく進めるようにする。

図３

→カスタネットを使いながらテンポをとったら各パートのリズムがずれなくて良かった。
→時間に無駄がない。しゃべる隙を与えない。
→数多く練習できた。
→生徒主体の練習なので指導者が全パート自由に巡回できた。
→他のパートを聴きながら歌え、耳の訓練にもなった。

[１年生の生徒の変容]
アンケート（１クラス３９人中）
Ｑ１．歌うことは好きですか。

	好き	嫌い
小学校時	３０人	９人（うち男子７人）
現在	３６人	３人（うち男子２人）

Q　Ｑ２．中学校に入って自分が伸びたと思う歌唱力はなんですか。（３９人中）

項目	人数
口が開くようになった	３２
声量がつくようになった	２３
恥ずかしがらず声を出せるようになった	１６
高い音が出るようになった	２７
響きのある声が出せるようになった	１８
気持ちを込めて歌えるようになった	１４

＜考察＞
Ｑ１の結果では、歌うことが好きな生徒が高い割合でいたことが良かった。しかし嫌いな生徒もいる。理由は音がとれないとか高い音がでないなど苦手意識が強いところにあった。長年にわたって苦手意識があると思うので個別でアドバイスを継続していき、その生徒の変容を見逃さないようにしたい。
変声期を小学生時代に終了し､歌うことが｢嫌い」と言っていた男子の多くが「好き」に変容した。音域の幅を広げ、変声前の男子の手本にしたことが本人たちの自信となりよかった。

Ｑ２では「口が開くようになった」という生徒が８割以上いる。小学生時代に多くの生徒があまり「口を開くこと」を意識していなかったということがわかる。それに付随して声量がアップし、高い音が出るという結果が出ているのは喉の奥を広げることができるようになったからであると考えられる。

［２年生の指導目標］

音楽的な表現を意識し自己表現力を身につけさせる。

変声期も安定しつつ、発声も基礎を意識して声を出せるようになってきたため、のびのびと声を出すことができるようになってきた。

音楽の諸要素を曲に応じてわかりやすく楽しく指導していく。

［２年生の指導ポイント］

（１）軽い声から大人の深みのある声に変える

①男子の低音も鳴るようにしていく。

男子は変声も落ち着いて終了してくるのでロングトーンで１点Ｇより下の音域も積極的に発声させ、お腹の支え、顔より下の共鳴腔を意識させながら深みのある低音を作っていく。

図４

→今までは高音の練習が多かったので低音域を出すことによって変声が安定してきた生徒たちは低い音がでるようになったことが嬉しいようであった。

②女子は鼻腔の響きも意識させる。

「ｎｇ（んご)」ハミングで鼻腔に響きをもっていくようにする。裏声と地声の響きの違いが目立たないようにする。

図５

（２）楽しく、またはわかりやすく音楽の諸要素を意識させ、深い表現を作っていく。

①助詞抜きハミング

助詞のところだけハミングにし、助詞を意識させる

例

「夏の思い出」江間章子作詞　中田喜直作曲

図６

→言葉の単語をはっきりさせ、助詞は柔らかく歌わせたいとき効果的であった。

②フレーズ感を生かした練習

ＬＯ（ロー）で１フレーズを一息で歌う。

※歌詞をつけないで歌うと腹筋や息の流れに焦点がいくので抑揚がつけやすい。

↓

歌詞を母音だけで歌う。※レガート感が出しやすい。

↓

フレーズ感や響きを損なわないまま、歌詞をつけて歌ってみる。

図７

③拍子感をつけるペアリトミック練習

ペアで手を合わせたり、ボディパーカッションを使ってリトミック練習を行い、拍子感を体で覚えさせる。

→間違えないようにと緊張感を持って、またペアで友達と手を合わせることが面白いらしく、「もう一回やりたい」とどのクラスでも声があがった。

［　生徒の変容　］

アンケート

Ｑ１　歌っていて楽しいと感じるときはどんな時ですか。

・大きな声で歌うと気持ちよい
・上手だねと言われたとき
・曲の中のサビにきたとき
・みんなで歌っているとき
・きれいな響きで歌えたとき
・みんなの声がハーモニーになったとき
・高い音も低い音もでたとき
・みんなでのって歌えたとき

＜考察＞

合唱コンクールでは学年ごとの成長の差を感じることができた。２年生は１年時より遥かに難曲を選ぶ。授業時数も 1.5 時間から１時間に減少する。それでも１年生より響きが深く、表現力が増しているのがわかった。また取り組みもリーダー中心で指示の出し方に余裕があった。

[３年生の指導目標]

「主体的に活動し、さらに音楽表現を伸ばし、感動的な歌を歌えるようにする。」

[３年生の指導ポイント]

① 基礎的な発声や音楽表現は積み上げてきているのでその能力をさらに伸ばすアドバイスをしていく。

② 選曲で混声四部を取り入れ、１，２年生とは違う最高学年に成長した大人の響きを味わわせる。

＜本校の合唱コンクールでの３年生の選曲例＞

♪海の匂い
♪海はなかった
♪言葉にすれば
♪むぎや
♪二十億光年の孤独
♪郷愁歌　　など

※どの曲も難曲が多いが、３年生になると男子の声量があるので混声三部だとバランスが悪い。そのため、なるべく混声四部にしている。簡単な混声四部も探し、無理なく取り組めるようにしている。

※まだこの実践での３年生の指導はしていないため、来年度この方向で３年生の指導にあたりたいと考えている。

５、成果と課題

具体的で丁寧な発声指導をすることによって自分の声に興味を持たせることができた。声域を広げたり、声の響きに深さを求めたりと現在の力をさらに伸ばそうと素直にチャレンジする生徒が多く、日々やりがいを感じている。

歌唱指導で一番大切なことは「個々を頻繁にみる」ということであった。「１時間に２０人」を目標に個々の歌声を聴き、アドバイスをするようにした。

生徒が笑顔を見せてくれるのは、個別指導で「上手になったね」「〇〇ができるようになったね」と褒めた時である。このように他人に褒めてもらったことを自信につなげ、さらに頑張ろうとするので、その教育効果は非常に高いということを痛感した。

今後もさらに研修を積み、いろいろなアプローチの仕方で楽しくわかりやすい歌唱指導をしていきたい。

【実践記録】

キャリア教育の充実を図る作業学習のあり方

－自立活動の実践を通して－

船橋市立船橋特別支援学校　教諭　濱本 武将

１　主題設定の理由

キャリア教育の取り組みとして、本校でも、高等部では、個別の学習、作業学習、総合的な学習の時間等において、勤労観・職業観の育成にかかわる指導を実践している。そうした中、「就職の決め手となった能力」は、という東京都教育委員会がとったアンケートに、キャリア教育で育てる力の４つの領域が全体の 86 パーセントと高い割合になっていると報告されている。その中でも、人間関係形成能力は 60 パーセントで群を抜いている。人間関係形成能力は、小中学校、小学部、中学部、高等部すべてにおいて課題として取り組まれるもので、就労のみならず社会生活全般に求められる力だと様々な研修会などでも言われている。

作業班の研究と、自立活動、キャリア教育、個別の教育支援計画に絞ってまとめていくことにより、生徒の自己肯定感をもった生活を確立していけるのではないかと考えた。

本校の高等部では、産業現場等における実習を 1 年生から年 2 回行い、事前学習では、マナーについて学んだり、実習先についてインターネットで調べたりする学習を行う。終了後には、お礼状を書いたり、保護者を交えた 3 者面談で実習の評価票をもとに自身を振り返ったりする。作業班では、単元ごとに頒布会や納品を行い社会にでて多くの人と関わる経験を重ねている。そうした活動の中で自立活動を生かしたいと考え、本主題を設定した。

２　研究仮説

（１）　自立活動を加味した作業学習の年間指導計画を考え、単元化を図り、支援案を作成し実践していく中で、活動内容が具体化され、生徒が興味関心、期待感をもって意欲的に働くようになると考える。

（２）　生徒が、持てる力を最大限に出し切って、精いっぱい取り組めるように、教職員ができる状況作りをすることで生徒は自ら主体的に働くことができると考える。

（３）　一緒に働く人、顧客など多くの方との人間関係の形成がスムーズにいくことで、自己肯定感をもった働き方をできて、定着にもつながっていくと考えられる。そのため、たくさん認めたり、ほめたりできるように、個別の教育支援計画を立てる際、短期目標を生徒の実態をよく考えた上でたてることが重要だと考える。

３　研究計画

（１）自立活動を加味した作業学習の年間指導計画を考え、単元化を図り、支援案を作成し実践していく中で、活動内容が具体化され、生徒が興味関心・期待感をもって意欲的に働くようになると考える。

①自立活動の学習指導要領の改定の要点について、研修会に参加したり、文献などで詳しく調べたりして、校内で機会があるたびに伝えると共に自らが実践し模範を示していく。

②校内研修会などで、自立活動、キャリア教育についての内容をもとに、自分でも支援案を作成して意見を伺うと共に、他の学部、作業班の支援案を深く読み込んで、研究会が深まるような質疑応答を積極的に行う。

③作業班でも、専門家を招いて職員、生徒の研修会を重ねたり、教師と一緒に生徒が自分たちで、専門書やインターネットをもとに、学び合って新しいことに常に挑戦していったりする。

④個別の教育支援計画をもとに、一人一人のニーズを的確に把握して作業班としては何をしたらよいのかを明確にし、支援案を作成して実践する。産業現場等における実習の様子を担任や学年の先生から聞いたり、逆に作業の様子をまめに伝えたりする。また、保護者面談の様子を聞く、「ふらっと船橋」や就労支援センター、職業安定所、などの専門機関との様子を聞くなど連携を密にもつ。

⑤必要に応じて、具体的な理解と支援の為の生徒の発達検査として、WISC や K-ABC などの検査をしたりする。どういった風に偏りがあるのか、苦手なものがあるか、などを分析して得られたものを手がかりに、生徒にあった対応や理解を考えて行き、生徒の個性や特性と捉えて、理解・対応・支援に役立てる。

（２）生徒が、持てる力を最大限に出し切って、精いっぱい取り組めるように、教職員ができる

状況作りをすることで、生徒は自ら主体的に働くことができると考える。
①製品作りの工程を細分化したり、手順書を作成しておいたりして、生徒が仕事を理解して自ら取り組めるようにする。
②毎回、作業の開始時に生徒と一緒に作業準備をしたり、終了時には、清掃や整理整頓を一緒に行ったりして、常に仕事をしやすい環境整備を念頭においた取組をする。整理整頓チェックは生徒の係として行ったり、年間目標の柱に入れて毎日確認し合ったりする。
③生徒や教職員で相談しながら補助具作りや新しい道具の購入をして生徒一人一人に合ったものにしたり、新しいことに挑戦する意欲につなげたりする。
（３）一緒に働く人、顧客など多くの方との人間関係の形成がスムーズにいくことで、自己肯定感をもった働き方をできて、定着にもつながっていくと考えられる。
①自ら考え、新しいことに挑戦し合える雰囲気を作り、教え合う、学び合う機会を多くもてるようにする。
②単元の締めくくりは、頒布会を行い、みんなで喜びや達成感を分かち合う中で、自己肯定感をもてるようにする。
③学校全体、学部、作業班独自、他校での頒布会など様々な機会を設け、製品作りと共に、お店との打ち合わせ、チラシ作り、会計などの諸活動を通し様々な人と関わる。

４　研究実践

（１）文献研究、研修会に参加

自立活動の活動内容について、キャリア教育との関連性について、他校の実践から学び、勤務校での教育実践、校務分掌（自立活動）への還元を図った。

ホームページで自立活動を検索した中で、詳しく掲載している学校が、県立冨里特別支援学校、県立特別支援学校　流山高等学園　県立柏特別支援学校などがあった。ホームページ上の資料を勤務校に紹介したり、夏休み等を利用して、実際にその学校に見学や研修に出かけて学ばせていただいたりした。

千葉県総合教育センター主催の、自立活動やキャリア教育の研修会にも参加して他校（小、中学校、特別支援学校）の実践を学んだり、情報交換をしあったりした。

勤務校でも時間をかけてＩＣＦに対して研修会で学んでいたので、取り掛かりやすくチームのリーダーとして、まとめ役を実践することができた。今後の教育課程の改善のために様々な時に活用する必要性を感じている。
①県立富里特別支援学校の実践から

以前の勤務校である県立富里特別支援学校の「過去 3 年間の研究」を参考にした。サブテーマー「課題学習」でのコミュニケーション、人間関係の形成、社会性を育てる支援を中心にーは、注目に値した。過去に、アセスメント（WISC Ⅲ、K-ABC）を行い具体的な支援を行ったことで実態に合った課題を設定できたことで、非常に落ち着きを取り戻して学力も向上した実践の経験を振り返りつつ学んだ。夏休みに、同校主催の研修会に参加し、キャリア教育と作業学習、そして発達検査を生かした実態把握などを学び、質疑にも応じていただいた。作業班の様子も少しだが見ることができた。

その時も、「東京都教育委員会がとったアンケートにキャリア教育で育てる力の４つの領域が全体の 86 パーセントと高い割合になっていると報告されている。その中でも、人間関係形成能力は、小中学校、小学部、中学部、高等部すべてにおいて課題として取り組まれるもので、就労のみならず社会生活全般に求められる力である。」との引用をされ、人間関係形成能力が大切であることを述べられていた。そうしたことをふまえた実践を行う中で、生徒の何人かが実習先から高い評価を受け、次回も来てほしいとの評価を受けた。
②流山高等学園の実践から

千教研船橋支部の研修会や夏休みの研修会に流山高等学園の作業班を参観したり、職業学習の内容や自立活動の様子を学んだりした。

自己評価力を高めて自己肯定感を促す授業実践は、私が目指す考えと一致しているところである。私自身も生徒が主体的に取り組めるように作業の準備をしたり、補助具を作ったりして一人でできる状況作りに取り組んでいる。流山高等学園のような学校は、分校として、柏や我孫子にでき、市川にも来年からできる予定であるので、ますますその教育実践は注目されている。しかし、本校の実践は決して負けていないことを強く訴えたい。
③県立柏特別支援学校の実践から

まず､ホームページで研究のまとめの中に､『自閉症教育４つの柱として「コミュニケーション」「見通し」「社会参加」「余暇」を取り上げた。これまでの本校における実践のなかで、これらの視点が強くは意識されていなかったかもしれないが、４つの柱につながる指導・支援は、たくさん行われていた。そこで今年度、研究活動の一つとして、日々の実践事例の中から、自閉

症教育４つの柱に関するものを募った。』と図解入りで多くの実践事例を見つけた。船橋特別支援学校でもすでに取り組まれていることが多く、せっかく実践しているのだから、柏特別支援学校のようにホームページに掲載したほうが良いのではと、職員会議で提案させていただいた。同じような実践がホームページ上に載っていたり、書籍に紹介されたりすることで、自信をもって実践できるのではと考える。

柏特別支援学校にも、夏休みの研修会に出かけ、「太田ステージの理論」と実践と題しての話をきいた。実態把握をする際に役立ち、私自身も初任校の時に使わせていただいていた。自立活動を実践する中で欠かせない内容であると再度認識が深まった。コミュニケーションの発達を要求、拒否、指示理解に分け、ステージごとに見ていき、その発達段階にあった課題の例をあげている。遊びの発達でも、種類、道具の使い方、対人関係の視点から段階を踏まえて取り組めるよう課題の例をあげている。

太田ステージ、鳥の絵課題、新版 S-M 社会生活能力検査を組み合わせて実施するとより総合的に判断できることを再確認できた。

（２）本校校の研究テーマに沿った作業学習の取り組み

「『年末陶器市』in　ジャスコ高根木戸店」と単元名を設定、支援案（右資料）を作成して公開研究会に向けて現在取り組んでいる。

『ふなっ子バザール』とは、船橋市内中学校の特別支援学級と船橋市立と区別支援学校中学部・高等部による合同頒配会のことで、ＪＲ船橋駅の協力によりコンコースを借り行われていた。今年は、改装中のため、フェイスで行う。この頒布会は毎年 12 月に行われており、約 1 ヶ月かけて授業で製作したものを、活動の報告を兼ねて販売を行っている。

「広報ふなばし」で告知をしている他は、ほとんど告知らしい事はしていないというが、多くの来場者が訪れ品物を購入していく。多くの来場者が、この日を楽しみに毎年訪れている。毎年、船橋中学校,湊中学校,宮本中学校,御瀧中学校,二宮中学校,旭中学校,高根台中学校,八木が谷中学校の特別支援学級、市立特別支援学校中学部・高等部の生徒とその友人。土曜日の船橋駅に「いらっしゃいませ～！」と元気な声が響き多くの客が訪れる。

船橋市では、この行事以外に、合同発表会（小中学校の特別支援学級と県立船橋特別支援学校と船橋市立特別支援学校による、演劇、太鼓演奏、ダンス、音楽発表など）合同作品展なども行われている。また、千教研船橋支部（小中教科別協議会）の研修会(授業研究会、進路先見学会、講演会、実技研修など)が毎月行われている。以前、部長として 100 数十名の会員による大会も行わせていただいた。特別支援学校を何校か経験したが、こんなに連携があるところはないのではないかと思う。

作業班は、生徒 15 名で職員が 4 名である。学部全体では、生徒が 120 数名、職員が 40 名弱で８つの作業班で構成されている。高等部は、卒業までの年数が少ないので、作業学習を中心とした教育課程の中で、産業現場等における実習やその前後の学習で社会に出ていく準備をしている。体育の時間では、約 20 分で 4 ㎞くらいを目安で走り、ストレッチなどで毎朝体を鍛えて、長時間働く力や、生涯、自分から進んで体を動かそうとする意欲を育てている。自立活動は学校教育全体を通して行うものであるので、そうした学習全体の中で伸ばせるところは伸ばし、短所は長所で補えるようにしていく。

通常の授業観察だけでは読み取れない部分を、先にも述べた発達検査（WISC Ⅲ、K-ABC）などで見ていく。結果については、保護者や本人、担当する作業班の教職員、実習先の担当者などにわかりやすく伝えている。そうした中、より具体的な取り組みなどが生まれている。

資料　今年私が主展開させていただいた公開研究会での支援案

１　単元名「年末陶器市inジャスコ高根木戸店」

２　単元について

本単元はジャスコ高根木戸店で行われる窯業班の頒布会である「年末陶器市」に向け、窯業製品をたくさん作り、仲間と協力しながら取り組もうというものである。

［数々の頒布会を終えて］

これまでに窯業班は、単元のまとめとして様々な頒布会を行い、回を重ねるごとに、生徒はスムーズに参加できるようになり、生き生きとした活動の様子が多く見られるようになってきた。

そのため、授業の始めに頒布会までのカウントダウンの後や終了時の反省会で頒布会のことを話題にすることでも、作業への意欲の高まりが見られる。たくさん購入していただいた製品や来場者からの「こういう製品がほしい、この色がほしい、ここは、こうなっていた方が良い」等の声が、次への製品作りへ

の具体的な指標となっていて、生徒一人一人の意欲へとつながっている。釉薬の色や模様を工夫したり、より大きな形や今までにない形に挑戦したりしている。

また、中学校と合同行事である「ふなっ子バザール」を間近に控え、たくさん作って、たくさん頒布しようという生徒の意気込みが益々高まっている。

［新製品・新技法を取り入れた製品作り］

本単元では今年最後のひとつの節目として、新製品、新技法を取り入れた製品を含め、今まで培った技術を生かして大量に製作していく。

クリスマスへ向け思わず楽しくなるような新製品のキャンドル立てなどの製作。そして、新技法の「盛り絵」「印花での模様つけ」「化粧泥で下絵の色つけ」などを取り入れたマグカップ、大皿などの製作。さらに来年の干支である龍のペーパーウエイト、楊枝立てでは、今までの鋳込み成形だけではなく、型押し成形でも取り組んだ新技法での製品作りに丁寧に取り組んでいきたい。

生徒にもクリスマス、正月、冬などのキーワードを示していく。生徒からのアイデアや思いなどが発表され、新製品に反映できるとよいと思う。生徒一人一人がより質の高い製品を作り、継続して仕事ができるように場の配置や補助具などを整理して取り組んでいきたい。

［みんなの手で成功させる「年末陶器市」］

単元を締めくくる「年末陶器市」に向けて、生徒代表が直接店へ挨拶に行ったり、パソコンを使って生徒の手でチラシやポスターを作ったりして、準備活動もみんなで一斉に行う。また、出品表、出来高表、単元の目標の掲示等、各担当の係活動をより充実し、生徒自身が自分たちで作り上げた頒布会であるという雰囲気を高めていく。

各グループから仕上がった製品に工夫をこらした釉薬付けをし、窯詰めして本焼きした完成させた製品の中から、特に良くできた製品を一緒に選んで棚へ陳列し、自分の作った製品の完成を実感できるようにする。

本時は、「年末陶器市」に向けて単元が始まって５日目で、作業製品作りに取り組んでいるところである。

3　単元のねがい

○頒布会に向けて、新製品を中心に完成度の高い製品をより多く製作してほしい。

○頒布会当日は、自分が作った製品を頒布することを通して一人一人が達成感を味わってほしい。

4　単元の計画

（１）計画を立てるにあたって

［単元のすすめ方・活動内容］

・単元の初日に「年末陶器市」「ふなっ子バザール」の内容を話したり、日程などを確認したりして単元の見通しをもてるようにする。
・単元の初日に生徒と一緒に単元の目標を話し合い、作業室の前に掲示し、自分たちで考えた目標を意識できるようにし、頒布会への意欲を高められるようにする。
・単元の目標の記入、ちらし作成、班だより、会計、出品表作成など、各係の活動を活発にできるように、事前に見本を用意しておいたり、道具を用意しておいたりして、主体的に取り組めるようにする。
・頒布会までのカウントダウンを毎日行い、「いつまでにこれだけ作ろう」と出来高表でその都度確認し合い、単元の終盤には、たくさんの製品がそろった状態にできるようにしていく。
・型押しグループでは、大きな皿や鉢、新技法を取り入れた干支の置物、中位の皿や鉢、小さめな皿や鉢などそれぞれ自分の作りやすい大きさの製品を作り、製品の作成数を今までより高めていけるようにする。
・型抜きグループでは、新製品のキャンドルスタンドの見本や手順書を手元に置いたり、必要な助言を行ったりすることで、確実に作れるようにする。
・鋳込み成形グループでは、新製品の干支の置物（毎年売れ行きが良い）や花瓶、茶碗（在庫数を確認して、数が減っている製品）を中心的に作ることで、頒布会に向けての期待感を高め、意欲的に鋳込み成形作業に取り組めるようにする。
・釉薬付けグループでは、釉薬づけの様々な技法（上絵、下絵、刷毛模様、吹きつけなど）を事前に専門書を読みあったり、専門家に手順や新しい技法について確認ししたりしておき、生徒同士のやりとりを大切にしながら進めていく。
・頒布会のことを常に話題にしていき、準備活動を一斉に行って仲間同士で協力していく雰囲気をつくる。
・頒布会用のチラシやポスターを一緒に作り、校内に掲示したり、ポストに配布したりするなどして、当日への意欲を高める。

［場の設定、道具・補助具］

・型押し成形グループでは、型押しする際、強く叩かないように柔らかいスポンジの入った「たんぽ」で押せるようにする。
・型抜き成形グループでは、穴を開けた補助板の間に粘土を挟むようにして、穴あけの位置が一定になるようにする。
・鋳込み成形グループでは、鋳込み、型ふき、排泥などの仕事用テーブルを近くに配置して、それぞれの仕事へスムーズに移動できるようにする。
・釉薬付けグループでは、濃度計を使って適切な濃度に釉薬を調整しておいたり、コンプレッサーで吹き付ける際に、電動ろくろで回しながら均等に吹き付けられるようにセットしたりしておく。

［ともに活動しながらの教師の支援］

・教師も分担の仕事に取り組みながら、様子を見ながら声をかけたり励ましたりして、生徒が意欲的に取り組めるようにする。
・製品の修正や製作の準備を行いながら、吹きつけの出具合の確認や、コンプレッサーや電動ろくろなどの機械の様子にも気を配るようにする。
・頒布会当日は、一緒にチラシ配りや来場者への声かけなどの頒布活動を行い、会場の雰囲気を盛り上げるようにする。

以下、日程計画、場の設定、道具・補助具、作業工程、本時の計画、（１）単元のねがい、（２）展開（３）生徒の様子、本時のねがい、手だてと続いていくが、この論文では省略させていただく。

公開研究会では、単元の組み方について、頒布会の回数を１回にしたほうが良い。コンプレッサーの場の配置について考える。吹きつけ方では、取扱説明書をじっくり読んで工夫が必要。場の配置をもっと整然として整理整頓を行う。仕事に勢いを。大量生産をしていく工夫。作品を製品へ転換していく努力を。掲示物を生徒自身の手で行えているところが良いところで、一部まだ工夫できるところがある。などの意見や質問が出て、公開研究会をやった甲斐があった。

終了後には、作業班で、見直しができるところはすぐに見直しをし、新製品については、もっと完成度が高く、量産ができ、たくさん頒布できそうな製品作りができつつある。作業室も整理整頓を今まで以上に行ったり、生徒が主体的に取り組める場作りをより徹底したりした。

５　実践の成果

（１）自立活動を加味した作業学習の年間指導計画を考え、単元化を図り、支援案を作成し実践していく中で、活動内容が具体化され、生徒が興味関心・期待感をもって意欲的に働くようになってきた。

①　自立活動の学習指導要領の改定の要点について、研修会に参加したり、文献などで詳しく調べたりして、校内で機会があるたびに伝えた。また、校内研修会などで、自立活動、キャリア教育についての内容をもとに、自分でも支援案を作成して意見を伺うと共に、他の学部、作業班の支援案を深く読み込んでいった。そのためか、研究会が深まるような質疑応答を積極的に行う教職員(特に若手教員)が増えてきたと感じる。

②　作業班でも、専門家を招いて職員の研修、生徒の学習を重ねたり、自分たちで、専門書やインターネットをもとに、学び合って新しいことに常に挑戦していったりした。

③　必要に応じて、具体的な理解と支援の為の子どもの発達検査として、WISC や K-ABC などの検査をしたりした。どういった風に偏りがあるのか、苦手なものがあるか、などを分析して得られたものを手がかりに、子どもにあった対応や理解を考えていった。実習先でも、子どもの個性や特性と捉えて、理解・対応・支援に役立てられた。

（２）生徒が、持てる力を最大限に出し切って、精いっぱい取り組めるように、教職員ができる状況作りをすることで生徒は自ら主体的に働くことができてきている。

①　製品作りの工程を細分化したり、図解入りの専門書を一緒に読んだりしたことで、生徒が仕事を理解して創意工夫を凝らした製品を自ら取り組めるようになってきた。

②　生徒と教職員で相談しながら、補助具作りや新しい道具の購入をして生徒一人一人に合ったものにしたことで、新しいことに挑戦する意欲につなげることができ、キャンドルスタンド、干支の龍の置物やコンプレッサーを使った釉薬がけなどの新しい製品ができた。

（３）一緒に働く人、顧客など多くの方との人間関係の形成がスムーズにいくことで、自己肯定感をもった働き方ができ、定着にもつながっていっている。

①　自ら考え、新しいことに挑戦し合える雰囲気を作り、教え合う、学び合う機会を多くもてたことで、生徒や教師が和気あいあいと意見を出し合って製品つくりができた。単元の

締めくくりの頒布会では、みんなで喜びや達成感を分かち合う中で、自信をもって一人一人が来場者に声をかけられるようになってきている。

② 学校全体、学部、作業班独自、他校での頒布会など様々な機会を設け､製品作りと共に、お店との打ち合わせ、チラシ作り、会計などの諸活動を通し様々な人と関われた。

６ 今後の課題

（１）自立活動を加味した作業学習の年間指導計画の考えについては、まだまだ精査されていない内容がある。単元化を図り、支援案を作成し実践していく活動では、職員が毎年入れ替わり実践内容を引き継ぐことが容易でないことがあげられる。

① 自立活動の学習指導要領の改定の要点について、研修会に参加したり、文献などで詳しく調べたりして、校内で機会があるたびに伝えてはいるが、全体にまんべんなく伝わっているのかは今後、アンケート調査などをする必要性を感じている。

② 作業班でも、専門家を招いて職員、生徒の研修会を重ねたり、自分たちで、専門書やインターネットをもとに、学び合って新しいことに常に挑戦していったりしたが年度の途中から本腰を入れた感じだった。複数年計画で取り組めると良いのではと感じている。

③ 個別の教育支援計画をもとに、連携はある程度はできているが、学年会や学部会などで、もっと密な情報交換が必要であると感じる。民間企業で行っているメーリングリストによる配信など、定期的に情報が流れて読み取れるような仕組みも今後必要なのかもしれない。

④ 発達検査の WISC や K-ABC などでどういった風に偏りがあるのか、苦手なものがあるか、など分析して得られたものを手がかりに、子どもにあった対応や理解を考えて行き、子どもの個性や特性と捉えて、理解・対応・支援に役立てることは、一部の教職員では行っているが全体には浸透しきっていない。

（２）生徒が、持てる力を最大限に出し切って、精いっぱい取り組めるように、教職員ができる状況作りをすることで生徒は自ら主体的に働くことができると考える。まだやれることはあるのではないか、と限界を超えていくことが必要だと思われる。

① 製品作りの工程を細分化したり、手順書を作成しておいたりして、生徒が仕事を理解して自ら取り組めるようにすることもまだ見直す余地は充分ある。

② 環境整備を念頭においた取組は、企業への実習にいくとまだまだ、甘さを感じることが多い、生徒でもそう感じる生徒も多いのではと思われる。

③ 生徒や教職員で相談しながら補助具作りや新しい道具の購入をして生徒一人一人に合ったものにしたり、新しいことに挑戦する意欲につなげたりすることも、時には、班会議と称して作業班全体で生徒を交えて会議をするのも面白いのではと思う。

７ まとめ

自ら考え、新しいことに挑戦し合える雰囲気を作り、教え合う、学び合う機会を多くもてるようにすると共にお互いの良いところを認め合い尊重し合える雰囲気作りをしたり、そういったトレーニングを重ねたりする必要があると考えられる。また、単元の締めくくりの頒布会も、学校全体、学部、作業班独自、他校での頒布会など、様々な機会を設け、みんなで喜びや達成感をもっともてるようにする工夫を考える必要がある。そうしたことを踏まえ、キャリア教育をより充実させる中に自立活動が生かされていくことが実証される。今後も自らの実践を深めながら船橋市の特別支援教育をリードしていきたいと考える。

【参考文献】

平成１９年度　船橋市教育論文集　濱本武将
平成２０年度　船橋市教育論文集　濱本武将
平成２１年度　船橋市教育論文集　濱本武将
平成２２年度　船橋市教育論文集　濱本武将
特別支援学校自立活動学習指導要領
第５章 自立活動
平成２１年度　柏特別支援学校　実践事例集
平成２１年度　流山高等学園　実践のあゆみ
平成２２年度　富里特別支援学校　実践報告集
平成２１年度～２２年度　千葉県長期研修論文
「個別の教育支援計画」策定・実施・評価の実際　平成１８年　全国特殊学校校長会
平成２０年度特別支援教育推進計画に基づく教育課程の研究・開発事業（キャリア教育推進委員会）報告書　東京都教育庁指導部発行